

---

# とある科学の絶対領域 《クリアランス》

とあるいぬまる

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある科学の絶対領域クリアランス

### 【Nコード】

N9492S

### 【作者名】

とあるいぬまる

### 【あらすじ】

学園都市の闇。そこに絶対領域クリアランスと呼ばれる少年がいた。彼は殺しに適用した能力を手にしたレベル5だった。彼は冷酷に上の命令に従うだけ。彼が描く物語とは？ 科学サイド中心です！ 一週間に4回更新目指して頑張ります！

1 - 1 絶対領域へクリアランス (前書き)

はじめまして！ とあるいぬまるです！！  
物質分解のほうはいろいろと問題があったので作り直しました。

皆さんが少しでもお楽しみいただけよう、全力で書きますので、  
どうかよろしくお願いします！！

「めんどくせえな、ゴミ掃除はアイテムにでもやらせとけ……」  
学園都市屈指の超能力者<sup>レベル5</sup> 絶対領域<sup>クリアランス</sup>

## 1-1 絶対領域へクリアランス

東京の西部を開拓して作られた学園都市。人口は200万を超えている。その中の8割が

学生であり、一人一人が科学の結晶である超能力という力に目覚めている。学生がそこまでの力を有するこの都市で、闇というものが存在していた。

8月30日 PM 11時50分26秒

「あれがターゲットでいいのか？」

『ああ、間違いない。15秒後に殺してオーケーだ。隠ぺいは任せておけ』

なんの変哲もないただの廃工場。たくさんのコンテナ、鉄骨が置いてあるような、工場というより貨物船を壁でつつんだ風景に近かった。そこには3台の黒いバンが停まっており、12人の黒いスーツの男が何らかの取引を行っているようだった。そんな様子を一人の少年がコンテナの陰に隠れて見ていた。携帯電話を手に持ちながら。誰かと通話しているのだろう。

「了解。」

『では、またあとで。』

少年が通話していたその誰かが電話を切ったらしい。携帯から無機質な音が響く。

「ゾツとするね。まったく……」

少年は携帯をしまい、取引の現場に意識を集中させる。

「これが例のチップか。」

「ああ。この情報を外に流せば、この都市も終わりだ。」

「ついに、出し抜いたんだ。《上》のやつらを！」

黒いスーツの男たちは、歓喜の感情をあらわにする。少年が携帯をしまつてからも

うすぐ15秒立つとも知らずに。もうすぐ殺されるとも知らずに……。

「楽しそうだな。オレも混ぜてくれよ。いいよなあ？」

「ッ！ 敵か!？」

男たちは一斉に声のした方向を向く。そこに一人の少年が立っていた。月に照らされた整った顔立ちに、すこしパーマをかけている金髪に近い茶髪。黒いモッズコートボタンのボタンはすべて外されており、中のVネックの白いインナーが見えている。黒いロールアップデニムと黒いショートブーツは上の服装にマッチしている。まだ夏だと言うのに、肌を全くみせていない服装だ。どこかの俳優のような、そんな気品を漂わせている少年は、にっこりと、さわやかな笑みを浮かべていた。

「反応はえーな。さすがプロ。えらいえらい。」

「……てめえ、状況わかってんのか？」

拍手する少年に、男たちは12人全員サブマシンガンに向けていた。つい先ほどま

では、歓喜に震えていた男たちの切り替えの速さを見ると、少年が言ったように1人

1人がプロであることが窺える。その状況で少年は余裕をにじませる。

「分かってるつつの。これからハンティングタイムだろお？」

「クソガキが……、殺せ！」

男たちは隊長らしき者の声に忠実だった。銃声が響きわたる。しかし……

「なっ……え、はぁ？」

それだけだった。男たちの予想では少年はグチャグチャになるはずだった。その予想

に反し、鉛の弾丸は少年を貫かなかったどころか、跡形もなく《消失》した。男たちは

目の前の現象の整理ができていないようだ。

「満足か？ 次はオレの番だぜえ。」

少年がそう言うと同時に、閃光が男の心臓を貫いた。閃光は男を貫通し、後ろの壁まで貫いた。

「う……あ、あああああああ！！」

先ほどまでの男たちの余裕と怒りは別の感情に塗りつぶされていた。圧倒的な恐怖。

目の前の仲間の死が、男たちを狂わせる。いくらプロであろうが、この状況で取り乱さない者などいないだろう。男たちは一斉に駆け出していた。少年から遠ざかろうと。

「逃がすかよ。クソ野郎ども。」

\*

少年の一方的な虐殺開始から9秒後、1人を除き、男たちは全員絶命していた。

胸にぼつかりと穴が空いた者、頭部が消滅している者。さまざまな死体が転がっていた。唯一生きている男も仲間たちの死を前にして絶望し、逃げるそぶりすら見せない。

「次はお前だ。覚悟決めろや、クソ野郎。」

「お前…一体？」

「知りてえか？」

少年は男の近くまで歩み寄り、楽しそうに口を開く。

「オレはレベル5。絶対領域クリアランスつて能力だ。お前らの始末つてことここに来た。まあ…あれだ、暗部だよ。」

「絶対領域？ …… そんな能力聞いたことが……」

「《表》じゃそうかもしれねえが、ちょっと考えりゃ分かんたる。《裏》でやってくには面が

われてねえほうがやりやすいこともある。目立たねえために序列にもはいつてねえんだ

よ。」

「……そういうことか。最後にひとつだけ聞かせる。お前の能力だ。どういう理論で殺されるか知りたい。」

「は？ お前変わってんなあ……」

男の質問に虚をつかれた絶対領域クリアランスは一瞬呆けた顔をすぐに笑顔にして説明をはじめた。

「オレの絶対領域クリアランスは、触れた物質を反物質に転換できる。銃弾の物質の半分を反物質に転換して対消滅させられるし、その際に放出される中間子だけを取り出してこんなこともできる。」

そういうと絶対領域クリアランスは手を前につきだす。すると手のひらから、先ほどの細く不気味に光る閃光が放出された。

「反物質の説明もしてやるーか？ 反物質つつのは、普通の物質と正負の属性とかがまったく逆の物質のことだ。すげーだろ？ お話はここまでだ。じゃあな、クソ野郎。」

「……畜生。」

説明を終えた絶対領域クリアランスは男の頭部に、そつと手を当てる。その光景を

最後に見て、男の意識は途絶えた。

\*

絶対領域クリアランスが仕事を行った現場は何事もなかったように戦闘前の状態に

なっていた。ある一点を除いて……。最初の間子レーザーの傷跡だ。そこをあとにした

絶対領域クリアランスは、工場からそう遠くない駐輪場に停めた真っ黒なバイク《エリミネ ター250V》のシートに片手をつき、もう片方の手で黒い携帯を持ち、通話していた。

「死体は消したけど、工場に傷痕残しちまった。悪いな。」

『構わん。あんな所に足を踏み入れる人間は少ない。お仕事御苦労だった。金はすでに振り込んでいる。帰って体を休める。もうすぐでかい仕事もある。』

傷痕を気にするなど言った電話の相手は絶対領域クリアランスを気遣うような台詞を口にする。(よく言うな、クソ野郎)と思いつつ、絶対領域クリアランスは携帯を切って、帰宅するためバイクのエンジンをつけた。

(でかい仕事、か……)

時速100kmほどの速度で進むレベル5の怪物は、ぼんやりと次の仕事について思考する。



1 - 1 絶対領域へクリアランス (後書き)

よろしければ、感想をお願いします!!

少しでも多くの方に楽しんでいただけたら幸いです。

## 1 - 2 デカイ仕事 (前書き)

「第1位を潰したレベル0ねえ……」  
「学園都市屈指の超能力者 - 絶対領域クリアランス」

## 1 - 2 デカイ仕事

深夜のとある学区の道路。照明にコンクリートが照らされる、なんの変哲もないただの道路。そこに少年は、絶対領域クリアランスは存在した。

(今日もつまねえ仕事だな……)

絶対領域クリアランスはあからさまに「ダリイ」という表情を浮かべている。授業中の不良のような表情だ。しかし、彼を包みこむ状況は授業などという平凡な《表》ではない。

(残り2体か……)

絶対領域クリアランスが2 m程の鉄の兵器の中心に触れる。それと同時に彼が触れていた箇所は消滅した。

「ッ！」

(これであと1体っ)

声を発することもできずに、鉄の兵器は倒れ伏せる。学園都市の技術が生んだ怪物マシン、駆動鎧だ。内部にいる人間の数十倍の能力をたたき出すその兵器の肩には《barrette line」バレットライン」》という文字が見える。

《H s G A M - 0 1》。それがこの兵器の正式名称だ。

「おいおい……たしか、《バレットライン》は駆動鎧パワードスーツの中でも結構な力は持つてるよなあ？ そんなもんを8体も使ってこのざまか

よ。情けねえクソ野郎どもだ。」

クリアランス 絶対領域は目の前の兵器と、兵器だったジャンクを嘲笑する。本  
当につまらなそうな顔で。

その態度に対し、残り1体の駆動鎧は右腕を彼に向ける。パワードスーツ その右腕には大きな腕輪のようなものが付いていた。その腕輪は駆動鎧のパワードスーツ 右腕の手首から肘あたりまで包んでいて、6個もの穴が腕輪の前方部分にあげられてある。銃口だ。腕輪は1秒もたたないうちに高速回転を始めた。

### 《対隔壁用チェーングン》

それがこの武装の名称だ。毎秒50発もの弾丸が絶対領域を襲う。クリアランス 銃撃と呼ぶのは適切ではない。爆撃という表現が適切な攻撃は10秒ほど続く。

そのはずだった。

「はいはい。よくがんばりました。もういいよ。」

銃弾は彼に触れると同時に消滅。隔壁を3秒もかからずスクラップにするこの武装ですら彼には傷1つ負わせられない。

「じゃあな、今日最後のクソ野郎。」

クリアランス 絶対領域は最後までつまらなさそうに、今日の仕事を終えた。

\*\*\*

「でかい仕事だと聞いてたんだがなあ？」

今日もいつも通りの仕事を終えた絶対領域はお気に入りの《エリミネ ター250V》に腰掛けながら携帯を手にして《電話の相手》と話していた。とても不機嫌そうに。

『私は今日だと言っではない。この前の電話の内容を聞き違えたのはお前だろう。仕事の詳細もまだ説明していないのだぞ。今日なわけがないだろう。勘違いは見苦しいぞ。』

「……………そうだったか？」

絶対領域クリアランスは不満を怒りを含めてぶつけると、《電話の相手》はそれに冷静に対処した。見苦しいという言葉クリアランスを聞き更にイラつきながらも非があるのは自分であるため、絶対領域クリアランスは怒りを無理におさめる。奥歯を強く噛みしめながら。

『そうだ。しかし、でかい仕事が近いのは確かだ。そろそろ仕事の詳細を聴きたいか？』

「……………ああ。そうだな。ぜひとも聴きてえなあ。」

《電話の相手》の言葉に少し気を良くした絶対領域クリアランスは口調を一瞬で楽しそうにする。分かりやすい奴だと《電話の相手》は苦笑しつつ、絶対領域クリアランスに説明をはじめた。

『ふん、仕事というのは簡単に言つと調査だがな。』

「調査なあ？」

絶対領域クリアランスが眉をひそめた。

『ああ、つい最近まで第1位の実験を行っていたのだが、思わぬ誤算があつてね。』

「一方通行アクセラレータか……。」

『そうだ。』

一方通行アクセラレータという名前を聴いて絶対領域クリアランスは委縮する。

『一方通行アクセラレータが被験者となつた実験は知っているな？』

「絶対能力者進化実験レベル6ソフトか……。」

『そう。お前が何よりも欲しているレベル6への鍵となる実験だ。』

絶対領域クリアランスはゴクリと唾をのんだ。しかし、それは緊張や恐怖からくる行動にはとても見えない。例えるなら、欲しいおもちゃを目の前にした子供がとるようなものだった。

「それがどうした？ あの実験は一方通行アクセラレータの敗北とともに中止になつたとか聴いたぜ。」

あくまで平静を装おうとする絶対領域クリアランスはあくまで、態度を変えずに話す。

『ああ。そうだな。あくまで、一方通行アクセラレータの実験は終わった。第3位のクローンを10031体犠牲にしてね。』

「……………なにが言いたい？ まさか残りのクローンを処理しろなんて言わねえよなあ？」

《電話の男》の意思がつかめない絶対領域はすこし苛立ちながら、  
《電話の相手》を冗談を交えて急かす。

『惜しいね。』

「ああ？」

「冗談を惜しいと言われた絶対領域は呆けた声を出した。」

「てめえ……………このオレに9069体の後始末をさせようってかあ？」

絶対領域は怒りをあらわにする。（久しぶりのデカイ仕事があることだと？ 潰されてえのかコイツ……………）というような思いが彼の中で怒りに変わっていくのだ。

『早とちりするな……………確かにお前にはクローンと闘ってもらおう。しかし、だ。ただのクローンではない。特別なんだよ。』

「……………」

絶対領域は黙って聴いてやることにした。もちろんつまらないことを言いやがったら、仕事とやらは全力で拒否してやるというスタンスで、だ。

『サードシーズン 第三次製造計画という計画までは、お前でも知らなかったろう』

?

## 1 - 2 デカイ仕事 (後書き)

伏線の回です。第三次製造計画サードシリーズという計画でピンとくる方もいるかもしれませんが、なんとあの人が……

次回もお楽しみに！

できれば感想をよろしく願います！……！

### 1・3 ヒーローに向けられた殺意(前書き)

「オレの領域は誰にも理解出来やしねえよ……」  
- 学園都市屈指の超能力者 レベル5 絶対領域 クリアランス

### 1 - 3 ヒーローに向けられた殺意

「聞いたことねえな……」

絶対領域クリアランスは一方通行と同じく強さを求めていた。それゆえ、絶対能力者進化（レベル6シフト）実験にも多少の興味を示していた。実験の内容は100%調べていた自信があった彼は怪訝そうな表情を浮かべる。

「詳しい詳細は私にも掴めていないのだから、お前が知らんのも無理はない。欠落品ではないクローンを使った計画らしいが……」

「欠落品ねえ」

絶対領域クリアランスにも少しの良心ぐらいはある。欠落品という呼び方はあんまりではないだろうか？ などと偽善じみた考えが頭によぎり、彼は自嘲する。（オレみたいな悪党の考えることじゃねえな）と。

「なんだ。欠落品に同情でもしたか？」

「なめてやがんのか？ よっぽど潰されてえらしいな。そんなくだらねえ冗談は省いてとつと話を進めるクソ野郎」

《電話の相手》に自分の考えを見抜かれた絶対領域クリアランスはイラついたのか、《電話の相手》を思いきり罵倒した。

「そうだな……。お前とは冗談を交えて会話するような仲ではなかったな。では、話を進めるとしよう。先ほど言ったとおり、第三次製造計画ドシーズンで使われる予定だったクローンは欠落品ではない。大能レベル4

力者クラスの力を有することに成功していな。その相手を君に  
してもらおう。』

「やっぱりたいした仕事じゃねえだろうが。大能力者<sup>レベル4</sup>ごときじゃ、  
オレの相手にすらなんねえよ。悪いがことわ

『早とちりするな』

絶対領域<sup>クリアランス</sup>が拒否の意を伝えようとした声を遮って、《電話の相手  
》は無機質な声を出す。

『第三次製造計画のクローンとの戦闘はあくまでついでに過ぎん。  
研究者どもがデータ収集をおこないたいようだな。本題はこれから  
だ。我々が実験を再開したという情報を流せば、一方通行を倒した  
ヒーロー君はどうすると思う?』

「まさか……」

絶対領域<sup>クリアランス</sup>が目を見開き、息をのむ。その口元が微かに歪む。邪悪  
な微笑だった。

『最強<sup>レベル0</sup>を倒した最弱<sup>アクセラレータ</sup>を倒せば学園都市最強はお前だ。でかい仕事  
だろう? 報酬は世界の頂点という肩書だ』

《電話の相手》は楽しそうに語る。この男が感情をにじみださせ  
る声を出すのは珍しい。その言葉を聴き、絶対領域<sup>クリアランス</sup>は額に片手を着  
き、口が裂けるのではないかと思うほどに口の端を釣り上げた。

「クハッ、ギャハハハハハハハアア!!! いいね、最高だ  
あ!!!!!! 引き受けてやんぜえ!!!」

『そう言ってもらえると思ってたよ。一週間後にヒーロー君と対決だ。詳しい時間や実験場所は追って連絡する。それでは』

そういうと《電話の相手》は電話を切った。携帯をしまった絶対領域クリアラはふと思う。

いつぶりだろうか？　ここまでハイになれたのは。

「オレが世界の頂点ねえ。ヒヤハハハア！」

絶対領域クリアラは笑いを抑えられなかった。常に強さを求めている彼の頭の中はすでに《最強》の自分というヴィジョンを描き、これまでにない興奮に包まれる。

「オーケー、オーケー。一週間後、オレは世界の王様ってわけだ。たまんねえなあ、オイ！」

とてつもない殺意を持つ怪物が、再びヒーローを襲う。奇しくも一方通行と同じ理由で。自らの強さという、自らのためだけの身勝手な理由で。

### 1 - 3 ヒーローに向けられた殺意（後書き）

サードシーズ  
第三次製造計画の個体の戦闘実験の理由は人間自転車さんへの感想欄にある回答を見てもらうと助かります。

次回も早めに更新したいと思いますので、どうかよろしくお願ひします！

感想やアドバイスなどとても励みになります。

本当にありがとうございます

それでは次回もお楽しみに！

## 1 - 4 実験開始（前書き）

「とつとつミサカの登場かじゃーん！」  
サイドシリーズ  
第三次製造計画の成功作  
プロトワーラスト  
初期番外

## 1 - 4 実験開始

PM 20 : 00分

(世界の頂点……)

あれから一週間後、絶対領域クリアランスは第十七学区の操車場まで、バイクを走らせていた。

今回の実験は絶対領域クリアランスが望むものが報酬だ。やる気が出ないわけがない。

(研究者の利益にもなるつつうーのは気に入くわねえがな)

今回の第三次製造計画サードシーズンのクローンとの戦闘シミュレーションは大能力者(レベル4)クラスの力を得た個体の単体戦略展開実験だそうだ。元々クローンは軍事力に使うつもりだったらしいのだから、大能力者(レベル4)クラスの力を得た個体には、それを前提とした戦闘実験を行っておきたいということころだろう。

(今日が終わった時には、オレは世界の頂点だ)

アクセルを回す手に自然に力が入る。望みつづけたモノがやっと手に入るのだ。

\*\*\*

昨晚のPM 9 : 30分、すこし遅めの夕食を喫茶店であっていた

絶対領域クリアランスの携帯が鳴った。購入した時から何もいじってないであろう、面白みのない着信音が響く。絶対領域クリアランスは携帯を開き、自分にかけてきた相手を確認めると同時に邪悪な微笑を浮かべる。携帯のディスプレイには《登録番号1番》と表示されていた。

「よう、クソ野郎。待ちわびたぜえ」

『お前と無駄話をして罵倒されるだけで1時間は使いそうだな……さつさと本題に入るとしよう』

かけてきたいつもの《電話の相手》は疲れたようなため息をつく。一方、絶対領域クリアランスは《本題》という言葉を聴き表情をさらに歪ませる。飲み終わったコーヒーをさげに来たウエイトレスが思わず息を飲み、あきらかに怯えた様子を見せるが、ハイになりつつある彼にそんな光景は文字どおり眼中にない。

『戦闘実験は明日、午後8時30分に最後の実験が行われた第七学区の操車場で行う。』

「りょくつかい」

くだけた返答は彼がどれだけの高揚感に包まれているかを滲ませる。遠足前の夜に眠れない子供が抱くものに似たような感覚だった。

『明日の報告を楽しみにしている』

「任せとけてえの」

そう言って《電話の相手》は、電話を切る。そして微かに口元が緩む。

(ヒーローは負けることがないから、ヒーローと呼ばれるのだが……、利用しやすい奴は助かる)

\*\*\*

PM8:20分 (実験開始10分前)

クリアランス 絶対領域が実験場に到着した。自分のバイクを戦闘予定エリアの範囲外に停めた後、最後の実験が行われた傷跡がまだ残されている操車場まで歩を進めた。月に照らされた表情は歪んでいる。

「着いたぜえ、成功作のクローン君」

クリアランス 絶対領域はすでに実験場についていた《少女》に話しかける。その《少女》は常盤台の制服を着用していた。赤みがかつた茶髪に整った顔立ち。学園都市第3位の超電磁法レールガンのクローンである妹達シスターズとよばれる個体だ。しかし、クリアランスの目の前に存在する《少女》は欠陥電気デフォイズと呼ばれる妹達とはいくらか異なる点があった。

まずはその容姿。たしかに欠陥電気レデオノイズと呼ばれる妹達シスターズとは似通っているが、身長は2、3cm程高くなっており見た目の年齢は高校生ほどだ。他の妹達シスターズ着けているヘアピンや軍事ゴーグルも見当たらない。

次に武装。これまでの妹達シスターズは欠陥電気を補うためなのか、銃器の類を装備していたはずだが目の前にいる《少女》には武装している様子はない。銃などなくとも戦闘は十分に可能ということだろう。そして、なによりも異なる点が……



## 1 - 4 実験開始（後書き）

まずここまで足を運んでくださった皆さん、ありがとうございます！

すでにピンとこられた方もいらっしやっただかもしれませんが、サカワースト番外的<sup>ニ</sup>人の登場です。

今回はぶっちゃけプロトフースト初期番外の登場のためだけのものですw

今回はとうとう戦闘回です！

お楽しみいただけるよう頑張ります！

よろしければ、感想やアドバイスをよろしくお願いします!!!

1 - 5 領域の選択肢（前書き）

「けっこうやベエかもな<sup>レベル5</sup>……」  
学園都市屈指の超能力者 絶対領域<sup>クリアランス</sup>

## 1 - 5 領域の選択肢

「ずいぶん強気だねええ、プロトワースト初期番外とやらアアアア！ オレを殺すことがオーダーだあ？ やれるもんならやってみるよオオオオオオオオオオ！！！」

クリアランス絶対領域の叫びと同時に実験は開始された。両者の距離は15m程開いている。先手をうったのは初期番外のほうだった。2億ボルトの電子の束、クリアランス雷撃の槍が絶対領域を襲う。それに対し絶対領域はクリアランス放たれた雷撃の槍を見ても余裕の笑みを崩さない。それどころか、自ら雷撃の槍に向かって走り出す。

「無駄無駄ア！ そんなもんじゃこのオレに傷一つつけらんねえよオオオオ！！！」

クリアランス絶対領域に向けられた雷撃の槍は彼に当たると同時に消滅する。

### 《対消滅演算》

放たれた電子の半分を、電子を構成する素粒子の電荷などが全く逆の性質を持つ反電子へと転換させることにより対消滅を引き起こさせる。《バーソナルリアリティ彼だけの現実》。

触れた物すべてを無に帰す演算は絶対領域という名に相応しい。クリアランス絶対領域は足を止めず、プロトワースト全速力で初期番外に向かって走る。両者の距離が5m程まで狭まったそのとき、

バジッ！！ という音がしたと同時にプロトワースト初期番外がクリアランス対領域の視界から消える。

(……………アア?)

一瞬思考が止まる。直後に真上からバジツ、という紫電の弾ける音が聞こえ絶対領域クリアランスは注意を上に向ける。その時にはすでに、2センチ程の釘が彼の眉間に迫っていた

「……………ツチ！」

余裕のある顔を少し崩し、軽く舌打ちすると同時に釘に対する《対消滅演算》を展開させる。

絶対領域が釘を対消滅させ終わるころ、重力に従い絶対領域クリアランスの眼前まで落下してくるはずの初期番外はバジツ！という音とがした直後、不自然に空中で軌道を変えて、絶対領域クリアランスの20m程後方へふんわりと背中を見せる形で着地する。

(……………なるほどねえ)

絶対領域クリアランスは笑みを浮かべた。名探偵が犯人のトリックを暴いた時のような知的な笑みだ。

「高圧電流で空気を爆発させて飛翔力を生み出しさらに空中で方向転換、純粋な磁力で鉄釘を音速以上の速度で射出……………か。」

絶対領域クリアランスは「ヒュウ」と口笛を吹き、初期番外プロトワーストを称賛する。どちらの戦術も並の電撃使い(エレクトロマスター)にできることではない。しかし、彼は称賛した直後、知的な笑みを邪悪な笑みへと歪ませる。その表情は称賛とは程遠い、侮蔑に満ちた笑みを浮かべて初期番外プロトワーストの背中を見つめる。

「大した戦術だが……、まったく知恵が足りてねえなア初期番外ちゃんよオ。不意打ちならオレの領域を破れるとでも思ったのかア？」

優越感に浸りながら、絶対領域は楽しそうに語る。

「残念ながら答えはノーだア。オレは常に自分の半径3m以内の物質の属性を感知する《知覚演算》を行っている。《対消滅演算》の応用というよりは《対消滅演算》までのプロセスの一部ってところかア。オレの《対消滅演算》は対象の半分を反物質に変換、つまり対象のまったく逆の属性に転換させる演算だ。対象の属性を正確に読み取れねエと、なんの意味もねえ。だから《知覚演算》は特化されてんだよオ。」

ギヤハハハアと笑う絶対領域は初期番外の絶望した表情を想像していた。だからこそ理解できなかった。こちらに振り向く初期番外の顔が浮かべた狂気的笑みを。

「ぎやはは！！ 知恵が足りてないのはミサカじゃなくてあなただよ！！ まだミサカの狙いに気づかないの？」

絶対領域は初期番外の言っている言葉が理解できず、怪訝な表情を浮かべた。様々な思考が彼の頭を駆け抜けた。その結果、彼の出した結論は

「ハツタリとはみつともねえなア、初期番外ちゃんよオ！ テメエに不意打ち以外に手がねえことは理解してんだよ。現にテメエは距離をとり続けるぐれえのことしかできてねえだろうが。悪リイがこれで……」

そこで、彼の嗅覚が異臭をとらえた。鼻の粘膜を直接刺激するよ  
うな独特の臭いだ。それと同時に彼の表情が変わる。目を見開き、  
手で口を覆う。気づいたのだ。初期番外の狙いに。以前、一方通行  
に使われた手段と同じ。

「……………ッオゾンか！」

空気中の酸素を電気分解により、オゾンへと組み換える。あの一  
方通行が認めた戦略の一つ。

初期番外は最初から彼の《知覚演算》を見破っていたのだろう。

だからこそ大能力者（レベル4）クラスの力で絶対領域の周りの酸  
素を一気にオゾンに変えるのではなく、微弱な電気分解を行ってい  
たのだ。微弱な電流を使ったのは、電気使い（エレクトロマスター）  
がだす特有の電磁波と誤魔化すことができたからだろう。

そして、絶対領域の《知覚演算》は高度な精度を持つが、それは  
物質の属性と一点一点にのみ特化している。よって酸素とオゾンの  
区別ができなかった。

「かつて一方通行は高速で移動する方法があったから、この戦略  
から逃れられたけどあなたはどうか？ ミサカはこの距離ならあ  
なたの中間子を利用した遠距離攻撃もかわせるだけの身体スペック  
は持つてる。走ってこっちに近づいてもミサカには空気爆発の高速  
移動があるから無駄だよ。」

そう言った初期番外はこれまでで一番歪んだ笑みを見せる。圧倒  
的自分の優位を絶対領域に見せつけてやったのだ。

「八八……………」

その笑みを見た絶対領域は、口に手を当て、俯きながら乾いた笑い声をあげる。その声には諦めが滲んでいるかのようだ。

「そうだなあ、完敗だア……」

「は！？ なに、もう諦めんの？ ホント拍子抜けだね絶対領域。あなたはミサカに傷一つ負わせられなかった。それでよく……」

「ただし」

絶対領域は初期番外が絶対領域を罵倒する言葉を遮り、ただし、と付け加える。今度は初期番外が絶対領域を怪訝そうに見つめる。絶対領域の表情は、口に手を当て俯いているためよく見えない。しかし、初期番外はなぜか感じ取ることができた。絶対領域の邪悪な笑みを。

絶対領域がゆっくりと顔を上げ、口から手を離す。そしてやはりその顔には《邪悪》がはりついていた。

「オレの領域に高速移動つつう選択肢がねえならなア」

直後、絶対領域の体がとつもない速度で初期番外に向かっていく。

「なっ」

それを見た初期番外は急いで高速移動のための空気爆発の演算を始める。しかし、予想外の行動にわずかに反応がおくれてしまっていた。

「遅えよ」

演算を終える前に、絶対領域クリアランスの速度と体重を乗せた重い肘打ちが、初期番外プロトワーストの鳩尾にはいつていた。体がくの字になりながら、後方へ5m程吹っ飛ばされた。そのまま地面に背中を強打して、ろくに呼吸すらできなくなる。

「がッ……あッ…ゲフ」

予想外の一撃をくらった初期番外プロトワーストは一気にスタミナを奪われたのだろう。立とうとしても膝がぐくぐくと震え、立てないようだ。この状態では演算など、とてもじゃないが不可能だろう。その様子を見下す絶対領域クリアランスは楽しそうに語り始める。

「種明かしといこうかア。オレが対消滅を利用した中間子を操れることから推測しておくべきだったなア。」

初期番外プロトワーストは小刻みに震えながら絶対領域クリアランスの顔を見上げる。

「オレは物質を対消滅した際に発生するモノも操れる。その応用が中間子レーザーだ。つまり、だ。中間子はいくまで応用の一つ。オレの領域にはまだ選択肢があるんだよ。」

絶対領域クリアランスは口の端をさらにつりあげる。

「それが《光子をつかった推進力》だ。対消滅の際に生まれる《光子》を後方に反射させる。それだけで、光子のもつ運動量を得て加速する。案外簡単だろオ？」

絶対領域クリアランスの説明を聴き終えた初期番外プロトワーストはそこで気を失ったようだ。

「あれ？ 気絶しちゃった感じ？ しょうがえなあ。」

片手で頭をポリポリとかきながら、絶対領域は屈みながら、初期  
番外にもう片方の手を近づけていく。

「じゃあな」

先ほどまでの笑顔を消し、少し後味の悪そうな表情を浮かべる。

絶対領域の手と初期番外の頭の距離が5センチメートルほどにまで狭まったそのとき、

「止めるおっ！」

背後から声をかけられ、絶対領域の手が止まる。そしてゆっくりと声のしたほうへと振り向く。

そこには、黒いツンツン頭が特徴的な《ヒーロー》の姿があった。それを見た絶対領域は邪悪に大きく顔を歪ませる。

「はじめして、ヒーローくん！！ オレは」

「離れるよ……」

「……アア？」

絶対領域は両手を広げながら、高らかに自己紹介を始めようとした声が遮られたことに、多少イラついた。

さらに《ヒーロー》は、《上条当麻》は言葉を発する。

「今すぐそいつから離れろっつてんだ！ 聞こえねえのか三下あ

ツ  
「! ! ! ! !」

## 1 - 5 領域の選択肢（後書き）

まずはお読みいただいて下さったみなさん、ありがとうございます！  
どうでしたでしょうか？

クリファランス  
絶対領域も結構追い込まれる感じにしてみました。

さて、いよいよ、みんなお待ちかね、上条さんの出番です！

次回とうとう決着の戦闘回です。

お楽しみに！！

よろしければ、感想やアドバイスをよろしくお願いします！！！！

1 - 6 結末（前書き）

上条さんとの対決です！

結構時間かかった……

1 - 6 結末

「今すぐそいつから離れろっつてんだ！ 聞こえねえのか三下あ  
ッ！……！」

「いや、お前ダレに口聴いてんのか、分かってんのか？ いくら  
ヒーロー気取ってるからって……！」

「グチャグチャ言ってねえで離れろっつてんだろっが……！」

上条当麻の叫びを耳にした絶対領域クリアランスはすこしイラついた表情を一  
瞬ポカンとさせる。そして思わず、吹き出してしまいそうになる。

目の前にいるヒーロー気取りの少年は実験の情報を掴んでいるか  
らここに来た。大方、超電磁砲レールガンあたりに流された情報を、彼女を介  
して手に入れたといったところだろう。

実験の詳細を掴んでいるのなら、絶対領域クリアランスがどういう存在なのか  
理解しているはずだが……その上で絶対領域クリアランスにそんな口を叩けると  
は、本当に面白い。

「オーケー、オーケー離れてやんよ。」

笑みを浮かべながらそう言うと、絶対領域クリアランスは初期番外プロトワーストから歩いて  
距離をとる。

上条当麻に近づく形で。  
初期番外プロトワーストから20m、上条当麻から5m程の距離で絶対領域クリアランスは止  
まる。邪悪な微笑をはりつけて

「で、お前はなにしに来たんですかア？ まさか実験を止めてや  
るってかア？ いるんだよねえ、お前みてえな偽善者が」

絶対領域クリアランスは上条当麻がなにをしに来たのか知っている。しかし、ここは敢えて疑問をなげかけてみることにする。

「ああ、そうだよ……偽善だろうがなんだろうが、そんなもんはどうでもいい。俺はそいつを助ける。あいつと約束したんだ。」

上条はあの日交わした約束を思い出し、絶対領域クリアランスを睨みつけながら重みのある言葉を発する。

それに対し、絶対領域クリアランスは笑みを崩さずに返す。

「ハッ、ほざいてろよヒーロー。約束だア？ そんなもんじゃ誰も救えやしねえ。なにかを救うにも、奪うにも、必要なのはチカラだ」

ポキポキと指を鳴らしながら、絶対領域クリアランスは口の端をさらにつりあげる。

「《なにかを守る人間は弱え》 そいつを今から証明してやんぜえ」

「その前に1つ聴かせろ、なんでお前はこんなことやってんだよ」  
上条は相変わらずこちらを睨みつけたままだ。

#### 最強の肩書のため

そう答えても、おそらく目の前の上条は理解しないだろう。だから、もっとシンプルな回答で、邪悪な笑いのまま答える。

「決まってるんだろ？ 実験つづうのは現状から更に進歩するた  
めにあんだよ。つ、ま、り、 オレの進歩の為だ。別にいいだろ？  
モルモット1匹の犠牲で済むんだからさあ」

「お前の進歩のためだと？」

クリアランス 絶対領域は上条の問いかけに答えるように、笑みを崩さない。

「そうかよ……だったらはっきり言ってやる。お前は俺に勝てな  
い」

「…いま、なんだった？」

クリアランス 絶対領域の保ち続けた笑みが消える。眉間にしわを寄せる。

三下と言われるのはまだいい。アクセラレータ 一方通行を倒したことで調子に乗  
っている処理できた。

しかし、悟られたように「勝てない」などと言われるのは、自分  
が求めているものを否定されるといふことではないか。

常に強さを、勝利を求めてきた絶対領域クリアランスにとって、上条の言葉は  
最高級の侮辱だった。

「オレがお前に勝てないねえ……」

クリアランス 絶対領域は目の前の少年へ視線に乗せて殺気を放つ。

上条が身構える。

「ほざいてるよオオオオオ！ ウジ虫がアアアアアアアアアア！」

クリアランス 絶対領域は足もとの線路を踏みつける。クリアランス 絶対領域が足を線路から  
退けた直後、線路の一部だった鉄骨が勢いよく3 m程飛び上がる。

線路の裏に光子を反射させたのだ。

重力に従い、全く回転せずに落ちてくる鉄骨が絶対領域クリアランスの目の前に来た時、それを軽くこずくように殴る。絶対領域クリアランスは自らの手が触れると同時に、もう1度公式を組む。

今度は上条に向けて鉄骨がとぶように光子を反射させる。

「なっ…」

「ヒヤハハハハア！」

その過程をなんども繰り返す。しかし、目の前の上条は器用にとは言えないまでも、それをよける。

(めんどくせえな……そこまで精度も高くねえし、近づいて直接消してやるか)

こんどは自らの後方に光子を反射させて自分自身を上条のもとへと高速で向かう。

上条は動かない。

(大口叩いてもう諦めたかア？ くだらねえ野郎だ)

殴るというより、触れようとする動作で右腕を伸ばす。

その右腕は上条の胸に触れると同時に穴を開ける……はずだった。

パンツ

乾いた音が響く。上条の右手が絶対領域クリアランスの右腕をはじいた音だ。

「は!？」

絶対領域は呆けた声を出し、自分の右手を見つめる。クリアランス

(いま、オレに触れて……どうなってやがる?)

上条が右腕を振りかぶるが、自分の右手を見つめる絶対領域は気づかない。クリアランス

「うおおおおっ!!」

呆然としたままの絶対領域の顔面に上条の拳がめり込む。そのまま後ろに1mほど吹っ飛ばされた。

「ごぶア!?!」

背中から地面に叩きつけられる。膝をつきながら立とうとするも、頬をはしる痛みさらに混乱させられていく。

(ありえねえ……こんな……)

「お前さつき言ったよな?」

混乱している絶対領域に上条は言葉を発する。絶対領域は目を見開いたまま声の主に視線を向けた。クリアランス

「《なにかを守る人間は弱い》だと……そんな考えだからお前は今やられてんだよ。もしお前がこんな道じゃなく、もっと別の道を選んだらそれだけでお前は今よりずっと前に進めてたはずだ」

「うるせえんだよオオオオオオ!!」

上条の言葉を耳にして絶対領域クリアラランスは勢いよく立ちあがりながら、その勢いのまま殴りかかるが上条はそれを容易によける。返す刀で上条の拳が飛び込んでくる。

「ぐふアツ！」

右の頬に痛みがはしる。ただでさえ痛みになれない絶対領域クリアラランスが怯む。その隙を上条が見逃すはずもなく、さらに拳は繰り出されていく。5撃目に強烈な拳が鼻っ柱にいれられた。

「ぐぱッ！」

後方に吹っ飛ばされて再び地面に叩きつけられる。口中から鉄の味を感じているのが分かった。

「お前がその力を使って誰かを守りたいって思ってたなら、お前が負けることはなかったに決まってる。奪うだけのお前じゃ、絶対に勝てるわけがねえだろうがっ！！」

(守る…だと もしそうしてれば……)

絶対領域クリアラランスの中に上条の声がすりこんでいく。

しかし、それを認めてしまえば今までの自分はなんだったのだらう？

暗部に入った時も、最初に人を殺した時も、単独で管轄に縛られずに動ける《青鳥ブルーバード》に任命されて、1人になって、もっと人を殺すことになった時も、力の為だと言い聞かせてきた。

人を傷つける道でないと、前には進めない。

(今までのすべてを否定する、この男を殺す)

それが絶対領域クリアランスの出した結論だった。

仰向けのまま絶対領域クリアランスは公式を組み始める。使い慣れた公式。

### 《中間子の束》

ノーモーションによる不意打ちに上条は対応できず、細い閃光が上条の左肩を貫いた。

「なっ……」

上条は勢いに押され、そのまま後ろに倒れこむ。

絶対領域クリアランスはそれに構わずふらふらと立ち上がる。その顔にはいつもの邪悪な笑みが浮かべられている。

### 《殺さなければならぬ》

とどめを刺すために絶対領域クリアランスは上条に歩み寄る。

「ギャハハハアア！ オレが勝てねえだと？ 笑わせんなよオ

オオー！ ……これで……」

そこまで言っただけで絶対領域クリアランスは信じられないようなモノを見るように目を見開いた。上条が左肩を押さえながら立ちあがったのだ。上条がこちらを睨みつける。

「…………ツ 面白い……最高に面白えぞ、オマエエエエエエッ……！」

絶対領域は上条に向い走り出す。右腕を大きく振りかぶり上条に殴りかかるが、右手を簡単に受け止められ、そのまま掴まれる。上条は絶対領域の腕をつかんだまま右腕を左に払い、絶対領域は体制を崩された。絶対領域の見開かれた眼には右腕を大きく振りかぶる上条が映っていた。

「最後の一発だ……これで目え覚ませ馬鹿野郎ッ！！！」

顔面に浴びせられた一撃により、大きく吹っ飛ばされる。数メートル転がり、コンテナにぶつかる。

「……ぐ……うぁッ……」

(体が…動かねえ……)

意識が遠のく。

(守る力……)

その言葉を思いながら、絶対領域は意識を手放した。

\*\*\*

「『ブルーバード』たる絶対領域が敗北しました。」

『絶対領域までもが……、彼はどうなった？』

室内に男性の声が響く。

「あの医者のもとに運ばれたそうです。いい腕ですからね、彼は」  
『そうか。それで、本来の目的の方は？』

「例の少年の危険度調査結果ですか？ それについては我々に害をなすレベルではないでしょう。放っておいて問題はなさそうです」

『ならばいい。絶対領域クリアランスの代わりを用意しておけ。彼は解任クビだ』

「了解」

回線が切れたらしく、男は携帯をしまう。

「お前が負けることなどわかっていただき、絶対領域クリアランス」

男は楽しそうに1人呟いた。

## 1 - 6 結末（後書き）

まずは、閲覧してくださったみなさん、ありがとうございます！

第1章終了です。

けっこう書きにくくて、時間掛かりました……

説教シーンは苦手っばいです……

今回の対決は絶対領域クリアランスの心情の迷いと孤独な過去を描いてみました。

彼は決して壮絶な悲劇を体験したとか、そういうのはありません。しかし、ずっと孤独に生きてきて、自分を偽っていくうちに、《力と肩書》だけが、彼の中で輝いてしまうようになってしまったんです。

それでは次回もお楽しみに！

よろしければ、感想よろしくお願いします！！

キャラ紹介？ 絶対領域（クリアランス）（前書き）

話が進むにつれて、設定に追加されることがあります。

## キャラ紹介？ 絶対領域（クリアランス）

本名不明

年齢 16歳

身長 166cm

体重 54kg

血液型 AB型

来歴：

7歳の頃に消失<sup>ロスト</sup>掌握という能力のレベル1に目覚める。それを理由に研究者に求められ、両親に金で売られることになった。

12歳の頃には絶対<sup>クリアランス</sup>領域にまで昇りつめており、暗部組織に身をゆだねる。

14歳の頃に能力と性格の適性から、謎の組織<sup>フルバード</sup>《青鳥》に任命される。組織と言っても、構成員は絶対<sup>クリアランス</sup>領域のみ。管轄に縛られず、ある程度は自分で仕事を選べる。

16歳<sup>フルバード</sup>になってから、上条当麻の危険度を計るために利用される。現在は《青鳥》<sup>フルバード</sup>を解任されてしまっている。

上条当麻はこちらが噛みつかない限りは無害という評価になる。

容姿：

顔立ちは少し目つきが悪いが整っている。髪の毛のいろは茶色で毛

先が多少曲がる程度のピンパーマをかけている。

肌の色は、季節に関係なく肌を見せない服装のためなのか、少し白いがいたって普通。

キャラの容姿のイメージは垣根帝督

性格：

一方通行と垣根帝督を足して2で割ったような口調。汚い口調が目立つ。自尊心が強く、すこし短気なところがある。

両親に対しては、憎しみは持っていない。生きるためには仕方のないことなのだろうと割り切っている。

コミュニケーションをとる機会が少ないため、会話が苦手だが懂れている。

実験以降は感情の起伏を表に見せることが少なくなり、極端に冷静になる。用心深い性格。

しかし、プロトタイプ初期番外が絡んでくると冷静さを失うこともあり、後先考えなくなることも。

趣味嗜好：

バイクに興味があり、とても大切に扱っている。現在は《X-11》というものを使っている。色はブラック。ちなみにヘルメットも黒のフルフェイス。

食べ物に関しては、ファーストフードが好み。

ファッションに関しては黒を主体にすることが多い。

能力：

レベル5の《絶対領域》クリミアランス

触れた物質の電荷などを全く逆の性質へと組み替える。いわゆる反物質への転換。なお、その際に放出される中間子や光子の操作も

可能。戦闘むきな能力。

反物質への転換には、対象となる物質の属性を正しく把握することが条件。

#### 能力使用例

- ・物質の半分を反物質に転換し、対象となった物質を消滅させる。
- ・中間子の束を撃ちだす。

・自分の半径3m以内の物質の属性を正確に認識する《知覚演算》  
無意識に展開されており、自分に害をなしそうな物質を感知したら、すぐに《対消滅演算》につなげる。ある意味、一方通行と同等アクセラレータの防御能力を有している。

動。  
・光子を自らの後方に反射させて、光子の運動量を利用した高速移動。

- ・光子を物質の後方に反射させて撃ちだす。

#### 服装

第一章、第三章 季節はずれな黒いモッズコート、無地の白いVネックのインナー

黒いロールアップデニム、黒いショートブーツ。

第四章、暗い赤のVネックのインナーの上に黒いショートダッフルモッズコート

ダークブルーのジーンズに黒いレザーニーカー。

キャラクター：小野大輔さん

キャラ紹介？ 絶対領域（クリアランス）（後書き）

他の声優さんの方がしっくりくるといっ方は、その声優さんで楽しんでみてください

## 2 - 1 入院生活（前書き）

「フルパート…似合わねえよな、レベル5こんなこと」  
青鳥の構成員だった超能力者 クリアランス絶対領域

## 2 - 1 入院生活

9月9日 AM10時00分

「…ん……あ？」

絶対領域クリアランスが目を覚ました時、その眼に映ったものは白い天井だった。痛む体を気にして顔をしかめながらも上半身を起こす。いつのまにか病室服を着せられ、更に清潔感の漂う一室の部屋にいるようだ。

「…病院……か？」

見る限り今この部屋には彼以外には誰もいないようだ。ベッドも自分の寝ているモノだけだと考えると、個室であることが分かる。

「オレ、なんでこんなところに……確か……オレは……」

ハッと、意識が途切れる前のことを思い出す。

上半身だけを起こしたまま、もう1度周りを見渡し携帯を探す。

ベッドの傍に置いてあるチェストの上に黒い携帯を見つけ、ゆっくりとそれを手に取り開く。

「やっぱりな……」

携帯を開き呆れたように笑う。携帯のアドレス帳を開いてみるが、現在登録されておりません、という無機質な文字が浮かぶだけだった。そのほか送信履歴や受信履歴も削除されておりこの携帯は誰とも連絡をとれないようにしてあるようだ。

「解任<sup>クビ</sup>ってことかよ……」

見舞いに来たという名目できた上の人間が消していったということろだろう。

誰にも連絡しなくてよい、というメッセージと受け取るのが妥当だ。つまり、お前はもういらぬということだ。

「……くだらねえよな」

誰もいない病室で彼は苦笑いを浮かべながら呟く。

あれほど求めていた肩書も

一種のプライドを持っていた《青鳥<sup>ブルーバード</sup>》にも

なんの未練も後悔も残らなかった。

それが何よりも馬鹿らしい。

(笑えねえ……)

自虐的思考をしても何の意味もない。今後の方針を考えることにする。

起こしていた上半身を寝せて、目を閉じた。

まず考えるべきは拠点の確保だ。いままでは上の用意したマンションを拠点としていたが、解任されたということは剥奪されている

確立も高い。やつらはそういう連中だ。役立たずに使う金など一銭もないという判断を下し、契約を破棄されているだろう。

とは言っても、彼には16歳にして一生働かずとも生活していけるであろう貯金がある。セレブが暮らすようなマンションに移ることも十分可能な為、そこまで深刻な問題というわけでもない。

そんなことを考えていって、大抵の問題は解決できた。

しかし……

（これからオレはどうすりゃいいんだ？）

目的が存在しない。

いままではそれが、目的が与えられてきた。

与えられた目的を自分の意志のためにやるべきことだと変換し、利用され続けてきた。

急に自分で考えるなどと言われても、そんなモノが分かるはずもない。

そこで思い出すのは、自分を撃破したヒーローの言葉。

（「お前がその力を使って誰かを守りたいって思ってたなら、お前が負けることはなかったに決まってる。奪うだけのお前じゃ、絶対に勝てるわけがねえだろうがっ！！」）

別の道。奪わない道。……なにかを守る道。

(なにかを守るってたって、オレにそんなもんは……)

どんなに探しても見つからない。これから見つけられるだろうか？

そんな彼の問いに、答えてくれる者などいない。

\*

「ッ痛えな…」

病院の自販機に向かう途中に、絶対領域クリアランスが呻く。

痛みを知らない絶対領域クリアランスは歩くだけでも鈍い痛みが響く体が忌々しい。

絶対領域クリアランスが無能力者のヒーローにフルボッコにされて、打撲を負い、入院。

笑えない冗談だ。

こんな無様な姿を友人にでも見られたら、そのネタでどれほどいじられたらだろうか？

友人など、1人としていないが……

そうこう考えてるうちに自販機までたどり着く。

(あ？ あいつ……)

自販機の前にはかなり若い少年が立っていた。なにやら自販機の上部を見たまま、しかめっ面をしている。自販機のボタンが青く光

っていることから、すでに金を入れている様子が分かる。それでも何も購入しないということは、

(とどかねえのか?)

絶対領域クリアランスは少年と同じくしかめっ面を浮かべたまま、自販機に歩み寄り、少年の視線の先にあるオレンジジュースのボタンを押した。

少年は絶対領域クリアランスの行動に驚き、目を見開きこちらに振りかえる。

「飲みてえんだろ? とつとと持ってけ」

少年はそれを聴き、あわてて屈んでオレンジジュースをとる。そのまま走りだそうとするが、5m程走った後、こちらに振り返った。

「ありがとな! 兄ちゃん!」

少年は笑顔を浮かべながらそう言つと、今度こそ走り去る。

(こつこつことなのか? ハッ、…随分影響されちまってんなあ)

その後、コーヒーを購入した場で飲み干した絶対領域クリアランスは、小さく笑っていた。

\*\*\*

空き缶を捨てた絶対領域クリアランスは自分の病室まで足を進めている。

しばらく歩いていると自分の病室の前に着き、扉を開けた。

そこで絶対領域クリアランスは息を呑む。

自分がいた時は空いていたベッドに誰かが座っていた。

自分と同じ病室服に身を包む、見覚えのある少女だ。

「お前……なんでここに？」

「そんなの決まってんじゃない。あなたの病室に来たってことは、お見舞いと考えるのが普通じゃない？」

目の前の少女は、初期番外プロトワーストは笑いながら、目を見開く絶対領域クリアランスの質問に答えた。



## 2 - 1 入院生活（後書き）

再び、プロトワースト初期番外の登場です。

今回の章は絶対領域クリアランスと初期番外プロトワーストがメインになっていきます。

9月30日の前にも事件が…

次回もよろしくお願いします。

よろしければ、感想をいただけると幸いです。

## 2・2 動き出す領域（前書き）

「昨日の今日でこれかよ……、まだ体中痛えつつの  
学園都市屈指の超能力者<sup>レベル5</sup> 絶対領域<sup>クリアランス</sup>」

## 2 - 2 動き出す領域

「そんなの決まってるんじゃない。あなたの病室に来たってことは、お見舞いと考えるのが普通なんじゃない？」

自分で開けた扉を閉めて、クリアランス絶対領域は眉をひそめる。

目の前の少女が、プロトワースト初期番外がなにを言ってるか分からなかった。

クリアランス絶対領域とプロトワースト初期番外の関係はとても良好とは言えない。接点もありなく、その少ない唯一の接点も心温まる話とは程遠い。

「面白えな。そんな冗談でオレが感心するとも思ってたのか？」

必至で動揺を押し隠しながら冷静に話そうとするも、頬につたる汗までは隠せない。

「おやまあ。ミサカの善意を信じられないとは、捻くれてるねえ」

ニヤニヤとプロトワースト初期番外は笑っている。

「…自分を殺そうとした奴の見舞いと善意をどうやってら結び付けられんだよ、本音は？」

「冗談が通じない奴ってのはつまらないモンだねホント。」

プロトワースト初期番外は表情を一瞬で変える。心底つまらなさそうにクリアランス絶対領域を見つめた。

「ただの暇つぶしだよ。ミサカの怪我はたいしたことないから治療とかそういうのもないし。お話ししようよ絶対領域の旦那。」

「なんでオレなんだよ……さつきも言ったが、オレはお前を楽しみながら殺そうとしてたんだぞ」

「楽しんでねえ」

それを聴き、プロトワースト初期番外はまたニヤリと笑う。

「じゃあ聴かせてもらうけどさ、なんであなたはミサカにとどめを刺さずにいたの？ 乱入者がいたとは言ってもとどめくらいはさせたよねえ？」

「…気まぐれだ。あいつが来なきゃ殺してた」

クリアランス絶対領域は目をそらしながら答える。

実際に上条当麻が来なければ殺していただろう。しかし、なぜかあの時照準したのも確かだ。

「あつそ。それでもミサカにはあなた以外の人との接点もないし、ここで話するのはもう決定事項だから」

「…勝手にしろ」

\* \*

「そういうわけで、サードシーズン第三次製造計画のミサカはネットワークから負の感情を拾い上げやすいように脳を調整されんだけど、ミサカは

あの戦闘実験で死ぬ予定だったっぽいからそこまで負の感情を拾わないわけよ。調整がてきとーだからなあ」

「そうかよ…そいつは驚きだ。デフォルトでそういう性格かよ」

その後、プロトワースト 初期番外と絶対領域はとても年頃の男女の青春とは言えないような話題ばかり挙げている。不穏なワードばかりが室内に響いていた。ちなみに絶対領域はベッドに寝ている状態で、プロトワースト 初期番外はそばにある背もたれのない椅子に座っている状態だ。

「ところでお前、普通にしていけど体のほうはいいのかよ？ 結構いいのくらしちまった記憶があんだが」

「おっ、心配かね？ 旦那」

「…別にそんなんじゃないよ」

プロトワースト 初期番外は質問に答えずニヤニヤと、クリアランス 仏頂面の絶対領域を見る。

「ミサカは鳩尾に一発くらったただけだし。明日には研究者に調整とかで引き取られることになってるぐらい余裕だよ」

「そうか…」

クリアランス 絶対領域はプロトワースト 初期番外の答えに少し眉をひそめた。

(クソ野郎どもが死ぬ予定だったクローンの調整ねえ)

そんなことを考えていると、プロトワースト 初期番外が急に立ち上がる。

「暇つぶしにはなつたかな。ミサカ、そろそろ失礼させてもらうから」

そう言つて初期番外は部屋を出た。絶対領域は悪意のない会話というモノを試してみたことにいい気分を感じ、自嘲気味に微かに笑つた。

＊＊

初期番外が部屋から出て行つた数分後、絶対領域も室外へと出ていた。

カエル顔の医者に自分の体の具合を聴き、外出許可を得た絶対領域は病院の駐車場へと向かつていた。なんでも、絶対領域のバイクをここまで運んできた人間がいるらしい。おそらく上の人間が、実験場に証拠を残したくなかつたのだらうと絶対領域は推測する。

なぜ彼がこんなことをするのかには理由がある。先ほどの初期番外の言葉が引つ掛かつたのだ。本来死亡するはずのクローンの調整をしてくれるほど、上の連中に人情があるとは思えない。ということとは、調整などという情報を初期番外に伝えた者は上の人間からならぬかの理由で見限られた人間。自らの為に初期番外を利用する可能性が高い。それが氣にくわない。上の人間はおそらく動くことはない。だから情報を集め、そのクソ野郎が行動する前にオレが消す。それが彼のだした結論だつた。

軽く舌打ちをしながら、絶対領域は黒いフルフェイスのヘルメットを着けて、とある場へと向かう。

(…あの野郎に頼るっつーのは癪だが仕方がねえ)

クリアランス  
絶対領域は昔からの知り合いの顔を思い浮かべて眉間にしわをよせながら、バイクのエンジンをかけて走り出した。

病院をでてから30分後、クリアランス絶対領域は《二輪専門店》という場所に足を運んでいた。店の雰囲気は営業してるのかどうかも微妙なものだった。

クリアランス  
絶対領域は自動ドアの近くまで行くと、ほこりまみれのそのドアがスムーズに開いた。20m四方程の広さがありそうな部屋だが、そのスペースのほとんどがバイクで埋め尽くされているため人1人が通れるくらいのスペースしかない。

その薄暗い通路を奥までどんどん歩いていくと地下へとつながる階段があった。

クリアランス  
絶対領域はその階段を馴れたような足取りで降りていく。最後の段を踏み終えると、10m程前方に、上の階とは桁違いにセキユリティーが嚴重そうな扉が見えた。そこまで歩を進める。

「31718564」

扉の前で8桁の数字を口にすると、ガチャツという音が聞こえ、電子ロックが解除された。

扉を開き中へと入るとそこは上の階とは違う雰囲気の部屋が広がっていた。まず目に映るのはビジネスデスクの上に置かれた1台のスーパーコンピューター。見た目自体は普通のPCとなんら変わらないが、スペックは比べ物にならないほど高度なものだ。その他、

山のようななにかの資料、ファイル、ケーブルがきちんと整頓されている。

どこかの研究所の一室のような部屋の中心に置かれたイスに座る1人の女性がいた。その女性は回転式のイスを反転させてこちらに顔を見せる。整った顔立ち、白い肌、ストレートの黒髪ショートヘアという大人の雰囲気を持つ美人だった。

「あら、あなたが私の元を訪れるなんてね。珍しいこともあるものだわ」

「悪りいが世間話しに来たわけじゃねえ。お前に頼みてえことがあんだよ、花宮」

花宮とよばれた女性は肩をすくめて笑う。

クリアランス 絶対領域は無表情で口を開く。

「今行方がつかめてねえレベル6ソフト超能力者進化実験の研究者どもの情報によこせ。ハッキングの腕に自信がある元同僚のお前ならできるよなア？」

花宮は絶対領域クリアランスの質問を聴き、驚いた様子を見せた。

「まさかあなたも搦んどるとはね。ブルーバード青鳥は解任されたと聞いたけど、大した情報収集力なこと」

「ああ？」

## 2 - 2 動き出す領域（後書き）

まずは閲覧してくださった皆様、ありがとうございます

かなりの急展開ですが、9月30日事件に介入させることを考えると、なるべく早めにこの事件を終わらしときたいので、どうかお許しを

今回の絶対領域の行動目的は単に気に食わないから潰すと本人は言ってますが、ほんの少しだけ初期番外を気にかけてます。

元々クローンに対しては多少の同情もしてましたし、いざ初期番外を殺すとなると後味の悪さを感じていましたから。悪意のない会話というモノを久しぶりにしてくれた人だからという理由もあります。

本人は否定するでしょうが（汗

尚、クローンへの同情の描写は1 - 3話に、初期番外を殺そうとした時、後味の悪さを感じた時の描写は1 - 5話にあります。

それでは次回、お楽しみに

## 2 - 3 決意（前書き）

「目障りだ……、潰すに限るなア」  
学園都市屈指の超能力者<sup>レベル5</sup> 絶対領域<sup>クリアランス</sup>

## 2 - 3 決意

「あぁ?」

クリアランス 絶対領域は無表情のまま疑問に思うような声を発する。

「あら、どうせすべて知っているんでしょう?」

「…予測がついてるだけだ。確かな情報を知ってるならよこせ」

クリアランス 絶対領域はすこし表情を強張らせて情報を要求する。大体の予測はついているが確証がないうちは所詮、妄想に過ぎない。

クリアランス 絶対領域の言葉を聴き、花宮は怪訝な表情を浮かべる。

「あなたが予測だけでここまで足を運ぶなんて珍しいわね。それに、予測の根拠はどこから?」

「色々あんだよ。話すと長え。んなことより、とつとよこせ」

クリアランス 絶対領域は問いには答えず花宮を急かす。

その様子に花宮は苦笑いを浮かべながら机に座り、口を開く。

「まあいいわ。まずはあなたに説明するべきことは、あなたも関わっている特殊な妹達シスターズについてね。普通の妹達シスターズについてはあなたも知ってるでしょうから省かせてもらっわ」

「……」

絶対領域は黙って説明を聞く。

「あなたが先日行った実験で戦った妹達、初期番外。彼女は特別な個体なの。本来、通常の妹達には暴走防止のためのある手段が存在するのだけれど、彼女にはその手段が通用しないようにしてある。」

「…ああ」

絶対領域は適当に相槌を打ちながら、わずかに眉をひそめる。とある手段とやらは気になるが今聴いても仕方がない。

「それを利用してしようとする輩がいてね…。あなたと彼女の実験の後、その後始末に彼女が調整されていた実験場のありとあらゆる情報を削除するようになっていたのだけれど、ある研究者の業務用PCのデータをのぞいてみると少し興味深いログが残されていたの…」

そこまで言うと、花宮は表情を曇らせた。

「先日の戦闘実験で彼女が死亡しなかった場合、学習装置を使って彼女の頭の中にウイルスを入れようとしているということがわかった。暴走を阻止する手段のない彼女を使ってテロかなにかを起こせば、上の人間に復讐できるとでも考えているのでしょよね。国内生産が禁止されているクローンを使って警備員でも襲えば隠蔽もできないからね」

「ハッ、そんなもんで上を出しぬけるとでも思ってたのかア？あいつらは得体の知れねえ情報網を持ってやがる。計画しただけならまだしも、実行に移そうとした時点で暗部が黙ってねえぞ。」

絶対領域は馬鹿にしたような笑みを浮かべる。

少し前まで絶対領域は上の連中は動かないと思っていたが、この計画は学園都市の闇を晒すことを前提としている。なんの隠蔽もする気のないテロ行為はいくら上の連中でもごまかしきれないだろう。ということとは、だ。実行に移す前にその輩は消される可能性が高い。

だが、その計画が実行に移される時まで上が動かない可能性も捨てきれない。上の連中の考えなど彼には分らないのだ。その場合、おそらく初期番外までもが処分されてしまうだろう。

（あいつは何もしちゃいねえ、オレやそいつがどんだけ腐ってようが、あいつが消される理由にはなんねえだろうが……ハッ、オレみてえなのがなに考えてんだか。オレだって昨日殺すつもりだったつてのによ）

絶対領域は自嘲気味に、らしくないことを考える。

「たしかにそうね、あなたの言う通りだわ……。でもね、それだと彼女まで殺されかねない。私はそれが気に食わないの」

花宮は眉を下げながら絶対領域に笑いかける。内心絶対領域のように、今さら何を言っている？ みたいな自虐的なことを考えているのだろう。

「だから私はその輩を上より先に潰してみせる。あなたはどつするの？」

花宮の問いに絶対領域は邪悪に笑いながら答える。

「決まってる。オレを解任クビにしやがった上に手柄を取られんのは気に入らねえ。潰してやる。今日中になア」

その答えを聞いた花宮は一瞬驚きの表情を浮かべ目を見開くが、その目を閉じて笑う。

「そう…、だったら協力して欲しいのだけれど。じつはもう例の輩の居場所には見当がついてるの。でも私1人じゃ奴を潰す手がなくてね」

「面しれエな。敵の敵は味方ってかア？ いいぜエ、協力してやるよ。」

クレアラランス 絶対領域は邪悪な笑みのまま共闘することを肯定した。

「ありがたいわ。じゃあ早速、例の輩について説明しておくわね」

そう言つと、花宮はなにかの資料と一緒にファイルに挟まれた写真を取り出し、絶対領域クレアラランスに渡す。その写真には男性の顔が写っていた。眼の下には大きな隈があり、髪はボサボサで肩まで伸ばしている。全体的に冴えない感じの風貌だった。

「彼の名前は《加納かのう 六月むつき》。例の業務用PCを使用していた男」

花宮はさらに説明を続ける。

「で、加納が今居ると思われる居場所は多分ここの研究所ね」

花宮は地図を机の上に広げ、1点を指さす。ここからそう遠くはなかった。

それに対し絶対領域クリアランスは質問する。

「根拠は？」

「簡単よ。一定以上の電力を使っている所を片っ端から調べていったの。施設のメインシステムにハッキングしてね。すると、ある監視カメラに不自然な点があったからそこに居ると見て間違いないわ」

花宮はさらっと、とんでもないことを言っただけの感じが感心している暇はない。絶対領域クリアランスは場所を確認した途端にそこを立ち去ろうとする。

しかし、それを花宮が止める。

「待ちなさい。この研究所のセキュリティーには《AIMジャマ―》という対能力者用の設備もある。この設備はハッキングではどうにもならないわね。サーバールームまで行けばどうにかなりそうだけれど……。流石に能力を打ち消すことはできないでしょうけど、能力の発動にタイムラグを発生させることが出来るみたいだから、一応これを」

そうやって花宮は、振り返った絶対領域クリアランスに拳銃を下手投げで渡す。見たところ、素人にも扱える程度の反動の少ないオートマチックの拳銃だ。

「私はここでシステムに侵入ハッキングして、加納に気づかれないように防

犯システムを無効化させる。それが済んだら私も向かうわ」

「……」

拳銃をズボンのベルトに挟み、礼も言わずに無言のまま、今度こそ絶対領域は外に出た。

## 2 - 3 決意（後書き）

まずは閲覧してくださった皆様、ありがとうございます！

今回は事態の説明ですから、あまり進展はありません。

次回は結構重要な回です。

お楽しみに！

2 - 4 2人の襲撃者（前書き）

「良い子のみんなは拳銃なんて持っちゃだめよ。撃つと手が痛くなるし……」

絶対領域クリアランスの協力者 花宮はなみや 愛花あいか

## 2 - 4 2人の襲撃者

「ここか…」

花宮と別れてから20分後、クリアランス絶対領域はとある建物の前にいた。表向きは生物科学研究所と呼ばれている。その建物の外観はいたって普通だ。頑丈なゲートがあるわけでもなく、武装ゴリラのようなガードマンがいるわけでもない。入口にも受付のためのカウンターやPCがあるだけであとは、監視カメラが数台あるだけであり、今は花宮が防犯システムを掌握しているだろう。監視カメラをまったく気にせずにクリアランス絶対領域は誰もいないカウンターの前を通り過ぎる。服装は相変わらず、季節はずれな黒のモッズコート、白いVネックのインナー、ダークブルーのジーンズに黒のショートブーツ。普段の彼と一つ違いがあるとすれば、黒光りするオートマチックの拳銃がその手に握られていることだ。

（能力自体は使えるらしいが、極力控えた方がいいな。AIMジヤマーのせいで暴走して自爆なんぞ、情けなすぎんだろ）

クリアランス絶対領域は横幅2m程の病院のように清潔感のある通路を歩きながら無表情のまま考える。一応、加納を警戒しているが、自分に気づいてすらいないだろう。そこまで警戒する必要はないのだが能力を制限されただけでかなり精神力を擦り減らされた。拳銃を握る手に汗がにじむのを感じる。今までは能力があつたため不意打ちなど怖くなかった。しかし、今は能力発動にタイムラグが生じる状態だ。タイムラグがどの程度のものかは分からないが、1秒以上のモノだとすれば、距離と銃弾の速度によるが、発砲音に気づいた時にはあの世行きということもありうる。

（落ち着け。一応こっちは拳銃の演習なら暗部にいた時に受けてんだ。そこら辺のインテリ野郎よりも100倍マシなはずだ）

12歳の頃から暗部に所属していた彼は自分の能力で完全に仕事をやりきる自信が無かった。建物に個人を特定させる証拠を残してはいけない仕事がある時は拳銃を携行していた時もある。反動で手を傷めない持ち方も、反動を考慮した上でどこに照準をあわせればよいかなど大抵のことは理解している。

しかし、だ。本格的な銃撃戦など演じたことはない。たった一発の銃弾に命運をゆだねる状況など体験したことはない。緊張しないほうがおかしい。

（この部屋か）

あれこれ考えているうちに、1つの部屋の前にたどり着いた。明らかに人の気配がする。質素な白一色のドアのドアノブに拳銃を持っていない左手をかける。

（加納の野郎はこっちに気づいてねえ。コソコソ開けるよりも、一気に開けてぶち抜く方が効果的だな）

ドアの開け方にすら気を使うなど初めてかもしれない。いやな汗が頬をつたう。ドアノブに手をかけてから5秒ほど思考を続けた後、ドアノブを回し勢いよくドアを開く。

絶対領域はPCのディスプレイを立ちながら見ている様子の白衣クリアランスを着た人影が驚きに満ちた表情で振り返る前に、太ももを撃ちぬいた。

「えッ…っ、うあああああ！！」

少し遅れて、痛みを感じたのか。その白衣を着た男は太ももを押さえてうずくまる。いくつもの玉のような汗が男の顔に浮き出る。その男の顔は間違いなく、写真で確認した加納六月そのものだった。絶対領域クリアランスは念の為に自分が入ってきた扉の鍵を閉める。別の扉もあるが、目の前の加納がそこまで逃げるのは不可能だろう。そう考えると今の行動も無駄ではあるがしても損はない。職員室のような部屋だった。たくさんビジネスデスクに回転式のイスが置いてある。

「いやあ〜。内心、違う奴だったらどうしようかとびびっちゃまってたぜ加納くう〜ん」

「い、ああ、絶対領域！？」クリアランス

露ほども思っていないことを口にする絶対領域クリアランスは先手を取ったことで余裕がでてきたのだろう。銃口を加納の頭に向けながら楽しそうに笑う。元々、部屋自体はそこそこ広いが動けなくなった加納に向かって歩み続ける絶対領域クリアランスの行動のせいか、両者の距離は6、7m程しかない。撃ちぬこうと思えば、人差し指を少し動かすだけで目の前の豚の眉間に穴を空けられる。苦痛に支配されている表情の加納は襲撃者の顔を視認して顔を青ざめた。そんなことに構わず絶対領域クリアランスは加納に近づいていき、両者の距離はさらに狭まって行く。

「な、なぜお前がここに！？ 情報が漏れ…いや、え？」

「悪いがお前とお茶したくて来たわけじゃねえ。小悪党が最後に口にする言葉なんざ記憶に残したくもねえしな。」

加納が疑問を口にしてしている間に絶対領域クリアランスは加納の眉間と銃口の距

離を0にする。そして迷わず引き金を引いた。　パンツ　という乾いた音が響き、目の前にいる男が崩れ落ちる。

「あゝあ。さっきまですっげえ緊張してたんですけど、なんなんですかア？　このしらけた空気。正直かなりガツカリだったの」

あつさりと片がついたことに、クリアランス絶対領域は呆れたように嘆息した。そのまま携帯に手を伸ばし30分ほど前に登録した番号にかけようとする。しかし……

「…アア？」

つながらない。

（ここは研究施設だ…。電波で計器が狂わないようにシールドでも仕かけてんのか…？　ッ！　いや、まさかこれは……）

少し不審に思い、思考を巡らせた後に1つの可能性が彼の頭をよぎる。その後のクリアランス絶対領域の行動はかなり速かった。先ほどまで加納が見ていたPCをインターネットに無線LANでつなげようとする。そして見事につながった。

この結果は彼の頭を巡った可能性を肯定するものだった。

（シールドが仕掛けられてんなら、無線LANだって生きてるはずがねえ…。明らかに外部との連絡手段を集中して断たれてる。そんなことすんのはプロがどうしても逃がしたくねえ奴を確実に殺す時だけだ）

刹那、クリアランス絶対領域が入ってきた扉をノックする音が聞こえた。乱暴

なノックだった。扉が揺れている。

（僕は敵じゃありません、善意の塊のボランティアで参りました。なんて言っても信じてくれそうな心優しい客ってわけでもなさそう。オレも敵として認識される可能性もある。花宮の奴が今すぐ来るって保証もねえ）

クリアランス  
絶対領域はビジネスデスクの陰に隠れながら、扉に銃口を向けて警戒する。

しばらくするとノックの音が止む。2秒後、ダンッ、ダンッ、ダンッ という激しい銃声が鳴り響き、鍵の付いたドアノブが バギンッ という音と共に外れて無様にぶら下がる。

そこからまた2秒後、ガンッという音と共に扉が吹き飛んだ。

それを見るや否や、絶対領域クリアランスは迷わず引き金を引いた。

パンッ、パンッ、パンッ

3発程撃ってみるも、襲撃者は一向に入ってくる様子はない。しかし銃撃を終えた直後、扉のすぐ横に付いてある照明のスイッチに白い手が素早く伸び、一瞬で部屋を暗くされる。元々、日光が入ってくるような部屋でもない。部屋から光が失われ、暗闇が部屋を支配する。

「ッ!？」

わずかに動揺した絶対領域クリアランスの隙をつき、襲撃者は素早く部屋に入り、ビジネスデスクの陰に隠れた。絶対領域クリアランスはその動きに気づかな

かったが、襲撃者が自分と同じくビジネスデスクの陰に隠れていることは分かった。そこからすさまじい殺気が伝わってくる。完全に加納の協力者と勘違いされたのだろう。

（さっきの銃声から考えるに襲撃者はかなり大口径の銃を使っている。それにこのジリジリと追い詰める手順……、相当な訓練と修羅場を経験してるプロだな。だが、最初のノックは無駄そのものだ。楽しんでやがるんだろうな。仕事が趣味になっちまってるプロ、か……。クソが、厄介過ぎんぞ）

彼は焦りと怒りを感じながら、奥歯を強く噛みしめた。

## 2 - 4 2人の襲撃者（後書き）

まずは閲覧してくださいさった皆様、ありがとうございます！

重要な回と言いながらも、次回に引つ張ってしまい申し訳ありません。

AIMジャマーの設定と渡された拳銃、そして「絶対領域ですら、上の考えが分からない為、暗部がいつ動くかは不明」というのはこの襲撃者の為の伏線でした。

ケリアランス  
絶対領域はかなりの銃の腕を持っています。一応、作中でも描いた通り、演習も受けていますので。

しかし、襲撃者はあきらかにそれ以上の腕を持っているプロ。

ドキドキしながら読んでもらっているとよいのですが…、いかがだったでしょうか？

今回はとうとう謎の襲撃者との戦闘シーンです。

お楽しみに

## 2・5 地に落ちる者（前書き）

「人殺しは人殺しだ……、正義もクソもねえよ」  
学園都市屈指の超能力者 レベル5 絶対領域 クリアランス

## 2・5 地に落ちる者

(発砲してきた…、やはり、加納の協力者か、または僕と同じ職業か。面白い。依頼にはないが楽しませてもらうとしよう)

暗闇に支配された部屋の中、黒いスーツの上に白いロングコートを着た長身の少年は、発砲してきた少年を警戒する。

《綴じゅう 慶嘉けいか》

それが襲撃者の名前だった。

ビジネスデスクに隠れながら、綴じゅうは邪悪に笑う。手の中の44口径マグナムが自分に語りかけているように見えた。早く撃ち殺せ、と。

(殺しても損はないだろう)

それが殺し屋である綴の出した結論だった。

\*\*\*

(仕事に興味になっちまってるプロ、か……。クソが、厄介過ぎんぞ)

絶対領域クリアランスは焦りと怒りを感じながら、奥歯を強く噛みしめた。

(残弾は13発・・・、襲撃者の野郎にはオレをミンチにできるくれえの装備があると見て間違いないエな)

綴を警戒しながら、脱出経路を見つめるべく詮索を始める。綴が入ってきた扉に向かって走るのは自殺志願者確定の超論外だ。となると、もう1つの扉が自然に選択されるわけだが・・・、その扉はビジネスデスクの陰から出なければいけない向かいの位置にある。

(この部屋は完全な暗闇だが相手がプロである以上、襲撃者は暗闇の行動には慣れていているという前提で動いた方がいいな。移動する際に少しでも音を立てたら・・・、なにかで襲撃者の隙を作らねえと話になんねえ)

絶対領域はあたりに使えそうなものがないか詮索する。そこで、天井に視線が固定された。ちょうど綴が隠れているであろうビジネスデスクの上方だ。

(使えるな・・・、残弾は気になるが……。クソがッ)

思考を終えると同時に絶対領域はビジネスデスクの上に置かれているパソコンのケーブルを引きちぎりコンセントを抜くと、自らの視線の先にあるモノを撃ちだした。

パンッ！ パンッ！！、乾いた銃声が響く。

「ハハ！ なんのつもりだ？ 銃声で人を呼ぶつもりなら無駄だぞ。こここの警備員はもう僕が・・・」

綴が絶対領域を罵倒したその時、綴の真上から勢いよく大量の水が噴き出した。流石の綴も身を強張らせた。その間に絶対領域は向

かいの扉へと走る。

(火災報知機を着弾熱で作動させたのか？ やってくれる……ッ)

綴は急いで絶対領域の後を追う。

\*\*\*

(チクシヨウが…ッ、能力さえ使いりゃあ楽に終わらせられたんだがな)

絶対領域は出てきた扉から続く廊下を10m程走り、右の曲がり角へと折れた所で壁を背にして座り込んでいた。息切れも激しく、疲労が顔ににじみ出ている。

(脱出するには奥の階段だが…そこまで6、7mぐれえか…。確実に狙い撃ちされるな)

すでに、綴は絶対領域の10m後方にいた。それを絶対領域が見抜けたのは、尋常ではない殺気を感じるからだ。幼いころから暗部で働いてきた中で培われた勘というものは馬鹿に出来ない。今この綴の死角からでた場合、簡単に殺されてしまうだろう。

(ここで殺るしかねえ…。今オレの手にあるのは拳銃ともう1つ。あの部屋からかっぱらってきたケーブルだけが、十分だ。この廊下にもアレがあるからなア)

絶対領域は笑みを浮かべる。追い詰められた時にでるあきらめに

満ちた笑みではない。自信に満ちた笑み。勝利を確信した笑みだ。  
絶対領域は引きちぎられたケーブルを近くのコンセントに刺した。

\*\*\*

綴は絶対領域が隠れているであろう曲がり角から5m程離れたところで銃を前方に構える。急所が死角からでた瞬間に撃ちぬく。作戦はそれだけだ。実力がある以上、特殊さも奇抜さもいらぬ。シンプルに技術に任せるだけで勝利は確定する。

自信、確信……油断

綴は理解していなかった。逃げるのをやめた獲物の選択肢は3つ。1つはあきらめに浸る者。1つは、時稼ぎによって可能性が開ける者。2つ目までは綴も理解していた。しかし、最後の選択肢には、油断を抱えた者は気づけなかった。

勝利が確定し、獲物から狩る側へと変化する者。逃げきる確率よりも、勝率が大きくなった者。

\*\*\*

絶対領域はすばやく動いた。綴の死角から腕だけを出して拳銃を構える。それに対し、綴は動かなかった。絶対領域が向けた拳銃は天井の火災報知機へと向けられていたからだ。

(またスプリンクラーか、芸のない……僕が怯んだ瞬間に逃げる気か？ ここはあえて腕を撃たずに逃げようとした瞬間に無様な背中を撃ちぬいてやる)

綴は嘆息しながら引き金に掛けられた指にわずかな力を込める。

パンツ！ パンツ！！

たった2発程でスプリンクラーから大量の水が噴き出る。

(さあ出て来い！ 1発で終わらせてやる！！)

綴が思うとほぼ同時に、死角となっていた曲がり角からなにかが飛び出してきた。そこで綴は怪訝な表情を浮かべた。出てきたものは引きちぎられたケーブルだ。そしてその先端が地に落ちる。

大量の水で綴とつながった地に。

パンツ バチチツ、パリッ！！！！

綴は絶対領域の狙いに気づき目を見開くがもう遅い。

感電。

「ガッアアアッ！！」

綴は苦痛に顔を歪めながら瞬時に後方に飛び退く。そこで綴の眼はある者を映していた。こちらに拳銃を向け、邪悪な笑みを浮かべる少年。

「ゲームセットだ、格下が」

目の前の少年の弾丸は、無情にも綴つづの胸へと吸い込まれていった。

\*\*\*

「ツたく、手間掛けさせやがって」

絶対領域クリアランスは出口へと向かいながら疲れを顔に浮かべる。

（今回は運がよかったただけだ。襲撃者の野郎が楽しむことより殲滅を優先させてやがったらとつくにあの世生きだぞ、クソツたれが）

「あら、もう片づいっちゃたの…」

思考にふける絶対領域クリアランスの耳に女性の声が入ってきた。いつのまにか出口まで来ていたようだ。明るい日差しを背に、花宮の姿が見えた。念のため花宮が呼んでおいたのだろうか。後方には救急車と救急隊員も見える。おそらく闇を知っている者達だろう。変な気を使う必要はない。

「遅エよ。余裕で終わらせてきたぞ。救急車なんざいらねえよ」

「その割には疲れ　　ッ後ろ！！」

絶対領域クリアランスが笑いながら悪態をついているのに対し、返事をしようとした花宮がなにやら焦った表情で後方を注意する。

そこから先はまるでスローモーションのようだった。

振り返るとそこに満身創痍の襲撃者、綴つづいが怒りに染められた顔でこちらに拳銃を向けていて、

ダンッ！ という重い銃声を聴き、そこで絶対領域クリアランスの視界が闇に塗りつぶされた。

\*\*\*

「絶対領域クリアランスッ！！」

花宮は焦燥した様子で倒れた絶対領域クリアランスに駆け寄る。

白いロングコートの少年は絶対領域クリアランスに発砲したと同時に倒れた。

そして発砲された少年、絶対領域クリアランスも同時に倒れた。

(眉間にッ!? これじゃ…もう…)

絶対領域クリアランスは眉間から出血している。間違いなく即死だろう。

そう結論付け、花宮が絶対領域クリアランスから目をそらそうとした時、ある違和感に気づいた。

(弾丸がない? でも、貫通してる様子もないし、よく見たら傷もそこまで深くない。これは…)

「早くこの子を病院にッ! 急いで!」

花宮が普段は出さないような焦りの混じった大声を出す。救急隊員の反応は早かった。数名の隊員が絶対領域クリアランスを担架に乗せて、そのまま救急車に乗せる。そして第7学区の病院へと向かっていく。その様子を花宮は汗を垂らしながら見送っていた。

（AIMジャマーのせいで多少のタイムラグが生じたけど、無意識下の対消滅演算が働いたみたいね……。弾丸が彼の頭を貫く前になんとか間に合った…）

大きな安堵のため息を吐いた後、花宮もそこを後にした。

9月9日 14時56分

加納のテロ計画は破綻した。

## 2・5 地に落ちる者（後書き）

まずは閲覧してくださった皆様、ありがとうございます！

能力をまったく使わない地味な戦闘シーンでしたが…如何だったでしょうか？

単純な頭脳戦という奴ですね。

綴が本気でかかれば絶対領域に勝機はなかったのですが、依頼になり殺しということ、最初から遊び心満載でしたからね。

前回の「タイムラグと不意打ちはやばい」というのが今回の為の伏線でしたが……、少々強引でしたかね？

次回は外出許可を得た日に重症を負って帰ってきたという医者泣かせの絶対領域と初期番外さん、花宮さんの会話シーンです

お楽しみに

2 - 6 誰かのために（前書き）

「まさかの2人目!? つてミサカはミサカは  
シスターズリアルナンバー  
妹達認識番号20001号 打ち止め（ラストオーダー）」

## 2 - 6 誰かのために

9月9日 PM 23時56分

第七学区のとある病院。集中治療室と呼ばれる部屋に、絶対領域クリアランスは呼吸器を装着され、穏やかな表情で眠っていた。本来ここは個室であり、患者以外の者が立ち入っていることは滅多にない。しかし、その傍らにはパイプ椅子に座りながら絶対領域クリアランスを見つめる少女の姿があった。

赤みがかった茶髪に整った顔立ち。妹達シスターズと呼ばれる学園都市第3位の超能力者レベル5、御坂美琴のクローンの1人であり、初期番外と呼ばれている少女だ。

\*\*\*

PM 22時32分

頭部に銃弾を浴びるといふ重傷を負った絶対領域クリアランスを執刀したのは初老の男性だった。カエル顔のすこし緊張感に欠けるものの、医療技術においては彼以上の医師はいないと名高い、《冥土帰し》（ヘヴンキャンセラー）と呼ばれている医者である。その元には花宮愛花の姿があった。彼はレントゲンの写真を手に取りながら、彼女に背を向けて口を開いた。

「……前頭葉に頭蓋骨の破片が刺さっているね。そこまで傷は深くないみたいだけど、多少計算能力には支障が出るだろうね」

「計算能力……」

花宮は眉を下げながら呟いた。

（じゃあもう彼の能力は ちから ）

暗い表情を浮かべている花宮に、冥土帰し（ヘヴンキャンセラー）は回転式のイスを180度回転させて振り返る。

「そんなに心配しなくても大丈夫だよ。一万ものクローン体を作った並列演算ネットワーク。そいつを使ってあの少年も脳の欠損部分を補わせるといい。君に説明はいらさないね？」

「あの子も？」

冥土帰しの発言に安堵と共に違和感を覚えた花宮は思わず聞き返す。「あの少年も」という言い方ではまるで前例があるかのようだ。

「つい最近、同じようなことがあってね。彼の場合は傷が深すぎて補助が無ければまともに歩くことすら難しいけど。もっとも、あの少年はそこまで重傷じゃないから安心してくれ」

冥土帰し（ヘヴンキャンセラー）は微笑を浮かべながら、説明する。どうやら少し前に絶対領域 クリアランス よりも危険な状態の患者がいたらしい。その前例もあるため、早急に処置できるそうだ。前の患者のステアの補助機があるらしい。あとはそれを絶対領域用 クリアランス に調整するだけのだ。

「そう……。」

花宮は安心した笑みを浮かべた。そして冥土帰し（ヘヴンキャンセラー）の顔を見る。

「ありがとう。彼を助けてくれて」

「医者として当たり前だね？」

そう言って冥土帰し（ヘヴンキャンセラー）はまた花宮に背を向けた。

花宮は彼に頭を下げ、そこを後にした。

\*\*\*

冥土帰し（ヘヴンキャンセラー）の居た部屋を後にした花宮はある思考に浸りながら、絶対領域クリアランスが眠っている集中治療室へと向かっていた。すでに日も沈み、廊下は薄暗い。

（今考えてみると、彼は何故あんな行動に出たのかしら？ 今回の事件の情報源だって、暗部を解雇されているはずなのに、一体どうやって？）

花宮の知る限り、青鳥ブルーバードを解雇されたのはつい昨日のことだ。コンタクトをとれる人間が存在するとは思えない。しかし、絶対領域クリアランスは自分の元を訪れる頃には、事件の片鱗を掴んでいた。

それよりも理解できないのは、彼の行動理由だ。彼は力と肩書の

みに執着していた。そんな彼が気に食わないという理由だけで行動するだろうか？

(彼になにがあったのでしょね？)

いくら考えても分からない。苦笑しながら歩を進めていると、目的の部屋に到達した。その部屋の前には1つの人影があった。扉の前に立ちながら少しも動かない。花宮はその人影を知っていた。だからこそ驚いた。花宮は柔らかな笑みを浮かべながら、その人影に話しかけた。

「こんなところで会うなんて奇遇ね。初期番外」

「…花宮？」

\*\*\*

初期番外は昼過ぎに廊下でモノ思いにふけていた。

(どうでもいいけどミサカの初めての話し相手ってあいつなのかな？)

ある程度感情データをインストールされ、打ち止めという上位個体や他の妹達から《会話》というものをネットワークを介して知っていたせい、初期番外は《会話》というものに憧れていた。第三次製造計画の妹達はネットワークの負の感情を拾いやすいように調整されている。しかし、初期番外はその調整が曖昧だったためか、そこまで悪意と言う感情を拾わない。よって、初期番外は正の感情

を、つまり楽しいという感情をいただくのは不思議なことではない。

(いや、別に絶対領域クリアランスの事なんざどうだっていいけど…)

ふと、あの少年のことを思い出す。不機嫌そうにしながらも、自分の会話に付き合ってくれた少年のことを。若干顔が熱くなったような気がするが……気のせいだろう。

その時だった。誰かがストレッチャーで運ばれていくのが偶然視界に入った。急患らしいその少年の顔には見覚えがある。

(絶対領域クリアランス!?)

急患の顔は初めての会話相手、絶対領域クリアランスだった。呼吸器のようなものを装着させられ、すぐに手術室へと運ばれていった少年の姿をプロトワースト初期番外は呆然と見送った。

\*\*\*

そして現在に至る。絶対領域クリアランスが運ばれてきた病室まで来てみたが、なにをすればよいのか分からずと立ちつくしていた。そうしているとき、かつての自分の研究者であった花宮が話しかけてきたわけだ。

「あなたがここに入院してるなんてね…初耳だわ」

「誰にも言っていないしなあ。大体、話相手も絶対領域クリアランスが初めてだし」

プロトワースト  
初期番外はいつものニヤニヤとした表情を浮かべているが、その顔が微かに紅くなっていることに本人は気づいていない。

「そう……。ねえ、もしかして彼に加納のことを話したのってあなた？」

「？　なんであなたが知ってるの？」

プロトワースト  
初期番外は少し意外そうな顔をする。そこで花宮は1つの仮説を立てる。

（もしかして彼、この子を守るために？）

クレアラランス  
絶対領域程の頭脳があれば、彼女の言葉から不審な点を感じ取り、ある程度の予測を立てることも可能だ。

クレアラランス  
自然と口元が緩む。花宮の知る絶対領域では有り得ない。なにかが彼の中で変わり始めたのだろう。

「いや、ちょっと色々あってね……。なにから話せばいいかしら」

花宮は今日の出来事をありのままに話した。花宮が話を終えて去っていく、その背中が見えなくなるとほぼ同時に初期番外は目の前の扉を開けて、ベッドの隣に置いてあるパイプ椅子に座った。

\*\*\*

プロトワースト  
初期番外は目の前で穏やかに眠っている少年を見つめた。

花宮から聞かされた話はある程度のところまでは予想していた。加納が自分を利用しようとしている所ぐらいまでは。しかし、絶対領域クリアランスのことに關してはまったく予想していないことだった。

（あなたが、ねえ…）

花宮の言葉を思い出しながら、初期番外は普段は見せないであろう、心から嬉しそうな笑みを浮かべ、眠りについた。眠る寸前に先ほどの花宮の言葉を思い出しながら。

\*\*\*

「そして、彼は傷を負ってしまったの」

「どうして、あいつがそんなこと…」

花宮の話に疑問を抱いた初期番外は問いかける。その問いに花宮は柔和な笑みで答えた。

「それは……多分あなたのためね、初期番外」

## 2 - 6 誰かのために（後書き）

まずはここまで足を運んでくださった皆さん、ありがとうございます！

感想の中でもピンとこられた方もいらしたので、他にも気づいてる方がいらっしやたかもしれません……電極ですね。

一方通行のスペアの電極を元に調整されていきます。

久しぶりの初期番外さんプロトワーストの登場ですね。なんか主人公より人気があつたり（笑）

次回からもっと登場シーンが増えてきますので〜

お楽しみに

2・7 道標（前書き）

「ミサカ、悪気はないから」  
サードシーズン  
第三次製造計画の個体  
プロトワースト  
初期番外

## 2 - 7 道標

9月10日 AM 6:06分

「…ん…」

絶対領域は病院のベッドで目を覚ました。

(…あ？ ここは…病院か？ 確か、オレは…)

まだぼんやりとしか頭が回っておらず、目も半開き状態だ。

(ああ、撃たれたんだっとな…)

ここまで来る前の事を冷静に思いだす。かなり衝撃的な内容なのだが、頭があまり回っていないためか、あくまで冷静に思考する。

寝ているままの状態のため、目の前にあるのは白い天井だけ。あまり昨日と変わらない風景だ。

しかし、昨日と違うなにかがあった。誰かがいる気配がする。

ゆっくりと上体を起こすと自分の寝ているベッドに誰かが突っ伏しているのが視界に入った。顔は見えないが絶対領域はその人物が誰であるかを理解した。

「…なんでコイツがいんだよ」

絶対領域は初期番外を見てため息をつく。昨日に引き続き今日も

だ。なぜ自分のようなものに近づこうと思うのか。彼には理解できなかった。しばらく彼女を怪訝そうに見つめていると、病室の扉が開いた。

「調子はどうだい？」

開けられた扉からは静かな声がした。絶対領域クリアランスはそちらに目を向ける。

居たのはやはり、冥土フンキャンセラー帰しだ。

「オマエもかよ…、なんだってんだ」

「ちゃんと会話ができてるってことは、上手くいったみたいだね。君用に調整するのは大変だったんだよ」

「あ？ 何の話だ？」

安心したような表情の冥土フンキャンセラー帰しに絶対領域クリアランスは怪訝そうにしながら視線を向ける。

「なんとなく理解出来てると思うけど、今の君は機械の補助を受けてるんだ」

「補助だあ？」

「ああ。科学生物研究所で脳にダメージを負ってしまったね。今の君は計算能力や言語機能なんかに支障が出ている状態だ。それでも君がそうして思考、会話、活動できるのは首元の装置からミサカネットワークの並列演算なんかを利用してあるからだ。まあ、彼と

は違って歩行機能なんかは無事だったみたいだね」

絶対領域クリアランスは首元に指を当てる。なにかスポーツネックレスのようなものが付いているのが分かる。チラリと初期番外プロトウェーブを見て思わず苦笑した。

(コイツにも貸し作っちゃったってことかよ…。一応コイツの為に動いてやったつもりだったんだがな)

気に食わないという名目で動いていたが、実際は彼女のことを多少気にかけていた節もある。もっとも、そんなことは死んでも口に出さないが。

「身近にこんなの付けてるのがオレ以外にもいんのかよ。世の中狭いもんだな、ホント」

「その誰かさんのおかげで早めに処置できたんだけどね。今は通常モードと言って、最低限の行動をとれる状態だ。能力はその状態じゃ使えないから注意するようにね。歩行機能にはそこまで支障も出てないと思うから普通に歩くくらいなら出来ると思うよ。通常モードなら60時間は行動可能だ」

「通常モードがあるってことは、能力使用モードもあんだろ？  
じゃねえとモードなんて言い方しねえよな？」

絶対領域クリアランスは無表情のまま電極をいじりながら問いかける。その間に冥土ヘブンキヤンセラ帰しはため息をつきながら答えた。

「もちろんあるさ。けど、能力使用には必要とする並列演算の量は相当なものだ。バッテリーの消費も激しくなる。15分行動する

のが限界だ。むやみやたらには使わないようにね」

「ハッ、無様になっちまったもんだな。たった2日でこの様かよ、笑えねえ……。バッテリー切れになったらどうなんだ？」

「……言語機能、計算機能のすべてが失われる。なにも考えられなくなるって言った方が分かりやすいかな」

△フンキャンセラ  
冥土帰しは淡々と告げた。それを聴き、クリアランス絶対領域はため息をつく。

「随分とハイリスクだな。気をつけるよう心がけとくわ、センチ」

「それは何よりだ。ではこれで失礼させてもらうよ」

そう言って冥土帰しは扉から出て行こうとするが、その寸前で立ち止まった。振り返って絶対領域の顔を正面から見据える。

「そうそう。言い忘れてたけど彼女、ずっと君の傍に居たよ。お礼を言っておくようにね。」

「……」

「君が今までどんな環境にいたかなんて関係ない。すべては君の心次第だよ？」

今度こそ冥土帰しは部屋から出て行った。クリアランス絶対領域は閉じられた扉をしばらく無表情に見つめ、やがて視線を初期番外に向ける。

「どいつもこいつもお節介がすぎんだよ」

絶対領域クリアランスは1人眩く。窓から差しいる光を浴びたその顔は、微かに笑っているかのようにだった。

\*\*\*

AM8:12

あの医者が出て行ってから、絶対領域クリアランスは2時間ほどベッドに寝そべっていた。

退屈と言えばそれまでだが不思議と気分は悪くない。静かなその部屋はとても居心地が良かった。

「おやおや旦那、お早いお目覚めですな。ミサカより早く起きるとは…」

「そいつはどうも。起床と同時に冗談とは恐れ入るな」

ボーっとしていると初期番外プロトワークストが目を覚ましたようで、起床とともに冗談をこぼす。適当に相槌をうちながら、視線を彼女へと向けた。

「あらら、首元にいかしたモンつけてんじゃん。それどこで買ったの？」

「オレに冗談が通じねえのは十分理解してると思ったんだがな。以外だったわ」

少し前までの彼なら自分を罵倒してきた相手を文字通り消しているところだが、そんな気は微塵も起きないどころかむしろ楽しいと感じている。もっとも、そんなことも死んでも口にはださないが。

「いいじゃんちよつとぐらい。これがミサカの個性なんだって」

「個性っつー言葉のせいで世の中便利になってくなア」

上体を起こしながら絶対領域フリアランスは呟くように答えた。そして、完全に上体が起きあがると同時に、初期番外の方を向く。そして少し仏頂面気味の口を開いた。

「…一応、礼は言っといてやる。」

「ッ!? あなたもお礼ってやつ言えるんだ。ミサカ、超意外」

「…なんで礼言っつて不快にさせられなきゃなんねエんだよ」

その後もとりとめのない会話プロトワースト（主に初期番外から話を振る）を繰り返す。しばらくして、初めて絶対領域クリアランスから初期番外プロトワーストに話しかけた。

「オマエ、調整がどうたらこうたらとかは大丈夫なのか？」

「ああ、そうだった。ミサカ、こっちの医者になんとかしてもらえらることになったから。他の妹達シスターズもいるらしいけど、そいつらと接触してもなんら問題はないだろうしね」

絶対領域クリアランスの質問に初期番外プロトワーストは相変わらずニヤニヤとしながら答える。答えたと同時に初期番外は立ち上がる。

「ミサカ、そろそろ検査の時間だから。失礼させてもらおう」

「…ああ」

プロトワースト  
初期番外はそう言ってスタスタと扉へと向かい、部屋を出て行った。

(なんなんだろうな)

クジアラランス  
絶対領域はベッドに寝そべりながら考える。会話と言つものに疲れながらも楽しさと言つモノを感じていた。

(…オレは…あいつを守りてえのか?)

守りたいものなど見つかるはずもない

本当にそうなのだろうか？

彼の中の変化がその前提を覆すこともあり得るのではないか

少なくとも今は、この時間を誰にも譲りたくない

自分にはふさわしくなかるうが、叶わない絵空事だろうか

守りたいものをみつけれられたかもしれないから

ずっと闇の中にあつた領域を僅かな光が照らした



## 2・7 道標（後書き）

まずここまで足を運んでくださった皆さん、ありがとうございます！

会話回ですね。絶対領域の現状、心情の変化、新たな目標設定も入れたほのぼの回でした。

初期番外に関しては、すでに気づいていらっしゃる方もいたのですが、番外个体さんより若干トゲが少ない感じですね。

一応、キャラに違和感が出さないように心がけていますが、如何だったでしょうか？

次回、又は次々回は書いてて少し恥ずかしい内容になるかもしれませんが、次回（笑

お楽しみに

## 2 - 8 ナイトパレード（前書き）

「あなた、素でやってるの？」  
クリアランス  
絶対領域の協力者 花宮 はなみや 愛花 あいか

「あ？」

学園都市屈指の超能力者 レベル5 絶対領域 クリアランス

## 2 - 8 ナイトパレード

9月19日

学園都市では大覇星祭という祭典ビッグイベントが行われていた。端的に言うと、大がかりな体育祭というやつだ。子供の晴れ姿を一目見たいと思う《外》の人間が、この大覇星祭が行われている期間は学園都市内に入ってくる。よって人口密度も自然に高くなり、どこにいても人ごみetcなどで暑苦しい状況となる。普通の学生は体育服で外を出歩き、室内にこもることは、ほほないと言っていいだろう。

そんな中、絶対領域クリアランスは病院の院長室を訪れていた。

「脳になにか違和感は感じるかい？」

「いや、特にねえな」

冥土ヘヴンキャンセラー帰しの問いに、絶対領域クリアランスは無表情のまま答えた。

いつも通り、初期番外との会話を終えた絶対領域クリアランスは自分の体に特に違和感はないことを伝えに来たのだ。

「なら、もう外出しても大丈夫かな。家はどうする？ あの病室なら貸してやれるが」

「悪いな。しばらく貸してもらおう。いい物件が見つかるまでだ」

そう言って、絶対領域クリアランスは院長室を出て行った。

(…外の飯でも食いにいくか。ついでに、新しいメットも買ったほうがいいな)

意外性あふれる一般人的思考を持ちながら、絶対領域クリアランスは歩を進めた。

\*\*\*

絶対領域クリアランスが病院から出た時とほぼ同時刻。初期番外プロトワーストは病室内で1人戦っていた。その部屋は、他の妹達シスターズのいる部屋とは違い個室である。清潔感あふれるその部屋には、戦闘の対象となるものなどない。そう見えるが…

(ツグああああ!!)

初期番外プロトワーストも多少特別とは言えども妹達シスターズの1人である。当然ミサカネットワークというものからある程度の情報や他の妹達シスターズの感情も多少共有される。

(ちくしょう、無駄な好奇心に突き動かされたばかりにイイイイイイ!!)

初期番外プロトワーストは病院のベッドの上に座りながらウズウズとしている。その顔はとてつもない熱を帯びていた。つまり、真っ赤というわけだ。

ミサカネットワークを利用して分かったことが1つ。他の妹達シスターズ達の中に今日行われるであろう《ナイトパレード》と言う行事を、

上条当麻という少年と楽しもうと企てている輩がいた。その輩は必死で情報が漏れないようにプロテクトを掛けていたが、演算能力に関しては初期番外の方が上であるため簡単に探り出せた。なんでも《ナイトパレード》を2人きりで過ごす距離が縮まるらしい。

ここで問題がいくつか出てきた。

1つ目の問題は初期番外が8月21日の実験以降に製造された個体であるため、上条当麻に対して特に何の感情も持ち合わせていないこと。

2つ目は例の輩の情報を手に入れてしまったこと。《ナイトパレードの存在と男女間の距離が縮まる方法》というモノを知ってしまったということ。当然、初期番外に気がかりな男性がいてしまった場合、感情データをインストールしてしまった彼女は当然その男性とナイトパレードを過ごしたくなってしまうだろう。

そして最後の問題は……気がかりな男性がいてしまったということだ。

（行きたい、ナイトパレードに行きたい！！ 絶対領域と一緒に……いや、あいつのことなんざマジでどうでもいいけど……。いや、でも一応恩があるし……借りは早めに返した方がいいに決まってる。そうだ、そのために今のうちに行つとこう！ 今日の内に戻しとけば後が楽だし！！）

謝礼という絶好の口実を手に入れた初期番外は半端ではない速度で絶対領域の部屋へと向かった。

\*\*\*

(なにがどうなっただろうなっちまっただら?)

クリアランス  
絶対領域は肩を落としていた。

実はファーストフードが好物の絶対領域クリアランスは現在、地下街のファーストフード店に居た。客はほとんどが地上の屋台や公園で昼食をとっているためか、あまり多くはない。その店のオープンスペースとして、外にもいくつかテーブルが並べてある。

そのテーブルの一つに、真っ白な修道服を着た銀髪碧眼の少女が目を輝かせながらハンバーガーやフライドポテトを両手に持ち、《ガツガツ》という擬音語が似合いに似合う程のありえない速度で口に運んでいうなんともシュールな絵が出来上がっていた。念のため言うておくと、これらの食物は絶対領域クリアランスが買い与えたものだ。

そもそもこんな事になってしまったきっかけは、絶対領域クリアランスが注文をしようとしていた時に、いきなりこの食欲旺盛少女が横から激突してきたことにある。

彼女はいかにも「空腹でもう動けますぬ」的な様子で絶対領域クリアランスに、

「あつとうまだ、いやちがつかも、ねえなんでとうまじやないのなんでご飯食べさせてくれないのあつ目の前においしそうなお店があるんだよあれ食べたいかも食べたいな食べたい食べたい食べたい食べたい全部食べたい!!」

「……」

などとはざきやがったため、《不本意》ながら現在に至る。

「それでね、私はお腹がすいちゃって、気づいたらこんなところにいたんだよ?」

「聞いてねえよ。それよりオレに言うことがあるんじゃないか」

「ごきゅ。うん、ありがとね」

「…一言かよ、どうでもいいからさっさと失せろ」

クリアランス  
絶対領域は疲れをこれ以上ないほどに滲ませながら目の前の少女に悪態をつく。あいにく、少女の神秘的な食欲と胃袋に付き合うなどというふざけた趣味は持ち合わせていない。

「…ありえねえ」

オレンジ色に染まり始めた空の下、クリアランス絶対領域はバイクを走らせながら考える。まさかファーストフード店で福沢諭吉を二人以上見ることがあるとは思わなかった。その上、

『この辺で我慢しないといけないかも』

などとはざいていたところを見ると、あの少女の保護者は相当金に困っていることだろう。流石に同情する。

\*\*\*

「……」

一方、プロトワースト初期番外はクリアランス絶対領域の病室のイスにに座りながらポーッと窓から外を見ていた。

その後、勢いよくクリアランス絶対領域の部屋を訪れたものの、クリアランス絶対領域はどこかへお出かけというわけだ。あの決意はなんだったのだろうか？

(…どこいったのかな？)

時計を見てみると、17時50分。今から向かって、ナイトパレードには間に合わないだろう。

(ミサカは別にあいつと見たいってわけじゃないし、礼だから今日の内にしたかっただけであって……なんか違う気がする)

なんとというか、胸がすつきりしない。自分のことをここまで理解できないとは。

そんなことを考えていると、不意に後方の扉が開いた。プロトワースト初期番外は反射的に振り返る。そこには自分が今の今まで待ち続けていた茶髪の少年、クリアランス絶対領域がすこし驚いたように目を見開いてこちらを見ていた。

「ここで何してんだよ、オレになんか用か？」

「えっ？ ああ、いや別になにも……」

明らかに声を上擦らせながら、しどろもどろに答える。頬も少し紅く染まり、目もろくに合わせられない様な状態だ。

その不自然な様子を絶対領域クリアランスは怪訝そうに見つめるが、そのまま黒のモッズコートをハンガーにかけ、ベッドに歩み寄ろうとする。そこで反射的に初期番外プロトワーストは声を出す。

「あの……なんていうか…」

「？」

絶対領域クリアランスはいつもの軽い感じとは違う様子の初期番外プロトワーストを見つめる。

「いや、加納の件のお礼でもしようかななんて、ミサカも思ってたわけで……ほら！ 今日のナイトパレードでも一緒に楽しもうかなあとか……。今からじゃ間に合わないだろうけど」

「オマエ、知ってたのか…」

まるで思考が安定しない。心臓の音がとても速く、大きく聞こえる気がした。顔はとてつもない熱を帯びていて、わけがわからない状況だ。

絶対領域クリアランスはその様子を驚いたまま、しばらく見つめて、嘆息する。ハンガーに掛けたモッズコートを着て、なぜかヘルメットを2つ手に持つ。

「…行くぞ」

「？ は？」

プロトワースト  
初期番外はわけもわからないまま、歩き出した絶対領域クリアランスの後を追った。

絶対領域クリアランスに連れてこられたのは、病院の駐輪所だった。絶対領域の前には黒いバイクが停められている。

「あのさ、これはどういう…」

「歩いてたら間に合わねえだろうが。こいつでいくんだよ」

「えっ、もしかして行ってくれんの！ あれ？ でも、そのバイク…」

さらりととんでもないことを言っただけの絶対領域クリアランス。彼のバイクにはタンDEMシートはあるが、グリップは付いていない。つまり、2人乗りの際には後ろの人間が前にしがみつく形になるわけだが…。

プロトワースト  
初期番外はそこまで思考が至ると、喜びに満ち、元々紅かった顔を更に熱くする。

「ッ！？ で、でもミサカ……」

「はやく付ける。そいつはやる」

プロトワースト  
戸惑う初期番外に構わず、絶対領域クリアランスは今日買ったばかりの黒いヘルメットを手渡す。

初期番外は渡されたヘルメットをポカンとしたまましばらく見つけた。

(これって……、プレゼン……)

「乗れ。早く行くぞ」

「え……、ああ……」

呆けていた初期番外はバイクのエンジン音と、絶対領域の声で我にかえる。焦ってヘルメットを着けて、バイクのタンデムシートに乗り……、

(ッこれは、しょうがないんだよね。ミサカが、絶対領域にだ、……抱きついても)

前にいる少年にしがみつく。

(ッ) (?!)

初期番外の胸が高鳴る

絶対領域は初期番外の準備ができたこと(心はみえないものである)を確認すると、早速走り出す。

(悪くねえかもな……こうゆうのも)

絶対領域は微かにほほ笑みながら、バイクを走らせた。

## 2 - 8 ナイトパレード（後書き）

まずは閲覧してくださったみなさん、ありがとうございます。

ラブコメですね、はい。

いやあ、書いてて恥ずかしいもんですね^^ 如何だったでしょうか？

バイクはこの為の設定でもありまして…

うらやましいですね、領域クン

完全に口説いてるっばいですけど無自覚です（笑

ナイトパレードのシーンは見たい方がいらしたら、後々SSで描こうかなと思います。

次回でこの章は終了です。ついに新章が…

それではお楽しみに！

**キャラ紹介？ 初期番外（プロトワースト）（前書き）**

キャラCVは未定です。申し訳ありません。

また、後々、設定が追加される場合があります。

## キャラ紹介？ 初期番外（プロトワースト）

プロトワースト  
初期番外

身長 163cm

血液型 AB型

来歴：

サードシーズン  
第三次製造計画のプロトタイプとして製造された個体。8月21日の実験後に製造されているため、上条当麻への好意等は特になし。

また、人間らしくするために感情データをインストールされている為、感情表現が豊かである。

容姿：

容姿はそれまでのミサカと似通っているが身長は2、3センチほど高く、見た目の年齢は高校生ほど。

容姿のイメージは番外個体

性格：

軽い感じの口調が目立つ。相手の神経を逆なでするような冗談が多い。

クリアランス  
絶対領域に対しての感情は、自分でもいまいち掴み切れてはいないが、気にしていることは確か。

能力：

## レベル4の電撃使い

エレクトロマスター

攻撃の際には、雷撃の槍や、電気分解を利用したオゾンを作り出したり、磁力を利用した方式で鉄釘を音速を超える速度で撃ち出す等、応用力も高い。莫大な高圧電流でもって空気を爆発させ、その勢いを利用して飛翔する戦術も持つ。

服装：

第一章～第二章 常盤台の夏服

第三章～ 常盤台の冬服

2・9 出会い(前書き)

「……潰しやがった」  
レベル5  
学園都市屈指の超能力者  
絶対領域  
クリアランス

## 2・9 出会い

9月30日 15時23分

絶対領域クリアランスは自分の病室の中で、携帯電話に入れた今風のJ・P・O Pを聴いていた。今日は既に初期番外プロトワーストと会話を済ませた後であるため、時間に意味を持たせることができなかつたわけだ。つまるところ、暇というやつである。

(…物件でも探しに行くか)

絶対領域クリアランスはハンガーにかけてある黒のモッズコートを手に取り、駐輪所へと向かった。

\*\*\*

(…呪われてんのか？ ついてねえってレベルじゃねえぞ)

絶対領域クリアランスは目の前の少女が満足そうにスイーツを口にするのを見て思わず、肩を落としながら盛大に溜息を吐く。

現在、絶対領域クリアランスはある学区のコンビニに居た。物件を探しに来たのだが、なかなか絶対領域クリアランスの求める物件は見つからず、喉がかわいたので緑茶でも飲むかと思ったのが運のつきだった。

\*

絶対領域クリアランスが目当ての物を購入し、シールが一枚張られているだけの緑茶を手にして

(ここで飲んで捨てるか)

などと考えながら入口の目の前に停めたバイクを視界に入れたのだが。そこで絶対領域クリアランスは怪訝な表情を浮かべた。見覚えのない少女が停めてあるバイクを目を輝かせながら見つめている。

ショートカットの茶髪に、てっぺんに自己主張しているアホ毛。

幼い顔立ちに、低めの身長。その顔だけはどこかで見たことがあるような気がするが、やはり知らない顔だ。

そこから導き出される答えは……

(…関わったらやべえタイプだな。無視シカトで通すか)

絶対領域クリアランスが9月19日の《謎のシスター現る!!》その少女、とどまることを知らず!!》事件の際に学んだことだ。一度犯したミスは2度と犯さない。

手に持っていた緑茶を一口飲んで、中身が入っているのにも関わらずそのペットボトルをゴミ箱に捨てる。そしてゴミ箱から、自分のバイクへと視線を向け直したその時、

驚愕の新事実に気づいてしまう。先ほど警戒していた少女がいつの間にか、自分の目の前に立ちながらバイクを指さしていた。

「ねえ、あのかっこいいバイクってあなたのもでしょって、ミサカはミサカは推測してみたり」

「…ミサカだと？」

クリアランス 絶対領域は怪訝そうに少女を見つめ、聞こえないように呟く。

先ほどまでは無視を貫くと決意していたのだが、あっさりとそれを破る。そんな決意よりも今浮かんだ疑問の方が強くなったからだ。今も一部の妹達は学園都市の中で暮らしているということは知っているため、彼女らと遭遇することは不思議ではない。

しかし、目の前にいる少女は言われてみると初期番外の面影もあるように見えるが、資料を通して知っている普通の妹達とは明らかに容姿が異なる。そこから推測されることは、

(アイツ同様、特別な妹達ってわけか)

彼女も妹達であるならば、なんとなくここで無視するというのは少し抵抗を覚えた。

「…ああ」

「やっぱり！ って、ミサカはミサカは自分の推測の正確さを自画自賛してみたり。」

クリアランス 絶対領域は嘆息しながらも質問に答えた。その回答に少女は満足そうにしている。質問には答えたため早々にその場を立ち去ろうと、自分のバイクに向かおうとした時、

例の少女に後ろから、コートの袖を掴まれる。嫌な予感を感じながら絶対領域は振り返った。

「今、アナタがコンビニから出てきたってことはお金を持ってることだよな？ ってミサカはミサカは不適に笑ってみたり」

「……」

「ミサカお腹が空いてるんだけど…、ってミサカはミサカは遠まわしに食べ物要求してみたり！」

\*

このような過程から現在に至る。今回の少女は食欲に関しては通常であったため、絶対領域クリアランスは不思議な安堵感に包まれた。この前のようなブラックホールシスターが何人もいたら、日本が滅びるのはそう遠くない。

とは言うものの。絶対領域クリアランスはどこぞのフラグ建築士のような、広く温かい心を持っているわけでもないため、決して望んで目の前の少女に奢っているわけではない。早々に立ち去りたいというのが本音だ。

「オマエ、ソレ食い終わったらとっとと帰れよ」

「うん…、それは難しい選択なのだ、ってミサカはミサカは俯いてみたり」

コンビニの入り口付近で立ちながら、スイーツを頬張る少女と戯れる絶対領域クリアランス。

シユールな絵だ。

「そっぴやオマエ…」

「ムッ！ あれは……、ってミサカはミサカは襲撃者を視界に入れて逃走を開始してみたり！」

クリアランス  
絶対領域が初めて話題を振ろうとした声を遮り、目の前の少女は一瞬でスイーツを飲み込み走り出す。

別に礼を言われたいわけではないが、一言もなく立ち去られたことに少し呆れながらも、絶対領域は自らのバイクに歩み寄る。

以前の彼ならば、怒りを感じているところだ。呆れるなどあり得ない。

\*\*\*

18時24分 学園都市には雨が降っていた。

クリアランス  
絶対領域は帰宅？するためにバイクを走らせていたが、今は信号が赤を示しているため止まっている。まあ、他には車どころか一人いないのだから、信号無視してもよいのだが。

結局、あの少女と別れた後もいい物件は見つからず、骨折り損のくというわけだ。

（まあ、そんなに急ぐことでもねえだろ、じっくり探せば……、ああ？）

そこで、彼は怪訝な表情を浮かべた。バイクのサイドミラーに黒いバンが映っているのが見える。そのバンは猛スピードでこちらに突っ込んできた。

クリアランス  
絶対領域はそれを見ると同時に首元の電極のスイッチに触れて、

光子を利用して大きく上空に跳んだ。

黒いバンは思ったとおりに、絶対領域クリアランスのバイクをそのまま引き潰した。

ギャリギャリッ！！ つと不快な金属音が響く。

黒いバンの運転手は絶対領域クリアランスを逃したことを悟ったのか、即座にブレーキを踏んだのだろう。黒いバンが急停止した。本来ならこの後、黒いバンは方向転換して再び攻撃態勢に入っていたはずだった。しかし、絶対領域クリアランスはそれを許さない。

バンが急停止したと同時に、絶対領域クリアランスは光子を利用してそのバンの屋根の上に急接近する。そのまま屋根に片足で着地すると同時に、対消滅演算式を組み、バンの屋根に穴を開ける。助手席に片足が触れる寸前に、光子を下向に噴射させて落下の勢いを中和する。そして、ふわり、と助手席に座る。

「ッな!?!」

「こんばんわあ」

絶対領域クリアランスは呆れたような表情で、驚きを隠せずにいる座ったままの運転手の左肩に右手で触れた。それと同時に、運転手の左肩に直径3cm、深さ2cm程の穴が開く。

「ツッ!!! あ、がアアアアア!!!」

「十秒以内にこの状況説明してくんない? オレ待たされんのかって嫌いでせ」

絶対領域クリアランスは嘆息しながら、目の前の襲撃者に質問する。しかし襲

撃者は質問には答えずにただ喚くだけだ。痛みに気を取られて声が聞こえていないのか、もしくはは…

（しゃべらねえな…。またプロかよ、面倒くせえ。狙われるような心当たりなんざ…、あの件か）

そこまで考えたと同時に、クリアランス絶対領域は更に大きなため息を吐きながら車を降りた。

襲撃者は肩を押さえながら、こちらをポカンと見つめた。見逃してもらえるとは思っていなかったのだろう。

襲撃者は安堵の表情を浮かべ、急いで傷の手当てに取りかかろうと、後ろの救急箱に手を伸ばす。

そのとき、襲撃者の視界には、こちらに背を向けるクリアランス絶対領域が自然に入ってしまった。

だからこそ理解できなかった。クリアランス絶対領域の背から放たれた閃光が、首をかしげることすら出来ず、中間子によるレーザーに襲撃者は貫かれた。

\*\*\*

（加納の件で裏の人間を1人殺っちまってるんだったな。余計なマネへの罰ってわけだ。そりゃあ、お尻ペンペンじゃ済まなくて当たり前か…。だが、よく考えりゃあそれだけでプロを寄こすとは思えねえな。別に目的が…？）

絶対領域は雨に濡れることなど微塵も気にせず思考しながら歩道を駆ける。

（よく見りゃあ、警備員アンチスキルの数が異常だ……。なにか関係してやがんのか？）

絶対領域が思考する中、不意に背後から物音がした。べしゃっ、という、濡れた地面に何か倒れる音だ。反射的に振り向く。

そこには奇妙な光景が広がっていた。

雨の降る中に、警備員アンチスキルが倒れこんでいた。一人や二人ではない、来た道に展開していた警備員アンチスキルが、一人残らず倒れている。

「クソガツ、ヤベエってレベルじゃねえぞ！」

絶対領域は思わず叫びながらも、携帯を取り出し花宮に連絡をしようとする。彼女ならなにか知っているかもしれない。その時、

がしっ、と。

腰に何かしがみつく感覚がした。しがみつく手は震えているように感じた。

絶対領域は視線を落とし、そこで目を見開く。

見開かれた瞳に映されたのは、ほんの数時間前幸せそうに走り去っていた少女。打ち止めと呼ばれる少女だ。

「ッ！ オマエ、さっきの……」

「助けて…」

ラストオーダー 打ち止めは涙声で呟く。クリアランス 絶対領域のモッズコートを掴みながら打ち止めは顔を上げる。大きな瞳は真っ赤に充血している。頬を透明な液体が伝っているのが分かる。雨の雫ではないと、一目で見分けられた。

「お願いだから…お願いだからあの人を助けてって、ミサカはミサカは頼み込んでみる！」

少女の悲しい叫びをきっかけに、3人の少年の決して交わることのない道は一点へと集中することになる。

彼らの道が交差する時、物語は始まる。

## 2・9 出会い（後書き）

まずは閲覧して下さったみなさん、ありがとうございます。

今回ではのぼの回は一時終了です。

ついに新章に入っていきます。

戦闘シーンは多めになってくると思いますので気合が入ってまいりました。

重要な章ですので、大事にしていきたいです！

次回もよろしく願います！

それでは、0930事件、お楽しみに！！

### 3 - 1 獵犬部隊（前書き）

「アア？ ムカつくガキだな、ハウントドッグどいつもこいつも」  
学園都市の科学者かつ獵犬部隊のリーダー 木原きはら数多

### 3 - 1 獵犬部隊

「つたく、情けねえ選択だ…」

ラストオーダー クリアランス  
打ち止めと絶対領域が会ってから20分後。絶対領域は1人、  
真つ暗な道路を駆けていた。

(こんな状態じゃなけりや、安全策を取ってたところだが…、な  
いものねだりしてもしようがねえ)

ラストオーダー  
打ち止めにある程度の情報を聴いた後、絶対領域は彼女を一人で  
逃がしたのだ。とても危険な判断に見えるが、絶対領域がその選択  
をしたことには理由がある。

自分が狙われている以上、行動を共にすると絶対領域が発見され  
ると同時に打ち止めまでもが危険に陥ってしまう。残念ながら、絶  
対領域の能力は他人を守ることには長けていない。

それならば、少しでも彼女が逃げ切れる確率を上げるため、陽動  
を行った方がより有意義な選択となる。襲撃者共を着々と壊滅させ  
ていけば、襲撃者は自分を更に無視できなくなる可能性が高い。元  
々、絶対領域も襲撃者の標的に選ばれているのだ。標的の優先順位  
を変えることぐらいならば可能かもしれない。

「つと、ここか。」

絶対領域は目的地に着いたのか、立ち止まって目の前の状況に目  
を向ける。ラストオーダー、彼女が最初に襲撃を受けた場  
所だ。

大きな通りの一角だった。最終下校時刻を既に過ぎていくせいか、真っ黒な道路に人影は一切ない。

少なくとも、2本の足で立って歩いている普通の人影は。

「随分堂々と事故ってんなあ。隠蔽が基本の暗部だったのに、対応遅すぎんだろ。ま、オレとしてはそっちの方が好都合だが」

絶対領域は呆れたように片手で頭をかく。少年の黒い瞳に映された光景は凄惨という表現がしっくりくる。

地面には複数の人間が倒れていた。雨脚の強くなった夜空の下、水溜りに変え仇を沈めるように、黒一色で統一された男達が転がっている。街灯の光を照り返しているのは合成素材の装甲服であり、薄い水膜に浸されているのは禍々しいサブマシンガンだった。ヘルメットや伸縮性の高いマスクで顔を覆ったその格好は、先程の自分を狙って来た者と一致している。どう考えても一般人ではない。

ぱちぱち、という音が聴こえる。

火の爆ぜる音だ

男達が倒れている所からほんの数メートルの位置に、ぐちゃぐちゃにひしゃげたワンボックスがある。それが薪だった。原形を失っている自動車はガードレールを突き破って、歩道の真ん中に停まっている。辺りには他に車がないところを見ると、あれはおそらく男達の車なのだろう。

(かなり高性能なサブマシンガンっばいな。こいつら、結構でけ

え組織と見て間違いない…。装備はちよいと借りさせてもらうとするか。利用できるモンはしとかねーとな

絶対領域は倒れていた男達に歩み寄った。そして、男達の傍で屈み、装備一式を奪い取る。

(ん?)

装備を奪い終えたその時、絶対領域はふと顔を上げる。低いエンジン音が聞こえてきたからだ。そして微笑を浮かべると、すぐ近くに停めてあった路上駐車クラランスの自動車の陰に隠れた。

(今頃来たか…。好都合すぎて気持ち悪いぐらいだ)

ヘッドライトを点けていない、奇妙なワンボックスがこちらに向かってくる。

\*\*\*

襲撃者達は獵犬部隊ハウントドッグと呼ばれる部隊だった。学園都市統括理事長直属の学園都市暗部であり、あの一方通行を圧倒した木原数多キハらのあまたと呼ばれる者がリーダーを務めている。

黒いワンボックスの後部のスライドドアが開き、獵犬部隊ハウントドッグの構成員が10人ほどぞろぞろと出てくる。

彼らがここに来た理由は証拠隠滅だ。木原数多キハらのあまたの邪魔をした奇妙な格好の女が囹の部隊を鎮圧したらしく、その部隊では証拠隠滅が

不可能になったため、ここに来たという訳だ。獵犬部隊ハウントドッグのメンバーアシッドスプレーは酸性浄化等の装備で、血痕や指紋などのDNA情報を潰していく。

(装備が奪われている…。その女とやらが持っていったのか?)

そんな中、獵犬部隊ハウントドッグの一員であるスミスは不審に思いつ点があった。気絶しているメンバーの一部は、装備一式を奪われている。

(それほど気にする必要もないか…。さつさと撤収 )

スミスの思考はそこで遮られた。

「ッア」

「グッ」

何人かの獵犬部隊ハウントドッグのメンバーが突然倒れた。ゆるやかにではなく、何かに弾かれたようにだ。

だが、スミスが気を取られたのはそんなことではない。音が聞こえた。聴きなれた音だ。高速連射可能なサブマシンガンの銃声。

(ッ！)

倒れたのは4人ほど。残りは6人。スミスを含む残りの獵犬部隊ハウントドッグの対応は速かった。すばやく銃声の発生源に銃口を向ける。

スミス達の視線の先にはたった1人の少年が居ただけだ。サブマシンガンを現在進行形で撃ち続けている少年の顔はよく見えないが、少なくともこちらと良好な関係の者とは思えない。

(殺す)

スミスは迷わず引き金を引いた。少年は首元にサブマシンガンを持ってない方の手で触れるような動作を見せる。そんなことをしても、少年の身が蜂の巣になるのは変わらない。

もつとも、その少年が普通ならば

「な、に？」

スミスは思わず声を出していた。自分たちの弾丸は少年の全身を貫くはずだった。しかし、弾丸は少年に触れると同時に消滅した。少年は再びサブマシンガンの引き金を引く。一方的に仲間たちが潰されていく。

(能力者かッ！)

スミスは急いで停めてあるワンボックスへと走る。他の仲間たちは未だに撃ち続けているが、そんなことは関係ない。スミスにとつて、自分の命以上に大切なものなどない。仲間の命が奪われていくそのわずかな時間で、自分の保身を完了させる。それがスミスのだけした結論だ。

しかし、

「1人だけ逃げようなんざあ、ちよいとムシがよすぎねえか？」

少年はいつの間にか自分の背後まで迫っていた。反射的に振り返った瞬間、肩を撃ち抜かれた。

「い、ギアアアアア！」

焼けるような痛みがスミスを襲う。思わず肩を押さえながら、地面にうずくまってしまった。その様子を少年は冷めた表情で見下す。

「つつてもお前は運がいい。今すぐお前の持つてる情報をよこすなら、命だけは助けてやる」

少年は相変わらず冷めた目でスミスを見つめる。スミスは痛みに顔を歪ませながら、少年の提案に乗った。

\*\*\*

「ハウントドッグ 猟犬部隊ねえ……。そんな大物が出てくるとはな」

「クリアランス 絶対領域はあの後、スミスから手に入れた情報を整理しながら駆けていた。」

肩紐でかけてあるサブマシンガンが揺れる。

「ハウントドッグ 猟犬部隊の狙いは打ち止めの捕縛らしい。ラストオーダー 彼女を使ってどのよう  
なことをするかまでは、スミスは聴かされていなかった。しかし、  
自分を狙う目的は聞かされていたらしく、そこまでは聞きだすこと  
に成功した。」

「アクセラレータ なんでも、一方通行と呼ばれる学園都市第1位の怪物と絶対領域  
シスターズ は妹達を気にかけていることから打ち止めの捕縛を妨害するだけでも  
ラストオーダー クリアランス 絶対領域」

思ったらしく、邪魔者排除というわけだ。

何故、自分が妹達シスターズを気にかけていることを暗部の連中が知っているかは分からないが、そんなことはどうでもいい。打ち止めラストオーダーに手を出すということは気に食わない。

「潰すか」

あっさりと、絶対領域クリアランスは決意した。獵犬部隊ハウントドッグの一員から奪ったトランシーバーを記憶されている周波数につなげる。そして、

「よオ、獵犬部隊ハウントドッグのみなさあん！ こちらは絶対領域クリアランス。お前ら随分と舐めたまねしてくれたじゃねえか。お返しに地獄行きの手ケツトをプレゼントしてやるよ。楽しみにしとけ、クソ野郎どもが」

堂々と宣戦布告した。

### 3 - 1 獵犬部隊（後書き）

まずは閲覧して下さったみなさん、ありがとうございます。

この章は自然と戦闘が多くなってくると思います。

今回は説明回ですね。絶対領域が獵犬部隊の標的にされた理由、装備の強奪、絶対領域の目的をはっきりとさせる必要があったもので

……

実は本当に微妙な伏線が入っています。いや、ホント微妙なんですけど（汗

獵犬部隊は絶対領域が妹達を気にかけていることをどうやって知ったのか？

次回、お楽しみに！

3・2 それぞれの思いと始動する間（前書き）

「2台目なんだから大事にね」  
クリアランス  
絶対領域の協力者 花宮 愛花  
はなみや あいか

### 3 - 2 それぞれの思いと始動する間

打ち止めは現在とあるファミレスの柱に隠れていた。その傍らには1人の少年がいた。

絶対領域クリアランスに1人で逃げて誰でもいいから協力者を探そう指示されてから、遭遇して自分と一緒に逃げてきた少年。

無能力者ながら学園都市の超能力者レベル52人に勝利するという偉業を成し遂げた少年。その右手には神の奇跡をも打ち消す力が宿っている。

上条当麻

一方通行と絶対領域クリアランスに新たな道を示した少年だ。

\*\*\*

一方通行はやや汚れた感じのする公衆電話のボックスに入っていた。

ほんの数十分前のことだった。猟犬部隊ハウントドッグのリーダーきはらあまた木原数多に敗北するも、なんとか機転を利かせて打ち止めを逃がし、偶然に遭遇したシスターを連れて逃走に成功した。

そして現在に至るわけだ。一方通行は利用した運転手の為に救急車を呼んでおきその後、第七学区の病院の番号を入力する。コール

音がしばらく続いた後に年配の女性看護師が応対した。  
一方通行はカエル顔の医者に取り次ぐように命令する。すぐに医者に換わった。

『こんな時間にどんな用件かな？』

予想していた医者の方が受話器から聞こえてくる。

「トラブルが起きた。デカイトラブルだ」

『一応、御坂妹さんとやらから大体の事情は聞いているよ？彼女たちの電氣的ネットワークを介して情報の交換が行われているらしいね』

なるほど、電話以外にもそういう手があるのか、と一方通行は感心した。代理演算を間借りしているだけの彼には、そのネットワークは利用できない訳だが。

「だったら話は早エ。ソッチが知ってる情報を渡せ。あのガキはどオなってる？」

『今は獵犬部隊ハウンドドッグの別働隊に追われているようだね。たまたま居合わせた一般人と一緒に逃げている。一応、君と同じような立場にある彼が時間を稼いでいるようだが……』

「オレと同じような立場、だと？」

そんな人物にはまるで心当たりがない。

『ああ。絶対領域クリアランスと呼ばれている少年だ。彼も妹達シスターズに対して色々

と事情があつてね。現在は獵犬部隊の囿ハウンドドッグになつてゐる。ついさつき彼から連絡が来たところだよ。患者全員を連れて退避するよつにね。

カエル顔の医者、もとい冥土ヘウンキヤンセラ帰しは一方通行の前に、自分に連絡してきた少年との会話を思い出す。

\*

『以上が今の状況だ。理解できたか？』

絶対領域ククリアランスは今の状況を公衆電話を介して説明してきた。病院は危険な為、急いで移動しろという警告と共に。

「ああ。もともと大体の事情は知っていたしね。しかし、僕に持ち場を離れるとは君も無茶を言うね」

『多少の無茶で助かるなら構わねえだろおが。急いで準備しろ。それともう一つ』

「なんだい？」

『初期番外プロトウェストを眠らせる。アイツはオレと同じで好戦的だ。いつ獵犬部隊ウントドッグに刃向かつてても不思議じゃねえ。』

「…分かった。それで君はどうするつもりだい？」

冥土ヘウンキヤンセラ帰しは一瞬眉をしかめたが、絶対領域ククリアランスの要求を受け入れた。

プロトワースト  
初期番外の命を優先すればこそその選択だ。

「打ち止めは助けにいけねえ。リスクが高すぎるからな。陽動に徹つして、すこしでもあのガキを狙う奴らを引き付けてやるよ」

『そうか…。死ぬなよ』

絶対領域クリアランスの選択はあまりに危険だ。以前までの彼ならともかく、能力に時間制限を付けられた彼が長期戦になるであろう困役などあり得ない。

それでも彼は打ち止めの命の為にそうすると言った。その声は静かではあったが、確かな覚悟が込められていた。

だからこそ冥土ヘヴンキヤンセラー帰しは彼に言う。絶対に死ぬな、と。その言葉に対し、少年は、ハッ、と笑いながら答える。

「ああ。犬つところに殺されるなんざア、あり得ねえ」

\*

「そうかよ…。ソイツの言う通りにしろ。オレも同じ用件だったしなア。ただし、今から運ばれてくるヤツの治療の後だ」

『分かった。それで、君はどこまでやるつもりだい？』

「木原は殺す。猟犬部隊ハウンドドッグもブツ潰す。そしてあのガキを無傷で助け出す」

『不可能だよ。この限られた状況の中で、君はあまりに多くの行動

目標を抱えすぎている』

即答だった。彼には似合わない、あまりに端的で冷徹な声に、一方通行は眉をひそめる。  
クセラレータ

「ハウンドドッグ 猟犬部隊とはソイツもやってンだろ？ なら潰すのはそこまで難しいことじゃねエ。大体、いつから医者ってなアフザけたリップサービスまで始めたんだ？ ソッチの世界の住人が、知ったよオナクチで闇を語るなよ」

「僕は君以上の地獄を見てきているよ。君と同様、闇ってヤツを知ってる先輩からアドバイスをしようと言っている訳だ。ハウントドッグ 猟犬部隊を潰す？ そんなことは後でもできるだろう。君が今ここでしなければならぬことはたった一つのはずだ」

「オマエが期待する答えの検討アついてる。流石は人命優先のお医者様だな。だが、あのガキを無傷で助けることも、木原達を潰すことも同じ事なんだよ」

「いい加減に現実を見るんだアクセラレータ。そんな事ができないのは、無様に這いつくばった時点で分かっているだろう？ 妥協をしるよ。ラストオーダー 打ち止めを無傷で助けることなど不可能だ。どんなに最高峰の手を打ったとしても、絶対に傷を負う』

一方通行は心理的な死角から一撃を叩き込まれたような気分になった。それほどこの医者に寄りかかっていたということだろうか？

「…クソツたれが。それを認めたくねエからこそ、泥ン中這い回って血まみれになっても木原を殺すつてのが分かんねエのか？」

「分からないね。望んだ程度じゃ物理的に人は救えない。だから僕は医者になつたんだ。腕が折れようが皮膚がはがれようが内蔵がつぶれようが頭蓋が欠けてしまおうが、生きて僕のところまで連れてくれば必ず直す。命を守り、傷痕も残さず精神的なケアまで含めて完璧な形で君の大切な人を救ってみせる。」

一方通行は一度激昂しかけるも、その後が続いた冥土帰しの言葉を聴いていた。

彼はひたすら《医者》として戦おうとしているのだ。

「だから一方通行。君は無駄な高望みなどせず、ただただ打ち止め（ラストオーダー）の命を助けることを優先しろ。それが一番大切なものだ。僕みたいな未熟者の腕では取り返せない、唯一のものだ。違つかい？もしも違うと言うのなら、あの子の命よりも大切なものを今ここで言ってみる」

「……」

その後、一方通行は、カエル顔の医者が病院を一度放棄したらどこへ身を隠すのかを教えてもらった。打ち止めを回収した場合はそちらへ回すように、とのことだった。

彼は受話器を置き、公衆電話のガラスの扉に背中を預ける。

（……、どんな最高峰の手を打つても、必ずあのガキは傷を負う、か）

一方通行は一度息を吸って、吐いた。

覚悟を決める。

「上等じゃねエか……」

全てを受け入れた後に残ったのは、笑みだった。

この世のものとは思えないほどに恐ろしい笑み。

\*\*\*

上条当麻と打ち止めは謎の襲撃者から身を守るため、柱の陰に隠れていた。あまりのストレスに気がおかしくなりそうだった。

しかし、謎の襲撃から30秒ほど経過した時、上条は異変に気づいた。いつまでたっても襲撃者達はやってこない。自分たちの大雑把な位置はすでに襲撃者にはばれているはずだが…

（どういう状況だ？）

さらにそのまま30秒が経過した。息を殺す。目を瞑る。時を待つ。

そして、動きがあった。

「ハッアアアィ びっくりしちゃった力ナ。怖がってないで出ておいでー？」

聞こえてきたその声は、甲高い女性の声だった。

\*\*\*

その頃、クリアランス絶対領域ははなみち花宮の二輪専門店に居た。スミスの部隊を潰した後に、はなみち花宮に連絡を入れて店の鍵を開けておいてもらったのだ。

クリアランス絶対領域は明かりのついていない薄暗い店に入ると同時に、カウンターに座りながら待っていたはなみち花宮に告げる。

「足が必要になった。どれか一つ貰っていくぞ。金は後払いだ。」

「分かったわ。」

はなみち花宮は言葉を聞くなり即答した。クリアランス絶対領域は思わず眉をひそめる。

「…訳はいいのか？」

「急ぎの用なら話してる時間が無駄でしょうしね。それで、どんなのが欲しいの？ あなたも知ってるでしょうけど、このバイクは全部《外の技術》のモノだからね」

微笑を浮かべながらはなみち花宮はクリアランス絶対領域に問いかける。クリアランス絶対領域は少し店内を見回していたが、やがてその視線がある一点に固定された。

「あそこの黒い《X-11》を貰う。確か100kmまでの到達時間は3秒くれえだよな？」

「いいえ、2秒前半つてところかしらね」

そりゃあいい、と絶対領域クリアランスは笑いながら、花宮はなみやに投げられたキーを受取る。そして、黒のフルフェイスのヘルメットを棚から手にして装着し、《X-11》を外に運ぶと、エンジンを着けた。

「…礼は言っておく」

「相変わらず素直じゃないのね。それ、ウチの一番の商品だったんだから、必ずお金は払いに来なさい。あなたが今抱えてる問題を全て終わらせてね」

「…ああ」

絶対領域クリアランスは短く答えると、すぐに暗闇に溶けるように《X-11》を走らせた。

\*\*\*

同時刻。暗闇に包まれた大通りを猟犬部隊ハウントドッグの一員であるスミスは、黒のワンボックスを走らせていた。先ほどまでのヘルメットやマスクは汗がへばりつき不快になったため脱いでいる。

（肩撃たれてっから運転しにくいな、クソツ。まあ、いい。俺は助かるんだ。ヒハツ、ヒヤハハハハ）

フロントガラスを通して見えるその顔は笑っていた。とことん下衆な彼には、つい先ほどまで殺されそうなことも痛みも忘れ、自分

が助かった余韻に浸っていた。その時、

(ん？ なんだあれ？)

スミスの目が奇妙な光景を映した。20m程前方に、1人の少年が正対していた。スミスは暗闇の中でもある程度のことまでは理解できるように訓練しているのだが、その格好や表情までは読み取れない。とっくに最終下刻時間を過ぎていくというのに何をしているのだろうか？

(どうでもいいや。引き殺してやる)

スミスはアクセルを極限まで踏む込む。あっさりと普通の少年らしき人物を殺すなどと言える人間はまさしく下衆と言えるだろう。ましてや、笑いながらそんな決断ができるなど論外だ。その笑みは、子供がゲームの中の敵キャラを狙う表情に見える。

黒のワンボックスと正対している男の距離が残り5m程となった時のことだった。

突然、黒のワンボックスの4つのタイヤが地面から30cmほど離れた。

つまり、地面から30cmほど浮いた。

(なんだこれ……ッ！！ まさか、こいつモッ！！)

常識から考えてみればすぐに理解できただろう。こんな状況で街仲を歩きまわる少年など普通ではない。根性のはいったスキルアウトか闇の一員である可能性が高い、と。

スミスはそこまで考えが至ると、先ほどまでの余裕の表情を一瞬で焦りへと変わる。急いでシートベルトを外し、ドアを開こうとした、しかし…

(な…、ちょ、開かねえッ)

鍵もかかっていないし、ドアノブも回る。ドアが開かない条件など存在しないのだが、まるで見えない力に外側から抑えられているようだ。

そんなことをしていると、突然

(ツゴ、アッ……)

スミスの体が運転席に向かって押さえつけられているかのように動けなくなった。

その状態であれば、目をそらそうとしても、目の前の少年の姿が目に入る。

その少年の姿はよく見ると少し異常だ。白いシャツに黒いネクタイ、ダークスーツ、というビジネスマンにも見える。ただし漆黒のサングラスがそうは見せない。闇に生きている雰囲気を少しも隠すつもりはないらしい。

髪は日本人特有の黒髪をショートレイヤースタイルにしており、漆黒のサングラスをかけている状態でも、その端正な顔立ちが覗えた。

その少年は右手を前にかざし、手のひらをスミスに向けた。

その瞬間、フロントガラスがスミスに向かって碎け散り、鋭利な凶器と化したガラスの破片がスミスの顔に突き刺さる。

スミスの顔の原型は完全に失われた。

### 3 - 2 それぞれの思いと始動する闇（後書き）

まずは閲覧してくださったみなさん、ありがとうございます。

3人+ の視点です。上条さんと打ち止めはとりあえず原作通りになつてもらおうと思います。上条さんは、絶対領域と絡むことが少しあるかもしれませんが…

一方通行さんは絶対領域と間違いなく絡みますね、ハイ。

当初は二人とも似ているのですが、絶対領域は正直2人ほど、いい人ではありません。

守りたいのはあくまで初期番外であつて、打ち止めが傷ついたとしても、初期番外になんのリスクもなければ放っておいたかもしれない（汗）

そして、不穏な影を登場させました。スミスさんは……なんにも言うまい。

それでは次回、お楽しみに！

### 3 - 3 信念（前書き）

「オレも随分と間抜けだな……」  
学園都市屈指の超能力者<sup>レベル5</sup> 絶対領域<sup>クリアランス</sup>

### 3 - 3 信念

真つ暗になったファミレスの中。上条当麻と打ち止めを襲撃したハウントドッグは獵犬部隊ではなかった。つい先ほどまで上条たちを追い詰めていたハウントドッグ獵犬部隊とは正反対に位置する者だ。

本来この街に居るはずのない者。

ローマ正教禁断の組織、《神の右席》の一員にして、科学に肉親を奪われた存在。

学園都市をほんの数十分で制圧しかけている者の名は、《前方のヴェント》

科学に憎しみを持つ存在。

\*\*\*

「4組潰して能力使用モードは残り13分か……。余裕すぎんだろ」

絶対領域クリアランスの周囲には10人ほどの獵犬部隊ハウントドッグの構成員が倒れていた。全員が急所を弾丸に貫かれており、ほとんどの者が即死したであろうことが窺える。大通りにたまっている水たまりには、禍々しい鮮血が早くも滲みだしている。

バイクを手にいれられたことはかなりのメリットを生んでいた。能力の使用を控えて移動できることと、移動できる範囲が広がった

ことはかなり好都合なことだ。一つの場所に留まっていたは囷としての役割を果たせない。相手が常に自分を搜索している状態を簡単に作りだすには、自分も常に移動し続けなければならない。この2つの条件をたつた一台のバイクだけでこなすことが可能だ。移動し終えた場合は戦闘に入る前にバイクを隠し、戦闘終了と同時にそこへ向かいまた移動する。それを繰り返すだけの単純作業。

戦闘の際も、確実に奇襲を成功させれば密集している1部隊を潰すなど、絶対領域クリアランスの銃の腕があればなんら難しいことはない。相手がこちらに気づくと同時に能力使用モードに切り替えていったとしても、その時には既にこちらは何人かのメンバーを潰している状態なのだから戦闘はそう長くは続かない。必然的に、バッテリーにもかなりの余裕がある状態だ。

（移動はもうしなくていいか。こんだけ潰せば木原のやつもオレを危険視すんだろ。逃げ回らなくても自然にオレを追ってくるはずだ。囷役はほぼ完ぺきにいつてんな。次の組潰したら、居場所がつかめ次第に木原の野郎も潰しにいくか？）

絶対領域クリアランスは次の行動を考えながら今潰した部隊が乗ってきたであろう、黒いワンボックスへと向かう。スライドドアを勢いよく開いて、後部座席に置いてあった合成革の死体袋のような大きなバッグを両手で抱えて、大通りの地面に下ろす。ファスナーを開けて中を覗くと、その中にはたくさんの殺人兵器がごろごろと入っていた。

（ん？ あれは…）

消費した装備の補充を済ませて、もう一度ワンボックスの中身を見ると、バッグ以外にも何か転がっているのが見える。携行型対戦車ミサイルだ。今まで自分を襲ってきた部隊の中にはこんなもの

を持ってきては居なかったのだが、それだけ自分を危険視していたということだろうか？

（ハッ、持って来たなら使っとけよ。銃器類だけでなんとかできねえから持たされたんだろうが）

クリアランス  
絶対領域は微笑を浮かべながら、その携行型対戦車ミサイルのパーツを取り出し、迅速に組み立て終える。

そして視線をワンボックスから真横の30m程前方に移した。その瞳には、ヘッドライトを点けていない黒のワンボックスが映っている。

「…アホか」

クリアランス  
絶対領域は今組み終えたばかりの携行型対戦車ミサイルのスコップを覗き、ワンボックスに照準を合わせると、なんの躊躇もなく引き金を引いた。

暗闇に包まれた大通りに爆音が響きわたる。

\*\*\*

ヘウンキャンセラー  
冥土帰しは現在、第七学区の立体駐車場に居た。病院が危険になるだろうと予想されるため、ここまで病院車などを利用して全患者を運んできたのだが…

（厄介なことになってしまったね…）

病院車の中で珍しく眉を寄せる彼はある相手に連絡するために、携帯のボタンを押していく。万が一の時に為に、以前、番号を交換しておいた相手だ。今も獮犬部隊の相手をしているであろう少年、ハウントドッグ クリアランス 絶対領域だ。5秒ほどコール音が続いた後に、絶対領域とつながった。

『なんだ？ こっちは今…』

「絶対領域。落ち着いて聞いてくれ」

クリアランス 絶対領域の声を遮り、ヘウンキャンセラー 冥土帰しは言いにくそうに告げた。

「初期番外が居なくなつた。移動前に薬品を使ったんだが、寝たふりにまんまと騙されてね」

『ッ！』

電話の向こうで明らかに息を呑む声が聞こえた。

しょうがないと言えば、しょうがないことだ。他にもやることは山積みなのだから、いちいち寝ているかどうかを確かめる余裕などなかったのだろう。プロトワースト 初期番外の能力があれば、機械の対策では意味をなさない。

『…初期番外がそこをでたのはいつ頃だ？』

「おそらく20分も経っていないと思うよ」

クリアランス 絶対領域は喚いても事態は好転しないと踏んだのだろう。冷静に対処した。しかし、その声からはわずかに焦りが滲んでいる。

「…すまないね」

『お前が謝ることなんざなにもねえよ。オレの対処が悪かっただけだ』

冥土ヘウンキャンセラ帰しは申し訳なさそうに謝るが、絶対領域クリアランスはそれに対しては責めない。元々、絶対領域クリアランスが早めに対処しておけばこんな事態にはならなかった。完全に絶対領域クリアランスの失態だ。彼の中のくだらないプライドが敵を優先させてしまったのだ。

『絶対エ…、』

その後続く言葉は、あまりにも小さすぎて冥土ヘウンキャンセラ帰しも聞き取れなかった。

\*\*\*

上条当麻は真つ暗なファミレスの中で一人状況の整理に努めていた。ヴェントと名乗る女が突然苦しみだした後に、撤退した理由は分からないが、今はそんなことを気にしてはいられない。ヴェントが狙っているのは上条らしいが、かと言って打ち止めに出会った際に危害を加えないとは考えにくい。一刻も早く彼女を見つけなければならぬ。

「……、」

上条は手に取った可愛らしい携帯を見つめる。打ち止めの携帯だ。ラストオーダー

悪いとは思いながらも、電源を入れた登録アドレスを表示した。打ち止めが知り合いに助けを求めているのならば、そのままコンタクトがとれるかもしれない。

登録件数は極端に少なく、登録してある人物も、名前ではなく《登録1》というデフォルトで表示されている。上から順に電話をかけていくが……

「…クソツ！」

3人目までは誰も応答しない。次の《登録4》という人物にかけても応答がなかった場合、完全に手がかりがなくなってしまう。

(…頼む！)

祈るような気持ちで、上条は最後の人物の応答を待つ。

コール音が響き渡る。

\*\*\*

「……………」

絶対領域は大通りのど真ん中で、雨に打たれながら空を見上げた。初期番外の居場所を掴む方法ならある。猟犬部隊の持っていた。嗅覚センサーだ。この機械には、おそらく打ち止めの匂いもデータ化されている。打ち止めと初期番外の臭い、つまり分子配列は同じはずだ。これを使って、第七学区の立体駐車場から追跡すればいい。

幸い、ここから第七学区の立体駐車場まではそこまで遠くはない。バイクでも十分に行くことのできる距離だ。とはいっても、事は一刻を争う。

（立体駐車場にバイクを停めてから、∴使うしかねえよな……）

自分の首筋に一度手を触れて、絶対領域はバイクの隠し場所へと向かう。

（絶対エ守り抜くって決めたんだよ。どんだけ無様だろうが、似合わなかつが関係ねえ）

その顔は無表情でありながらも、見る者に威圧感を与える。

学園都市の怪物の覚悟は絶対に揺るがない。

### 3 - 3 信念（後書き）

まずは閲覧してくださいっ たみなさん、ありがとうございます。

今回の展開は絶対領域にも信念の元に動いてほしいかなと思ったことと、初期番外も登場させなくてはと思い、このようにしてみました。

少々無理矢理だった気もします…

意外性が無さすぎるかな？ と思いつつもベタな方向に……

今、一方さんと上条さんの会話まで終了した所ですが、ここからが本番みたいな感じになると思います。

次回もよろしく願います!!

3 - 4 暗闇の中で（前書き）

「ミサカも本格的に動き出しちゃうよ」  
サードシーズンのプロトワークス  
第三次製造計画の個体 初期番外

### 3 - 4 暗闇の中で

「ふう、脱出成功かな」

現在、初期番外は冥土帰しの元を離れ、雨の降り注ぐ大通りを駆けていた。その理由は単純だ。面白そうなイベントに参加したいという純粋な好奇心。

（さてと…、連中に一泡吹かせてやりますか）

ネットワークを介して知った黒ずくめの連中をどう料理するか。今の彼女はそれだけを考えている。ニヤリと笑みを浮かべながら。

\*\*\*

一方通行は暗い病院に一人立っていた。足元にはグチャグチャになっハウントドッグている猟犬部隊のメンバーが転がしてある。

ゴミ処理場でハウントドッグ猟犬部隊の分班を一つ潰した後に、病院に別のハウントドッグ猟犬部隊の分班が迫ってくることは分かっていた為、迎撃するためにここを訪れたのだ。迎撃目的は絶対領域という少年と同じ。ハウントドッグ猟犬部隊の分班を潰すことにより、敵に自分を危険視させるといふ単純な目的である。現在潰した分班は2つ。

大粒の雨が当たる窓を眺めながら、一歩通行は呟いた。

(木原きはらのクソ野郎も、これで多少はプランを変更せざるを得なくなる。俺を潰すことの優先順位が跳ね上がる。その分だけあのガキの危険度は引き下げられるって寸法だ。絶対領域クリアランスとかいうヤツも動いてるみてエだしな)

とはいうものの、一方通行アクセラレータ達の劣位は変わらない。自分や臨時の協力者も、木原きはらや打ち止めラストオーダーの居場所は分からない以上、こちらからアクションを起こすことはできない。

(つつたく、笑えねえ状況だ)

一方通行アクセラレータが無線機を入手したことも木原きはらにもばれたらしく、先ほどから重要な会話はなくなっていた。無線機はもう利用できない。

(にしても、何でこのタイミングでヤツらがあのガキを狙う?)

壁に背を預けながら、ふと思う。打ち止めラストオーダーを狙うとなると妹達シスターズ絡みの可能性が大きい、その理由が分からない。

(量産能力者計画と、それに続く絶対能力進化実験……オレやあのガキは今まで一体ナニに関わっていたんだ?)

ぼんやりと視線をさまよわせながら思考する。何かを掴みかけそうだったが、思考はそう長くは続かなかった。突然、携帯電話が小刻みに振動したからだ。

一方通行アクセラレータは息を殺しながら、ポケットの中から小さな携帯電話を取り出した。その画面に表示されているのは、彼が現在探し続けている打ち止めラストオーダーという少女の番号だ。

(あのガキ本人か、木原のクソ野郎か。まさに両極端の二択だな)  
通話ボタンを押し、携帯電話を耳に押し当てる。

『良かった、ようやくつながったな!』

(……、?)

聞こえてきたその声は彼の選択肢には含まれていなかったものの、どこか聞き覚えのあるような少年の声だった。

\*\*\*

木原<sup>きはらのあまた</sup>多数は暗い一室にいた。

今は使われていないオフィスだ。大量の事務机と椅子だけが取り残されている。木原は椅子の一つに腰をかけ、両足を埃っぽい机に乗せてくつろいでいた。その態度には少しの焦りも恐怖もない。

周囲には部下らしき装甲服で身を固めた男達が5、6人控えている。最初から比べれば数は少ないものの、どうせいくらでも上から支給されるクズばかりだ。わざわざ気を使う程の事でもない。

「複数の班から連絡が途絶えました。現在残っている班は我々を含め、3班のみですね」

「…一方通行に絶対領域<sup>クリアランス</sup>、さらにあの女が<sup>アクセラレータ</sup>」

相変わらず余裕が崩れることはないが、あの女、という所で木原

は眉をひそめた。

「気絶してる奴らは？」

木原のそれだけの質問で、部下らしき男は木原の求めている回答を察した。

「今、機材を使って調査中です」

「状態は全員同じか？」

「いえ。現在までに3種類あります。眠るように気を失っている者から、石のように硬直している者までいるようです」

「種類を分ける基準は？」

「それが…、明確な基準については把握しきれいていません。場所、時間に限らず振り分けられるグループには特に規則性もありません」

一番多いグループは、と黒ずくめの男は前置きして、

「正確な数字は分かりませんが、倒れた者達は体内の酸素が急激に減っているようです。脳や内臓の機能に必要な最低限な分は確保できていますが」

「……、人工的な仮死の誘発か」

一方通行や絶対領域アクセラレーターの行動ではないだろう。彼らの能力で可能なことだとは思えないし、そもそも彼らには気絶に留める理由もないと、なると最も怪しいのはあの女だ。中世ヨーロッパ風の、木原

の邪魔をした妙な女。

「倒れた者達には現在もなんらかの《力》が働いていると考えられ、酸素ボンベなどで酸素を供給しても症状は変わりません。……、あんな女のせいで作戦にも支障が出始めていますし、あいつらも

」

不意に声が途切れ、黒ずくめはそのまま床に倒れてしまった。ごとん、という重苦しい音が室内に響く。

木原<sup>きはら</sup>数多<sup>あまた</sup>は室内をジロリと見渡すが、それ以上の変化は起きない。何らかの能力<sup>ちから</sup>による狙撃とは考えにくい。そんな力を持っているのならば、木原が今無事であることが説明できない。

（非科学、か）

木原は目を細め、得体のしれない何かに囚われるような感覚に陥った。

彼は舌打ちをすると、机から両足を下した。

「まあ良い。こっちはこっちの仕事をやるだけだ。上の連中もやかましいいな」

やるべき事の手順は伝えられている。ただそれを実行すればいい。部下が学習装置<sup>テストメント</sup>を組み立てていく中、木原は呟いた。

「あいつら……、ああいうイレギュラーにはどう対処するんだろうな」

「は？」

何でもねえよ、と木原は言った。

\*\*\*

「ここからが正念場ってどこか……」

絶対領域クリアランスはバイクにまたがりながら目の前の第七学区の立体駐車場を見上げた。冥土ヘンキョウ帰しの待機しているその場所に来た理由は言うまでもない。自らの信念そのものを貫くためだ。

「…尾行の気配はねえな」

ふと、自分のいる大通りを見渡すも誰もいる気配はない。それを確認して、絶対領域クリアランスはバイクを立体駐車場の中に入れる。

3階まで登ると、エンジンブレーキを踏んで、バイクを駐車線に気にせずに停める。目の前にあるのは観光バスにも見える、特殊な病院車だ。完全にカーテンで窓を塞いでいるため、中の様子は窺えない。

絶対領域クリアランスはスタンドでバイクを立て掛けてフルフェイスのヘルメットを鬱陶しそうに脱ぎ、バイクのシートの上に置いた。

そのまま病院車に歩み寄り、ベルトに挿してある嗅覚センサーを抜いて、使用した。拳銃のような容姿をしたものだ。拳銃で言うハンマーのある部分には、三インチぐらいの小型液晶モニタがついている。

「…あっちかッ!」

絶対領域は臭覚センサーが示した結果を見ると同時に、視線をその方向に向けた。肩ひもでかけてあるサブマシンガンが揺れる。

彼はなんの躊躇もなく首筋のスイッチに指で触れた。

ピピツ、という電子音がした直後、絶対領域は爆発的な速度で初期番外のいるであろう場所へと向かっていった。

### 3 - 4 暗闇の中で（後書き）

まずは閲覧していただきっ たみなさん、ありがとうございます。

会話&説明回ですね。今の状況の把握と、動きだす初期番外の描写のみです。

一方さんとの接触までそう遠くはありません。少なくとも今週中には……

絶対領域の能力使用は、かなり危険な選択です（汗 彼は用心深い性格ですが、初期番外のことになると多少どころか、かなり無茶するタイプです。自分の生き方を変えるきっかけになってくれた人ですから。（上条さんとの一戦もそうですが）

次回もよろしくお願いします!!

3・5 悪夢と再会(前書き)

「……勘違いすんなよ」  
学園都市屈指の超能力者<sup>レベル5</sup> 絶対領域<sup>クリアランス</sup>

### 3 - 5 悪夢と再会

現在、ハウントドッグ 猟犬部隊の生き残っている分班は3つ。しかし、別の班がラストオーダー 打ち止めを捕獲したことから、最早そんなことは大したことではなくなっていた。

暗闇に包まれた大通りで、ブラウンとビルは他の班が打ち止めの捕獲に成功したことを知らずに、今も打ち止めを搜索していた。

アクセラレータ 一方通行や絶対領域がハウントドッグ 猟犬部隊の無線を手に入れていることから、無線での連絡は控えるようにと木原から連絡があったため、打ち止めが捕獲されたことを知らないためである。

「なあ、こんなところで探しても見つかるとは思えないのだが……」

ビルは不意に立ち止まり、不審気味に尋ねた。暗闇で視界が優れないとはいえ、こんな大通りを逃走ルートに選ぶ者は少ないはずだ。その質問に対しブラウンも立ち止まり、ビルのいる方へと首を向けた。

「確かにな。だがよく考えてみる。目標を見つけちゃった場合、あの化け物共と交戦する確率が高くなるだろう。とりあえず探してみましたっていう大義名分だけ作つとけば、木原さんの制裁も免れるだろうから一石二鳥だ」

「…なるほど」

ブラウンの言葉を聞き、ビルは感心したような返事をする。

(にしても木原の野郎。いつつも高みの見物ばかりしやがって……。いつか殺してやる)

ブラウンはまだ木原の恐ろしさを知らないのか。他の隊員なら絶対に思考しないようなことを思考する。

バジッ!!

そんなことを考えていると、不意に後方から奇妙な音が聞こえた。ブラウンとビルは迅速に振り返る。先ほどまでの無駄な行動をすぐに切り替え、音のした方へと銃口を向けた。

そこには、制服らしきものを身にまとう少女が、ニヤリとした笑みを浮かべながら、こちらに手を振っていた。

ほんの数秒前に自分たちが歩いていた場所だ。しかし、その時は後方に誰かがいる気配などなかった。まるで視線の先に居る少女は空から降り立って来ましたとも言つような、そんな状況だ。

普段の彼らならなんの躊躇もなく引き金を引いていただろうが、目の前の少女の姿を確認すると同時に、疑問が彼らの頭の中をよぎる。

(…妹達?)  
シスターズ

ブラウンとビルは作戦の資料を確認していた際に、その資料に含まれていた妹達シスターズの容姿をふと思い出す。

(回収しておくか? 能力者と言ってもレベルはたいしたこと)

……)

ブラウンがそこまで考えを至らせたと同時に、

「ッ！！？」

目の前の少女を始点に、紫電がブラウンの隣に居たビルの体を貫いた。ビルは声を上げることもできず、面白いように後方に3m程吹き飛んだ。途端、あたりに焦げくさい臭いが広がっていく。

「…え？」

ブラウンはビルの居た方向へと、ゆっくりと顔を向けた。無様に仰向けになっている同僚から、プスプス、と白い煙が上がっているように見えるのは気のせいだろうか？

思わず両手から力が抜け、肩ひもでかけてあるサブマシンガンがダラリと垂れ下り、揺れる。

直後、紫電がブラウンの体を貫いた。

\*\*\*

アクセラレータ

一方通行は第七学区三十九号線、木の葉通りに来ていた。

先ほどの《電話の男》の話では、この通りにあるファミレスで打ち止めだけを先に逃がしたらしい。男の言っていたファミレスはすぐに見つかった。最低限の隠蔽すらされておらず、建物の中は鉄筋コンクリートが剥き出しになっているレベルで破壊されていた。

「……、」

「どうやら、先程の男の話は畏では無かったようだ。」

（チツ、早いところあのガキを見つけねえとな。アイツは一体どこへ行った？）

目印なども残せるほどの余裕はなかっただろうし、仮にあったとしても、この状況では流されている可能性が高い。

（あのガキは妹達シスターズのネットワークを介して『実験』当時の証拠隠滅マニユアルに従って逃亡してるはずだ。……衛星の目を盗み、なおかつ警備ロボットの巡回ルートから外れるような道だな）

証拠隠滅マニユアルを元に動いてるなら、表通りよりも裏通りの方が怪しい。

一方通行は杖代わりのショットガンをつきながら、路地に入っていく。ひたすら歩きながら、なにか手がかりがないかと探すものの収穫はなかった。

こんなヒントの少なすぎる状態では流石に発見できるはずもない。敵から逃げるためなのだから仕方がないが。

「クソツたれが……」

打ち止めはここからそう遠くまでは行ってはいないはずだ。あるいは、一方通行はの方から何らかのサインを出せば、打ち止めは気づくだろうか？

と、ここまで考えて、一方通行は別の方法を思いついた。

あまりに馬鹿馬鹿しいその方法に、アクセラレータ一方通行は思わず笑ってしまった。

大声で名前を呼べばいい。

その声が打ち止めまで届けば、きつと出てくるはずだ。ラストオーダー

忌々しそくに舌打ちしながらも、アクセラレータ一方通行は大きく息を吸い込んだ。

しかし、声を発そうとしたその時、

アクセラレータ一方通行は《何か》を見つけた。

土砂降りによって、汚い水溜りの上に、その《何か》が浮いていた。

ハンカチ程度の大きさの破り取られた布切れだ。近づいて観察してみると、男物のワイシャツの袖のように見えるそれに、アクセラレータ一方通行は見覚えがあった。

ラストオーダー打ち止めが空色のキャミソールの上に羽織っていたものだ。

アクセラレータ一方通行の顔色が青ざめていく。

そのタイミングで不意に、携帯電話が振動し始めた。ノロノロとポケットから電話を取り出し、画面に目を向ける。

見知らぬ番号だ。

違う、これはヤツじゃない。こんな分かりやすい手をヤツは使わない。

自分にそう言い聞かせながら、アクセラレータ一方通行は通話ボタンを押す。耳に当てるまでもなく、大きな声が彼の鼓膜を揺さぶった。

『元氣かなーん、一方通行。<sup>アクセラレータ</sup> ぎやははははっ！！』

その声を聞き、一方通行は大きく目を見開いた。<sup>アクセラレータ</sup>

彼を中心に、ざわざわとした感情の渦がばら撒かれて行く。

\*\*\*

「…つまんないなあ」

<sup>プロトワースト</sup>初期番外は不機嫌そうにしながら、目の前の感電死した哀れな豚を見つめた。ネットワークを介して知った襲撃者の情報によると、襲撃者である黒ずくめの連中はこんな少人数で動いてはいないはずだ。しかし、目の前に倒れているのはたったの2人だけ。これが意味することは、

(ひょっとして、こいつら壊滅に近い状態なのかな?)

<sup>プロトワースト</sup>初期番外は仰向けの男に近づきながら、その装備品をまじまじと見つめる。そしてサブマシンガンを手に取りうと、屈んだその時、

ガチャ、という金属のこすれる重苦しい音がした。<sup>プロトワースト</sup>初期番外はこの音に大体の予想がついていた。おそらくは自分は今銃口を向けられているだろう。むやみに能力<sup>チカラ</sup>を使うと、そのはずみで相手が引き金を引いてしまうかもしれない。

つまらなそうな顔をしながら、ゆっくりと音のした方向へと振り向いた。

そこで、プロトワースト初期番外は驚きの表情を浮かべる。

目の前にいるのは少年だ。白いVネックのインナーの上に黒のモッズコートを羽織っている。黒のロールアップデニムと黒のショートブーツ。整った顔立ちに、金髪にちかい茶髪。

かつて、プロトワースト初期番外の為に能力を犠牲にしてまでも救おうと動いた少年だ。チカラ

プロトワーストその少年は初期番外に向けていたサブマシンガンをゆっくりと下ろし、どこか安心したような笑みを浮かべながら呟いた。

「勝手な真似してんじゃねえよ」

プロトワースト初期番外の瞳がその少年を、クリアランス絶対領域を映しだす。

### 3・5 悪夢と再会（後書き）

まずは閲覧してくださったみなさま、ありがとうございます。

なんとかヒューズ<sup>ラストオーダー</sup>カザキリの直前までこれました。打ち止めがとうとう捕まってしまい、一方通行<sup>アクセラレータ</sup>が決意するところまでです。

あと少しで一方通行<sup>アクセラレータ</sup>との出会いがあります！

そして、初期番外<sup>プロトワースト</sup>と再会。絶対領域<sup>クリアランス</sup>はずっとコミュニケーションを求めていた時の、初めての会話相手が初期番外<sup>プロトワースト</sup>ですので、大分気にかけています。

その為、初期番外を見つけた時に特に大きな怪我がないのを確認してホッとしていましたが態度には出したくないので、銃を向けるというのは彼なりの強がりです。

内心はすごく安堵感に浸っていたので隠そうとしても顔には出ているという描写でした。

それでは、次回もよろしくお願ひします！！

### 3 - 6 目覚める直前にある天使（前書き）

「ねえ、もしかしてミサカの出番も終わりが近い？」  
サードシーズ  
第三次製造計画の成功作  
プロトワークス  
初期番外

### 3 - 6 目覚める直前にある天使

「勝手な真似してんじゃねえよ」

クリアランス  
絶対領域は安心したような笑みを浮かべながら、目の前で驚愕を露わにしている少女に向かって呟いた。その瞳に映っているのは、赤みがかった茶髪に整った顔立ちの少女、プロトウースト初期番外だ。

「なんでここに？」

プロトウースト  
初期番外は驚愕の表情を浮かべながら、正対している絶対領域クリアランスに疑問を述べた。その質問に対し、絶対領域は浮かべていた笑みをいつもの仏頂面に戻して答える。

「お前があああの医者プロトウーストの所から抜けだしたからだろうが」

「おや？ もしかしてミサカプロトウーストのことが心配だったとか？」

プロトウースト  
初期番外はすぐにいつものニヤニヤとした笑みを浮かべた。相変わらずだなと思いつつ、絶対領域クリアランスは片手で頭をかき。

そして、答えた。

「……そうだな」

「え？」

「なんでもねえよ」

絶対領域クリアランスは思わず初期番外プロトワーストから目を背ける。思ったとおりに言葉を発してしまった。焦りながらも初期番外プロトワーストには聞こえていないことに気づくと慌てて訂正する。

こんなことを言うのは柄じゃない、と聞こえていなかったことに安堵して再び初期番外プロトワーストの目を見る。

「ねえ、今なんて……」

「なんでもねえって言ってんだろ。そんなことよりお前、あの医者のとこまでとつとと帰りやがれ」

「ミサカが聞くと思う？」

即答だった。初期番外プロトワーストは笑みを浮かべながらこちらの目を見つめる。やっぱりこういう奴だったな、と絶対領域クリアランスは嘆息した。

ここで力づくで気絶させるという手段もあるが、彼の場合は能力チカラを使わないとそれは難しい。しかも、能力チカラを使ったとしても、光子を使って初期番外プロトワーストの懐にもぐりこんだ後に拳を打ち込むぐらいのことしかできない。そんなことは極力したくなかった。

「…だったら一つだけ条件がある」

「？」

初期番外プロトワーストは絶対領域クリアランスがあっさりと自分の行動を認めたのが少し意外だったのか、目を見開いた。

「オレから絶対え離れんな」

「ッ!? え、いやあの、…それって……」

「あ？」

プロトワースト 初期番外は急に顔を真つ赤にして挙動不審になりだす。視線を絶ク  
リアランス 対領域から逸らし下を向いたかと思えば、上目づかいで絶対領域を  
チラリと見てまた下を向くという。

プロトワースト その様子に絶対領域は怪訝そうに初期番外を見つめた。  
プロトワースト 初期番外はしばらく挙動不審なままだったが、やがてこちらに視線を戻して、意を決したように言った。

「……………プロポーズ？」

「……………はあ？」

クリアランス 絶対領域は怪訝な表情を浮かべて目の前の少女を見つめた。

目の前に居る少女、もとい初期番外はどこをどう解釈したらそういう答えに行き着いたのだろうか？

\*\*\*

クリアランス 絶対領域と初期番外が再開したころ、木原から一方通行に一本の  
アクセラレータ 電話が掛かってきた。その内容は最悪のものだ。

ラストオーダー 打ち止めを捕らえたという一言。

その一言だけで学園都市最強の顔から血の気が引いた。木原の目的は打ち止めの頭の中に学習装置を利用して《ウイルス》を打ち込

むじと。

さらに、木原のバックについている存在。おそらくは…、

(……学園都市そのものか)

それが現状で最も大きな可能性だ。正確には学園都市を直接束ねている統括理事会がバックについているという可能性だが。

(木原の居場所は分かんねエが、統括理事会の連中なら話は別だ。そっちを調べりゃ……。おいおいすげエな。あつという間に進展しやがったよ。こんな順調でオツケーなのか)

アクセラレータ  
一方通行は乾いた笑いを浮かべた。そして携帯電話をポケットに仕舞いながら、

「ぶざっけんじゃねえぞ!! ナメやがってエえええええええええッ!!」

怒りにまかせて絶叫した。首筋の電極のスイッチを指で弾き、最強の演算能力を展開させる。彼の居る場所は狭い裏路地で周りにはどこを見回してもコンクリートの壁しかない。

しかし、彼はそんなことには目もくれない。

絶対座標を利用して。標的の位置情報を確実に理解する。

(敵は学園都市! ソイツを束ねてんのは統括理事長!!)

「がつ、アアあああああああああああああああああああああ  
あああッ!」

一方通行はその腕を手近なコンクリートの壁に突き刺した。ベクトル操作によって簡単にその腕は深々と突き刺さる。

そして咆哮とともに全てのベクトルを支配する。惑星の回転エネルギーという莫大な力までをも、彼の腕が支配した。

支配した力を操作して、腕に深々と突き刺さったビルを恐るべき速度で投げ放つ。

投げ放たれたビルは、標的との間を邪魔する障害をすべて倒壊させていく。

その恐るべき悪魔の一撃はすぐに標的に、《窓のないビル》に到達した。

轟音と粉塵が周囲にまき散らされる。その粉塵はしばらくそのまま彼の視界を灰色に染めていた。

一方通行は視界が晴れていくと同時に目を見開いた。今の一撃は彼の持つ全ての力をぶつけたのだ。地球の回転エネルギーをも奪い支配した一撃。

それにも関わらず、《窓のないビル》はなににも変わっていないかった。傷一つ付かず、揺らぐが、ただそこに堂々とそびえ立っていた。

一方通行は絶叫し、崩れ落ち、汚い水溜りに拳をぶつけた。

\*\*\*



ハウントドッグ  
獵犬部隊の現状の確認だ。これだけ分かりやすいように動いているのにも関わらず、ハウントドッグ 獵犬部隊は襲ってくる気配を見せない。もう、あまり余裕はないのだろう。いい展開だなと思いい、クリアランス 絶対領域は微笑を浮かべた。数分走り終えた後、クリアランス 絶対領域は一つの家の前で立ち止まる。見るからに金持ちと主張されている。クリアランス  
クリアランス 絶対領域はそこで、クリアランス 絶対領域にあわせて立ち止まった初期番外を振り返る。

「…ここで見張ってる。連中が来たら容赦する必要はねえ」

「まあ、連中が来たら暴れていいなら従うけど」

プロトワースト 初期番外はまだ少し頬を赤く染めたまま短く返答する。クリアランス 絶対領域はそれを見て、プロトワースト 初期番外に背を向けて再び家へと正対する。

クリアランス これから絶対領域は学園都市の統括理事会襲撃という禁忌を犯す。プロトワースト それに初期番外はできるだけ関わらせたくない。とは言っても、彼女をここで帰るように説得するのは難しい。

プロトワースト ならば、せめて、汚れるのは自分一人だけにする。初期番外には直接関わらせずに逃げ道を用意して、自分だけが汚ればいいのだ。

(いくか)

首元の電極のスイッチを切り替え、能力を使う。玄関のドアノブを中心に半径10cm程の穴が開いた。すぐにまた電極のスイッチに触れて通常モードへと移行する。

そのまま扉を開けて、明かりのついた玄関へと入っていく。肩ひもでかけてあるサブマシンガンが揺れた。

しばらくして、その家の中から銃声と悲鳴が響きわたった。

### 3 - 6 目覚める直前にある天使（後書き）

まずは閲覧して下さったみなさま、ありがとうございます。

結局この章でもヒューズ<sup>II</sup>カザキリのところまで行けず……、すみません。

時間軸としては、一方通行がビルを投げ飛ばした直後に、絶対領域と初期番外が統括理事会の一人まで辿り着いたということです。

今回はとうとう<sup>アクセラレータ</sup>一方通行との出会いとヒューズ<sup>II</sup>カザキリの出現です。

お楽しみに!!

3・7 出現（前書き）

「ここで出すのかよ……」  
レベル5  
学園都市屈指の超能力者  
絶対領域  
クリアランス

### 3 - 7 出現

クリアランス プロトワースト  
絶対領域と初期番外が統括理事会の内の一人の元を襲撃した頃、  
アクセラレータ  
一方通行が自身の最大の一撃を放ったその頃、

学園都市統括理事長、アレイスターは窓のないビルに居た。

学園都市最強の一撃を受けても、内部にはなんの影響もなかった。彼はその部屋の中にある、赤い液体に満たされた円筒容器の中で逆さに浮かんでいる。

(何やら表が騒がしいようだが)

彼は学園都市最強の一撃ですら眼中に入れず、思考する。その視線は空中にあった。

どのような技術を利用しているのかは分からないが、虚空には、いくつかもの四角い映像が浮かんでいた。

彼が眺めている画像にはいくつかのデータがある。

一つ目は、世界中の妹達の配線図と、彼女たちの脳波パターンのグラフ。

二つ目は、この街で生まれつつある『モノ』の生体データ。

三つ目は、学園都市を狙う襲撃者が手すりに寄りかかって咳きこんでいる映像だ。

(木原の方も、ラストオーダー最終信号の回収には成功したらしい。対象コード注入後の予備段階で、早くも学園都市の『場』に変化が生じている)

アレイスターは目の前のデータを見て、幾分満足する。急場しの

ぎでは、予想を下回る結果ではあるが、十分だ。

(AIM拡散力場を利用した虚数学区・五行機関は展開完了した。この学園都市の内部で魔術を行使すれば、あらゆる魔術師は暴走・自爆する。前方のヴェント、だったか。それは貴様とて例外ではない)

彼の中で、歴史を動かす知的奔流が築かれていく。

(現在の出力では、世界を覆うことなどともできない。術的な圧力にしても、かろうじて耐えられるレベルだろうが……。まだまだだぞ。例のコードは本起動もしてない。ヒューズカザキリの出現と共に、形勢はそのまま逆転する)

空中に新たなウィンドウが表示される。そこには、街の中を不安そうに歩く、一人の少女の姿があった。

\*\*\*

学園都市を襲撃した人物、《前方のヴェント》は大きな川にかかる鉄橋にいた。

その場所で先ほどまでは得体のしれない吐血と痛みに襲われていたが、今この瞬間、彼女はそれ以上の優先すべき現象に目を向けていた。

その正体は『気配』だった。

自分には敵意こそ向けていないものの、ただその『気配』があるだけで圧迫感を感じる。

(コレが、学園都市の、私達オカルトに対する、最終ライン)

あまりに巨大で輪郭すら掴めない『気配』は、ヴェントが学園都市の九割近くを麻痺させているにも関わらず、その状況を完全に覆すことも可能だろう。

「……関係、ない。何が出てこようが、私は目的を果たすだけってコトよ」

その正体不明の『気配』を前にしても、彼女には後に引けない理由がある。

彼女は自身の弟の名前を口にした。

それだけで、ヴェントの震えはいくらか引いた。状況はたしかにそこまで良くはないが、彼女が優勢なのもまた事実だ。ヴェントは口元の血を拭って結論を出す。

殺すだけだ。標的である上条当麻を。

(科学は、キライ。……科学は、ニクイ)

自分の弟を助けなかった科学が憎い。  
憎しみ、それが彼女の信念だ。

\*\*\*

「これで、本当に全部か？」

「…ああ、そうだ」

その頃、絶対領域クリアラランスは暗い室内にあるノートPCのディスプレイから目を離し、自分の膝元で肩を押さえている男に仏頂面で問いかけた。肩を押さえるその手からは、鮮血が滴り落ちている。

絶対領域クリアラランスは統括理事会のメンバーの一人である男を襲撃し、右肩をサブマシンガンで撃ちぬいた。その後、その男のPCまで案内させて情報をいくつか聞きだしたのだ。

手に入れたのは、ハウントドッグ 猟犬部隊の目的と木原の居場所だ。

目的の方は予想していたものよりもはるかに最悪だ。絶対領域クリアラランスは今知ったことだが、ラストオーダー 打ち止めはシスターズ 全妹達の司令塔らしき存在である。彼女の指令にはその妹達も逆らえない。それを利用して、ラストオーダー 打ち止めの頭に《ウイルス》を上書きすることにより、全妹達シスターズを土台にして、外部からの脅威を取り除くというのが目的らしい。

ふざけるな、と絶対領域クリアラランスは奥歯がすり潰れるほど強く歯噛みした。そんなヒーローごっここの為に全ての妹達シスターズを利用する？

「お前ら、マジで下種だな。殺してやるよ。」

絶対領域クリアラランスは目の前の男に冷ややかな視線をと共に、サブマシンガンの銃口を向けた。

その様子に対し、その男は大量の汗を浮かべながら急に笑い出した。

「ク、ハハハハハッ！！ お前のようなものからそんな言葉がで

るとはなあ！！ そんなにあの妹達シスターズに影響されたか。だったら一ついいことを教えてやろう。絶対領域クリアランス。確か、初期番外プロトワーストだったかあ？」

「ッ！」

絶対領域クリアランスの顔から急に血の気が引く。いや、まさか、

（あいつは司令塔からの指令も拒絶することができるって言うって。ウイルスの影響なんざあるはずが…）

その思考を遮るように、男は告げた。

「どうせお前は、初期番外プロトワーストがウイルスの影響を受けないなど思っているのだろう？ 無理もない。加納ですらそう思い込んでいたのだからな。確かに初期番外プロトワーストには上位個体のコマンドを自動で拒絶するように細工してある。だが、例外も存在する。統括理事会の認証コードが受理された場合、初期番外プロトワーストと云えど、打ち止めラストオーダーの指令には逆らえない。お前の愛しの初期番外プロトワーストもウイルスの影響を受けることに変わりはないんだよおお！！」

「…な、に？」

目の前の男はなにを言っているのだろう。

（ついさっきまであいつはピンピンしてた。……・打ち止めラストオーダーが捕獲されウイルスを打ち込まれると、アイツも……）

絶対領域クリアランスは呆けたように目を見開く。それと同時に、言葉にできない、ざわざわとした感情が溢れてきた。その感情はやがて部屋をいっぱいに広がっていったが、男は気づかずに口を動かし続ける。

「初期番外も、もうすぐウイルスの影響が出てくるころだ。ハハッ！、ざまあ」

「黙れよ」

絶対領域は冷たい声を発して男の声を遮った。これまでのどんな状況よりも冷たい声。自分の感情がそのまま言葉に乗っていく感覚があった。

そして、サブマシンガンの引き金を引いた。目の前の男が声とは思えないような悲鳴を上げて崩れ落ちる。しかし、絶対領域は標的が死んでいるのにも関わらずに倒れている死体に近づいていき、男の顔面に銃口を向けてまた引き金を引いた。否、マガジンが空になるまで引き続けた。

\*

絶対領域が統括理事会のメンバーを一人殺害した直後、夜の学園都市に莫大な閃光が溢れる。その光は瞬く間に無数の翼のようなものを形作っていった。

\*

学園都市に巨大な翼が出現からしばらく後、一方通行は暗い一室で液晶モニタに目を向けていた。彼が今いる部屋は、統括理事会のメンバーの一人である、トマス・プラチナバーグの家の執務室だ。  
一方通行は、今回の件に統括理事会が絡んでいることを突き止め

た後、少々強引にプラチナバグを黙らせて、現在はプラチナバグのPCからなにか情報がないかと模索している。しかし、いくつかのキーロックと膨大なデータの山が時間を消費させていき、求めている情報は一向に見つかる気配がない。

(面倒くせエな)

その時、

そうやって、だんだんと焦れてきた一方通行の鼓膜をなにかの音が揺らした。

(…アア?)

その音の発信源は、ハウントドッグ 猟犬部隊から奪っておいだトランシーバーの呼び出し音だ。このタイミングでトランシーバーが鳴りだすことを不審に思いつつ、一方通行は回線を繋げた。

『お前、第一位だよな?』

(なに……?)

なにやら切羽詰まったような少年の声が聞こえてきた。その声にはまるで聞き覚えがないうえに、木原は自分のことを第一位とは呼ばない。その声の持ち主に警戒しながら一方通行は答えた。今はどんなに馬鹿らしい情報でも集めておきたい。

「あア、そうだ。そう言うオマエは?」

『今はお前の協力者みたいなモンだ。俺が潰したクソ野郎共から奪った端末でお前の端末に繋いでる。面倒くせえからもろもろの事

情は省くぞ。今の状況を説明したい。近くにパソコンは？』

なるほどな、と一方通行は納得した。おそらくこの声の持主は、あの医者が言っていた絶対領域クリアランスという少年だろう。猟犬部隊ハウントドッグの連中の装備には、無線機の動きを特定するような機械があり、それで不審な動きをしている端末を特定でもしたのだろうか？

「目の前にあるな」

『そいつのメールアドレスを教える。木原の目的と居場所を送る』

一方通行がプラチナバグのPCのメールアドレスを教えて10秒もたたないうちに、なにかのデータが添付されているメールが送られてきた。そのデータを表示させて目を通す。その情報によれば、ここからそう遠くはない。

「今、目を通した。後はオレが潰しとく。お前は」

『一方通行』

一方通行が絶対領域クリアランスに指示を出そうとしたが、遮られる。一方通行は眉をひそめる。今の絶対領域クリアランスの声は、無線越しにでも分かるほどの感情が込められているような気がした。後悔のような、怒りのような、そんな負の感情。

『木原を潰せ。一応俺も向うが、俺に遠慮なんざしなくていい。……あのガキを助け出せ』

「……アア」

アクセラレータ  
一方通行の返事と共に、回線が切断された。

\*\*\*

(今やるべきことはやったな)

絶対領域は統括理事会のメンバーの一人に、弾丸をぶち込めるだけぶち込んでグチャグチャにした後、玄関へと向かって初期番外の様子を確認しに行った。その様子を目にした時に、一瞬頭の中の血管がすべてはち切れそうになった。すぐにあの医者に連絡して初期番外の為の救急車を頼み、救急車を待つ間に一方通行に木原の情報を流したのだ。

その時ほど、自分という存在がみじめに思えたことはなかった。

しばらくして、救急車が来た。それに初期番外が乗ったのを確認して、病院に向かって走り出していくと同時に、絶対領域は首筋の電極のスイッチに指で触れる。その瞬間、光子を利用して自分の体を上昇させて、弾丸のごとく加速させる。

(能力使用モードは残り七分。それまでに木原を潰す)

絶対領域は怒りに顔を歪ませながら滑空していく。

5分程たったころだろうか。目標となるビルが見えてきた。木原がいるはずのビルを視界に入れると同時に、自分の体をさらに加速させる。

その時だった。

不意に上方から突き刺すような殺気を感じた。絶対領域クリアランスがその殺気を感じた時とほぼ同時に、背中がとてつもない衝撃に襲われる。

「っ、あ……ッ」

肺から全ての酸素が吐き出され、せき込む。自分の体が急降下していくのが分かった。

(ツ！！)

絶対領域クリアランスは地面に落下する寸前に、なんとか光子を利用し落下の勢いを中和して、二本の足で着地する。しかし、背中の痛みが響き、思わず膝に手をついて、また咳きこむ。

(な、にが……)

絶対領域クリアランスは酸素を十分に吸い、呼吸を整え、上空を見上げる。

(…あれは?)

そこには妙な格好の少年が見えた。ダークスーツを着ており、どこかの作業員エージェントのような雰囲気醸し出している。それだけでも普通ではないのだが、絶対領域クリアランスが注目したのはそこではない。

3対の黒い翼らしきものが、その少年の背から伸びている。その翼は漆黒でこそあるものの、その形は、天使のように幻想的だ。

その少年はゆっくりと翼を羽ばたかせながら、絶対領域クリアランスの5m程前方に着地した。

白いシャツに黒いネクタイ、ダークスーツという格好。髪は日本

人特有の黒髪をショートレイヤースタイルにしており、漆黒のサン  
グラスをかけている状態でも、その端正な顔立ちが覗える。

クリアランス  
絶対領域の目の前にいる少年は口元を僅かに緩め、呟いた。

「やりすぎだな、絶対領域。クリアランス 悪いがここで足止めさせてもらう」

### 3・7 出現（後書き）

まずは閲覧して下さったみなさま、ありがとうございます。

少々強引に進めました。ヒューズ<sup>アクセラレータ</sup>と一方通行との出会い  
です。

今回の一方通行<sup>アクセラレータ</sup>との出会いは、後の為のモノですので、今回は直接的な出会いは削りました。すみません。

そして、新キャラの登場です。だすのはもう少し後にしようと思っていたのですが、今出しておいた方が後の展開につながるかな？  
と思ひまして

今回は戦闘シーンがメインです。

お楽しみに！！

3・8 つながりのために（前書き）

「狙う相手、間違えたな」  
学園都市屈指の超能力者<sup>レベル5</sup> 絶対領域<sup>クリアランス</sup>

### 3 - 8 つながりのために

「…誰だテメエ」

クリアランス 絶対領域は目の前に降り立ち、自分と正対している少年を睨みつける。冷静な状態であれば、能力使用モードでダメージを負ったことに多少の困惑と疑問を感じるところだが、生憎今の絶対領域は冷静ではない。今の絶対領域クリアランスの心境は、焦り、後悔、怒りという負の感情だけで埋め尽くされている。

それに対し、目の前の少年は柔和な笑みを浮かべて答えた。

「幸せを運ぶ青い鳥つてところかな」

「ッ!」

その言葉を聞き、絶対領域クリアランスは目を見開く。その少年の言っていることは、普通の人間にはただの戯言にしか聞こえないだろう。しかし、目の前の少年の言葉は、絶対領域クリアランスには理解できる。かつて自分の居た場所。

圧倒的な力を持つ者だけが、それを名乗ることを許される。

「…青鳥ブルーバードか」

その質問に、少年は「ハハ」と馬鹿にしたように笑いながら答えた。

「御名答。まあ、お前ならこんだけのヒントでも分かかって当然か」

「おいおい、まさか天下の青鳥ブルーバード様がパシリの手伝いつてかあ？

随分落ちぶれたもんだねえ」

絶対領域クリアランスは皮肉を口にしながら嘲笑するが、内心はかなり焦っていた。青鳥ブルーバードとなった者は、暗部の管轄に関係なく仕事を選べる。

つまり、たった一人で、全ての暗部の仕事をこなせるほどの化け物が、今自分の目の前に現れたことになる。

正直、かなり不味い。

（この野郎の目的は確か俺の足止めって言ってたな。だとすると、アクセラレータ一方通行の方は放っておいても撃退できる要素があるってことが。クソッ、早く合流しねえとやべえな。コイツを潰す必要はねえ。とにかく迅速に木原のところまで

）  
「言っておくが」

絶対領域クリアランスの思考を遮るように、目の前の少年は言葉を紡ぐ。

「俺の目的はお前の足止め。その方法は、お前と殺りあうことだけじゃねえ。お前が上手いことやり過ぎそうなんて考えてんなら、俺にも考えがある」

「な、に?」

まさか、と絶対領域クリアランスの顔から血の気が引いた。

「第七学区の立体駐車場だっけか? お前の大事な大事な女の子が居る場所って」

「ッこの野郎オオオオオオ!!」

気がつけば、体が勝手に動いていた。絶対領域クリアランスの体が一瞬で加速する。光子を利用して目の前の少年に触れればそれで終わりだ。ましてや、少年との距離はたったの5m程度。この条件であれば、相手が一方通行でもない限りは、確実に殺れる。

絶対領域はそう思っていた。一秒もたたないうちに、目の前の少年の頭部は、自分の右腕を当てると同時に消えると。

更に、その少年はなんの反応も出来ないのか、ポケットに手を突っ込みながら不敵に笑っているだけだ。完全に絶対領域クリアランスの右腕は、少年をグロテスクな状態にする条件を整えていた。

しかし、

絶対領域クリアランスの右腕が少年の頭部を捕らえる前に、少年を中心に衝撃波が生みだされた。それにより絶対領域クリアランスは勢いよく吹き飛ばされる。

(なッ……)

絶対領域クリアランスは慌てて、もう一度光子を利用して勢いを中和しようとするも、勢いを完全には消しきれず、10m程後方へとそのまま吹き飛んだ。なんとか転倒はしないよう堪えるが、思わず目を見開き、目の前の少年を見つめる。

少年は相変わらず余裕の笑みを浮かべ、おいおい、と肩をすくめた。

「俺の能力チカラはお前にとっては未知数。ロクな情報もないうちから特攻つつうのは馬鹿のすることじゃねえか？ もつと頭使えよ」

少年は皮肉をぶつけるが、絶対領域クリアランスの耳にはその言葉は入っていない。疑問が彼の頭を支配しているからだ。

絶対領域クリアランスの能力は絶対ではない。粒子を用いない純粹なベクトル

だけの力を使われれば干渉される。風力使いや圧力操作系の能力者等の苦手な分野も存在する。それ故、自分が吹き飛ばされるといふ事は、珍しくはあれども不可能ではない。目の前の少年がそういった類の能力者と仮定すればおかしな話でもない。

従って、彼の頭の中を駆け巡る疑問は自分がダメージを受けたことではない。

（俺の知覚演算に『知覚できないなにか』が引っ掛かった？）

彼の知覚演算は無意識に自分の周囲に展開されており、物質の属性を正確に読み取ることが可能だ。どれだけ希少な素粒子であろうがなんだろうが、この世に存在する全ての物質の属性を完全に知覚することができる。

その知覚演算に、衝撃波を受けた際に『なにかの素粒子』が感知されたのだ。

それが意味すること。それは、彼を襲った衝撃波にはベクトルだけの力ではなく、なにか質量を持つ物質が引き起こした状況ということになる。

この世に存在する全ての物質を知覚できるはずの演算が、その物質を感じできないなどという状況はあり得ないはずなのだが、皮肉にも絶対領域クリアランスの演算がその結果を裏付ける。

（分析してる場合じゃねえ。やつが俺の対応できない『なにか』を利用して攻撃できるってんなら、アウトレンジから仕掛けるだけだ）

絶対領域クリアランスは10m程離れた距離で、光子を利用して空中へと飛翔する。それを見て、少年も同じくらいの高度まで翼を羽ばたかせながら飛翔する。

絶対領域クリアランスはそれに驚きはせずに、中間子进行操作して、少年にむけ

て撃ちだす。

今まで幾度となく利用してきた『中間子操作』。それを絶対領域クリアランスは、自分だけの能力が持つている応用法だと自負していた。特別なものだと。どんなものでも関係なく、全てを貫く悪魔の一撃だと。しかし、少年は一枚の翼を盾のように自分の前に突き出し、その翼をもぎ取られながらも中間子による一撃を簡単に相殺させた。

「ッ！」

「残念だったな。次は俺の番だ。歯アくいしばって受け止めてみるよ」

絶対領域クリアランスの顔が驚愕に染められる。それを見て少年は嘲笑を浮かべ、もぎ取られた分の翼を新たに作り出す。そして、先ほどまでは3m程の長さしかなかったはずのそれは一瞬で20m程にまで達し、絶対領域クリアランスへと放たれた。絶対領域クリアランスは慌てて回避にうつるものの、間に合わない。

ゴキベキバキ！、と重苦しい音が響くのを絶対領域クリアランスは聞いた。

「が、あッ!？」

絶対領域クリアランスは10m程後方へと吹き飛ばされながらも、なんとか光子を使って勢いを中和させる。しかし、そうしてる間にも少年は2撃目を放つ為に、2枚目の翼を上方へと大きくつきだす。

「ほら、もう一発」

その言葉と共に、少年の翼が振り下ろされた。また、重苦しい音が響く。

「ッあ……!？」

今度は声すら出せずに、絶対領域クリアランスは地面へと叩き落とされた。全身を激しい痛みが襲う。

体が動かない。戦闘が始まってまだ一分もたたないというのに、早くも視界が霞む。うつぶせになりながら、目をぼんやりと開く。見ると、少年が自分のすぐ前方にたっているのか、二本の足が視界に入った。なにか自分を馬鹿にするような声が聞こえるような気がするが、思考までもが霞んでいるようで耳に入らない。

諦めの感情が滲みだし、意識が途切れかけている。このまま倒れたい。

うつぶせのままの絶対領域クリアランスを雨がうつ。

「こんな事は言いたくないんだが、正直ちょっとガツカリだ」

少年がなにか言っているがどうでもいい。眠りたい。

(そういやあ、なにをこんなに必死になつてた?)

途切れかけている意識の中、ぼんやりと考える。

(どうしても、いいか……。いや、でも何か譲れねえモノが……)

諦めに満たされ、瞼を閉じた絶対領域クリアランスをなにかが引きとめる。

(ああ、そうだ……。そうじゃねえか)

絶対領域クリアランスは閉じられた目をゆっくりと開いていく。

(アイツの為なら全てを壊しても俺は )

覚悟を取り戻す。自分の信念を再確認する。可能かどうかなど関係ない。やりぬいてみせると、ただ、そう決めただけの儂い幻想。自分は何故、力を使う？  
自分は何故、今動こうとする？  
その答えはたった二つ。

生き方を変える出会いがあった。

そして、きつかけになった『つながり』を守ると誓った。

直後、絶対領域クリアランスは、カツ、と目を見開く。途端、静かな殺気が辺りに広がっていく。

「ッ!？」

少年は目の前に転がっている絶対領域クリアランスの感情を感じ取り、瞬時に翼を飛ばたかせ、上空へと飛翔して距離をとる。

そこで少年は思わず目を見開いた。彼の翼の一撃は、確実に絶対領域クリアランスを戦闘不能にしたはずだった。あれほどの一撃を受けたのだから、それは確定事項だと、そう思っていた。

それにも関わらず、絶対領域クリアランスがゆらゆらと立ち上がったからだ。そして、絶対領域クリアランスは光子を使い、少年と同じ高度まで飛翔する。その顔は、微かに笑っているような気がする。

「悪いな、再認識した。必ずお前を潰してやるよ」

「ハッ、やれるもんならやってみ

」

「ああ」

少年の挑発を遮り、絶対領域クリアランスは短く言葉を紡ぐ。刹那、閃光が放たれた。すなわち、中間子の束。先ほど防がれた一撃となにも変わらない。

そう。閃光が一筋ではなく、複数、連続的に放たれていること以外は。

（ツなんだと!?!）

少年はあわてて、自分を翼で包みこむように縮めた。その姿は、まるで漆黒の繭まゆのようだ。

しかし、翼は簡単にもぎ取られていく。いくら再生させても、中間子の束は止まらない。

それでも、少年は余裕こそないものの、確かに笑っていた。

（大丈夫だ。いくら超能力者レベル5って言っても、中間子を無限に操ることなんざ、どんな演算能力を持ってしてもできやしねえ。必ず、どこかで脳がブレーキをかける。攻撃が止んだと同時に反撃を

）

それから、数秒たったころだろうか？

中間子による攻撃が突如として止んだ。

（ツここだ!?!）

少年は反撃のタイミングを見つけ、翼を広げる。先ほどまで、翼の防御によって阻まれていた視界が晴れる。

そして、少年は驚愕した。

何故、絶対領域クリアランスが自分の懐に入り込んでいる？

「ッ！、この」

クリアランス 絶対領域の作戦は単純なものだった。敵が視界を捨てても、防御しなければならぬ状況を作り出し、その防御を解く一瞬の隙に懐に入り込む。

本来、中間子の束を操作するのは、相当な負荷がかかるため、常に一本だけしか操作はできなかった。

しかし、ここで、彼は新しい力を手にした。

そして、クリアランス 絶対領域は微かに笑いながら告げた。

「吹っ飛べ、クソ野郎」

少年の腹に手を当てて、クリアランス 絶対領域はありったけの光子を反射させる。

少年はそれと同時に、とてつもない速度で後方へと吹き飛ばされていった。

\*\*\*

少年を撃退した後、クリアランス 絶対領域はゆっくりと地面に着地した。息切れが激しい。また、視界が霞み始める。

それでも、よろよろと不安定な足取りで、少しずつ踏み出していく。

（早く…行かねえと、木原を潰して……）

思考すらまともに働かなくなる。なにを考えているのか自分でも

分からなくなっていく。

それでも、絶対領域クリアランスは一人の少女の顔を浮かべながら、一歩一歩踏み出していく。

（俺の、信念……。アイツを傷つける全てを、俺が、壊す）

しかし、神様というのは無情なのか。

絶対領域クリアランスはそこで、ドサツ、と無様に倒れこみ、そのまま意識を失くした。

### 3 - 8 つながりのために（後書き）

まずはここまで足を運んでくださった皆さん、ありがとうございます！

新キャラの能力は結局不明なままでした。彼の詳細は今後、明らかになっていきますのでお許しを（汗）

結局、ぼんやりとした終わり方になってしまいましたが、この章では絶対領域の思いを最後の最後で描きたかつたんです。

その為に、前々回の話でも初期番外との絡みを取り入れ、やっぱり彼女は特別なんだと、ぼんやりと思わせました。

そして、今回でその思いを露わにさせました。

それでは、次回から新章です！！

楽しみに！！

キャラ紹介？ 花宮 愛花

年齢 23歳

身長 164cm

体重 45kg

血液型 B型

来歴：

以前は研究者として絶対能力者進化実験に<sup>レベル。シフト</sup>関与していたが、現在は解任されている。

現在は《外の技術》専門のバイクシヨップのオーナー。売上は正直好ましくなく、利用しているのは絶対領域<sup>クリアランス</sup>と数人の客だけ。

容姿：

黒いストレートの髪。髪型はショートヘアで、肩までぎりぎり届かないくらい。肌は白く、大人の雰囲気を持つ美人。

性格：

感情の起伏はあまりないタイプ。いつも薄笑いを浮かべている。

研究者としての技術はもちろん、二輪車<sup>クリアランス</sup>に対するの知識も持ち合わせている。

絶対領域とも面識があったようだが、そちらは不明。

キャラCV 桑島法子



(……ここは……)

絶対領域クリアラランスは瞼をゆっくりと開き、意識を取り戻した。視界には清潔感の漂う見慣れた病室の天井が入ってくる。窓から差し込む日光から考えるに、今の時刻は10〜15時くらいだろう。

絶対領域はまだ思考には微かに霧がかかっているようなそんなすつきりしない気分の中、なんとか意識が途絶える前のことを思い出そうとする。

「ッアイツは!？」

絶対領域クリアラランスは意識を失う前のことを思い出し、勢いよく体を起こす。意味もなく周囲を見渡すが、当然、『アイツ』の姿が見えるはずもない。

(いや、俺の脳が正常に働いてるってことは『ミサカネットワーク』自体に問題はねえってことなのか?)

なんとか表面上だけでもポジティブな思考をするように努力するが、根拠のない最悪の結果が彼の頭の中で広がっていく。自分でも信じられないほど動揺している。噴き出す汗が止まらない。

そんな中、不意にスライド式の扉が開く音がした。

(ッ!!)

絶対領域クリアラランス思わず目を見開きながら、扉の方へと目を向ける。そこに居たのは、彼がよく知る女性だった。

黒いストレートの髪をショートヘアに白い肌。そして、整った顔立ちと落ち着いた大人の雰囲気。花宮愛花だ。

花宮は今自分が入ってきた扉を閉めて、そこに立ちながら絶対領域クリアラに微笑みかける。

「あら、案外大丈夫そうね。この様子ならすっかりお金も払えそう」

「アイツは……ッ!!」

絶対領域クリアランスは花宮の言葉を遮り『アイツ』の安否を、初期番外プロトワーストも安否を問いかけてよとするが、そこで下を向く。その先の言葉が発せない。

今までにない恐怖が彼を襲う。

もしも、初期番外プロトワーストが取り返しのつかないところまで傷ついていたら？

その様子を見て花宮は、ハア、とため息をついて言葉を発した。

「心配しないで。あの子は無事よ」

「…そうか」

その言葉を聞き、絶対領域クリアランスは花宮の顔を見上げた。花宮は微笑みに笑っている。

一気に、肩の重荷が取れたような気がした。先ほどまでの最悪な仮定が一瞬で消え去り、安堵感が心を満たしていく。

そして、絶対領域クリアランスも微かに笑みを浮かべて目を閉じた。

「だったら構わねえ。もう帰れ。金は口座に振り込んでく」

「…あなた、あの子以外の人間を何だと思ってるの？」

クリアランス  
絶対領域は安堵からくる脱力感から花宮の質問には答えずに、また体を寝かせる。

花宮はその様子に額に手をつけてまた嘆息する。しばらく沈黙が続いた後、花宮は額から手をどけて、先程の笑みを消し、逆に苦虫を噛み潰したような顔をして告げた。

「まだ話は残ってるわ。あなたにとってはあまり良くない話かね」

「なに？」

クリアランス  
絶対領域が少し目を開けて彼女に目を向けた。なにか言いにくそうな雰囲気伝わってくる。とは言っても、大体の予想はついているのだが。

自分は学園都市の暗部に刃向かったあげく、統括理事会のメンバーを一人殺害しているのだ。なんのお咎めもないはずがない。『ヤツら』は必ずなにかを要求してくるだろう。花宮はその伝令役を頼まれたといったところだろうか、と絶対領域は予測した。

「あなたが今回の件で学園都市に及ぼした被害は甚大なものらしいわ。ハウントドッグ 猟犬部隊の襲撃、器物毀損。さらに、統括理事会のメンバーを一人殺害したようね」

「……色々あってな。話すと長え。それで結局連中は俺になにを要求してきた？」

花宮は相変わらず浮かぬ表情のままだ。

「……あなたは今、すごい額のお金を請求されている状態。一カ

月やそこら、コンビニでバイトして返せる額じゃないわね。それと、もう一つ」

詳細な金額を口にしない所を見ると、かなりの金額なのだろう。

それだけで、ふざけるなど言ってやりたいところだが、これに加えてさらに要求をしてくるとは。怒りを通り越して笑うしかねえなどクリアランス絶対領域は自嘲気味に笑う。

「…招待状、来てるわよ」

それだけでクリアランス絶対領域は理解した。

(…暗部で働けてことか。ホント腐ってやがんな、あいつら)

クリアランス絶対領域もかつてはそちら側の人間だったのだから『上』の連中の考えは大体分かる。どうせ連中は、むしろ儲け物をしたぐらいにしか思っていないのだろう。

これがやつらのやり方だ。弱みにつけこんで人を操り、不要となればリサイクルするか捨てるか。

そんなやつらの掌で踊るのは、はっきり言って死んでも否定したい。しかし、やらなければ標的にされる。自分ではなく、なんの罪もない『彼女』が。

何故、この世界はここまで不平等にできているのだろうか？

むかついてたまらないが、今自分には、そんなクス達の操り人形になるしか選択肢は残されていない。

「笑うしかねえよな」

「戻るのね？」

花宮が問いかける。  
絶対領域クリアランスはそれに対し、ハッ、と笑って答えた。

「答えなんざ、決まってる」

「そう」

花宮も微かに笑う。決して心地よい笑みではなさそうだが。結局逆戻りしてきたというわけだ。『暗部』の構成員の一人として。闇というものは自分を相当好んでいるらしい。

それでも構わない。汚れることを怖がっていても、守りたいものは守れない。ならば答えは簡単。汚れるだけだ。

「じゃあ。これに目を通しておくようにね。端末とか必要なものもはいつてるから。それじゃ」

花宮はなにかのファイルをベッドの傍にある机に置き、そう言っ  
て病室から出て行った。彼女も自分が暗部に所属することは反対な  
のだろうかと、今の様子から絶対領域クリアランスは予測する。それでも、他  
道はないのだから仕方がない。

花宮が出て行ってしばらくしてから、絶対領域クリアランスは立ちあがった。  
そこまで体に異常はない。戦闘に影響は少ないはずだ。  
それを確認すると、絶対領域クリアランスは窓に近づいて空を見た。清々しい  
くらい透き通っている。

「借金返済、か。上等だな」

ファイルの中の端末を抜き取り、情報を確認すると、絶対領域クリアランスは  
笑みを浮かべて絶対領域クリアランスは部屋を後にした。『闇』が自分を待つて

いる。

「……『アイテム』、か」

白い廊下に、彼の足跡が響きわたる。

#### 4 - 1 帰還（後書き）

まずはここまで足を運んでくださった皆さん、ありがとうございました！

今回は後日談的なものになりました。新しい居場所と初期番外の安否確認だけの話です。

『アイテム』、です。実は1 - 1の前書きで伏線を張っていたのですが、お気づきになられた方もいらっしゃるかもしれません。

この章では彼の暗部の構成員としての活動を描いていくことになると思います。

絶対番外もたまにある……、はずです。

次回もお楽しみに

## 4・2 ファミレス（前書き）

「……帰るか……」

学園都市屈指の超能力者<sup>レベル5</sup> 絶対領域<sup>クリアランス</sup>

「え、じゃあ俺も……、ま、待ってくれッ！冗談なんだ！！」

『スキルアウト』の元リーダー 浜面<sup>はまじま</sup>仕上<sup>しあげ</sup>

## 4 - 2 ファミレス

学園都市第三学区は学園都市の外交の主役となっている学区であり、先端技術を外部に紹介する際には大抵この学区のホールを使用する。外部からの客を招くため、警備員の施設も豊富である。

それを利用する『闇』の住人がいた。その名は『田沼流沙<sup>たぬまりゅうさ</sup>』。表向きは外交官として真面目に働く男だ。しかし、裏の顔はそんな真つ当なものではない。警備員の滞在する施設に自分の部下の待機所を独断で作り、『外』の人間を自分のオフィスで取引するという名目で連れ込み、圧倒的な兵力を見せつけて大金を手にするという非法的な行為に手を染めている。

こんな学園都市に不利益な人間を、『上』が見逃すはずもなかった。

\*

10月2日 PM 12時33分

『学園都市第三学区外交官専用オフィス』

そこに務める警備員である小沢は、奇妙な男がホテルによくある回転式の入口を通して、黒い大きなスポーツバッグを持ちながらこのオフィスに入ってくるのを見た。否、男というよりは高校生くらいの少年といったところか。淡々とこちらへと近づいてくる。

その少年は、暗い赤のVネックのインナーの上には黒いショートダッフルモッズコートを着ている。ボタンは全て開けられており、中の暗い赤が存在感を出している。更にダークブルーのジーンズに黒イレザースニーカーらしきものを履いていて、更に、漆黒のサン

グラスをかけており、かなり危険な霧困気を漂わせている。

少年は、空港などでよく見る金属探知器のゲートをなんの躊躇もなく潜くった。その瞬間、ピーツという高らかな音がそのフロアに響き渡り、あつという間に五人程の小沢を含む警備員が少年の目の前に集まる。

そのフロアはホテルのカウンターのあるフロアのような清潔感の漂う霧困気がある。そんな霧困気には合わない霧困気の少年は無表情のまま警報と共に立ち止まっていた。それを見て小沢は警戒しながら告げた。

「小銭や鍵などのささいな金属も、一切ここには持ち運べません。申し訳ありませんが、金属類は全てこちらにお預けください」

「……」

そう言われ、少年は黒いスポーツバッグを地面に降ろすとコートの中に両手を入れた。

それを見て、小沢は不審に思う。何故、両手を入れる必要があるのだろうか？ なにかを取り出す際に、そんな動作をとるのは不自然だ。普通は片手で済ませるものだろう。

次の瞬間、

ダンツ、と重苦しい音が聞こえた。

「ツな!？」

視界には黒光りする拳銃を両手で二丁握った少年が見える。あまりに素早い拳銃に小沢は呆然とした。何発かの銃声が響いた後、自分以外の同僚は全員床に倒れ伏せていた。

そして今、自分に銃口を向けている。あまりの恐怖に体が動かな

い。それでも、必死に口を開く。

「お、前……、何者、だ？」

少年はそこで初めて表情に変化をもたらした。邪悪な笑みだ。その笑みを浮かべたまま、少年は告げた。

「『アイテム』だ。依頼でお前らを消しに来た」

少年は、『絶対領域』<sup>クリアランス</sup>はそのまま引き金を引いた。

\*\*\*

「こちら絶対領域」<sup>クリアランス</sup>だ。作戦通り1フロアを制圧した」

『そう、御苦労さま』

<sup>クリアランス</sup>絶対領域は床に伏せている死体の前で、何事もなかったかのように携帯電話を耳に当てていた。二丁持っていた拳銃の内の一丁は懐にしまっている。電話の相手は自分の属している組織、『アイテム』のリーダーを務める人物だ。

「お前らは？」

『田沼の支配下にある連中のお掃除は終わったけど、そっちに行くのはもう少しかかりそうね。一人じゃ怖くてお仕事できないのかしら。』

挑発的な電話の相手の声と口調は女性のものに聞こえる。

「言ってるよ。お前らが来れねえなら俺だけで制圧すんぞ」

『うーん……、それでもいいかな』

肯定の返事を聞いて、絶対領域クリアランスは通話を切る。それにしても、相変わらず『アイテム』のリーダーはなんとというか、軽いと思う。ゲーム感覚でやっているような感じさえするのだが、絶対領域クリアランスは嘆息した。

本来は、銃器類で時間を稼いで他の『アイテム』の構成員がもう一つの仕事を終わると同時にこちらへ向かい、全員で一気に制圧するはずだったのだが。

「だったら『コレ』もいらなかったか」

絶対領域クリアランスは地面に置かれたスポーツバッグを見つめる。思わずもう一度深いため息をついた。作戦に合わせて、かなりの重装備で来たのだが……。

「まあいいか。『コッチ』の方が銃より楽だ」

片手で持っていたもう一丁の拳銃を投げ捨てる。そして、首筋の電極に手を当てる。ブチリと引き裂かれたような笑みが、彼の表情を支配していく。

それからたった数分後のことだった。『田沼流沙たぬまじゅうせ』の心臓をえぐりだした絶対領域クリアランスが立ちつくしていたのは。

\*\*\*

結局、初めての『アイテム』としての任務はかなり容易に終わらせることができた。

今回の任務は学園都市に不利益をもたらず外交官の始末。その外交官はかなりの兵力を有していたらしい。よって、その外交官の本拠地を襲撃すれば、同じ第三学区内にある警備員の待機所からすぐに増援部隊がくるはずであることは分かっていた為、待機所と本拠地の襲撃を同時に行ったのだ。幸いその本拠地はビルのような構造をしていたため、逃げ道は入口のみだ。そうなると、敵の外交官をそこに留めておくのはそれほど難しくはない。自分はその足止め役だったのだが、色々と面倒くさくなり結局一人で潰してきたわけだ。もっとも、面倒な増援部隊を潰したのは他の構成員の少女達なのである。

急ぎよ話は変わるが、世の中には『マナー』というものが存在する。人間が気持ちよく生活していくための知恵のことを指し、社会にでていく上では最低限のマナーは身につけなければならない。それを怠ると人を不快にさせる、厄介事の原因になる等々、マイナスなことばかり起きるものだ。

「……………」

絶対領域クリアランスは今まで自分はあまり常識のないほうだろうと自己分析していた。しかし、自分はまだマシなほうなのではないか？と今になっただけだ。

今、彼がいるのは第七学区のファミレスだ。ちなみに今の時刻は午後2時半といったところだろうか。昼食には少々遅い時間なのかもしれないが、それでも自分以外にも客はいる。そんな中、自分の

目の前には、とても常識があるようには見えない少女たちがやりた  
い放題にしている。

「うん。今日のシヤケ弁はなかなか」

聞くに値しない、と絶対領域クリアランスは自らの鼓膜が持つ機能を強制的に  
シャットダウンさせる。まず、ファミレスに弁当を持ちこむとい  
うのは如何なものだろうか？

さらに、その秋物らしい明るい色の半袖コートを着込んだ少女が  
『アイテム』のリーダー、『麦野沈利むぎのしずり』たる人物というのも如何なも  
のだろうか？

「結局さ、缶切りなんてローテクな物、学園都市には必要ないっ  
て訳よ」

麦野の隣にいる『フレンド』という金髪碧眼の女子高生ぐらいの  
少女は意味の分からないことを言っ、缶詰のふたを開けるために  
四苦八苦しているようだ。じゃあ使つなよ、持ち歩くなよ、と言  
いたくなるが、面倒くさい。絶対領域クリアランスにはマナー教師になる必要性が  
全く見当たらない。

「今週は不作ですね。超クソみたいなものばかりです。やっぱり  
そう簡単には見つからないものですね」

フレンドの向かいに座っている『絹旗最愛きぬはたさいあい』という、ニットのワ  
ンピースを着た少女に至っては最早、食い物に全く関係ないことを  
ほざいている。何故問いかけるような口調にする？と疑問に思いな  
がらも、絹旗の言葉を右から左へと受け流す。

「……………北東から信号がきてる……………」

絹旗の隣にいる『滝壺理后』<sup>たきじほ</sup>という脱力系の少女は、視線をどこに向けているのかも分からない。いや、きていないだろうと思いな  
がらも絶対に突っ込まない。そして、ふと通路の奥にあるドリンク  
バーに目を向ける。

そこには、一人の茶髪少年の哀愁漂う後ろ姿が見える。自分とそ  
こまで歳は変わらないと思う。その少年の名は『浜面仕上』<sup>はまむらじあげ</sup>だった  
だろうか。『アイテム』の下部組織のメンバー。平たく言えば雑用  
係なのだが……。雑用係とはあんなことまでやるのかと、その少年  
を見て感心した。『ドリンクバー往復係』。暗部にはしっくりこな  
い響きだと感じるのは自分だけだろうか？

絶対領域はこれが『アイテム』なのかと思うと、思わず頭痛がして  
きたような気がする。以前、自分が身を置いていた組織はこんな感  
じだっただろうか？

その疑問に答えてくれる者はいない。

「……………ついてねえな」

## 4 - 2 ファミレス（後書き）

まずはここまで足を運んでくださった皆さん、ありがとうございます！

今回は『アイテム』の方々と絶対領域クリアランスの顔合わせのためのもので、会話を期待されていた方は、申し訳ありませんが、少し最後までお待ちください（汗）

今回は会話を入れるとゴチャゴチャなりすぎて、折角の会話が台無しになるかと思い、『アイテム』の方々の説明回でしっかり一話使ったことと思ひまして（汗）

そのついでに初任務も済まして置きました。

後、さりげに絶対領域の服装が変わっていますので、お時間がございましたら、目を通していただけるとありがたいです。

次回は、いよいよ『会話回』になりそうです。お楽しみに！！

#### 4 - 3 再会（前書き）

「あれ？いない……」  
サードシーズン  
第三次製造計画の成功作  
プロトワースト  
初期番外

#### 4 - 3 再会

「……ついてねえな」

絶対領域ケリアランスはそう呟きながら席を立つ。向かった先は浜面という『アイテム』の下部組織兼ドリンクバー往復係の少年の隣だ。片手で頭をかきながらグラスを手に取り、目の前の飲み物を入れる機械に目を向ける。

( 緑茶は )

「アンタは俺に運ばせねえのか？」

「あ？」

緑茶と表示されているプレートを探していると、隣の浜面が声をかけてきた。最初はその質問を怪訝に思ったがすぐに納得した。浜面に目を向けると、手には複数のグラスがある。どんだけ酷使したらここまで重傷になるのかと、呆れるというより哀れになってくる。

「……」

「な、なんだよ」

「自分のことは自分でやる主義でな。入れ終わったらとっと持ってけ」

浜面はそれを聞くと、すぐに麦野達のテーブルへと戻っていく。自分もすぐに目当ての緑茶を見つけ、グラスの3分の2ぐらいいまで

入れた。こんくらいでいいか、と絶対領域クリアランスが席を戻ろうとしたその時、

「はまづらああああ!!」

ファミレスに少女の声が響きわたる。反射的に振り返ると、そこには先ほどのグラスを持つ浜面がこちらへ引き返してくる姿が見えた。

\*

(最悪だ)

浜面は内心呟いた。少し前までは『スキルアウト』のリーダーという人の上に立つ側の人間だったはずの自分が、たった一度のミスでこの様だ。笑えない冗談というのにも程がある。おまけに、自分の属している組織の人間はかなり危険な人間ばかりだ。麦野沈利をはじめとして、全員が危ない仕事を長いことやっているメンバー。さらに、だ。最近『アイテム』に入ってきたあの少年。たしか絶対領域リアランスだっただろうか。その少年も、かつては単独で暗部の仕事をやりぬいてきた少年らしい

そういった人間が今度うちに入るから、と麦野が気軽に言ったときは思わず顔を青ざめた。そんな人間が真つ当なはずはなく、ターミネーター的な危ない人間を想像していた。しかし、

(にしてもアイツ、思ってたより普通だったな)

飲み物をグラスに注ぎながら、浜面はふと思った。案外、常識人

であると。

それに、今までの『アイテム』は自分を除いた全員が女性だったこともあり、正直気まずかったのだが、男性が一人増えただけになり気が楽になる。とは言っても、あまりフレンドリーな性格とも言い難いのだが。

「はあ……」

それでも、あまり楽しい職場とは言い難い。浜面は深いため息をつけて麦野達のいるテーブルへと肩を落としながら戻っていった。

\*

(にしても流石『アイテム』だな。『第四位』に『暗闇の五月計画』か)

クリアランス  
絶対領域はストローをすすりながら考える。

(……『暗闇の五月計画』。あんまりいい思い出はねえな)

わずかに眉をひそめて、ストローから口を離す。緑茶の苦みが口の中に後味として残っていくのを感じながら昔の記憶を思い出したが、すぐにそれ払拭する。今はもう関係のない記憶だ。昔のことを蒸し返しても得することは何もない。目を細めながら手にとったグラスに映る自分の姿を見る。

「初仕事は上手くやれたみたいね。御苦労様」

ふと麦野から声をかけられそちらに目を向けて、「ああ」と適当に返事をしておく。

「実際大したことねえ仕事だったしな。能力5分も使っとけば瞬殺だ」

「電極無しには動けないくせに随分強がるのね」

「…ああ？」

「冗談よ、と麦野は返しながらグラスを手にする。しかし、麦野を睨みつける絶対領域クリアランスの表情は晴れないままだ。少し陰悪な雰囲気霧困気が二人の間に訪れる。

そんな雰囲気霧困気をまったく気にせず、滝壺は口を開いた。

「大丈夫だよ、くりあらんす。私はそんなコンプレックスを指摘されてるくりあらんすを応援してる」

「……」

「け、結局そのフォローは逆効果すぎる訳よ！」

滝壺と向かいの席に座っているフレндаが顔を青ざめた。その瞳には、額に血管の浮かんだ少年の姿が映っている。

「はい、おしゃべりはそこまで。仕事の話に戻るけど」

先ほど、絶対領域クリアランスを侮辱した麦野がパンパンと手を叩きながら話を切り出す。絶対領域クリアランスはその様子を見て再度、麦野を睨みつけるが、当の本人に気にした様子はない。

「『スクール』の連中が不穏な動きを見せてる」

「『スクール』が、ですか？」

麦野の話聞いて、絹旗が少し驚いた様子で聞き返す。それに対し、麦野は「うん」と答えてさらに言葉を紡いでいく。

『スクール』とは、『アイテム』と同じ、少数の人数で作られた非公式部隊の内の一つだ。確か、第二位が仕切っているんだつたと、絶対領域は興味なさに思いだす。

「どうもさ、あそこに所属してる暗殺用のスナイパーを利用して統括理事会の一人を暗殺しようって計画してるみたいなんだよね。どっかの誰かさんみたいに」

麦野が意地の悪い笑みを浮かべながら絶対領域を見る。それと同じ時に『アイテム』全員の視線を感じたが、絶対領域はそれを無視して言った。

「つまんねえジョークは聞きなれてんだよ。とつとと本題に入りやがれ」

「つまんないわね……。まあいいわ。それでその標的なんだけど、ちよつと妙なのよね」

「と言いますと？」

その言葉を聞き絹旗が問いかけると、麦野は額に手を当てて呟いた。

「……『スクール』の標的は『親船最中』」

おやふねもなか

「親船？でも……」

今度はフレンダが麦野の言葉に続き疑問を抱いてそのまま言葉を紡いでいく。

「確か親船って結局役立たずじゃん。影響力もそんなにあるわけでもないし」

「そうなんだけど、この情報はかなり確かなものらしいから一応『スクール』の連中に警告はしておかないとね」

麦野はニヤリ、と不気味な笑みを浮かべながら、楽しそうに言葉を紡いでいく。

嫌な予感がするな、と絶対領域クリアランスはストローをすすりながら考える。こんな話題で楽しそうにしていること自体不自然だ。そんなことに慣れてしまっているのだらうと、絶対領域クリアランスは嘆息した。改めて、自分のいる場所を自覚する。

「というわけで、暗殺用のスナイパーでもぶっ潰しに行くことになるからね。各自準備はしておくように。ちなみに、警告する日は10月6日ね。ハイ、以上で解散！！」

麦野がそう言うと同時に、全員がそれぞれ席を立つていく。絶対領域クリアランスは通路側に座っていた為、彼が席を離れないと奥に座っている絹旗と滝壺が出られない。よって、すぐに席を立たなければならぬ。

最後にもう一杯緑茶でも飲んでいくかと思いい、席を立つと同時に絶対領域クリアランスはドリンクバーの機械へと向かっていく。機械の前で立ち

止まり、緑茶をグラスに注ぐ為に、ボタンを押す。ジャゴツという機械音と共に、グラスに緑茶が満たされていく。そのグラスをふと見ると、そこには少女の姿が映っている。絶対領域クリアランスはその少女に背を向けたまま、声を発した。

「久しぶりだな。優等生」

その表情には笑みが浮かんでいる。その笑みはまるで「懐かしい」  
とでも言いたげだ。古い友人に会った時のようなものに似ている。

絶対領域クリアランスの言葉に対し、背後の少女は答えた。

「そうですね、絶対領域クリアランス。実験以来になります。あなたがまさか『アイテム』に入るようになるとは、超予想外でした」

そういった少女は、絹旗最愛は無表情なままそう言った。

#### 4 - 3 再会（後書き）

まずはここまで足を運んでくださった皆さん、ありがとうございます！

会話回です。やはり、麦野とはあまり仲良くはやっていけそうにありません（汗）  
ガチバトルまでいくことはないでしょうが、どちらか長いわけではありませんので。

そして、伏線です。これも『アイテム』に入れた理由です。詳細は後ほど……。

それでは次回もお楽しみに！！

#### 4 - 4 懐かしい響き（前書き）

「彼なら仕事に行くって言うってたよ」

学園都市の誇る医者 冥土帰し（へヴンキャンセラー）

「……………」  
サードシーズン  
第三次製造計画の成功作  
プロトウースト  
初期番外

「なんで私を睨むのよ……………」  
クリアランス  
絶対領域の協力者 花宮 愛花  
はなみや あいか

#### 4 - 4 懐かしい響き

「そりやそうだろ。俺だって入りたくて入ったわけじゃねえんだよ『優等生』」

クリアランス 絶対領域は緑茶の入ったグラスを片手で持ちながら振り返り、絹旗へと視線を向けて言った。その顔を見て、あまりいい思い出とは呼べない記憶がよみがえるが、それを表情には出さない。

「その呼び方はやめてくれませんか？超腹が立ちます」

絹旗は絶対領域の言葉を聞いて、僅かに眉間にしわを寄せたが、その様子を見ても絶対領域は特に悪びれた様子もなく『そうかよ』と呟いて続ける。

「で、絹旗。俺になんの用だ？」

「いえ、別に用というほどのことではありません。ただ超懐かしい顔を見たので声をかけただけです」

懐かしいという言葉聞いて、絶対領域は少し目を細めた。その『懐かしい』という言葉から分かる通り、彼には過去に絹旗最愛との面識があった。

『暗闇の五月計画』。かつて学園都市の暗部で行われていた非人道的な実験の一つだ。学園都市最強の超能力者である一方通行の演算パターンを参考に、各能力者の自分だけの現実を最適化、能力者の性能を向上させようという計画である。

その被験者のメンバーの中には絶対領域も含まれていた。

そして、目の前の絹旗も被験者の内の一人である。

あまり良好な接点とは言えない。

「『暗闇の五月計画』のことか……。まあ被験者つっても俺の方は大した効果もなかったから、すぐにリコールされちゃったんだがな。お前は？」

実験のことを思い出すと同時に、ふと気がかりな点を問いかける。そうでしたな、と言って、絹旗は答える。

「私の方は、連中が超満足するような結果を出せたみたいなので最後まで実験には参加させられてましたよ。迷惑な話です」

「…そうか」

緑茶をストローですすりながら話を聞いていたが、絹旗が話終わるころにはすでにグラスの中身は空になっていた。クリアランス絶対領域は絹旗に背を向け、そのグラスを使用済みと表示されているプレートの前に置く。そして、振り返り絹旗に視線を向ける。

「そんで今は暗部の構成員って訳だ。お互い落ちたもんだな」

そう言って、クリアランス絶対領域は出口へと向かう。絹旗が後ろで何か言っているのが聞こえたが、彼はその声を全く気にしない。

\*

「『暗闇の五月計画』。なんと口にしても懐かしい響きだな」

ファミレスを出て30分後。絶対領域クリアランスは汚くて、横幅が5m以上ありそうな広い路地裏を歩きながら呟いた。その顔は無表情にも見えるが、僅かに苛立ちを滲ませている。

絹旗との再会により、忌まわしい記憶を思い出してしまった。かつて、自分を予想を大きく下回る個体だと、好き放題に言っていた白衣の研究者。

あの頃の自分は、その言葉にどれほど虫唾がはしったことか。

「ホント、あん時はムカついたもんだ」

絶対領域クリアランスは言葉を紡ぎ続ける。誰もいない路地裏に声が空しく響いていく。その様子に絶対領域クリアランスは嘆息した。苛立ちがさらに表情に滲んでいく。

そしてその怒りは、だんだんと後方から感じる不気味な気配に向き始めていた。

(……まだ出てこねえのか。わざわざ人目に付かない所に来てやったってのに)

だったらしょうがねえ、と絶対領域クリアランスは首筋の電極のスイッチを押した。ピピッ、という電子音が小さく響く。

そして、絶対領域クリアランスは、瞬時に振り向いて後方へと拳銃を向けて、その引き金を引いた。

その銃弾の進行ルート上に障害はなかった。しかし、本来はそのまま直進しているはずの銃弾は、10m程進んだところで、火花を上げて弾かれる。まるで、見えない壁に弾丸が阻まれたようだ。

それを確認して、絶対領域クリアランスはなにもないはずの前方を睨みつけて叫ぶ。

「居るのは分かってんだよ……、いつまでも亀みてえに閉じこも

つてんじゃねえぞツ!!」

その瞬間、なにもなかった空間に、ジジツ、という機械音と共に空間がねじれていくような現象が起きた。絶対領域クリアランスの視線の先には、今まで何もなかった絶対領域クリアランスの前方には、その現象を引き起こした張本人が何も無い空間から突然現れるという異常なことが起きていた。

いや、張本人と言っても、それは人ではない。その現象を引き起こしてももの、それは学園都市の科学の結晶である鉄の兵器だった。すなわち、パワードスーツ駆動鎧だ。

色は灰色を主体にしている、ところどころ黒も見られる。大きさは男性の成人より少し大きめ程度の人型ではあるものの、頭部にはビデオカメラのようなものが何台か取り付けてあり、頭部をグルリと一周している。背中には何らかの大型の銃器と、先端がクイのようにとがったハンマーのようなものをクロス状にして掛けている。さらに、最初に現れた駆動鎧パワードスーツを中心に、同じタイプの二体の駆動鎧パワードスーツが左右に現れる。

それを見て、絶対領域クリアランスは鼻で笑った。

「なるほどなあ…、H S A S S 3「ステルスアーミー」か。確か、その頭部搭載型プロジェクタを利用して、周囲の風景をボデイに映し出すことで機体を不可視にするんだっか。くだらねえな」

H S A S S 3「ステルスアーミー」ははっきり言うと、まだ試作の段階までしか開発はできていない。不可視にしておくためには、速度を犠牲にする必要がある。そうしないと、どれだけ高性能なプロジェクタを使用してもやがては処理しきれなくなり、映し出した映像に綻びが生じ始めることが課題になっているあくまで発展途上にある個体。それがH S A S S 3「ステルスアーミー」だ。

とは言っても、一応実用化はされているものだ。その戦力はかな

りのものである。光学迷彩を使用していない状態であれば、パワードスーツ 駆動鎧特有の速度も出せる。ただの、殴る、という動作だけでもコンクリートを砕くこともできる。

さらに、この裏路地はあまりコーナーなどもなく、しばらくは直線状に続いている。H S A S S 3「ステルスアーミー」から逃れるには不利な条件ばかりだ。

しかし、クリアランス 絶対領域は余裕を崩さないどころか、三体のH S A S S 3「ステルスアーミー」に正対して、中指を立てて言った。

「来いよ。バラバラにしてやる」

刹那、中心に立っていたステルスアーミーが強靱な脚力を利用して、クリアランス 絶対領域との間合いを一瞬で詰める。そして、背中に掛けていた巨大なハンマーを振り上げる。その装備は、

『H S P P - 01』

アンチスキル 警備員の使用しているものとは違い、パワードスーツ 駆動鎧を破壊するために作られたリニア電磁力式ハンマーだ。

まともに当たれば、パワードスーツ 駆動鎧の装甲すら貫くその一撃が、クリアランス 絶対領域に振り落とされる。

しかし、彼に向かって振り下ろされた『H S P P - 01』は、クリアランス 絶対領域に触れると同時に、その先端部分が消失した。

「ッ!?!」

ステルスアーミーはH S P P - 01を振り下した勢いにより、前のみりになってバランスを失いかける。

クリアランス 絶対領域はその隙に、すばやくステルスアーミーの懐に入り込み、右腕でその腹部を貫いた。そして、その右腕を少し捻る。ステルス

アーミーの操縦者の腹部を貫いている状態で。

ぬちゃ、という、肉が捻じれる生々しい音がした。

「ッ！！ あああッ、あああああッ！？」

操縦者があまりの激痛に絶叫する。その叫び声を聞いて、絶対領域クリアラは邪悪に顔を歪ませた。そして、ステルスアーミーを貫いているその手をそのままにして、今度は左手で胸部の中心を貫く。

「かつ……」

何かを詰まらせたような短い悲鳴と共に、ステルスアーミーが力を失い、無様に頭を垂らした。ステルスアーミーは操縦者の脳を演算のコアに指定してあるため、操縦者が絶命したことにより行動不可能という結果が残る。

絶対領域クリアラが突き刺した両腕を抜くと同時に、ステルスアーミーは無様に崩れ落ちた。

そして、絶対領域クリアラは狂気に顔を歪ませながら、視線を再び前方に立ちつくしている向ける。

「残り二体つと」

「ッう、撃て……。撃ち殺せええええええッ！！」

絶対領域クリアラの冷たい殺気を浴びて、二体のステルスアーミーは背中クリアラの対戦車ライフルを絶対領域クリアラに向けて掃射する。

しかし、絶対領域クリアラは笑みを崩すこともなく、銃弾を無効化している。

直後、絶対領域クリアラから中間子の束が放たれ、左側のステルスアーミーの頭部を貫いた。

今度は悲鳴を上げることできずに、ステルスアーミーは崩れ落ちる。

これで残りは一体だ。

(な、なんだよこれ……。話が違っじゃねえかよ……)

思わず、最後となった襲撃者は、すぐ隣で倒れているステルスアーミーの頭部に空けられた穴を見る。

その頭部に空けられた穴を見て、襲撃者の額から玉のような汗が溢れてくる。

そして、襲撃者が再び前方に視線を向けると、少年はもう襲撃者の目の前までの間合いを詰めて、自分の胸に手を当てていた。

絶対領域は相変わらず邪悪な表情のまま、楽しそうに告げた。

「言い残すことは？」

「ま、待ってくれ……。俺は、た、頼まれただけで、お前を狙いたくて狙ったわけじゃねえんだ……」

「へえ」

大して興味もなさそうに、絶対領域は相槌をつく。

それでも襲撃者はあまり呂律が回らないのも気にせず、ステルスアーミーの内部から必死に言葉を紡ぐ。

「お、お前とは古い知り合いだってあの人は言ってた」

「なに？」

そこで絶対領域微かに怪訝な表情を浮かべる。古い知り合い等自

分にはいない。少なくとも、まともな知り合いは。

「そいつの名前は？」

絶対領域クリアランスはそこで初めて興味を示した。目の前の襲撃者が本当のことを言っているとは限らないが、この襲撃者は仲間の無惨な死に方を目にした直後で冷静ではない。もし、それが演技であるとするならば、即座にハリウッドで即戦力として世界に名前を轟かせるだろう。

「ら、ラスカー・ハンコック……。俺達の上司、だ」

その言葉を聞いて、絶対領域クリアランスは思わず目を見開いて、息をのんだ。その英語圏の男の名前には、少々心当たりがある。かつての自分の同僚であった男の名前だ。

「そうか……。あのクソ野郎が俺を、ねえ」

「う、嘘じゃねえッ！！ 本当なんだ！！」

襲撃者は必死に叫ぶ。

「そうかよ。じゃあなんで今更、ラスカーが俺を狙う？」

「し、知らない。俺たちは、このステルスアーミーでお前を殺るよう命令されたただけだッ！！」

襲撃者が嘘を吐いている様子はない。

しかし、ラスカーが今になって自分を狙う理由が分からない。絶対領域クリアランスはしばらく、ステルスアーミーの胸部の中心に右手をあ

てて、睨みつけながら思考する。

(今、考えても分かるわけねえか。これ以上の情報はコイツも持ってなさそうだな。下っ端中の下っ端って訳だ。だとすると、おそらくコイツらは使い捨てってところか)

クリアランス 絶対領域は嘆息する。思考しても答えが見つからないからではない。  
い。

そして、クリアランス 絶対領域はステルスアーミーから手をゆっくりと離して告げた。

「情報はもらっとく。後は好きにしろよ」

そう言つと、クリアランス 絶対領域は襲撃者に背を向けて、光子を利用して一瞬でその裏路地から消え去っていった。

(……え?)

クリアランス ステルスアーミーの操縦者は予想外の絶対領域の行動に呆気にとられ、しばらくそこから動けなかった。

#### 4 - 4 懐かしい響き（後書き）

まずはここまで足を運んでくださった皆さん、ありがとうございます！

絹旗との関係はそこまで明確に、というわけにもしませんでした。そちらの方が想像の余地もあっていいかなと思った所存です。

『暗闇の五月計画』での絶対領域の評価はそれほど高くはありませんでした。効果はあったといえはありますが、前よりマシになった程度で……。

『暗闇の五月計画』は能力者の性能を向上させようという目的だったので、絶対領域は別のことに利用しようとなったわけです。

そして、今回の襲撃者。

結構大事な人ですので、注目していただけると幸いです。

一応伏線は出しているのですが、実は本文中には今回の伏線はありません（汗

暇つぶし程度に探していただけると幸いです。

次回は、ほのぼのになるかもしれません。

お楽しみに

#### 4 - 5 会話と想像（前書き）

「大丈夫なのかアイツ……。もしかしてウイルスの影響がまだ……」

『アイテム』の構成員 クリアランス 絶対領域

「あなたも思い込み激しくない？」  
クリアランス 絶対領域の協力者 はなみや 花宮 あいか 愛花

#### 4 - 5 会話と想像

10月2日 PM17時23分

絶対領域クリアランスはステルスアーミーを片づけた後、自分の病室のベッドに腰掛けていた。窓の外を見ると、オレンジ色の空が見える。その空をチラリと見上げ、絶対領域クリアランスは目を細めた。

(にしてもラスカー、か。最近懐かしい単語ばかりだな。気味悪い)

絶対領域クリアランスは嘆息する。

ラスカー・ハンコックという英語圏の名前の男を彼は知っていた。かつて、自分が青鳥ブルーバードに任命される前に属していた少数の人数で構成されていた組織の構成員だ。

(駆動鎧を馬鹿みたいに集めてる軍事研究者、か……。そんな野郎に狙われる展開は面白くねえな)

絶対領域クリアランスは眉根をよせる。今の自分は、『アイテム』の技術によって、能力使用モードが30分に延長されているとはいえ、たかが30分では100円が500円になりました程度でしかない、と絶対領域クリアランスは思っていた。

守りに徹すれば、持久戦に持ち込まれてあの世行き確定というわけだ。

となると、

(あのチキン野郎の拠点はいくつか知ってる……。本格的に仕掛けてくる前にヤツを潰せば問題はねえわけだ。後は『アイテム』の

コンピューターを利用してハッキングでもすれば

)

そこで、彼の思考は途切れた。

理由は、背を向けていたスライド式の扉を開ける音が聞こえたからだ。

ノックもせずに誰だ、と絶対領域クリアランスはゆっくりと扉の方へ振り返るとはいつても、大体の予想はついているのだが……。まず、自分の病室を訪れる人物というだけで、その人物が誰なのか？ という疑問の答えは三択に絞られる。次に、その三人の中でノックもせずに入ってきたような人物。

思考終了&確定完了。

「お、いたいた」

「ノックぐらいしろよ」

病室に少女の高い声が響く。絶対領域クリアランスの瞳には、自らが守ると誓

った少女の姿が、初期番外プロトワーストの姿が映っていた。

初期番外プロトワーストは「まあまあ」と言つて、隣の椅子に腰かける。

「でさ、今まで何してたの？」

ベッドの傍にある椅子に腰かけた初期番外プロトワーストは、少し不機嫌そうな顔で問いかけてきた。俺のいない間に不快なことでも起きたのだからか？と一瞬考えるが、それよりも、どう返答すればよいのか絶対領域クリアランスは思考した。

暗部組織に入った等とは口が裂けても言えない。もちろん理由がある。

一つ。ここが病室とはいえ、盗聴システムがないとも言い切れな

い。情報をむやみやたらに口走ると、処分というお決まりの展開が待っていてもおかしくはない。

次に、プロトワースト初期番外の性格を考えるに、そんなことを言ってしまったらどうなるか。考えただけでも恐ろしい。彼女の命と平穩の為に自分は今ここで生きているのだから、彼女を『闇』へ近づけるようなことはしたくない。

数秒答えを考えて、クリアランス絶対領域は面倒くさそうに答えた。

「物件探した。いつまでもここで世話になるわけにもいかねえしな」

「なるほどねえ」

プロトワースト初期番外はそれを聞き、納得したように相槌をうつ。言い訳としては苦しかったきもするが、とりあえずは大丈

「ミサカは少し広めの部屋がいいかな」

「……はあ？」

「いや、だからミサカは少し広めの部屋がいいって」

クリアランス絶対領域は虚を突かれて怪訝な表情を浮かべる。すでにプロトワースト初期番外は絶対領域の世話になる気らしい。もちろん自分の拠点を確保するとしたら、プロトワースト初期番外もそこに居た方がこちらとしても心配する必要はないのだが、すでに同居を前提にしているとは思わなかった。

\*

やはりこの少年がすぐ隣に居るとなにか心地よさを感じるなど、  
初期番外はふと思った。

「あれ？ もしミサカ達の物件が見つかったら……」

物件の話でさりげなく自分の好みと自分もその物件に乗り込みます。すげなアピールを試してみた初期番外は先ほどの発言の結果を仮定する。もしも、その仮定どおりの結果が訪れるとしたら……。ふとあの医者から手に入れた知識を思い出す。これは、そう。

いわゆる同棲生活というやつではないだろうか？

初期番外の顔が急に熱を帯びてきた。若干興奮気味になり、俯いてみる。すると急に頭の中に様々な想像というよりはもはや、妄想の域に達しているものが次々に浮かんでくる。

「…どうかしたか？」

絶対領域が怪訝そうに問いかけるが、その言葉は今の初期番外には届かない。

(同棲、二人きり、男と女で同棲、絶対領域とミサカが同棲……)

「オイ」

絶対領域の声、すなわち鼓膜から得られる情報は全て別の思考に塗りつぶされていく。そう言えば、あの医者が言っていたような気がする。

しばらく同棲をしたカップルが、結婚という勝ち組人生を歩めま  
す的なことを。

それはあくまで例の中の一つであり、別に同棲≠結婚につながる  
訳でもないのだが、初期番外の中の知識ではそうなるらしい。仮に  
そのような方程式が成り立つとしても、まず絶対領域クリアランスとはそのよう  
な関係ではないし、そもそも彼がタキシード姿で「誓います」なん  
て似合わないにも程がある台詞セリフを言うとは思えない。いや、言わな  
いだろう。

しかし、初期番外の頭の中では絶対領域クリアランスが未来永劫発言すること  
はないであろうロマンチックな台詞セリフやその他もろもろが広がってい  
く。

いつぞやのプロポーズ発言プロトワースト（と初期番外は思っているが、厳密に  
は誤解である）も相重なり、初期番外の顔からはもう湯気が出て  
きそうなほど赤くなってきた。

「そ、そうになると……く、薬指の指……」

「……」

俯きながらぶつぶつと何かを呟いている初期番外を絶対領域クリアランスは怪  
訝そうに見つめていた。

今の初期番外を現実リアルに連れ戻す方法は誰も知らない。

#### 4 - 5 会話と想像（後書き）

まずは閲覧してくださった皆様、ありがとうございます！

久々のラブコメ回です。少し苦手なので時間がかかってしまつて……  
最近<sup>プロトワースト</sup>は初期番外の出番が少なくなってきたのと、彼女はまだあの時の「俺から離れるな」発言を誤解してますということを描きたかったもので^^

伏線も入れるところかと迷ったのですが、今回はラブコメで一話使いました。

次回は、若干シリアスになると思います。  
お楽しみに

4 - 6 迎撃準備（前書き）

「なに考えてたの？」

クリアランス

絶対領域の協力者

はなみや

花宮

あいか

愛花

「ッ！？ べ、別になにも……」

サードシーズン

第三次製造計画の成功作

プロトワースト

初期番外

#### 4 - 6 迎撃準備

10月3日 PM3時05分

絶対領域クリアランスはとあるマンションの一室で、ノートPCのキーボードを叩いていた。4LDK程の広さがある、平凡なマンションの一室。しかし、なんの変哲もない場所に見えるが、その実態は『アイテム』の所有する隠れ家。

すなわち、絶対領域クリアランスは『アイテム』の隠れ家にいるわけだ。『アイテム』の隠れ家とは言っても、ここを訪れた理由は召集を受けた等の理由ではない。自分のためだ。

昨日の襲撃者を裏で操っている人物には心当たりがある。その人物の拠点を特定するために『アイテム』を利用するというわけだ。

具体的な策は、書庫バンクと呼ばれる学園都市の総合データベースから突き止めるという方法。

学園都市の全ての情報が収納されているというだけのことにはあり、一般人に閲覧できるようなものではない。ファイアーウォールを始めとした厳重なセキュリティに加え、都市伝説のような凄腕ハッカーが監視しているそうだ。

まあ『全ての情報を収納されている』という情報も『凄腕ハッカー』も絶対領域クリアランスは信じていないため、クラックしてもいいのだが、念には念をとというやつだ。

(ラスカーは俺と同じで裏の人間。だとすると、おそらく奴の行動は記録されてるはずだ。上層部の連中が把握できないやつなんざいねえ)

無表情のまま絶対領域クリアランスはキーボードを叩きながら思考する。第二位が仕切る『スクール』ですら、上層部の連中には狙撃計画の動き

を読まれているのだ。そう考えると今の思考に至ることは別段不自然ではない。

（それなら、H S A S S 3「ステルスアーミー」を出撃させたつつう履歴が必ずどこかに残ってる。そこから探りを入れてやれば、ラスカーの今の拠点も掴めるはずだ）

しばらくして、絶対領域クリアランスの動きが止まった。その視線はディスプレイに釘付けになっている。見つけたのだ。ラスカーの拠点を。

（第一九学区か。考えたもんだねえラスカー）

絶対領域クリアランスは微笑を浮かべた。純粹に感心しているのだ。

第一九学区は再開発に失敗し、急速に寂れてしまった学区だ。蒸気機関や真空管などの技術を調べる研究機関が並んでいる。全体的に街並みは古く、前時代的。裏の人間にとっては拠点にしやすいだろう。

（にしても地下か……。でけえな）

絶対領域クリアランスはラスカーの拠点らしき地下施設の全体図らしきものを目を通し、すこし眉根を寄せる。その形状は円柱状になっており、深さは30mほど。

電極を利用してミサカネットワークから電気信号を受信することにより能力使用を可能とする自分にとってはあまり好ましくない条件だ。

（30mなら電極の方は大丈夫だろうが、チャフでも使われりゃあ厄介だな。多少の武装は必要か……。）

絶対領域クリアランスは嘆息しながら、ノートPCの電源を落とし、そのまま部屋を出て出口へと向かう。

(田沼の時の装備をそのまま使えば問題はねえな)

邪悪な笑みを浮かべながら、絶対領域クリアランスは『アイテム』の隠れ家を出た。

\*

絶対領域クリアランスが『アイテム』の隠れ家を出たのとほぼ同じ時、第十九学区に存在するとある地下施設に、その男は居た。

巨大なディスプレイに映されたテキストを、椅子に座りながら確認しているようだ。

何の変哲もないスーツを着ており、短い金髪をオールバックにしている。その瞳は青いことから、日本人ではないだろう。身長は高く、スーツの上からでも鍛え上げられた肉体が主張されている。

その男の名は『ラスカー・ハンコック』

絶対領域クリアランスを襲ったH S A S S 3「ステルスアーミー」の操縦者の上司であり、絶対領域クリアランスの古い知り合いだ。とはいっても、いい知り合いとは呼びがたい。

学園都市の研究者かつ暗部の人間。

ラスカーを一言で表すとすればまさにその言葉がしっくりくる。

研究の専門は軍事関係であり、その中でも特に駆動鎧パワードスーツの開発、製造に関しては天才的な才能を持つ。

「ラスカー所長。地上部隊の配置が整いました。」

黒いスーツの背中に、軍服らしき服に身を包んだ男が堂々と報告する。どこかの軍隊を思わせるような雰囲気醸し出している。

その男の声を聞いても、ラスカーの表情は変わらず、振り向くことすらしない。

「そうか」

機械のような無機質で低い声が響く。

「ならば後は待つだけだ。地上部隊とは2分ごとに定期連絡をとるよう指示をだせ」

「御言葉ですが所長」

ラスカーの命令にはまともに取り合わず、軍服の男が意見するよ  
うに言葉を発する。その声に、ラスカーはゆっくりと男の方へ、無  
表情なまま振り向いた。

この男はなにも分かっている。ラスカーがどういう人間である  
かを。

「……言ってみる」

ハイ、と軍服の男は勢いよく答えながら言葉を発する。

「今回の標的ターゲットですが、奴は現在弱体化しています。『あんな物』」

を奴のためだけに製造するのは如何かと……。奴が五億もかけるほどの価値のある者とは思えません。今からでも、『アレ』を使用しないことを前提とした作戦に立て直すべきでは？」

ラスカーは軍服の男から目を離さずにスーツに片腕を入れるが、男はそんな事など気にもせず、相変わらず堂々と発言していく。

「例えばH S A S S 3「ステルスアーミー」を上手く活用すれば、不意打ちも可能ですし、他にも対能力者機能を持つ特殊な駆動パワード鎧スーツも用意してあります。それを

「お前の言い分は分かった」

光栄です、と軍服の男は優越感のようなものを感じながらそれを表情に浮かばせたいたが、次の瞬間にその顔が驚愕に染められた。

その理由は至って単純。

ラスカーが懐から大口径の拳銃を取り出して、軍服の男に向けていたからだ。

「し、所長、なにをッ!？」

「解任クビだ」

ダン、と重苦しい銃声が響くと同時に、軍服の男が倒れた。倒れた男を見下して、ラスカーは懐に拳銃をしまつて、その死体に背を向ける形で再びディスプレイへと視線を向ける。

数秒後、銃声を聞きつけたのであろう装甲服の男が、慌てた様子で扉を開いた。そして、目の前の死体を目にして愕然とした。

「所長……。こ、これは一体？」

装甲服の男の質問に、ラスカーは背を向けながら答えた。

「そいつは裏切り者だった。死体を処分しておけ」

全くの虚言だが、装甲服の男はそれを信じたらしく、仲間を何人か呼んで死体を運ぶ。

何人かの装甲服の男が死体を持ちだし、扉を閉める。ラスカーのいた室内には、不気味な血痕だけが残った。

（準備は万端。慢心もない）

そんな中。ラスカーは何事もなかったかのように思考する。彼にとっては、部下は銃と同じような存在。自分の思い通りに操れなければ、それを処分して新しいモノを手に入れる。命を命とは思っていないのだから、部下の命を絶つことにはなんの躊躇もない。

（俺が貴様に負ける理由など存在しないぞ、『クリアランス絶対領域』）

ラスカーは学園都市でも最高峰のスペックを持つ、あの超能力者レベル5の少年を思い浮かべる。たった一人で一国の軍隊とまともに正面衝突チカラできる程の能力を持つ少年を。

#### 4 - 6 迎撃準備（後書き）

まずはここまで足を運んでくださった皆さん、ありがとうございます！

とうとうラスカーの登場です。前章に登場した翼の少年に引き続き、なかなか手強いキャラに仕上げました。

原作で言う、木原数多ポジションなのですが、キャラと立場は結構違います。詳細は後ほど明らかになってきます。

今回は地味回でしたね（汗）

次回は結構進展させるか、または戦闘シーンの予定です。

お楽しみに

4 - 7 地下施設（前書き）

「能力以外にも取り柄あったのね」  
『アイテム』のリーダー 麦野沈利<sup>むきのしずり</sup>

## 4 - 7 地下施設

10月3日 PM5時56分

第十九学区には蒸気機関研究所と呼ばれる施設が存在する。蒸気の圧力を効率的にエネルギーに変換するために必要な技術に着目しているという名目のもと、なんらかの研究を行っているらしい。

しかし、所詮それは表向きの情報。実際にその地下に広がるのは、<sup>パワードスーツ</sup>駆動鎧を始めとした学園都市の最新鋭兵器の製造に着目するラスカー・ハンコックという男の拠点である。

(ここが入口か……)

<sup>クリアランス</sup>絶対領域はそこに居た。大きな黒いスポーツバッグを左肩にかけ、蒸気機関研究所のメインゲートを目の前にしている。蒸気研究所には、施設をグルリと囲む外壁に巨大なゲートがたった一つだけ存在する。本来はゲート付近には警備員の一人や二人くらいは居るはずなのだが、どういう訳か、ゲート付近には絶対領域<sup>クリアランス</sup>以外の人影は存在しない。

これが意味すること。それは、

(明らかに誘われてるな)

ラスカーには何か勝算があるということなのだろうが、それについては今考えてもしょうがない。

今考えるべき問題は他にある。絶対領域は無表情のまま思考していく。<sup>クリアランス</sup>

(この施設まで来るのになんの邪魔もなかったことは、ラスカー

「はおそらくこの施設に兵力を集中させてる。何体ぐらいかは駆動  
鎧スィーツがゲートの先に居てもおかしくはねえか」

おもしれえ、と絶対領域クリアランスは笑みを浮かべながら、黒いスポーツバ  
ッグを地面に下ろした。その中には大量の銃器が入っているのだが、  
駆動鎧スィーツとの戦闘の役には立たないだろう。元々、施設内に潜入した  
際に相手が人の場合のみ使用する予定だったのだから、戦闘中に敵  
の攻撃がバッグに当たって中身に引火などという情けなさすぎる展  
開は避けたい。

そして、首元の電極の方へと指を伸ばす。

「さあて、ゴミ掃除の時間だ」

狂気に支配された笑みを浮かべ、絶対領域クリアランスは目の前のゲートに右  
腕で触れて穴を開ける。特に音もなく空けられた穴の向こうには、  
予想通り、人ではないシルエットが覗える。駆動鎧スィーツだ。その数は四  
体ほどだろうか？

周囲を警戒していたのか。駆動鎧スィーツの操縦者達の対応は迅速だった。  
四体の駆動鎧スィーツは絶対領域クリアランスがゲートの穴を通ると同時に、対装甲フル  
オートライフルクリアランスの銃口を絶対領域クリアランスに向ける。

直後、絶対領域クリアランスに向かって駆動鎧スィーツは対装甲フルオートライフルを  
掃射した。

しかし、その銃撃は絶対領域クリアランスに傷一つ負わせることすらできない。

「お前らさあ……」

絶対領域クリアランスが呆れたように呟くその声に、駆動鎧スィーツの操縦者達は反応  
もせずに撃ち続ける。逃げた所でラスカーに処分されるのだろうか  
ら、彼らに残された道は引き金を引き続けるぐらいのことだろう。  
そして、その銃撃は確かに標的に命中している。

それを見て、パワードスーツ駆動鎧の操縦者達の中で徐々に焦燥と後悔が膨らみ始めた。

「誰相手にしてつか分かってんのか？」

『ッ！！』

たった一言の少年の呟きが、彼らには死刑宣告に聞こえた。決して逃れられない最後を感じているのが分かる。

ゾワリと、冷たいものが彼らの背筋を駆け抜けていく。

直後、四筋の中間子の束が、四体のパワードスーツ駆動鎧を貫いた。

崩れ落ち、地面に転がる四体のパワードスーツ駆動鎧を見下して、クリアランス絶対領域はうつすらと笑う。

「次はテメエの番だぜ、ラスカー」

\*

「2分前、地上部隊との交信が途絶えました。全員やられたと思われませう。」

軍服を着た威厳のある男が、地下施設のワンフロアに響く。広さも高さもそれほどではないフロアだ。そこには様々な電子機器やキーボード、巨大なディスプレイが並んでいる。オペレータールームと呼ばれるフロアで、基本的にはここから状況の確認や隊員へ指示がとばされる。その他、エレベーターや隔壁の開閉の操作もここで

行っただ。その為、今このフロアには、軍服の男以外にも、5人ほどオペレーターが存在する。

そこに、ラスカーは居た。軍服の男の声を聞いて、ラスカーは特に表情を変えることなく言った。

「そうか。それでは標的ターゲットはもうここに入り込んでいるのだろう」

「今のところ施設内では特に

「所長ッ！！」

男が言いかけた時だった。突如、オペレーターの一人が焦りを滲ませて叫ぶように言葉を発する。その場に居る全員が声の持ち主に視線を向ける。

「メインエントランスで警備隊の発砲を確認しました。監視カメラでは確認できていませんが、おそらくは標的ターゲットの影響かと思われる」

連絡すらできないほどの交戦状況ということか、とラスカーは推測する。微かに怒りを感じつつ、彼はいつもどおりの無表情のまま思考する。

（奴が俺の元に来るのも時間の問題という訳か）

残念ながら、ラスカーの部下たちでは、まともに戦えば侵入者に傷一つ付けることなく全滅するだろう。あの少年は自分以外では相手にすることすら難しい。

ラスカーしばらく考えた後、淡々と機械のような無機質な低い声で言った。

「隔壁を全て閉鎖して、エレベーターもロックダウン。各員に持ち場を離れないように指示しろ。いずれここまで来るぞ」

ラスカーの指示を聞き、その場に居る男達は迅速にキーボードを叩きだす。

それを見て、ラスカーは続ける。

「生意気な鼻を叩き折ってやれ」

あくまでも無表情なまま、ラスカーは淡々と告げて、オペレータールームを後にした。

\*

メインエントランスと呼ばれるそのフロアで、絶対領域は装甲車の陰に隠れていた。オペレータールームとは違い、かなりの広さを持つそのフロアには、たくさんの数の装甲車が並べられている。

(数はざっと10〜15つとところか……)

絶対領域はチラリと装甲車の陰から、顔を出した。その視線の先には、猟犬部隊のような装備をした、黒ずくめがこちらに向かってアサルトライフルの銃口を向けている様子が映っている。警戒してこちらに近づかないのか、それ以外に意味があるのかは分からない。それを確認して、絶対領域は顔を引っ込めると共に、小さく息を吐きだす。

（一々中間子で貫くのも面倒だ。持つてきといて正解だったな）

ふと、絶対領域クリアランスは足元に置かれているスポーツバッグに目を向けた。

絶対領域はそのファスナーを開けてその中身を取り出す。いくつクリアランスかの黒いパーツが3個程地面に並べられた。それを素早く絶対領域は組み立てていく。

パーツを全て組み立てると、そこには1・2m程のリボルビング・グレネードランチャーが姿を現した。

『ダネルMGL』という外の技術の兵器を元に学園都市で作られた、『HS-MGL』と呼ばれるものだ。スプリングの力で回転するリボルバー式の弾倉に、18発ものグレネードを装填できる連発式のグレネードランチャー。反動をガス圧を利用して極限まで抑えであるらしい。

絶対領域は電極に触れると同時に、すぐに装甲車から身を出した。HS-MGLを両手で手にしながら。

それを見て、黒づくめの連中はギョツとする。

「吹っ飛んでろ」

絶対領域は呟くと同時に引き金を引いた。クリアランスポントッ！、という小気味いい音が響いた。

それから一秒もたたないうちに、黒づくめ達を飲み込む爆音が響いた。

使用した能力使用モードはたったの3秒。

\*

『そろそろか……』

ラスカーは一人、呟いた。真つ白な部屋だ。ラスカー以外には何もない、広さは四方20m程の立方体の部屋。なにに使用する部屋なのかはまったく見当もつかない。

『「コレ」が俺に勝利を与える』

ラスカーはふと自分の手を見つめる。否、その言葉は正確ではない。正確には、ラスカーを包む機械の腕。すなわち、パワードスーツ駆動鎧だ。全体的なシルエットは、既存のモデルに比べてかなりスリムに見えた。全身のほとんどが黒で染められている。

手を開け閉めして、パワードスーツ駆動鎧の調子確かめるようにしていたその時、

バゴオオツ！！ という轟音と共に、その部屋の唯一の入り口であるシャッターが吹き飛んだ。

ラスカーはそちらに目を向けて、微笑を浮かべる。

『来たか……』

その視線の先には一人の少年がいた。鮮やかな茶髪。黒いモッズコート。そして、銃口から煙を吹いているリボルビング・グレネードランチャーを肩に抱えるその少年。クリアランス絶対領域と呼ばれる少年だ。

「久しぶりだなあ、ラスカー」

静かな口調とは裏腹に、とてつもない殺意が部屋を包んでいく。

#### 4 - 7 地下施設（後書き）

まずは閲覧してくださった皆様、ありがとうございます！

今回出てきた『リボルビング・グレネードランチャー』の容姿はターミネーター2に出てきたもの『マンビルガン』を元に想像しています。

容姿のイメージがつきにくい時は、お手数ですが、『m g i 1 4 0』とインターネットで検索していただければ画像が出てくると思いますので、確認していただければ嬉しいです^^

学園都市は対隔壁用ショットガンやガトリングレールガンを始めた、派手な重火器が出てくるので、僕としても派手なイメージのモノを出したいなと思ひまして。

絶対領域はかなり用心深い性格です。能力に穴もあり、制限時間さえついてしまった状態だと、自然と銃器類に頼ることも多くなってきましたね（汗）

かつては能力へのプライドはかなりのものでしたが、上条さんに負けてからはそれほど能力には拘りません。便利な武器ぐらいの認識です（笑）

次回はいよいよラスカーとの対峙です。

お楽しみに

#### 4 - 8 対峙（前書き）

「私の出番少くない？」  
クリアランス  
絶対領域の協力者 花宮 はなみや 愛花 あいか

「俺に言っなよ」

『アイテム』の構成員 クリアランス  
絶対領域

「……………」  
サードシーズン  
第三次製造計画の成功作 プロトワースト  
初期番外

ラスカー・ハンコックと絶対領域クリアランスには接点が存在した。

絶対領域が青鳥に任命される前に所属していた組織の構成員の一人がラスカー・ハンコックだ。

駆動鎧ワードスーツを利用して、任務のサポートを行っていた人物。

そして今は、軍事関係の研究者として活動している。

「久しぶりだなあ、ラスカー」

絶対領域視線の先にある黒い駆動鎧ワードスーツを睨みつける。駆動鎧ワードスーツに覆われている為、その顔は確認できないが、これまでの装備の違いから目の前の駆動鎧ワードスーツがラスカーであることは分かる。

『そうだな。こちらとしてはお前の顔など二度と目にしたくなかったのだが、こればかりはどうしようもない』

ラスカーは学園都市でも最高峰の存在を目の前にしても、どこか余裕を含ませながら続けていく。

『ビジネス、だからな』

「ああ？」

絶対領域クリアランスは怪訝そうにラスカーを見つめた。

『ビジネスだよ、絶対領域クリアランス。しかるべき報酬の為に、仕事を請け負って実行する。どう言う訳か、お前を少々痛みつけるように言われていてな。依頼人が言うには、お前の脳さえ生きていれば問題は

ないそうだ』

「……」

ラスカーは少しの動作も見せず淡々と語る。

おそらくここで、依頼者は誰だ、と聞いても無駄骨だろう。それについては触れないでおく。

クリアランス 絶対領域はラスカーを馬鹿にしたような笑みを浮かべ、

「強気だなあ、ラスカー。組織に居たころは、俺とろくに目も合わせられなかったチキン野郎が」

『……やはりお前を見ていると腹立たしくなるな』

わずかにラスカーの声のトーンが低くなる。

二人の間に数秒の沈黙が続く。

元々、彼らは決して気の長い方ではない。

人を傷つけることには、なんの抵抗も持たない。

故に、彼らが会話を続けていくこと自体、あり得ないのだ。相手が自分の毛嫌いする人間であるならば。

クリアランス 絶対領域が引き裂かれたような笑みを浮かべ、HS・MGLを手にしていない方の手で、首筋の電極に触れる。

ラスカーはそれを見て、パワードスーツ 駆動鎧に包まれた手をゆっくりと閉じていく。

「来いよ、クソ野郎。お前にそんな勇気があるならな」

『ほざいてるガキが』

刹那、ラスカーの駆動鎧が地面を軽く蹴った。

それだけで、10m以上あつた絶対領域との間合いを詰めて、絶対領域を潰すために右腕を振りかぶる。

それを絶対領域は冷めた目で見ていた。コイツは馬鹿か、と。

絶対領域の対消滅演算に、質量のある物質で干渉できるはずがない。質量のある物質が触れた所で、ただそれは消し飛ぶだけ。

ラスカーの駆動鎧に包まれた右腕もそれは変わらない。

はずだった。

にも関わらず、ラスカーの拳は、絶対領域の鳩尾を確実に捕えていた。

「が、あッ!?!」

体がくの字に折れ曲がる。おそらくラスカーの駆動鎧は機動性を重視して、一撃の破壊力はかなり抑えるように作られている。そうしなければ、絶対領域の体など一撃で原形を失くしてしまうほどグチャグチャになってしまつていただろう。

とは言つても、鉄の拳の一撃は、絶対領域に許容できる範囲のダメージを超えている。肺にたまつた酸素が全て吐き出された。

更に、ラスカーは右腕を引き戻して、回し蹴りを絶対領域に叩きこむ。

「あッ」

悲鳴というより、肺に残つた僅かな酸素を吐き出したような間抜けな声を出す。

痛みが電気信号となつて脳に伝わる。

それと同時に、ラスカーの回し蹴りを脇腹にくらった絶対領域クリアランスの華奢な体は真横に吹き飛ばされた。

壁に体を叩きつけられ、そのまま地面に力なく倒れこむ。

(な、にが……?)

『その程度だ。お前は』

今起きた現象を頭で処理できない絶対領域クリアランスの鼓膜を、ラスカーの声が揺さぶる。

絶対領域は偶然離さずに掴んでおいたHS-MGLを杖のようにして立ち上がり、ラスカーに視線を向けた。駆動鎧パワードスーツに遮られ、その表情は見えないが、自分を馬鹿にしておりことが雰囲気に分かる。

「クソ、野郎が……調子こいてんじゃねえぞオオオオツ!!」

絶対領域クリアランスは叫ぶと同時に、中間子の束でラスカーを貫くために演算をはじめていった。

彼の能力の応用の一つ、中間子の束の放出。彼の掌に中間子が集められていく。

殺してやる、と絶対領域クリアランスは殺意を増長させる。  
しかし、

『調子に乗っているのはお前だろう?』

突如、何の前触れもなく、自分の制御していた中間子の塊が、四方八方へと拡散していく。

「ッ!?!」

あの黒い翼の少年を撃退した際にも使った、自身の最大のチカラだと思っていたそれが、あっけなく無効化されていく。心当たりがある。かつて自分が初めて敗北した相手。自分の能力を右腕の掌だけでいとも簡単に無効化させて、自分に何度もダメージを与え続けたあの少年。

まさか、

「テ、メエ……自分の体に、超能力の……」

『馬鹿が』

ラスカーはあっさりと絶対領域クリアランスの推測を否定する。ならばどうやって自分に干渉している？

思考する中、距離を全く詰めずにラスカーはさらに言葉を続けていく。

『そうやって自分の理解する範囲のことしか推測できないお前が哀れでしょうがないな。答えは簡単だ、絶対領域クリアランス。』木原数多『が使っていた戦法と同じだよ』

「な、にを？」

絶対領域クリアランスの目が見開かれた。その名を絶対領域クリアランスは知っている。

あの一步通行アクセラレータを圧倒した男の名前。自身の得意分野を極めることにより、圧倒的な力の差を覆した男の名だ。

『お前の絶対領域は本来、『ただ、物質の属性を真逆にするために電荷などを組み替える』だけの能力だ。物質に干渉するといういみでは第二位と近いところがあるか。ただ物質を反物質にするだけの計算式ならともかく、その先の間子、光子の操作となると話は

別だろっ』

ラスカーは得意げに言葉を紡いでいく。

『ただ組み替えるだけの『対消滅』に比べて、『制御』はかなり複雑な計算式を必要とする。記述が多ければ多いほど、介入する隙も生じてくる。『音波』などを利用すれば、お前の中間子も光子も無効化できるんだよ。生憎、この部屋にはそういう仕掛けが施されているという訳だ』

つまり、そういうことか。この『部屋すべて』がラスカーの持つ兵器となっている。おそらくは人間の聴覚では捕えられないほどの超音波が流れているのだろっ。それだけのことで、彼の能力のほとんどが封じられてしまった訳だ。

しかし、疑問はまだ残る。ただ『音波』を流すためだけの為に、この部屋をわざわざ製造するだろっか？

ラスカーの技術者としての腕を持ってすれば、もう少し小型化することも可能なはずだ。

それならば、この部屋にはまだ役割があるということになる。疑問を感じながら、絶対領域クリアランスはラスカーを睨みつけていると、ラスカーが、気づいたか、と絶対領域クリアランスを称賛するような声を上げた。

『たしかにお前の計算式の妨害の為だけならば、もっと使い勝手のいい装置を使っていただろっな。だが、この部屋はそのためだけのものではない。この部屋では『ただ組み替える』ことすら許さない』

ラスカーはさらに続けた。

『単純な計算式にすら介入、妨害できるのがこの部屋だ。絶対領クリアランス

域。知覚することの妨害だよ。『知覚』というのは外界からの刺激を感じ取り、意味づけすることだ。つまり、外界からの刺激にちよつと手を加えてやれば、お前の『知覚』に『錯覚』を起こすことも可能だ。お前の『対消滅演算』は対象となる物質を正確に読み取ることから始まっている。そこを乱してしまえば、お前はもう何もできない』

ラスカーの無機質な声が、白い部屋に響いた。

#### 4 - 8 対峙（後書き）

まずはここまで足を運んでくださった皆さん、ありがとうございます！

ラスカーたの対決ですが、少し設定が強引だったかなと思います（汗  
この部屋までラスカーが誘い込んだわけです。  
黒い駆動鎧にも色々パワードスーツと機能はありますが、だすかださないか迷っ  
てます。

ラスカーが若干怒りを感じた場面では、少し口調も変わりました。  
木原ポジだけあって、キレることもあるかもしれません。

次回もお楽しみに

## 重要なお知らせです

いつも、閲覧してくださっている読者の皆様方。  
ありがとうございます。

タイトルの通り、重大なお知らせがあるんです。

実は、来週の火曜日。つまり7月5日まで更新ができそうにありません。

その理由としては、少しリアルが多忙になってしまいそうで……

本当に申し訳ありません。こちらの都合なのですが、7月5日からはまた、これまで通りの更新速度で頑張らせていただきますので、どうかお許しく下さい。> m (——) m <

次回はいよいよラスカーの策が露わになっていきます。  
黒い駆動鎧がキーになってくる予定です。

それでは、次回も閲覧していただければ幸いです。

4 - 9 突破口（前書き）

「話したいなら素直に言えば？」  
クリアランス  
絶対領域の協力者 花宮 愛花

「ッ!?!」

サードシーズン  
第三次製造計画の成功作  
プロトウースト  
初期番外

## 4 - 9 突破口

「それにしても、圧倒するというのはいいものだな。この優越感がたまらない」

ラスカーの声が耳に残る。

人間というものは絶望的な結果が訪れると、どうしてもそればかりを気にしてしまうものだろう。それは仕方のないものだ。絶対領域<sup>レベル5</sup>とて超能力者とは言っても所詮はただの少年だ。深層心理をねじ伏せるのはいくら暗部の人間であったとしても難しいだろう。

しかし、

絶対領域<sup>クリアランス</sup>がラスカーの言葉を耳に残しているのは深層心理などではなかった。その理由は、絶望でも恐怖でもなく、一つの疑問だ。

ラスカーの言葉が全て真実だと仮定する。そうであるならば、絶対領域<sup>クリアランス</sup>に残された手は、手持ちの銃器で部屋を破壊することぐらいだろう。まさに、絶望的だ。

もし、その絶望的な状況が、自分の置かれている状況だとするならば、矛盾が生じてくる現象がある。故に、絶対領域<sup>クリアランス</sup>は思考する。

(この部屋だけで俺を完全に封じられるなら、なんで奴はこんな駆動鎧<sup>パワードスーツ</sup>を使っただ?)

この部屋だけで絶対領域<sup>クリアランス</sup>を完全に制圧できるのならば、普通の駆動鎧<sup>パワードスーツ</sup>でも問題はないだろう。

目の前の駆動鎧<sup>パワードスーツ</sup>が傷つけずに自分を捕らえる機能に特化しているという可能性もある。しかし、もしそんな機能があるのならば、それを迅速に使えばいい。

目の前の駆動鎧<sup>パワードスーツ</sup>には何かそれ以外の機能があるとみて間違いない。普通の駆動鎧<sup>パワードスーツ</sup>では代わりが務まらないような何か。

そう仮定すれば、ラスカーのいくつかの不自然な行動の説明が  
く。

今もラスカーはこちらの様子を窺がっているようだが、『絶対領  
域』を封じているというのに、何を警戒しているのだろうか？  
さらに、

（奴はさつきからやけに「部屋」つつうのを強調してきやがる。  
まるで俺に「部屋だけを意識させる」ようにな）

クリアランス 絶対領域の思考は止まらない。不自然すぎる行動が、ある推測を  
確信に近づけていく。不自然な行動は何かを隠しているからだ。つ  
まり、

（奴の言葉には嘘がある）

思考がそこまで至り、クリアランス 絶対領域は、ハッ、と笑った。

『なにがおかしい？』

クリアランス 絶対領域の様子を見てラスカーが問いかける。その声に僅かな焦  
りが滲んでいるのを絶対領域は見逃さない。

「お前は言ったよなア。この「部屋だけで俺の能力を封じてる」、  
だと？ ハハッ、ホラ吹き野郎が」

『……………』

ラスカーは何も答えない。  
クリアランス それに構わず、絶対領域は続ける。

「お前が言う通りこの「部屋」には俺の能力に制限を付ける機能が付いてやがるんだろつよ。おそらくここじゃ複雑な計算式を必要とする中間子も光子も操作は不可能なんだろうな。だがなあ……、俺の能力を全て制圧してるのはこの「部屋」なんかじゃねえだろうが」

『……気づいたか』

ラスカーの声から先ほどまでの余裕が消えている。それが、絶対領域クリアラの言葉を肯定している証拠だ。

ならば、『絶対領域』を真に封じているのは、『部屋』以外に今ここに存在する物は、一つしかない。

「その駆動鎧パワードスーツがお前の切り札なんだろう？」

絶対領域クリアラの声がラスカーに突き刺さっていく。にも関わらず、ラスカーは小さく笑い、誇るように手をいっぱいに広げた。

『正解だ、絶対領域クリアラ。中間子を始めた複雑な計算式を封じているのは間違いなく「この部屋」だが、お前の「対消滅」を封じているのはこの駆動鎧パワードスーツ。正式名称は「HS-PP」ピンポイント」「だよ。この「部屋」はただの巨大な「音波装置」だ。あくまで複雑な計算式にしか介入は不可能。対消滅の単純な計算式に介入する力なんてありはしない』

やはりそうか、と絶対領域クリアラは目の前の駆動鎧パワードスーツ、HS-PP「ピンポイント」を睨みつける。

そう。ラスカーがわざわざ真実をご丁寧ご丁寧に話す必要はなかった。一つ一つの言葉さえ、人間の心の隙を作る武器として扱っていた訳だ。

『この「ピンポイント」には本来の駆動鎧パワードスーツにあるはずの『マインドサポート』等の機能は無い。そんなものを付けた所で、俺がお前に勝てるはずはない。ならば、別の機能を付け加えるのは当然だろ』  
『う』

ラスカーは今度こそ、真実を語っていく。

『さっき言っただろう、絶対領域クリアランス。お前の対消滅は「知覚」することから始まる。「錯覚」を起こさせてしまえば対消滅は不可能になってくるわけだ。人間の脳ってやつは、コンピュータと同じで、ある条件が整ってしまえばエラーを起こしてしまう。トリックアートの錯視なんかがいい例だな。それを利用したのだ。駆動鎧パワードスーツが持つ最大の特性を活かしてな』

「特性、だと？」

駆動鎧パワードスーツの持つ驚異的な特性。それは何も、筋力の補強や、装甲の強靭な強度、高度な機動性だけではない。そのモデルの多様さ。そして、その最大の特徴。本来、足りないはずの知識や技術を駆動鎧パワードスーツそのもので補強する機能。人間と機械を繋げる仕組み。それを、絶対領域クリアランスは知っている。

(ま、さか……)

絶対領域クリアランスの喉が干上がる。

『マインドサポートの応用だよ』

ラスカーはあっさりとそう告げた。絶対領域クリアランスの目が見開かれる。

マインドサポート。電気的な信号などを利用したその技術。使用者の思考や五感を修正することも可能だ。

例を出すとすれば、普通の人間では操れないような、時速1000kmで動く二輪車があったとしよう。そんな速度をもつてして運転など不可能に近い。人間の運動神経では運転を可能にするには圧倒的に不足しているし、心理面でもパニックを起こすに決まっている。しかし、それを機械の補助で可能にする技術。それが、マインドサポートだ。心理面のケア、知識の補強、動作のガイド。勝手に体が動き、頭に知識が流れ込んでくるとというのが使用者の感覚だろうか？

目を見開く絶対領域クリアランスを見て、ラスカーは更に言葉を紡いでいく。

『電気的な信号等を利用して、機械と人間を繋げる。本来それは、使用者である俺に向けられた機能だが。仮に、だ。絶対領域クリアランス。その「機械と人間を繋げる機能」をお前に向けたらどうなると思う？』

「ッ!？」

あり得ないことだ。確かに、人間と機械を繋げる機能を強制的に対象に押し付けることが可能ならば、絶対領域クリアランスの能力に支障が出てもおかしくはない。

しかし、人間と機械を繋げる機能を発動させるには、最低でも接触が必要なはず。今のところ、絶対領域クリアランスとピンポイントの接触は、打撃を受けた際に一瞬あっただけ。それだけで繋げる機能を発動させるのは不可能だ。

『スタンガンと同じだよ。一瞬の接触で電流をほんの一瞬で対象へと流す』

「そんな、こと、できるはずが……」

『普通のマインドサポートは確かに不可能。しかし、先ほど言ったろう？』

ラスカーはそこでため息をついた。

『お前の知覚演算は、外界からのちょっとした刺激の変化で妨害できる、と。このH S - P P「ピンポイント」の拳はお前に触れると同時に、特殊な電気信号をお前に流すんだよ。その電気信号はお前の知覚から得た認識を誤った情報へと変える。すなわち、錯覚の誘発だ』

絶対領域クリアランスという能力と、彼の脳波等を全て知っているからこそできることだ。いや、仮にそれらを知り尽くしていても、それだけの技術を再現できる者は、この世にそう多くはいない。

ラスカーの能力を極めた過程が、絶対領域クリアランスを圧倒するという結果を生みだす。

絶対領域クリアランスは俯き、地面を見た。前髪が絶対領域クリアランスの目を隠し、ラスカーからはその表情が窺えなくなる。

(諦めたのか?)

ラスカーは絶対領域クリアランスの行動をそう捕えた。この絶望的な状況では無理もないかもしれない。

数秒後、絶対領域クリアランスが顔を上げた。その顔に浮かぶものは、

まぎれもない、笑みだった。

(……なんだと?)

ラスカーの思考とは異なる結果。諦めたような笑みでもない。むしろ、ラスカーを馬鹿にするような笑みだ。

「なるほどなあ、必死に考えたもんだあ、ラスカー」

余裕を滲ませた声。それはラスカーの感情を上書きした。

余裕から怒り、そして驚愕、焦りへと。

(このガキ、ピンポイントの弱点に気づいたな)

対絶対領域用のHS-PP「ピンポイント」。特殊電気信号を対象へと流す機能。その弊害。それこそが、ラスカー最大の弱点となる。

「だが、完璧じゃねえなラスカー。今だに俺を警戒して、距離を詰めてこねえのが証拠だろうが」

そう、ラスカーは先ほどから、言葉を発するだけで絶対領域クリアランスに近づかない。

それが、ラスカーにとっての裏目になった。

絶対領域はラスカーが拳を強く握り、震わせているのが分かった。

おそらくは、怒りを滲ませている。

それに構わず、絶対領域は続けていく。

「そのピンポイントとやらの装甲。そこまで自信がねえんだろ？」

『コイツ』でもダメージを与えられるくらいにな」

『テメエ……………』

ラスカーの口調が怒りに支配される。彼の瞳には、自分に『HS

- MGL』の銃口を向けた、クリアランス絶対領域の姿が映っていた。

#### 4 - 9 突破口（後書き）

まずはここまで足を運んでくださった皆さん、ありがとうございました！

駆動鎧の説明は少し分かりにくかったと思います（汗

とりあえず、絶対領域を殴れる駆動鎧と理解していただければ問題ありません。

多少強引ですね、すみません（汗

学園都市のトンデモ技術ということでお許しを > m ( ) ( m <

中間子や光子は白い部屋で、対消滅の防御は駆動鎧で対処って感じ  
です。最低でも、中間子と光子の利用は封じてやるぜという思考で  
す。

次回はいよいよ決着です。装甲の薄い理由なども明らかになります。  
お楽しみに

4 - 10 引き金(前書き)

「ついに本性だしやがったな……」  
『アイテム』の構成員 絶対領域 クリアランス

## 4 - 10 引き金

もう一度言うが、ラスカー・ハンコックと絶対領域クリアランスには接点があった。

その接点を始めとして、ラスカーは絶対領域クリアランスという人間を完全に知り尽くしていると、そう思っていた。

彼の知る限り、絶対領域クリアランスという人間は暗部に所属したての頃を除いて、自分の能力チカラを過信している節がある。よって、拳銃程度の武装はあったとしても、あくまで能力チカラに頼るその心情は変わらないと確信していた。しかし、それは間違いだった。

（まさか、これほどの重火器を携行しているとは……。完全に予想外ギユラーだった）

最初に絶対領域クリアランスがこの部屋に入ってきたのを目にした時、内心ラスカーは焦りを感じていた。正確には、肩に乗せられたその武器を『HS - MGL』を目にした時に、40×46mmの榴弾をくらつても、一応ラスカーの『ピンポイント』は耐えることだけなら出来るだろう。しかし、特殊電気信号の機能はなんらかの不備が出てきてしまうかもしれない。

しかし、ラスカーは怒りを一瞬滲ませた後、すぐに心を落ち着かせ、絶対領域クリアランスに向けて言葉を発した。

『確かに40×46mmの榴弾ならば、俺の「ピンポイント」にダメージは与えられるだろう。だが』

そこでラスカーは少し間を開けた。再び余裕が戻ってきたのが霧囲気で分かる。

『お前、それをこの「ピンポイント」に当てられるとも思っているのか?』

「……」

確かに「HS-PP「ピンポイント」」は絶対領域を封じる機能がメインな為、戦闘能力はいささか既存のモデルよりも劣る、しかし、あくまでも「ピンポイント」も駆動鎧バウドスライツの一つ。その機動性は人間を遙に上回るスペックを叩きだす。

グレネードランチャーのような初速の遅い銃器では回避される可能性は低くはない。

それでも、絶対領域クリアランスはラスカーに向けた銃口を下げることなく、微笑を浮かべて告げた。

「どうせ出来なきや死ぬだけだ。試してみんのも悪くねえ」

直後、ポンツ!という小気味良い音が響いた。

『HS-MGL』のリボルバーが回り、銃口から缶コーヒー程の大きさの物体が発射される。ラスカーに向かつて。

『ツ!~!』

ラスカーは慌てて、半身になるような形で最低限の回避行動に移る。発射されたグレネードはラスカー胸部の数センチ横を通り抜け、そのまま白い壁へと着弾し、爆ぜる。

ドゴオツ!!という爆音が空気を揺らし、絶対領域クリアランスの鼓膜を揺さぶるが、絶対領域クリアランスはそれを全く気にしせず、さらに引き金を引く。

再び、ラスカーに向けてグレネードが発射された。それをラスカーは、前に出ながら、半身になって回避する。最低限の回避行動で、極力隙を少なくしつつ、絶対領域クリアランスに向かう。たがいの距離は15m

程。

(もらった)

と、ラスカーが歓喜を僅かに滲ませた瞬間、絶対領域クリアランスはまたもやラスカーの方に銃口を向け、その銃口を僅かに下げる。

ちょうど、ラスカーの5m程手前にグレネードが着弾する形で。

(このガキ、俺の行動を先読みして!?)

ラスカーは慌てて、絶対領域クリアランスに向かっていた足を止め、後方へと飛び退く。「ピンポイント」の膝の関節が、ミシミシと嫌な音を立てるが気にしている場合ではない。

絶対領域は引き金を引き、すでにグレネードは発射されている。

地面に弾頭が当たると同時に、爆音が室内に響く。直撃は免れたものの、その爆風が、「ピンポイント」をモロに巻き込んだ。「ピンポイント」の体が吹き飛び、地面に背中から着地する。そのまま5m程地面を擦り、「ピンポイント」の体はようやく止まる。

(ここだッ!)

その時、すでに絶対領域クリアランスは『HS-MGL』の引き金を引いていた。リボルバーが回転し、ポンッ!という小気味良い音と共に、グレネードが発射される。

まだ体勢を立て直していないラスカーには、それを回避する手段はない。

ゴバツ!! という爆音が空気を叩いた。凄まじい衝撃波が走り、音が鼓膜を殴りつける。

(クソ野郎が。思ったより手間取っちゃったな)

終わった。あの一撃は、確実に「ピンポイント」の機能にダメージを与えただろう。安堵感から、絶対領域クリアランスは構えていた『H S - M G L』を投げ捨てる。どうせ今のが最後の一発だった。

特殊電気信号を流す機能さえ潰してしまえば、はつきり言ってラスカーはそれほど脅威ではない。少なくとも対消滅は取り戻せるのなら、ラスカーに自分を傷つける方法などありはしないのだ。運動性能に不備が出ていないのであれば、多少は手こずるだろうが、それはこの部屋を出してしまえばすぐに終わる。どの道、ラスカーが逃げるにはこの部屋を出るしかない。自分の勝利は確定したのだ。

そう思考していた時だった。

粉塵が晴れ、視界が晴れる。既存の駆動鎧バワードスーツに比べて些か細いシルエット。黒で染められたそのボディ。ラスカーの「ピンポイント」そのものだ。

その姿を見て、絶対領域クリアランスは目を大きく見開いた。別に今の一撃で完全に「ピンポイント」を破壊できるとは思っていなかった。特殊な機能の中枢。おそらくは胸部や頭部など、打撃の際に使用しない部分に仕込まれているであろう機能の核となる部品に少しダメージを与えられていれば上等だと、そう考えていた為、行動不能まで持つて行けるとは思っていなかった。絶対領域クリアランスが驚愕したのはそこではない。

「ピンポイント」の中央付近の装甲には、傷一つ付いていなかった。よく見ると、左腕の装甲がグチャグチャにひしゃげている。

『……たか』

ラスカーが何かを呟いた。

次の瞬間、「ピンポイント」は膝を軽く曲げると同時に、絶対領域クリアランスへと向かう。

『この程度で俺に勝ったとでも思ったかアアああああああッ  
！！』

「ッ！！」

絶対領域クリアランスが身構えるも、そんな行為は無駄な徒労というものだ。  
ラスカーは絶対領域クリアランスを間合いに入れると、大きく拳を振りかぶる。  
ゴキ！！という鈍い音が聞こえた。「ピンポイント」の拳が、絶対クリアランス  
領域の鳩尾に食い込む。

「がッ……」

絶対領域クリアランスの華奢な体が吹き飛んだ。その背中が白い壁に叩きつけ  
られ、息が吐き出される。それに構わず、ラスカーは再び間合いを  
詰めて、二発、三発と絶対領域クリアランスに右の拳を叩きこんだ。

三発目の拳が引かれると同時に、絶対領域クリアランスの体がズルズルと力な  
く崩れ落ちる。それを見て、ラスカーは激情に囚われた口調で言葉  
を紡いでいく。

『ふざけんじゃねえよ害虫が！！　なんでこの俺がテメエみてえ  
なクズに一生モンの傷つけられなきゃなんねえんだアアッ！！』

あの時。体制を完全に崩していたラスカーのとつた行動は捨て身  
の策だった。胸部に付けられた特殊電気信号の機能の核を守るため  
に、彼は「ピンポイント」に包まれたその左腕を、迷うことなく突  
き出して被害を最小限に抑えたのだ。当然、その左腕はグチャグチャ  
ヤになっている。

『落とし前はキツチリ付けてもらっせえ、絶対領域クリアランスウ。俺にテメ  
エは殺せないけどよオ……、代わりにテメエの大事なモンは全部ぶ

っ潰してやる。ヒハ、ギャハハハハアアッ！！ざまあみるよ、  
テメエのせいで、あのクローンは死体確定だア」

真っ白な室内に、ラスカーの下劣な高笑いが響いた。

#### 4 - 10 引き金（後書き）

まずは閲覧してください。たみなさん、ありがとうございます。

ラスカーも木原ポジですから、やはりキレましたね、ハイ。  
完全な逆ギレです。

すみません。決着と言っていないながら次話に持ち越しに……（汗

次回こそ本当に決着です（焦  
お楽しみに

4 - 1 1 正しい答え(前書き)

「正しい方、か……」  
『アイテム』の構成員 クリアランス 絶対領域

#### 4 - 11 正しい答え

体を動かそうとすると、痛みというよりも重みを感じた。

ラスカーから受けたダメージは尋常ではない。体が動かない感覚。9月30日の翼の少年の一撃には及ばないものの確実に人体の急所を突かれ、息を吸っても酸素が肺に入る感覚が全くなく、息苦しい。

『ふざけんじゃねえよ害虫が！！　なんでこの俺がテメエみてえなクズに一生モンの傷つけられなきゃなんねえんだアアツ！！』

うつ伏せに倒れ伏し、ラスカーの自分を罵倒する言葉が鼓膜を揺らす。

(ちく、しょう……)

もう自分に打つ手はない。能力チカラを封じられ、武器も封じられ、体を動かすことすら出来ない。完全に詰んでしまった。

(やっぱり、俺みてえなクソ野郎は、結局こんな終わり方だったのかよ……)

絶対領域クハリアランスは薄れてゆく意識の中でボンヤリと思考する。

やっと新しい生き方を見つけたばかりだというのに。

やはり、自分のような人殺しに、そんな道を歩む資格は無いということだったのか。当然と言えば、当然だろう。今まで自分はたくさん命を奪って来た存在だ。

光の世界に憧れることすら、おこがましいというものだったのだらう。

自分に仕方がないと言いつ聞かせる。

なにも不思議なことではない。今まで奪ってきた数多の命。その罪に報いると思えば、それでいい。もう充分に、自分は『光』を味わった。

そう納得しようとした時、視界が霞み始めたその時、不意にラスカーの言葉が鼓膜を揺さぶった。

『落とし前はキツチリ付けてもらうぜえ、絶対領域ウ。俺にテメエは殺せないけどよオ……、代わりにテメエの大事なモンは全部ぶっ潰してやる。ヒハ、ギャハハハハアアッ！！ざまあみるよ、テメエのせいで、あのクローンは死体確定だア』

ぼんやりと目を開く。

なにか、許してはいけない言葉が聞こえた。

(あのクローンは死体確定、だと……?)

薄く開かれたその眼に、再び小さな光が灯る。

(落とし前に、アイツを殺す……?)

無造作に開かれた掌に、ほんの少し、力が戻ってくる。

ラスカーの言葉の意味。その結果を、想像するのは難しくない。ふと思いつ出す。つい昨日に、病室で会話した時のことを。物件についての話。噛み合っていないが、その内容は覚えている。自分とは違い、彼女にはなんの罪もない。

それを、殺す?

(あり、得ねえ)

そつだ。つい最近、自分の信念を再確認したばかりではないか。まだ終われない。彼女に牙を向ける者を全て自分が壊すことで、守ると誓った幻想がある。

(させ、ねえ)

負ける訳にはいかない。

今の自分は、かつての自分とは違う。自分以上に大切なものが、背負っているものがある。

あの少年のように誰かを守ることに憧れた。その守りたいものが、今奪われようとしている。

(分かってんだよ……)

限界だという事は分かってる。それでもあがけずにはいられない。

刹那、体をなにかが包み込んでいくような感覚と共に、絶対領域クリアランスはユラリと立ち上がった。

\*

『さてと、それじゃあ行くとするかア』

ラスカーは未だに劇場に囚われ、絶対領域クリアランスの入ってきた扉とは反対側にある出口へと足を進める。絶対領域クリアランスの方は、あとで自分の部



『潰れてるよ害虫がアツ!!』

ラスカーの間合いに絶対領域クリアランスが入った。あとは振りかぶった右の拳を、その顔面に向かって振りぬけば終わる。顔の原形を失った少年の姿を見て、死ぬまで笑い続けてやる、と。

そう考えていた時だった。

彼の眼に信じられない現象が映った。

『…は?』

呆けた声がむなしく響く。

ラスカーの放った右腕が、「ピンポイント」に包まれて、加減をしなければ並のショットガンよりも凶悪な結果を生みだすその右腕が、能力チカラを封じられたはずの、ただの少年の右手に容易く受け止められたのだ。パシッ という乾いた音と共に。

(な、にが?)

その思考を遮るように、絶対領域クリアランスがラスカーの右腕を掴んだまま、軽く押し戻すような動作をとる。それだけで、ラスカーの体は5m程吹き飛ばされた。

『ッ!?!?』

無様に背中から着地して、ラスカーは気づいた。自分の感情が殺意から驚愕へと変化している。

それを自覚した瞬間、とてつもない怒りが沸き起こってきた。

『こ、の害…虫がアアアアアツ!!』

立ちあがり絶対領域クリアランスに罵倒を浴びせる。今のラスカーには、もう冷静など欠片もない。

互いの距離は5m程。ラスカーは立ち上がると同時に再び右腕を振りかぶった。今何が起きたのかなど、どうでもいい。

間合いを詰めて、右の拳を絶対領域クリアランスに向かって放つ。しかし、絶対領域クリアランスはその拳を再び受け止めた。

『ク…ソ』

更にラスカーは右の回し蹴りを放とうとするが、それよりも先に絶対領域クリアランスが動いた。一瞬でラスカーの懐に入り、その首の根を右手で掴む。

『ソ…の』

ラスカーの言葉は続かなかつた。ラスカーの首の根を掴んだまま、絶対領域クリアランスは軽く地面を蹴った。それだけで、光子も使えない状態であるにも関わらず、絶対領域クリアランスは凄まじい勢いで弾丸のように加速する。そして、そのままラスカーを真っ白な壁へと叩きつけた。

『かッ……ッ』

「ピンポイント」をまとっているというのに、衝撃が内部に伝わり息が吐き出される。未だに自分の首根を掴んでいる少年を至近距離で目にする。なんの変哲もない少年。その姿はラスカー・ハンコックが知っている絶対領域クリアランスそのものだ。しかし、この至近距離で見ると、微かになにか違和感を感じた。

(なんだ……これ?)

絶対領域クリアラランスの体を、なにかが覆っている。透過性の高い何か。例えるならガラスやプラスチック。透き通ったなにかが、絶対領域クリアラランスの体を覆っている。

(『絶対領域クリアラランス』でこんな現象が……？　こんな、こんな)

ラスカーはあらゆる『絶対領域クリアラランス』の可能性を考えるが、答えは出てこない。あえて言うならば光子を利用した場合は可能なだろうが、複雑な演算を必要とする光子操作はこの部屋では不可能だ。と、なる。

(ま、さか……、非科学かッ?)

それ以外に可能性がない。馬鹿らしくて笑ってしまいそうだが、それ以外に考えられない。『絶対領域クリアラランス』という可能性を知っているからこそ、その可能性に信憑性が出てくる。

そこまで考えが至り、改めて目の前の少年を見る。  
茶色い毛先がはねた髪。普通の日本人らしい肌。端正な顔立ち。  
ハハ、と思わず笑いがこぼれた。

『テ、メエさ。もしかして自分が……、正しいとか思ってるのか？』

ラスカーは諦めたように問いかける。

『人、殺しが、誰かを守って、ノウノウと生きてられんのが、正しい、だと？』

絶対領域クリアラランスはそれを黙って聞いている。いや、意識があるのかどう

かさえ分らない。

『そんな、権利はなあ、俺達には無えんだよ…。誰かを守る、だと？ 調子のいいことぬかしてんじゃねえ。そんなこと言っても、俺達の大事なモンってのは壊れていくもんなんだ。……あの時みてえにな』

不意に、ラスカーの声に少し後悔が入り混じった。こんな台詞を吐くということは、おそらくラスカーも誰かを守ろうと思っていた時期があつたのだらう。そして、その誰かは壊れてしまった。そこから、ラスカーは悲劇に負けて、ここまで歪んでしまったのだ。

『それでも、テメエは、悪党が誰かを守るのが、正しいと思ってるのか？ …… 答えるよ』

ラスカーの声が徐々に小さくなっていく。

そこで初めて、絶対領域クリアラランスが唇を薄く開く。そして、小さくつぶやいた。

「お前の言ってることは正しいんだろうな。間違ってるのは俺の方だ」

ラスカーはそれを聞き、息を呑んだ。

この少年には、迷いが無い。矛盾、間違いを自覚していながらも、誰かを守るなどと言える人間はこの世にどれほどいるだろうか？

普通の人間であるならば、この言葉を聞き、驚愕にかられていたのかもしれない。

しかし、ラスカーは歪んでしまった人間だ。かつては大事なものを守ろうとして失敗したからこそ、ラスカーはその言葉を受け、再び怒りがこみあげてきた。

『……殺してやる。許さねえ……、絶対エ殺してやるウウウウア  
アアアアツ！！』

「ほざいてる」

怒りのままに叫ぶラスカーに、絶対領域は右腕でラスカーの首根  
を抑えつけながら、左の拳を全力でぶつけた。

ゴバツ！！ という爆音のような音が響き、ラスカーはズルズル  
と崩れ落ちた。

\*\*\*

絶対領域は、壁に背を預け崩れ落ちているラスカーを見つめた。  
クリアランス  
死んでいるかどうかは分からない。確認をしなければと、そう思  
った瞬間だった。

「……っあ」

小さく息がこぼれる。それと同時に、自分を包んでいた何かが消  
えていくのが分かった。

それと同時に、急に自分の体が重力に負け、白い地面に倒れる。  
先ほどまでは、体が勝手に動いていたような気がしていたが、今は  
もうなにも感じない。

壁から冷たい感触が頬に伝わってくる。

(……やべえな。意識が、もう )

その思考は最後まで至るまでに途絶え、  
絶対領域クリアランスの視界が黒く染  
まった。

#### 4 - 11 正しい答え（後書き）

まずは閲覧してくださったみなさん、ありがとうございます。

決着、ですね。

絶対領域の不可解な現象。一方通行の翼の覚醒などと比べると、かなり劣りますが、一応覚醒になります。

中途半端な覚醒、ですね。感想の返信で、ある方々にはすでにお伝えしたのですが、僕としては、一方通行達は翼に至るまで一気に覚醒して、階段を一気に駆け上がった感じがしたんです。

それに比べ、絶対領域は一方通行達ほど、すぐには覚醒できず、一段階段を上るとい感じです。

まんま感想の返信の内容と同じですが、これ以外に表現が出来ないんです。すみません（汗）

今回の後半の戦闘では、直接の心情の描写はあまり出しませんでした。（簡単な描写は出しましたが）

ラスカーに関しては、前回の話で結構批判が多かったですよね（笑）僕もそれに対してラスカーは木原ボジだから嫌悪感が出るように作りましたと言いましたが、実は彼も彼で悲しい過去を持っているんです。

以前は、ラスカーも絶対領域と同じような立場にあり、守りたい人を守れず壊れてしまった人間になるんです。

とは言え、そんなことを聞いても絶対領域にとっては初期番外に牙を向けようとした時点でそんなことは関係なく潰すという結果に。

そして今回の、絶対領域の「間違っているのは俺の方だ」という台詞ですが。これはラスカーの言葉は一応肯定はしてるんですよ。

人殺しが誰かを守るという矛盾。間違っているという自覚は彼の中にもありますが、彼が選びたい選択は、正しくて失う道ではなく、間違った守る道だということです。正解不正解は関係ないということに。

それでは、次回もよろしくお願いします!!

## キャラクター紹介？ ラスカール・ハンコック

年齢 48歳

身長 188cm

体重 79kg

血液型 A型

来歴：

特殊軍事研究所所長及び、元フランス外人部隊所属。

過去にフランス外人部隊で曹長を務めた経験がある。ある時、自分の娘が難病にかかる。外の技術では治せないものだったらしく、彼は学園都市に頼るようになる。そこで娘の病気は治療されたものの、弱みを握られ学園都市の暗部に所属することになる。研究者として目覚めたのは、学園都市の技術に娘を救われたため、その技術に魅力を感じるようになった。

容姿：

短い金髪をオールバックにしている。黒いスーツを着ている。尚、駆動鎧を着用する際には、スーツ以外の服装に身を包む。

性格：

感情の起伏がないようなタイプに見えて、実際は感情の起伏は激しいタイプだがそれを隠すのが上手いだけ。激情を表に見せることは少ないが、絶対領域に対しては激情を現しやすい。

戦闘能力：

駆動鎧に頼りがちな印象が強いが、体術、射撃能力なども非凡なものがある。

キャラCV

立木文彦

5 - 1 電話の相手（前書き）

「ゾツとするね、アレイスター」  
謎の少年 ？

## 5 - 1 電話の相手

10月4日 AM8:38分

「……っん……」

呻くような声と共に、白い天井がボンヤリと見えてきた。

(また、病院か)

もうこの展開には慣れてきつつあるのが恐ろしく感じる。相変わらず寝起きは頭に靄がかかったような感じがして、嫌いと言うほどでもないが好きでもない。

絶対領域はゆっくりと上体を起こした。見たところ、自分以外には誰もいない病室のようだ。

おそらく自分は『アイテム』の下部組織あたりにも回収されたのだろう。『アイテム』の機材を介してハッキングを行ったのだから、別に不自然なことではない。勿論、履歴等は消すようにはしていたが、実際に消したつもりでも、ほとんどのコンピュータはその履歴を消したように見せているだけで、完全なデータの削除は難しい。

(…あの時)

絶対領域は意識を失う前のことを思い出す。ラスカーの激情を乗せた拳をくらい、確かに自分は限界を迎えていたはずだ。しかし、絶対領域は立ち上がった。何らかの見えない力の支えによって。

内から力が湧き出て切るのではなく、外からの力で強引に体が動かされるような感覚。かろうじて意識は残っていたが、『絶対領域』

であんな『現象』を引き起こせるとは思えない。それ以前に演算も何もしていない状態で、あの『何か』は出てきたのだ。能力チカラに頼って出したことではないのは明白。

そして、あの『何か』を展開している時に、感じた感覚を思い出す。

体を包んだその『何か』は、決していい感覚はしなかった。言葉にするならば、砂を纏っているような感覚だ。体が動くたびにザラザラとした不快感、肌が乾いていくような不快感、そして脳の隙間という隙間に砂を埋め込まれていくような言葉にし難い不快感。

理解ができない。自分自身が引き起こした現象であるにも関わらず。

絶対領域クリアランスは自分の左の掌を見つめる。ラスカーに最後の一撃を放ったその手も、今見るとなんの変哲もないただの掌だ。

(今、考えて分かることじゃねえか)

絶対領域クリアランスは掌から視線を外し、窓へと目を向ける。澄み切った青から降り注ぐ光が、その窓から滲んでいる。それを見て苦笑いを浮かべた。

その時、スライド式のドアが開けられる音がした。

ドアを開けた人物を、絶対領域クリアランスは振り返ることもなく誰であるかを確信していた。

\*

「あなたはこうなることを知っていたのですか？」

薄暗い部屋の中、黒髪の少年の声が空しく響いた。少年のその瞳には巨大な円注状のビーカーの中に浮かんでいる人物が、学園都市統括理事長アレキスター・クロウリーが映っている。

『君にそれを話す必要があるのかな？』

静かながらも威圧感のある声で、疑問を疑問で返えされた少年は思わず肩をすくめる。少年の質問に答えてくれる気はないらしい。とは言え、表情一つ変えない所を見ると、おそらく質問の答えはイエスだろうと仮定する。

「それで、あなたの望む結果まで至ったのですか？」

少年は先ほど答えを貰えなかったことなど気にせず、知っていたという前提で質問した。

『まあまあ、と言ったところだな。私の望む結果とまではいかなかったが、扉の前に立つ段階までは進んでくれたみたいだ』

抑揚のない声。機械のような無機質なものにも聞こえるし、あるいは神々しくも感じる。少年は苦笑いを浮かべた。

『あと少しだな』

アレキスターもまた、微かに笑う。少年はその声を聞き、アレキスターに背を向けて歩きだす。その背中にアレキスターは声を掛けた。

『君にも頑張ってもらわないといけないかもしれない。その時は

よろしく頼むよ、「不破 憲我」」

不破と呼ばれた少年の歩みが止まる。

「折角ですから、『青鳥』と呼んでいただきたいものですが」

振り返りもせず、不破は不機嫌そうに眉根を寄せた。

\*

絶対領域は数分前に来客との会話を終えた後に、自分の携帯を確認する。もしも、ラスカーの施設から自分を連れ出したのが『アイテム』の下部組織であるならば、自分の勝手な行動の為に『アイテム』の端末を利用したことは既にばれているはずだ。

何らかの咎めの連絡があってもおかしくないと思い、受信ボックスに目を通す。しかし、そういった類のメールは受信されていない。

（気にするほどでもねえってことか？）

そんなことを考えていた時、手に持っていた携帯電話が振動した。普通の人間であるならば、病院内での使用は如何なものかと考えるだろうが、絶対領域は迷わず通話のボタンを押して携帯電話を耳に当てる。盛大に嫌そうな表情で。

ディスプレイに表示された番号には心当たりがあった。

「かけてくんなくソ野郎、潰されてえのか？」

『こいつときたら！ アンタが連絡せざるをえない状況作るから

でしょうが!!』

黒い携帯からは女性の声が聞こえてきた。一応『アイテム』に指示を出す上司的存在だ。

残念ながら、いいお話し相手にはなりそうにない相手である。絶対領域リアランスは深いため息をつく。電話越しとはいえ、直接のお説教をくらうことになるとは。

「ラスカーのことか？ お前には関係ねえだろ」

『関係ないわけないじゃないコイツときたら!!』

叫ぶような電話の相手の声により、キーンと耳鳴りがする。絶対領域ランスは鬱陶しそうに両目を閉じた。

『私的理由に「アイテム」の端末使ってハッキングなんてするなつっの！ しかもアンタ書庫バンクにハッキングしたでしょ。足跡完全に消してないせいでこっちが怒られちゃったじゃない!!』

またしても残念ながら正論だ。ハッキングに関してはそこそこ出来るという自負があるが、所詮はそこそこののである。自分よりレベルの高いハッカーぐらいいくらでもいるのだから、上層部には『アイテムの端末からの不正アクセスの痕跡』を見つけたことぐらい簡単だろう。

「うつせえな。説教の為だけの電話なら、俺も深く反省してっから切るぞ」

『コイツときたら！ 欠片も反省してないでしょ!!』

電話の相手は嘔みつくように叫ぶと、一呼吸置いて。

『…それで、「スクール」への警告のことなんだけど』

電話の相手の言葉を聞き、そう言えば麦野がそんなことを言っていたような気がする、とファミレスでのことを思い出す。

『それアンタ行かなくていいから』

「なに？」

クリアランス 絶対領域は眉をひそめた。意図が理解できない。上層部の連中は使える者はなんでも使おうよというのを座右の銘にしているようなものだ。こんな休暇のような連絡が来るはずがない。思考する暇もなく電話の相手は続けていく。

『「スクール」の連中にはまだアンタが「アイテム」に入ったこととは知られたくないのよね。コッチにも色々事情があるのよ』

「へえ」

大した理由でもないかと、クリアランス 絶対領域は眉をひそめて損をしたとでも言つように明らかな生返事をする。

『それじゃあ、これからは「アイテム」の一員として自覚を』

「じゃあなボケ」

電話の相手の話を遮るように、クリアランス 絶対領域は通話を切った。



## 5 - 1 電話の相手（後書き）

まずは閲覧して下さったみなさん、ありがとうございます。

今回は後日談です。ラスカーの紹介に引き続き、あまり面白くない話が続きそうだったので一応不思議な会話を取り入れてみました。今回でてきた不破には御察しが付いている方もいらっしゃると思います。

ついに15巻の内容、暗部闘争辺です。

絶対領域視点だけではなく、原作キャラ視点も取り入れていこうと思います。

お楽しみに

## 5 - 2 動き出す組織（前書き）

「あなたの行動地味なのね」  
クリアランス  
絶対領域の協力者 花宮 はなみや 愛花 あいか

「……………」  
『アイテム』の構成員 クリアランス  
絶対領域

## 5 - 2 動き出す組織

10月9日 学園都市独立記念日

朝の陽射しが学園都市を照らしている。祝日らしい柔らかな雰囲気  
気が漂っているこの街で、大きな影は動きだそうとしていた。

(さてと、色々あったがギリギリ間に合ったな)

薄暗いどこかの部屋で、端正な顔立ちの少年は微笑した。

その少年は『スクール』のリーダー的な立場にある。名は垣根帝  
督とく。彼も『アイテム』同様、学園都市の暗部に身を置く存在。上層  
部から下される命令に、疑問を抱こうが抱くまいが従うことを強要  
され、実行するのが『スクール』の存在意義だ。

しかし、垣根はもうウンザリしていた。この街に利用されるため  
だけの人生などムカついてたまらない。

そして、彼はある計画を考えた。この街を手中に治めること。テ  
ロリストのようなものだとすることは自覚している。それでも、や  
り遂げねばならない。

まずは最初のアクションを起こす。『人材派遣』マネジメントを介して手に入  
れた駒の一つ、砂皿緻密すなひらちみつというスナイパーを利用して、親船最中を  
射殺することで最初の一步が踏み出されるのだ。

\*

AM12時35分。

絶対領域クリアランスは早朝に拠点としている病院をでて、『アイテム』の隠  
れ家高級ホテルの一室で、丸い形のガラス製の透けたテーブルとセ

ットにされた柔らかい座り心地の椅子に座り、テーブルの上を睨みつけるような視線を向けていた。テーブルの上には、黒光りする鉄の塊がいくつか転がされていた。分解された拳銃の各パーツだ。それをドライバーを使って器用に拳銃へと戻していく。

(特に不備はねえな)

クリアランス 絶対領域は拳銃をマジマジと見つめる。その拳銃は外では『SO COM銃』と呼ばれているものに酷似している。拳銃の中でもかなり大きい部類に入るものだ。重量もそこそこにあるそれを絶対領域クリアランスが選んだ理由は、その高性能な命中精度だ。競技用にカスタムされたリースガンに匹敵する程の制度に加え、レーザー照準器がデフォルトで装備されている。最初は45口径を使うのは、反動などから考えて敬遠していたが、学園都市の得体のしれない技術には感心せざるをえない。

流石に病院で拳銃のメンテなどする気にはなれず、病院から一番短いこの隠れ家に足を運んだのである。

(用はすんだ。帰るか)

と、そう考えた直後。クリアランス 絶対領域の携帯が振動した。携帯を開き、嘆息する。

相手は『アイテム』のリーダー、麦野だ。どうやら今日は昼時からお仕事らしい。クリアランス 絶対領域は眉根をよせて、携帯を耳にした。

「なんだ？」

『急いでこの前のファミレスに集合ね。詳しいことはそこで話すから』

プツツという歯切れのいい音と共に通話が切れた。仕事の話であるはずなのだが、相変わらず軽い口調だ。

軽いため息をつき、絶対領域はSOCOMを懐にしまつとその部屋を後にした。

\*

朝の柔らかい日差しに少し熱が加わった昼時。学園都市第七学区に存在するとあるファミレスに不相応な人物たちが自分勝手というたった四文字で表せる単語がピッタリな行動をとっていた。

四人+ の構成員で組織された彼女彼らは「アイテム」と呼ばれる学園都市の暗部組織の一つだ。上層部暴走の阻止が基本的な業務となつている。

そのリーダーを務める<sup>む</sup>麦野沈利<sup>しのすい</sup>は自らのアイデンティティーとも呼べる究極<sup>シヤケベン</sup>万能即席食品なるものを、昼時のファミレスで堂々と広げている。隅でウェイトレスがビクビクしていようが関係ない。彼女にとってコンビニ弁当は、そんなことを気にしなくなるほどの魅力があるのだから。割りばしで弁当をつつきながら、麦野はその弁当に違和感を感じていた。

「あれ？ 今日のシヤケ弁と昨日のシヤケ弁は違う気がするけど。あれー？」

秋物らしい明るい色の半袖コートを着込んだ麦野は、その違和感を何気なく口にする。その眩きには誰も興味を示さないが別にいい。この価値観は、麦野以外の人間がそう簡単に理解できる代物ではないのだ。

この言い方だと、麦野だけが少しばかり変わった趣味嗜好の持主

のようにも聞こえるが、決してそういう訳ではない。他のメンバーも少しばかり変わった趣味嗜好の持主、平たく言うと変人なのである。

「結局さ、サバの缶詰がきてる訳よ。カレーね、カレーが最高」

麦野の隣に居るフレンドという外人の女子高生も例にもれない。かなりの容姿を持つフレンドだが、缶詰をいじり回したあげく缶切りの代用品として爆薬を使うその姿を見れば、いわゆるナンパ師たるチャラ男でも声をかけることはないだろう。

フレンドと向き合う形で座っている絹旗最愛きぬはたさいあいというニット生地ニット生地のワンピースを着た中学生くらいの少女は、映画のパンフレットに目を通してしている。その表紙には、俺達どう間違ったらこういう風になっちまったんだらうな、と言っているようなタイトルが並べられていた。

「香港赤龍電影カンパニーが送るC及ウルトラ問題作……様々な意味で手に汗握りそうで、逆に超気になります。要チェック、と。滝壺さんはどう思いますか？」

歪んだチョイスの話を振られた、絹旗の隣に居る脱力した滝壺理たきつぼり后こうという少女は、ソファ状の席に手足を投げ出したまま、焦点をどこにも合わせずに、

「……………南南西から信号が来てる……………」

そういった少女たちの様子を全く気にすることなく、『アイテムで唯一の男性でもある絶対領域クリアランスと呼ばれている少年は、ソファに背を預けたただ目を閉じているだけだ。現実逃避はまごしらしあげをしているようにも見える。そして、そんな風景を呆れたように見ている浜面仕上はまづらしあげという

少年は両手にドリンクを持ち、立ちすくんでいる。

（どうやって切り出そうかな？）

そんな個性の強いメンバーを前にして、麦野はこれからの『アイテム』の行動をどう伝えるかを考えた。

これから麦野達『アイテム』の戦うであろう敵の姿を想像しても、麦野の表情が変化することは無かった。

## 5 - 2 動き出す組織（後書き）

まずは閲覧して下さった皆様、ありがとうございます！

今回は短いです。

15巻の内容は『アイテム』と『スクール』が基本で、その他の組織はそこまで描写はないつもりです。

次回から本格的に乗り出します。

お楽しみに

### 5 - 3 目的（前書き）

「更新遅れてごめんなさい」

クリアランス  
絶対領域の協力者

花宮

愛花

「……ミサカの出番は？」

サードシーズン  
第二次製造計画の成功作

プロトタイプ  
初期番外

「服引つ張んな。気にいってんだよ」

学園都市屈指の超能力者（レベル5）

絶対領域

## 5 - 3 目的

「んでね」

シャケ弁を一通り食べ終えた麦野は、軽い調子で切り出した。

浜面はそれをさほど重要なことでもないように、軽く聞き流す。彼にとっては正直『アイテム』（の下部組織）には仕方なく所属しているわけであり、積極的に仕事をしようとは思えない。少し前まではスキルアウトを束ねていたはずが、たった一度のミスでこんなことになるとは。人生とは恐ろしいものだ。

「昼前に統括理事会の一人、親船おやふねもなか最中が狙撃されかけた事件があったよね。あれについて、そろそろこっちも動きたいわけなんだけど」

「つか、結局その情報、私は持ってないよ」

フレンドがそう言うのを聞いて、浜面は情報をメンバーに伝達するのを忘れていたことを思い出す。案の定、麦野が少し眉根を寄せ、

「浜面。全員のケータイに事件の詳細を転送」

へいへい、と答えながら、浜面はケータイをいじりだす。こんな少女に指示されるのは正直すこし憤りを感じるが、文句を言おうものなら第四位の怒りをもって人生にアデューしなければならぬ。保存されているデータを特に確認もせずメールに添付して、全員のケータイに一斉送信する。

それが、浜面の失敗の始まりだった。

「ふむふむ」と『アイテム』の四人の少女と+の少年がケータイを確認する。

その画面に映し出されたのは、浜面が必死にネットで探しに探したお気に入りの『大人の動画』と呼べるものだった。

四人の少女は浜面に向けて視線に軽蔑の意を乗せる。茶髪の少年は目を閉じて浜面とは目を合わせなくなった。最初は「情報間違えたか？」と的外れなことを考える浜面だが、送信ボックスを開き、先ほど送信されたメールのデータを見て、表情が青ざめた。

「違つ、待て!! やり直させる! これは何かの間違いなんだ  
ツツツ!!」

浜面は喉を傷める勢いで腹から必死に声を出す。しかし、そんな必死の言い訳も空しく、『アイテム』のメンバーは、

「浜面……」

「結局、浜面ってキモいんだけど」

「浜面的にはバニーさんが超ヒットだったんですか」

「大丈夫だよ、はまづら。私はそんなはまづらを応援してる」

「……」

少年に至っては口を動かそうとすらしない。自分のミスではある

ものの、若干の怒りで体が震えるのを感じた浜面は、今度こそ親船最中狙撃未遂事件の情報をデータに転送した。それを見て、絹旗は呆れたように声を出す。

「ああ、『スクール』の連中が超計画していたあれですね。確か、あそこに所属していた暗殺用のスナイパーは三日ほど前にこちらで超始末したはずなんですけど。絶対領域クリティカルは何もしていませんが」

「わざわざ付け足す必要があるか？」

「新しく雇ったんだろね。ま、つまりこっちの『警告』は無視されたって訳かな」

「結局、あの時も『何で親船最中なのか』ってことで議論して無かった？」

『アイテム』のメンバーは10月2日の議論を思い出す。

「この前も言ったけどさ、親船って結局役立たずじゃん。影響力はほとんどないし、殺すだけの価値はない。なのに……」

「『スクール』はわざわざ失ったスナイパーを補充、私達の『警告』を無視してまで親船の暗殺に取り掛かった」

フレンダと滝壺の言葉に、麦野は軽く頷く。

「親船最中には殺すだけの価値はない。そして目をつけられるリスクを負ってまで『スクール』は予定を無理に合わせて狙撃を実行した。それは何故でしょ。ハイ浜面君！」

浜面は予想外の展開に面白いようにパニック状態になる。クラスメイトの無茶ぶりとは違う。先ほどの大人の動画もといエロ動画の不名誉をここで挽回せねば、と男HAMDRRAは必死に頭をフル回転させる。時間がない。『アイテム』の四人は（絶対領域クリアランスを除く）はずでにこちらへ注目している。が、

「え、ええとだな！！ ちょっと待て喉まで出かかっているからあと少しで分かるんだ！」

と苦し紛れにとりあえず言葉を発するも、『アイテム』はそれを見苦しいと受け取ったらしく、

「いやー、浜面……」

「結局、そのうるたえ方がキモいんだって」

「キモいと言っても超種類があるんですけど、浜面のは最悪のキモさですね」

「大丈夫だよ、はまづら。私はそんなキモいと呼ばれ続けるはまづらを応援してる」

君にはがっかりだよ、と言わんばかりの少女たちの態度を受け、浜面はついに心を砕かれて床にかがみこんでしまった。

（不憫だな）

クリアランス絶対領域は浜面に目を向けないまでも、微かに同情を寄せる。  
一方、麦野はそんなことは気にせずに続けた。

「ま、さつきも言ったけど、親船最中には暗殺するだけの価値はない。それぐらい表裏がないんだよね。にも関わらず『スクール』は親船をターゲットに選んだ。これってさ、親船に価値がないからこそ、親船が選ばれたって事じゃないのかな」

「価値がないからこそ？ 超意味が分かりませんが」

「だからあれよ。『スクール』は誰でも良かったんじゃないかな。とにかく騒ぎを起こせば構わないかあら、とりあえずできるだけ『死んでも影響の少なそーなVIP』……つまり『最も警備の手薄なVIP』が選ばれたって訳」

「……そういうことか」

「いや、今ので分かったんですか？」

「頭の出来が違うんだよ、ガキ」

クリアランス  
絶対領域の言葉に絹旗は怒りを感じて抗議するが、とうの本人は「イン・ザ・オレワールド」しているので聞いていない。麦野はそれを無視して続けた。

「他のVIPの連中相手に狙撃が成功するわけないんだから、『狙いやすい相手』が選択されたって思うんだけど。正直、親船最中はかなり手薄だしねー」

「……結局、かわいそうな親船」

「それが仮に正しいとするなら、『スクール』は何を求めているのか。私はここで『VIP用安全保障体制』を提唱したい」

麦野はどうだと言わんばかりに胸を張る。

「十二人の統括理事会を始めとして、学園都市にはいくつかVIP認定された人員・組織が存在する。こいつらは普通とは違う警備で守られてるし、命の危機に見舞われれば様々な部署から召集がかけられる。救急車の移動用に道路が封鎖されたり、手術のために各業界の大物が病院に集められたりってね。つまり……」

ここで一度麦野は言葉を切って、

「VIPが暗殺されかけたら、どうなると思う？」

その問いに、抗議を諦めた絹旗は不満げに答えた。

「……治療先の施設を守るために、よその人員が呼ばれますし、特殊な研究者や機材なんかも、必要なものは片っ端からかき集められます。その混乱に乗じて『スクール』は何かをしでかそうって訳ですか。つまらない手ですね」

「よく出来たな、ガキ」

「これは超喧嘩を売っていると受け取っていいんでしょうか、いいですよね」

絹旗を窒素が包み込んでいく。彼女は空気中の窒素を自由に操るオフエンスアーマー『窒素装甲』という能力者だ。その拳の一撃は容易にコンクリートを砕くことも、自動車を片手で軽々と持ち上げることもできる。そんな彼女に睨みつけられても、絶対領域は堂々と目の前のグラスにクリティカルス手を付けて。ストローをすすった。

麦野は二人の様子は眼中にいらしく言葉を続けるのを止めない。

「保険、かもしれないね。『スクール』の連中なら、本気になれば力技で大抵の施設は突破できるだろうし」

ただし、と麦野は付け加えて、

「連中はその保険を実行するために、潰されたスナイパーを急遽補充したり、親船最中の暗殺を企てたりした。かなり神経質になつてみたいだね」

「となると、結局親船は単なる『保険の一つ』で、『スクール』はこれから本命の『どこか』または『誰か』を襲う予定だと？」

だね、と麦野はあっさり頷いた。

その時、今まで床にかがみ込んだまま動かなくなった、男HAM DURAがビクビクと声を発する。

「……あれ？ つて事は、親船暗殺は未遂で終わって正解なのかな？」

「どつちでも良いんじゃない？ 仮に親船が死んでいたとしても、今度は心肺蘇生だ検視だ解剖だつてので多くの人員が割かれるんだし。学園都市の得体の知れない技術を総動員して対処するはずだよ」

浜面は嫌悪感を表情に滲ませる。

麦野は特に表情を変えることなく、

「親船最中暗殺未遂によって、警備が手薄になった施設をチエックする。……いや、これだけじゃ甘いかな。親船暗殺が成功した場

合の変更点もチェック。『スクール』はスナイパーの狙撃が成功しても失敗しても、そのどちらでも動ける状況を作っていたはずだから、その両方のパターンで合致する『警備の手薄になる施設』があるはず。『スクール』が次に現れるのはそこって訳」

やることは決まったと、麦野は席を立つ。

そのまま浜面を見もせずに、

「浜面、車を探して来てちょうだい。すぐに出る事になりそだし」

上からの物言いに、浜面は憤りを感じた。反論できる立場ではないのだが、言い方というものがあるだろう。

「くそつ。俺は100人以上のスキルアウトを束ねていた組織のリーダーなんだぞ……」

なんの悪意もなく、思わず本音がポロリと口からこぼれた。

「そうね。だから何？」

(……ちくしょう)

浜面は言葉にすることなく、心の中で呟いた。

### 5・3 目的（後書き）

まずはここまで足を運んでくださった皆さん、ありがとうございます！

最初はこのシーンを入れる予定はなかったのですが、ある方からメッセージを通して「主人公と絹旗を絡ませてみてください」という要望をいただきました。

僕も結構好きなキャラなので、少しだけ入れてみました。

この絶対領域と絹旗の会話には複数の意味があります。

一つは、初期番外の『からかい癖』が絶対領域にも移ってきているということ。それだけ彼女を思っているんでしょう。似合いませんね、ごめんなさい。

二つ目は、『暗闇の五月計画』で絶対領域も被験者だったため。無意識のうちに絹旗とは接しやすいというのを感じているという暗喩です。

読者様は何かご要望がありましたら、遠慮なくメッセージ等でお伝え下さい。出来ないこともあるかもしれませんが、可能な範囲で応えていきたいと思えます。

それでは、次回もお楽しみに

5 - 4 片鱗（前書き）

「おいおい主人公」

『スクール』のリーダー 垣根帝督

「…別に負けちゃいねえ」

『アイテム』の構成員 絶対領域クリアランス

「ここか」

絶対領域は第18学区の素粒子工学研究所の前に、バイクにまたがりながら、その施設を睨みつけていた。四角いとしか言いようのない平凡な建物だ。先刻の親船暗殺未遂事件の際に、警備が手薄となった施設の一つであり、『スクール』が最も現れる可能性の高い彼がここに居る理由は一つ。学園都市の暗部組織『スクール』の目的の確認、及び撃退。他の『アイテム』の構成員は車を調達してから来るらしい。

『あんたは自前のバイク持つてるんだから、先行つときなさい』

という麦野からの有難い御言葉で、『スクール』の行動を予測した途端に単独行動だ。別に単独でやるのは不安とう訳ではないが、命令されるのはあまりいい気はしない。

絶対領域はヘルメットを脱ぎ、懐から携帯を取り出して、『アイテム』のリーダーである麦野に掛ける。

3コールもしないうちに、通話はつながった。

『もしもし?』

麦野の声に混じって、僅かに車独特のエンジン音が聞こえてくる。もうこちらに向かっているらしい。

「結論だけ話すぞ。当たり前だ」

絶対領域は面倒くさそうに眉根を寄せた。破壊されたセキュリティ

イーロックのドアがそれを物語っている。

「やっぱりね。そっちの状況は？」

「侵入の為の破壊工作は最低限。人員も施設の外の見張りがない所を見ると、隠密行動だつづうのが推測できる。だとすると、」

「狙いは人じゃなくて、施設……」

言いきる前に、麦野は言葉を続けた。頭の回転が速いなど、絶対領域<sup>クリアラ</sup>は内心感心した。親船を利用した陽動の時点では、「スクール」の本命が「人」か「施設」かはまだ判断できなかった。しかし、「スクール」の狙いが人であるならば、隠密性を優先せずにもっと大人数で攻めるべきだ。逃げ道を無くさなくてはならないのだから。だとすると、「スクール」の狙いは逃げる心配の無い施設ということになる。

「ああ。この施設にしかないような機材、もしくは端末に記憶されたデータとかが怪しいな。そっちについては今考えても仕方ねえ。お前らは後どれくらいで、こっちに着く？」

「後ろ見れば分かるんじゃない？」

そこで通話が切られた。麦野の言葉を聞いた絶対領域<sup>クリアラ</sup>は携帯をしまいながら振り返った。見ると4ドアのファミリーカーが100m程前方で停車して、中から四人の人間が出てくるのが見える。距離的にその四人の顔は見えないが、おそらくは「アイテム」のメンバーだ。浜面は車をいつでも発進させられるように待機と言ったところだろうか。

(第二位の未元物質、ダークマターか)

絶対領域はもう一度、素粒子工学研究所の方へ視線を向ける。『クリアランス アイテム』が総勢して挑んでも、果たして勝率はどれくらいあるのだろうか？

\*

(第一ステージはクリアってところか)

垣根帝督は素粒子工学研究所で、部下が目的の『機材』をステーションワゴンに積み込むのを見守っている。

念には念をと、砂皿緻密を利用した陽動を行ったのは正解だったらしい。追手から逃げ切る為の一番大事なことは、とにかく追手の目に触れないことである。足跡をたどられても目的を先に成し遂げてしまえばこちらの勝ちなのだから。その為に警備を手薄にして、力押し of 正攻法ではなく、回りくどいやり方をとったのだ。彼の性分には合わないが。

(場所を移して解析に移る。そっちが駄目でももう一つ方法はあるが、出来ればこっちで片づけたいところだな)

垣根は鬱陶しそうに前髪をかきあげて、ステーションワゴンに乗り込もうとする。

その時だった。

何気なく部下の姿を視界に入れて、垣根はふと気付く。機材の積み込みを終えて、エンジンのかかったステーションワゴンに乗り込もうとしていた部下の一人の側頭部に、赤くて小さな点が当たって

いる。

それを見て、垣根は微笑した。

直後、銃声が響いき、部下の一人が側頭部に穴を開けて、鮮血がステーションワゴンの内部へと飛び散る。

「ッ!？」

他の部下が焦りながらも迅速な反応で銃声の方向に拳銃を向けるが、垣根はゆっくりと振り返る。別に大したことでもないと言いたげに。パフォーマンスのように気品を漂わせて。

振り返ったその先に立っている、三人の少女と一人の少年を視界に入るが、垣根は微笑を崩すことはなかった。

見る限りはどれも格下ばかりだ。自分の敵ではない。

\*

「ハッ、誰かと思ってみたら『アイテム』か。ビックリして損だったな、麦野？」

「……………ダークマター未元物質」

明らかな怒りを滲ませながら麦野は呟く。垣根の態度は相変わらず崩れない。余裕が見て取れる。それが、プライドの高い麦野としては癪だったのだろう。

「第四位の麦野沈利に下っ端が一人か。そこまでは分かるが、いつもとは違う面子が混じってるな」

垣根は未だに拳銃を下げない少年に目を向けた。見たところ、自分の身長を少し縮めて服装を変えればあんな感じになるのかもしれない。

興味を向けてみたものの、少年は、絶対領域クリアランスは沈黙を貫く。  
「ハア、と垣根はため息を吐き、

「つまんねえな。お前らごときじゃ相手にもなりやしねえんだから、せめてトークで楽しませるぐらいはして欲しいもんだ」

明らかかな挑発だ。沸点の低い人間であれば、すでに殴りかかっていても仕方はない。しかし絶対領域クリアランスは動かなかった。

（あのクソ野郎の能力は俺にとっては未知数。いつぞやの時みてえに、迂闊には動けねえな。遠距離から中間子で仕掛けてもいいが、逆に利用されねえとも限らねえ）

更に、絶対領域クリアランスはステーションワゴンに視線を向ける。あの中に何らかの機材が置いてあるのは何となく分かるが、詳細な情報はない。あまり動くのは得策ではないと結論付けようとしたその時、

「ほざいてろクソツたれエエエエツッ!」

麦野は堪え切れなかったらしく、叫ぶと同時に垣根に向けて閃光を繰り出す。

垣根はそれを悠々と防ぎ、それが更に麦野の怒りに火を付けていく。

「ハハッ、どうした？ よく狙えよ」

垣根は笑いながら麦野を侮辱して、その結果、麦野は自然と垣根

にしか注意が向かなくなる。そうこうしてる間にも、ステーションワゴンに部下が乗りこんで逃走の準備を進めていった。絶対領域は軽く舌打ちすると、小さく絹旗に呟く。

「絹旗、ステーションワゴンだ」

たったそれだけで、絹旗は自分の意図を読み取ったらしく、頷いてステーションワゴンへと足を進める。

そして、絶対領域は垣根の方へ向き直った。すでに電極のスイッチはオンにしてある。

(しょうがねえな、背に腹は代えられねえ)

光子を反射させて、垣根の方へと高速で向かう。麦野の原子崩しは未だに垣根を襲っているが、自分が当たっても問題はない。今は如何に垣根の注意を自分に向かわせるかだ。

絶対領域が垣根を射程範囲に入れて、右腕を垣根に振るおうとしたその時、正体不明の爆発が起こった。

「があッ!?!」

絶対領域は爆風をモロに受けて、そのまま壁を突き抜けていく。光子を反射させて、勢いを中和するものの、予想外の一撃に、絶対領域は膝をついてしばらく咳きこんだ。深く息を吸い、十分に酸素を取り込んだと同時に、自分の体によって空けられた穴を睨みつける。

「クソッ!」

噛みつくように吐き捨てた直後、光子反射で垣根の方へと加速す

る。

しかし、絶対領域クリアランスが戻ったその時、絹旗は垣根から何らかのダメージを受けたらしくステーションワゴンとの距離を開けられており、そのステーションワゴンは既に加速を始めていた。

麦野と滝壺が急いで、浜面の待っている方角へと走っていく様子を見て、絶対領域クリアランスは電極のスイッチを切りながら自覚した。

まんまと逃げられたわけだ。

絶対領域クリアランスは絹旗の方へ歩み寄り、つい先ほどまでステーションワゴンが存在していた空間を見つめる。

#### 5 - 4 片鱗（後書き）

まずは閲覧してくださった皆様、ありがとうございます！

今回の戦闘はさくつと終わらせました。

垣根の目的は『アイテム』の殲滅ではないので、軽くあしらう程度だったと思いきんな形に。

若干物足りない気もしますが（汗）

次回もお楽しみに

## 5・5 追跡と逃走（前書き）

「ミサカは例外？」

サイドシリーズ

第三次製造計画の成功作

プロトワークス

初期番外

「……………」

『アイテム』の構成員

クリアランス  
絶対領域

## 5 - 5 追跡と逃走

浜面仕上が、出会いたくないランキング上位クラスの警備員アンチスキルにエ  
ンカウントしてから数分後。苛立ちを露わにした麦野の指示で、浜  
面はファミリーカーを爆走させた。急速な加速に、エンジンとタイ  
ヤには大分不可がかっただろうが、気にしている暇はない。

ふと、浜面はルームミラー越しに後部座席をチラリと視界に入れ  
る。そこで、浜面はあることに気づいた。

「お、おい。他の三人はどうしたんだよ!？」

「あいつらはあれぐらいじゃ死なない。今はあのステーションワ  
ゴンが先!！」

苛立った声を聞き、研究所で何かあったのかと、浜面は後部座席  
をもう一度確認する。

麦野は重症を負った様子は見られないが、軽傷が目立つ箇所が多  
い。研究所の中で何があったか想像しようとしたが、見当もつくは  
ずがない。

「なんでこんな事になってんだよ、お前、第四位のくせに」

「向こうにも超能力者レベル5がいたの。垣根帝督、第二位のクソツたれ  
がね」

先ほどよりは声を荒げず、しかし確実にふてくされながら麦野は  
答えた。

「で、あのステーションワゴンを追ってどうするんだ?」

「乗ってるヤツを叩き潰して積み荷は回収」

「積み荷って？」

「『ピンセット』。超微粒子体用吸着式マニピュレータだね」

何やら凄そうなワードが飛び出してきたが、浜面にはその片鱗すら想像できない。あまりにも優しくない説明に、浜面は顔をしかめた。

「……説明する気ねえだろ」

「とにかくそいつが『スクール』の目的だったんだっつもの！！  
分からなくてもステーションワゴンは追えんでしょ！！ っつかこの車で追い付けるんだらうね！？」

「大丈夫」

麦野の問いに、浜面ではなく滝壺が答えた。  
相変わらず脱力中と言った感じで、

「私の『<sup>AEM</sup>能力追跡<sup>ストーカー</sup>』は、一度記録したAEM拡散力場の持ち主を徹底的に追い続ける。たとえば彼らが太陽系の外へ出たって私はいつでも検索・捕捉できる」

「だとさ」

浜面は他人事のように興味なさげに言った。

「優秀なナビがいてくれりゃ見逃す事はねえさ。それより、あの車の動きを封じた後はどうするん」

浜面の言葉は最後まで続かなかった。

すぐ横の道から、いきなり大型のクレーン車が、殺意むき出しで4ドアに体当たりを仕掛けてきたからだ。

\*

「……つながらねえな」

戦闘の傷跡が残るその場所で、絶対領域クリアランスは無表情なまま、耳に当てていた携帯を懐にしまう。麦野に電話をかけてこれからの指示を聞こうと思ったのだが、つながらないなら自分の推測で動くしかない。勿論、麦野の指示に従うよりも自分で動く方が好みではあるのだが、効率は悪い。

面倒くさそうに片手で頭をかきながら、絶対領域クリアランスは隣に居る絹旗に声をかける。

「これから麦野がどういうアクションを起こすか推測できるか？」

「そうですね……」

絹旗が顎に手を当てて考える。自分よりも彼女の方が『アイテム』には長く所属しているのだから、彼女に推測してもらった方が確実だろう。

思考していると、絹旗が口を開いた。

「一度は隠れ家で体制を超立て直すと思いますよ。メンバーの集合も必要ですし」

「どの隠れ家を使用するかの特定は？」

流石にそこまでは、と絹旗は首を振る。

目的地が決まらないのでは動きようがない。とは言え、いつまでもここで麦野からの連絡を待つ訳にもいかないだろう。

隠蔽工作もそう長くは続かない。じきに警備員が状況の調査に来るかもしれないのだ。もし見つかったら、事情聴取だの何だので身動きが取れなくなる。

「俺は場所移すが、お前は？」

「私もそうさせてもらいますよ。ここに居てもリスクが超高くなるだけですし」

そうかよ、と絶対領域は黒の《X-11》を停めた場所に向かつて歩きだしたが、しばらくしても後方から聞こえてくる足音が気になる。数分後、バイクの前で立ち止まると同時に、後方から聞こえてくる足跡も途絶えた。

まさか、と絶対領域は振り返る。

「……お前、まさかタンデムしようなんて言わねえよな」

「？　そうですけど」

何を当たり前のことを、といった様子で絹旗が首を傾げるが、それはこちらの台詞である。絶対領域はあまりタンデムという行為を好まない。

大覇星祭での事はイレギュラー中のイレギュラーなのだ。

「まさか、この私に超歩けなんて言いませんよね？」

言うまでもなく、そうするものだと思い込んでいた絶対領域クリアランスとしては、こんな隙の無い問いかけ方をされてもどう答えていいかわからない。相手が普通の少女だったらともかく、自動車を軽々と持ち上げられるような相手に下手な答え方をすると、

「分かりました。じゃあ私も歩いてあげますから、絶対領域クリアランスも超歩いてくださいね」

などと言われてバイクをバイクだった物体にされるのも困る。

「……ヘルメットなんざ俺の分しかねえぞ」

苦しいなと自分でも思いながら、絶対領域クリアランスは言葉を発した。

「私が交通ルールを気にするように見えますか？」

「見えるな」

「そうですか。残念ですが、それは超勘違いでしたね」

全く隙のない言い方だ。おそらくこの後、どれだけ言葉を並べても、断れない理由を突き付けてくるのだろう。あの翼の少年よりも、ある意味恐ろしく感じる。

「……歩けよ」

「しつこいですね。超却下ですって」

\*

絶対領域クリアランスが妥協という名の敗北を味わっていた頃、浜面はビルとビルの間クリアランスの路地を全力疾走していた。

大型のクレーン車が浜面たち突っ込んできた後、麦野の提案で三手に別れて逃げるようになったのだが……、

（ヤバいぞオイ、俺を追ってきやがった！！）

背後から聞こえてくる足音が、浜面に焦燥感を突き付けてくる。

先ほど、クレーン車のフロントガラスを通して見たところ、クレーン車の乗り手かつ現在の襲撃者は14歳ぐらいの華奢な少女ではあったものの、その少女を一超能力者（レベル5）である麦野が「鬱陶しい」と表現していたのだ。無能力者の自分にとってどうい存在なのか想像するのは難しくない。

浜面ビル横に設置された金属製の非常階段を駆け上がり、適当な所で建物に入る。

パツと見では学生寮らしい。

直線的な通路を駆け抜けると、背後で扉が開かれる音が聞こえた。

（追いつかれた……ッ！？）

音の方へと浜面は振り返る。

開けられたドアから、小柄な少女が視界に入った、派手なドレスの少女は、グリップのやたら小さい拳銃が握られている。

（死ぬ！？）

浜面の顔から血の気が引いた。ほとんど無意識で手近にあるボタンを叩きつけるように押す。それと同時に、鋼鉄で出来た隔壁が勢いよく下りてきた。

少女は目をわずかに見開き、迅速に浜面に銃口を向けて、引き金を引く。

パン！！ という乾いた音が浜面の鼓膜を揺さぶった。

明確な死の脅威に、反射的に目を閉じる浜面だった、その脅威が浜面に死を与えることはなかった。小口径の銃弾は、隔壁を貫通するほどの火力は持ち合わせていなかったらしい。壁のボタン近くにあるモニタには、拳銃に目を落とす少女の姿が映されている。

（つまり何をやるうが、あの女はこの壁を越えられない訳だ）

そう思うと、急に安堵感と共に、妙な感情が浜面に流れ込んできた。普通なら、それを確認した直後に逃走を始めるべきなのだろうが、浜面はその感情に身を任せ、世界で一番人を馬鹿にした表情を浮かべ、両手を上にあげると同時に、左右に尻を振りながら『ひいっひいっひいっひ』と声を上げた。

「、、、」

少女の表情が変わった。

拳銃を太股に仕舞い、後ろに手を回す。

次の瞬間、少女の手にはコーヒークラスの缶ぐらいの太さを持つ拳銃が握られていた。見た所、40ミリの小型グレネード砲だ。

「や、やべえ。これ絶対死んだんじゃないね!？」

再び顔を青ざめて通路の奥へ走る浜面だが、少女が引き金を引いたことで、その行動は掻き消された。

シャッターがこちらに向かって膨らんだ直後、こちら側に向かって吹き飛び、その爆風と破片は浜面を5m以上ノーバウンドで吹き飛ばした。

「ぐ、がああっ!？」

漫画のような勢いで転がった浜面は何とか起き上がり、壁に手をついて通路の奥を目指す。

その先はこれまたベタな展開、行き止まりだ三階分の高さが窺えるテラス。ここから飛び降りるなど冗談ではない。もっとも普通の状況ならばだが。

背後に感じる底の知れない恐怖が浜面の背を押した。つまり、

(もちろん三階ダイブに即決定!! あんなあからさまに強そうなのに立ち向かうくらいなら気合と根性で飛んだ方が100倍マシだ! 小物には小物の生きる道があるのでっす!!!)

「ハハッ!! 負け犬上等オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

全身全霊声を上げ、浜面は手すりを飛び越えた。

## 5 - 5 追跡と逃走（後書き）

まずは閲覧してくださった皆様、ありがとうございます！

今回は進展あまりなしです。

絶対領域は自分のバイクが好きなので、基本的に誰かを乗せることはありません。初期番外は例外中の例外です。

次の話では絶対領域視点で書くことになると思います。

お楽しみに

5 - 6 撃退（前書き）

「？  
サードシーズンの嫌な予感がした気がする」  
第三次製造計画の成功作 初期番外  
プロトワーラスト

「そついうのつて大抵当たるのよね」  
クリアランス  
絶対領域の協力者 花宮 愛花  
はなみや あいか

絶対領域クリアランスは現在、普通の国道で法定速度を少し上回る速度でバイクを走らせていた。普通なら、警備員アンチスキルに捕まるような行為は避けるべきなのだが、どうせタンDEMシートに腰をおろしている少女もとい絹旗のノーヘル乗車によって注目されるのだ。今更スピード違反など気にはならない。

その後、

『とりあえずは、ここから一番近い所に移動しましょうか。超ぶつとばして』

という絹旗の一言の方針に決定したのだ。何故速度までお前が決めなければならんのだと思ながらも、逆らったら壊れるのは自分ではない。第一、早く隠れ家について、後ろの少女を降ろしたいという願望から見れば、速度をだすのはむしろ好都合。

自然とアクセルを捻る手に力が入る。

そんなどうでもいい思考をしていると、十号線が見えてきた。前方に車はなく、信号が青になっているのを容易に確認できる。

「超急いで下さいよ。私も早く休みたいんですって」

「……………文句あんなら、歩けっつの」

呟きながら、絶対領域クリアランスはアクセルを更に捻った。そもそも彼は頼まれる方であって、頼む方ではない。それに矛盾したこの上下関係が、彼をだんだんとイラつかせていく。

(……………今は耐える。もう着くまでに、十分もかからねえ)

それでも、絶対領域クリアランスが不満を（絹旗に聞こえる大きさでは）漏らすことは無かった。

\*

第七学区のとある病院の屋上に少年は居た。白い無地の長袖Tシャツに、青いジーンズという無難極まりない格好だ。黒い髪が、風に吹かれて波のようになびく。

「垣根帝督の反逆、か」

少年は、不破憲我は薄ら笑いを浮かべて呟いた。昼の陽射しが彼を照らし、その背中に大きな影を作っている。

（まあ、普通の人間なら当たり前と言える事だな。一生、上層部の連中に尻尾振って生きていくなんざ惨めにも程がある）

不破は屋上という高さを利用して、地上を歩いている者達には味わえないであろう景色を見つめる。不破は高い所が気にいっている。この学園都市を一望できるとまではいかないが、それに近い光景は、素直に美しいと感じる。

（第二位は理解できていない。この学園都市は見事なまでの『完全』だ。力では何も変えられない）

確かに学園都市第二位の超能力者レベル5である垣根帝督が有する実力は相当のものだ。少なくとも自分よりは上の存在。下手をすれば、一ア

クセラレータ

方通行ですら及ばないかもしれない。

しかし、人間の『力』程度ではこの街に一矢報いるどころか、傷一つ付けることはできない。9月30日の外部の敵対勢力である『ローマ正教』の『前方のヴェント』と名乗る者を撃退。アビニオンでは死体こそ発見できなかったものの、『左方のテッラ』と名乗る人物は殺害という結果が残っている。その学園都市勝利の結果と共に、『垣根帝督』という名前が敗者として残るだけだ。

不破が垣根を嘲笑していたその時、それを遮るように携帯の着信音が鳴った。彼は素早く懐に手を伸ばし、携帯を耳に当てる。

「もしもし」

『仕事ね』

電話越しからは若い女性の声が聞こえてくる。とは言っても、その声は明らかな合成音声であるため当てにはならないのだが。

「『スクール』か。『アイテム』だけじゃ手には負えないと思っていた所だ」

『違うっつの、こいつときたら』

その声に不破は眉根を寄せた。今回の彼の『仕事』は、『スクール』や『ブロック』が手に負えなくなった時の、保険と言った感じのポジションだったはずだ。しかし、『ブロック』の方は、『グールプ』や『メンバー』が動いている。正直、彼らの相手は自分が行かなくてもお釣りが来るほど十分なはずだ。だとすると、必然的に『スクール』の相手をする事になると思ったのだが。

不破の疑問には構わず、電話の相手は続けていく。

『「ブロック」を管理してる人間があまりにも使えないからさ、脅威が取り除かれ次第、アイツを処分して欲しいんだけど』

「雑用かよ」

不破は怪訝そうに吐き捨てた。そんなことは下部組織にでも任せ  
ておけばいいはずだ。

しかし、彼に拒否という選択肢は無い。

その理由は至って単純。操られるだけの人生に、別に不満はない  
からだ。

『じゃあその時が来たら連絡するから、しっかりね』

「分かった」

不破はそう言うと、携帯を折りたたみ、院内へと繋がる扉に向か  
う。

その顔に、表情はない。

\*

絶対領域クリアランスと絹旗が乗るネイキッドバイクは、法定速度を完全無視  
した速度で、車と車の間をすり抜けながら走り続けていた。本来な  
らば、後、すでに隠れ家について一息ついていたはずのだが……、

「ホントについてねえな」

サイドミラーを確認して、絶対領域は奥歯を強く噛みしめる。  
無理もなかった。

「『スクール』の追手でしょうね。こんなになりふり構わず来る  
とは、超予想外でした」

ヘルメットに内蔵された指向性の音を拾う小型装置のおかげで、  
やかましいエンジン音にも関わらず、絹旗の苛立ち気味の声はクリ  
アに聞こえる。

サイドミラーに映っているのは、かなり大型のトラックだ。浜面  
たちを襲ったものとは違い、建物を破壊するようなモノはついてい  
ない。おそらくは荷台に駆動パワーステアでも乗せているのだろう。最初から  
それを使用しないのは、ある意味脅迫と解釈できる。そのまま逃げ  
るのであれば、トラックで一般人を巻き込むと。

事実、クレーン車は、一般人の普通車を強引に衝突させてこちら  
へ向かってきていた。

（このままじゃ、表のやつらまで危ねえな。別に無視して振り切  
つてもいいが……、クソッ！）

絶対領域は軽く舌打ちすると同時にビルとビルの間、すなわち裏  
路地へと向かい、そこに入ると同時に、ブレーキをかけた。慣性の  
法則で絹旗はガツン、と頭を絶対領域の背中にぶつけたが、気にし  
ている暇はない。

絶対領域はヘルメットを脱ぎ、投げ捨てながら噛みつくように言  
った。

「先に向かってるッ！ 俺も後で向かう！！」

絹旗は何か言おうとしていたが、それよりも先にトラックが裏路

地への入口に停車するのを見て、隠れ家へと走り出した。おそらくは、路地の広さを考えて、パワードスーツ駆動鎧で攻めてくる気だ。

クリアランス絶対領域は絹旗の方から、そちらへと振り返る。

やはり、荷台から6体のパワードスーツ駆動鎧が出てきた。青を主体とした塗装に、2m程の高さ、そして、腕に取り付けられた腕輪のような『対隔壁用チエーンガン』。いつぞやに戦ったことのある『H S G A M - 01』、『バレットライン』と呼ばれるパワードスーツ駆動鎧だ。

6体の『H S G A M - 01』は、一つの例外もなくこちらに銃口を向けている。

その状況で、クリアランス絶対領域は小さく笑った。指を首筋の電極に当てながら。

ピピッ、という小さな電子音が鳴る。

それが、戦闘開始の合図となった。

\*

浜面はもう使われていない廃ビルにいた。仕事のためだ。

その仕事とは、誰かも分からない人物の死体を焼却処分すること。分厚い金属でできたコンテナほどの大きさの実験動物用電子炉に放り込んで、スイッチを押しだけの肉体的には簡単な作業。

そう、あくまで肉体的には、だ。

精神的な苦痛は、時に肉体的な苦痛より大きなものとなる。今の浜面は、それを肌で感じ取り、脳で認識し、そして、心が痛むのを理解していた。

すでに作業は完了している。黒い重みのある寝袋は、すでに35

00度はDNA情報を完全に破壊して、その人間がこの世に存在していたという痕跡すら消すのだろう。

ひとつの『存在』を消してしまった浜面は、埃だらけの床に座り込みながら動けなくなってしまうていた。

「はまづら」

不意に、後方から自分を呼ぶ声が聞こえたが、浜面は反応しない。鼓膜を揺さぶる振動よりも、ずっと重いものが胸を抑えつける。

「はまづら、どうしたの？」

少し、不安げな声に浜面は気付かない。自分とは違って『力』を持つ少女。それが何よりも羨ましい。

「……人の命って、何なんだろうな」

脱力感が、浜面を支配する。

「ちくしょう無能力者の命<sup>おれたち</sup>って、一体いつからこんなに安くなっちゃったんだよ」

空しく、その声は空気に溶けていった。

\*

ドバツ！！と、爆音のような銃声が響いた。『対隔壁用チェーリガン』の銃撃が、絶対領域に向けて浴びせかけられる。流れ弾は

地面を剥ぎ取り、壁をえぐり抜いていく。銃撃と呼んでいいのかと疑いたくなるような、凄惨な光景だ。

しかし、クリアランス絶対領域には傷一つ付かない。

「クソ野郎どもが……、仕事ばっか増やしやがって」

中間子で貫いてもいいが、念の為に周囲の被害は最小限に抑える方針にしておいた方がいいだろう。薄ら笑いを退屈そうな表情にすり替えたと同時に、クリアランス絶対領域は光子を利用して、六体の《H s G A M - 0 1》へと加速する。

『ツ！！』

六体の《H s G A M - 0 1》は、ほとんど同じ動作で空中へと回避行動をとる。三次元の高さを利用した回避。それが、彼らの失敗だった。

クリアランス絶対領域はそれを見て、迅速に空中へと大きく飛翔する。

そして、まずは一体の《H s G A M - 0 1》の太い足に触れると同時に、そのボディに光子を思いきり反射させた。ちょうど、直線状に存在していた3体の《H s G A M - 0 1》を巻き込むように。

音速を超えて射出された《H s G A M - 0 1》は、その進行ルートに存在していた《H s G A M - 0 1》を見事に巻き込み、そしてビルの壁を突き抜け、グシャリと潰した。

一瞬で、六体は二体に。

さらに、クリアランス絶対領域は一体の《H s G A M - 0 1》着地すると同時に、自分自身も着地してその機体に接近する。直後、クリアランス絶対領域の細い右腕が《H s G A M - 0 1》の腹部を貫いた。そのまま軽く右腕を横に払う。腹部を切断寸前で留まってはいるが、すでにパイロットの命はないだろう。

これで、残りの襲撃者はたった一体だけとなった。

## 5 - 6 撃退（後書き）

まずは閲覧してくださった皆様、ありがとうございます！

今回は久々の戦闘シーンでしたのが、見ててスカツとするものではなかったと思います。すみません（汗

それにしても、『バレットライン』という存在を覚えていた方は少ないと思いますが、実は僕的にはお気に入りキャラです。

他にも『ステルスアーミー』なども好みです。あまり登場させる機会はありませんが。

そして、地味に登場した不破ですが、少し彼の立ち位置というものをしておきました。彼は本当に重要なキャラになってくるので、注目していただけると有難いです。

次回からはこの章の中盤あたりに入る予定です。  
お楽しみに

5・7 二人の少年（前書き）

「ふう、とりあえずは危機が去った気がする」  
サードシーズ  
第三次製造計画の成功作 初期番外  
プロトワーラスト

「そう（随分と具体的な予感ね）」  
クリアランス  
絶対領域の協力者 花宮 愛花  
はなみや あいか

## 5 - 7 二人の少年

圧倒的という結果。

10秒もたたないうちに、5体の駆動鎧を再起不能にした絶対領域クリアラは、残りの一体を睨みつけた。《H S G A M - 01》を纏ツっているとはいえ、恐怖が既に滲み出ている。それでも、銃口をこちらに向けている所を見て、絶対領域は目の前の襲撃者を内心では称賛した。

(……嫌いじゃねえな)

垣根から脅迫を受けているのか、もしくは何も知らずに行っているのか、知っていて自分の意思に従っているのか。理由など山の数ほど思い浮かぶが、そんなことは関係ない。自分の命、恐怖に勝る覚悟がある人間はそういない。

自分の姿を目の前の襲撃者に重ねた瞬間、絶対領域クリアランスは微かに笑った。

そして、再び殺意を取り戻す。

自分は悪党にも劣るチンピラだ。気に入った人間だからと言って、自分を襲った人間や、自分の大切なモノに手を出す人間を見逃すという選択肢などあるはずもない。

「安心しろよ。痛みは無えはずだ」

『ツ!!』

絶対領域クリアランスは光子を利用して、瞬時に加速する。

それとほぼ同時に、《H S G A M - 01》の『対隔壁用チェーニング』が火を噴いた。

放たれた弾丸は彼に触れると同時に消失する。互いの距離は10mもない。

絶対領域クリアランスの掌が《 H S G A M - 0 1 》を捕らえた時、戦闘はあまりにあっけなく幕を引かれた。

\*

絶対領域クリアランスと《 H S G A M - 0 1 》の戦闘が終了してからしばらく後。

その女性は、堂々と街を歩く。

彼女は普通に見えても『裏』の人間。そんな人間にはあまりに不釣り合いな行動だ。誰でも通行できる『表』の路上。護衛は一人として存在せずに、一般人に溶け込みんでいる。彼女が一步踏み出すたびに、ヘリウムの浮力で浮き上がっている風船が揺れた。

もう片方の手には、どこにでもあるような携帯電話が握られている。

「あのさー。一応私が管理してるのは『アイテム』なんだけど。こいつときたら……。なーんでこんな残業代も出ない電話を掛けなきゃならないんだか」

『何言ってるんだ。確かに「ブロック」については、俺も出し抜かれたのは認める。でもな、俺の力ならいくらでも巻き返せる。だから「ブロック」の位置や情報に関する遮断を解けよ！俺が彼らを再び掌握すれば、学園都市に被害が及ぶ事はないんだ』

「被害については、大丈夫。ついさつき、『グループ』の連中が少年院で『ブロック』を行動不能にしたみたいだから。これ以上、

ヤツらがトラブルを起こす事はないよ」

『そ、そうか』

電話の相手が安堵しているのを感じて、彼女は嘆息しそうになる。自分の失態を巻き返したいがために、さも学園都市に対する忠誠心のアピールと、自分は優秀だという過信。人の上に立てる人間ではない。

『それなら、俺は』

「ええ」

彼女は言葉を引き継ぎ、続きを言った。

「『ブロック』の脅威は消えたんだから、それを制御するアンタも必要ないわよね」

電話の相手が息をのみ、焦燥にかられながら何かをまくし立てたが、そんなことは興味がない。

これは、学園都市の意向だ。今更、変更などありはしない。

彼女は携帯を折りたたみ、風船を握る手を僅かに開く。それに伴い、五つの風船の一つが空へと消えていく。

「さて、と」

彼女は残る風船の紐を弄りながら呟いた。

「『スクール』の制御役はなんて言うのかな」

\*

「待て、学園都市にとって俺は……、クソツ!!」

『ブロツク』の制御役である男は焦燥にかられていた。通話が切れた状態の携帯電話が「ツー」という空しい音を、薄暗い室内に響かせる。

彼は、通話を切られたと同時に、携帯電話を真ん中から思いきりへし折る。これでGPSからは追跡されることはない。そのまま護身用にと立て掛けてあった、大口径の黒光りする拳銃を手にして扉へと向かう。長く続くその廊下は一本道で、30mほど進めば出口が見えてくるはずだ。そこから使用の車を使い、とにかくここから距離を取らなくては。

そう考えて走っていると、不意に、その出口が開かれた。いや、強引に吹き飛ばされた。

(なんだと!?)

男は反射的に足を止め、前方に拳銃の銃口を向ける。この廊下は電球すらなく薄暗さが特徴な為、視界は良いとは言えない。しばらく前方を睨みつけていると、コツコツという足跡が聞こえてきた。

「誰だ?」

低い声で、彼は問いかけが、答えはない。

しばらくすると、出口からこちらに近づいてきたであろう人影が、だんだんとその姿を露わにしてきた。

「止まれ！ 誰だって聞い……、て」

彼の声はそこで途切れた。

その理由は単純なものだ。出口の扉を破壊した人物が、自分の5m程手前で歩みを止めて、そのシルエットを完全に現したからだ。その姿は少年のものだった。

黒い髪。

整った顔立ち。

白い無地のTシャツに、青いジーンズ。

そして、とてつもない殺気。

（『暗部』の人間か、ちくしょう！！）

彼はその姿を完全に確認すると同時に、拳銃の引き金を引こうとした。

銃口から放たれた弾丸は、空気を切り裂きながら、渦を巻くように進んでいき、そして少年の額を貫く直前に、『弾かれた』。

「なッ！？ クソ！」

彼は一瞬呆然としたが、すぐにまた引き金を引く。

一発。

二発。

三発。

四発。

五発。

六発。

そのどれもが、少年の手前で何かに弾かれていく。

彼はその結果に、啞然とした。この超能力にあふれた学園都市において、普通じゃない少年がいるのはごく当たり前のことだ。拳銃程度では屈さない学生も珍しくはない。

しかし、実際に目の前でそれを見ると湧き上がってくる感情はある。『恐怖』だ。

男の脳内で、自分の数分後の姿が想像されていく。途端、尋常ではない汗が彼を覆っていく。

「おい」

突き刺すような少年の声に、ビクリと男は反応する。

「次に引き金を引いて自分で死ぬか、それとも俺自身に殺されるか選ばせてやる。悪党にも選択する権利ってヤツはあるからな。ほら、言えよ。どっちに殺されたい？」

「い、ああ……」

少年が一步踏み出すたびに、男も一步下がる。

その繰り返しだが、しばらく続き、やがて男は我慢できずに再び銃口を少年に向けた。

それを見て、少年は薄く笑う。

「そうか。『そっち』がお好みならオーダーに従ってやる」

「な、舐めるなアアアア！」

恐怖と錯乱の混じった叫び声とともに、男は引き金を引いた。

その弾丸は、今までとは違い少年の額の直前で弾かれる前に、重力を無視してピタリと静止した。

「な、に!？」

今までとは異なる現象が、男に驚愕を与える。

少年は相変わらず笑みを絶やさぬまま、右手を拳銃のような形にして、人差し指を男に向けた。

同時に、ピタリと停止していた弾丸が、ゆっくりと回転を始める。

10度。

45度。

90度。

そして、180度完全に方向転換する。弾丸の先端は必然的に男の方へと向けられる。

少年の能力は未だに不明だが、その弾丸がこれからどのようなのかを想像するのは難しくない。明確にされた死の恐怖が、男の顔を更に青ざめさせる。

「や、やめてくれ、まだ死にたくない」

「バーン」

男の声を遮るように、少年の楽しそうな声が響いた。

その直後、男は頭骸骨を砕かれ、後頭部からは生暖かいドロリとした真っ赤な液体が飛び散り、共に柔らかい脳髓の欠片が床にへばりついた。

## 5・7 二人の少年（後書き）

まずは閲覧して下さった皆様、ありがとうございます！

今回は二人のメインキャラクターの対比も兼ねた戦闘？シーンでした。

絶対領域の殺しと不破の殺し。

こうして比べてみると、色々と相違点が見えてきて面白い所もあるかもしれません。

不破の能力はホントにチートにしました。

次回からは再び原作に沿っていきたいと思います。

お楽しみに

5 - 8 集合と逆転(前書き)

「……物件探しだ」

『アイテム』の構成員 クリアランス 絶対領域

「……本当？」

サイドシースン 第三次製造計画の成功作 プロトウーレスト 初期番外

## 5 - 8 集合と逆転

浜面は『アイテム』の隠れ家に一つに戻ってきていた。死体処分という仕事の後に私用を済ませていた為、ここに着いたのは他のメンバーと比べて少し遅めになっている。

「遅いよー浜面」

麦野は大して気にもせず、浜面に声をかけた。

ここは第三学区にある高層ビルの一つだ。屋内レジャーを集約させた施設で、利用者は基本的に身分の高い者が多い。入室するだけでも会員証を必要とし、更にはその会員証にはランクというものが存在する。

浜面達がいるのは、いわゆるVIP用のサロン。年間単位の契約で貸し切り可能な個室。『二つ星』以上の会員証がなければ借りる資格すら与えられない最高級の個室だ。

3Ldkを超える広さの空間で、麦野はソファに身を沈めていた。浜面はそこに集まった面子を見まわして、ふと違和感を感じる。ファミレスに居た人数から、一人欠けていた。

「フレンドはどうしたんだ？」

「消えた」

麦野は大して気にもせず、

「死んだか、捕まったか。補充している暇はなさそうだし、いずれにしても『アイテム』は四人でやってくしかないね。ま、他の所も基本は四人でワンセットだから、平等と言えば平等だし。巻き返

すのは難しくないよ。ウチら『アイテム』には滝壺もいるしね」

自分が数に入れられていないことに浜面は違和感を感じたが、言及した所でハートブレイクされるのが落ちだ。ベタながっかりに引っ掛かっている気分ではない。

そんなことを考えていると、視線を感じた。その方向に目を向けてみると、滝壺が自分の顔を見つめている事に気づいた。

「はまづら、怪我してる」

「何でもねえよ」

無表情な滝壺の顔に、僅かに心配という感情が滲んでいることに浜面は気づかない。絶対領域はクリアランス麦野とは別のソファに寝そべりながら、滝壺の表情の変化を視界に入れたのが、「へえ」と小さく呟いた。

浜面はその呟きが聞こえ、音の発生源へと視線を向ける。

「何だよ」

「お前と同じだ。何でもねえよ」

浜面は眉をひそめたが、視線の先に居る少年はそれ以上何も言う気はないらしい。再び麦野の方へと浜面の視線が回帰する。

「これからどうするんだ。『スクール』の連中には『ピンセット』を奪われちまったんだろ」

「そだね」

麦野はあっさりと答えて、

「だから、今度はこっちが反撃する番よ。滝壺の『AEM能力追跡』は一度記憶したAEM拡散力場を元に、特定の能力者の位置情報を『検索』できる。素粒子工学研究所では連中と一戦やりあってるからね。これでいつでも連中を追えるって訳。『アイテム』の存在意義は上層部や極秘集団の暴走を防ぐ事。そいつをまっとうしてやるうじゃない」

浜面は滝壺に目を向けた。

相変わらず脱力中の少女について色々と推測するが、明確な答えはない。

「検索対象は『ダークマター未元物質』でいい？」

「誰だそりゃ」

「第二位のレベル5超能力者。『スクール』を指揮してるクソ野郎だよ」

4ドアに乗り込んできた時から、麦野はその『ダークマター未元物質』とやらの事を『クソ野郎』と表現するのを続けている。素粒子工学研究所で何かムカつくことでもあったのだろうか？

そんなことを考えていると、滝壺はポケットから白い粉末の入った小さなケースを取り出した。

絹旗はそのケースを不思議そうに見つめている。

「滝壺さんも超難儀していますよね。『たじろ体晶』がないと能力を発言できないなんて」

「別に。私にとっては、こっちの方が普通だったから」

滝壺はそう言うと、手の甲に白い粉末をほんの少し乗せて、それを舐めた。

それと同時に、彼女の目に光が宿る。彼女を包む雰囲気は、威圧感さえ感じさせるほどだ。

「AIM拡散力場による検索を開始。近似・類似するAIM拡散力場のピックアップは停止。該当する単一のAIM拡散力場のみを結果報告するものとする。検索終了まで残り五秒」

滝壺は必要最低限のことだけを口にした。

そして、再び言葉を発する。

「結論。『<sup>データ</sup>未元物質』はこの建物の中にある」

その場に居る全員が驚愕を露わにする前に、動きがあった。サロンの扉が、内側に吹き飛ばす形で思いきり蹴り破られる。その奥には、圧倒的な『力』があった。

5 - 8 集合と逆転(後書き)

まずは閲覧してくださった皆様、ありがとうございます！

更新が遅れたうえ、短い内容で申し訳ありません。

明日からは通常通りに出来ると思いますので、お許しください。m  
( m <

話のキレ的に、一度ここで切っておいた方が歯切れがいいというところ、  
次のシーンまで書くと、今日中の更新が難しくなりそうだったので

……

浜面の名シーンも近いです。

お楽しみに

5 - 9 圧倒的な力（前書き）

「ねえ、今女の声がし

サードシーズ

第三次製造計画の成功作

プロトワイスト  
初期番外

「悪い。電池が切れそうだ」

「アイテム」の構成員

クリアランス  
絶対領域

## 5 - 9 圧倒的な力

蹴り破られた扉の奥から、一人の少年が歩いてくる。

高めの身長に、揺れるゴールドブラウンの髪。それを見て、絶対領域クリアラは、少年と滝壺を結ぶ直線状へと、さりげない動作で割り込んだ。

対して、麦野は忌々しそうな声を出す。

「『未元物質』……ッ！」

「名前と呼んで欲しいもんだな。俺には垣根帝督かきねていとくって名前があるんだからよ」

垣根の手には、機械でできた奇妙な『爪』があった。素粒子工学研究所では装着していなかったものだ。

「『ピンセット』か……」

「カツコイーだろ。勝利宣言をしに来たぜ」

麦野と垣根が会話する中、絶対領域クリアラはその様子に気を配りつつ、周囲を見回した。出入り口は垣根が立ちふさがっているあの扉だけ。『スクール』の目的には、大体の推測がつく。

垣根がアクションを起こす前に、滝壺を何とか避難させなければならぬ。そう考えていると、ふと絹旗に視線が固定される。見ると、彼女の表情はほんの少しだけ強張っており、その視線は垣根へと向けられている。今、彼女が何のタイミングを見計らっているか、想像するのは難しくなかった。

絶対領域クリアラは軽く舌打ちしながら、静かかつ、迅速に絹旗の近くま

で歩み寄り呟いた。垣根達には聞こえない程度の声で。

「『そつち』はお前がやる必要はねえ。お前の役は逃走経路を迅速に、だ」

「え？　ちよ、何を　」

絹旗の言葉は続かなかった。

それとほぼ同時に、麦野と垣根の会話も途切れる。

その理由は、絶対領域<sup>クリアランス</sup>。チョーカーのスイッチに指を当てた彼は、目の前にあったテーブルを思いきり蹴りつけた。その直後、数十キロはあるであろう重さのテーブルは、垣根に向かって弾丸のように射出される。

バガン！！　という轟音が響いた。

射出されたテーブルは粉々に砕け散ったが、肝心の垣根は傷一つつくどころか、表情の変化すらなかった。

「痛ってえな」

明らかかな余裕のある虚言が、空気を震わせて絶対領域<sup>クリアランス</sup>の鼓膜を刺激する。ゾツと、背中を冷たいものが突き抜けた気がした。

「そしてムカついた。まずはテメエから粉々にしてやる」

格上の言葉に、絶対領域<sup>クリアランス</sup>の体が僅かに強張るも、彼は迅速に壁際へと走る。

それを見て、既に移動を始めていた絹旗が、その小さな拳でサロンの壁を容赦なく破壊した。浜面と滝壺の手を引いて、壊れた壁の奥へと飛び込んでいく。絶対領域<sup>クリアランス</sup>はポツカリと空けられた穴の前で、ほんの一瞬、麦野の方へと視線を戻す。

『アイテム』に所属しているのは不本意から始まったことだが、別に面白くない事ばかりではなかった。今まで友人の一人すら存在しなかった彼にとつて、あんな大人数でファミレスに集まる機会などなかったのだから。

すでに、麦野は垣根との臨戦態勢に入っている。  
何かを呟き、絶対領域クリアランスはその場を後にした。

\*\*\*

浜面と滝壺を逃がした後、絹旗は屋内レジヤ―施設のロビーにいた。何人かの下部組織の男達を無効化し、男達から拳銃やライフルなどを足で遠ざけながら、思考する。

垣根との戦闘を行っているであろう麦野はともかく、自分たちのすぐ後に滝壺達の護衛のため逃走を始めた絶対領域クリアランスまで追ってこないのはおかしい。おそらくは、

(やられちゃったって事でしょうか?)

その答えがイエスであるならば、垣根は麦野や絶対領域クリアランスねじ伏せるのにそう時間はかからなかったという事だ。超能力者レベル5二人をここまで短い時間の中で撃破するなど普通ではない。もしくは、別の構成員が絶対領域クリアランスの足止めを行っているか。どちらにしても、2人の身に危険が迫っていることに変わりはない。

絹旗の頭に、最悪の結果がよぎる。

その時、不意に彼女の顔が、横方向にゴン!!! とブレた。

最初の衝撃を感じた時には既に、二回、三回と同じような衝撃が走り、華奢な体が吹き飛ばされる。彼女はその衝撃に耐えて逆らわず、床を滑って手近な柱の影へ隠れ、すぐに分析を始める。

(……狙撃。どこから?)

衝撃のあつた箇所、つまり銃弾を浴びた箇所は三つ。そのどれもが急所だった。明らかに腕のいいスナイパーだ。絹旗は床に転がっていた、潰れた弾丸を掌に載せる。

(スチール弾……例の磁力狙撃砲ですか。初速が音速以下だとすると、この潰れ具合から察するに、距離は五〇〇から七〇〇)

暗部で培われてきた知識をフルに活用し、絹旗は対応策を即座に練りだす。衣服の懐に素早く手を伸ばし、五本の指の間にあるものを挟んだ。三〇センチぐらいの金属棒の先端に、缶ジュースクらいの金属の塊がくっついたもの。

携行型対戦車ミサイルの弾頭だ。

彼女は上客たちの視線を完全無視して、五本の指で挟んだ複数の弾頭をそちらに向ける。弾頭の尻についていた短い紐を、もう片方の手で掴む。パーティーのクラッカーを鳴らすような、また弓を構えるような動作にも見える。彼女は一息ついて、一気に柱の陰から飛び出すと、スナイパーがいるであろう場所を砕けたウィンドウを通して視線を突き刺す。

その直後に眉間の真ん中へ弾丸が送られてきたが、その程度では彼女の窒素装甲オフエンスアーモアを貫くことは出来ない。彼女はひるみすらせずに、狙いを定めて迷わず引き金を引いた。

シュポン、という栓の抜けたような音と共に、圧縮空気のパワーを受けて、柄から弾頭が射出される。一〇〇メートルほど進むと弾頭の尻が火を吹き始め、爆炎を後方にまき散らしながら五〇〇メートルの距離をあっという間もなく詰めていく。

複数の弾頭はビルの側面に激突すると、ミルフィーユを潰すように爆破した。ビルの全体が倒壊する事だけはかるうじて免れたようだ。耐震構造が優れていたのだろう。

絹旗がスナイパーを撃破できたかと結論付けようとしたその時、

「おーおースゲエな。砂皿すなひらいの野郎、磁力狙撃砲と一緒にグチャグチャになってんじゃねえか？ ま、急いで補充した人員だから、あの程度が限界って感じかもな」

この場には似合わない、陽気な声が飛んできた。

絹旗は警戒心を露わに、音の方へと振り返る。見ると、垣根帝督が通路から出てきた所だった。

「はん、『暗闇の五月計画』の残骸か。難儀アクセラレータだよな。一方通行の演算パターンを参考に、各能力者の『自分パーソナルリアリティーだけの現実』を最適化しようとかって内容だったか」

「……、」

「結果、テメエが得たのは自動防御能力。元は大気制御系の能力っぽいけどな。一方通行アクセラレータの『反射』と同じく、自分の周囲に能力で作った防御フィールドを自動展開するのが限界、か。自分で惨めと思ったことはねえのか」

「別に」

絹旗はあっさりと答えた。

「『プロデュース』の被験者に比べれば超幸せですよ。彼ら。」

バーソナルリアリティー

自分だけの現実』は脳のどこに宿るのかを調べるために、クリスマスケーキみたいに脳みそを切り分けられたそうですし」

求めていた答えと違ったのか、「そうかい」と垣根は興味なさげに相槌をうった。

絹旗は目の前の垣根を警戒しつつ、先ほどから気にかかっていたことを確かめるために口を開く。

「麦野達はどうしたんですか？」

「麦野達？ ああ、『アイテム』の新入りのことか。そっちの方は知らねえよ。麦野の方は、相手にもならなかったな」

微笑しながら、垣根は答えた。それだけで、絹旗は垣根との力の差を認識した。学園都市第四位の超能力者<sup>レベル5</sup>ですら足元にも及ばないと言える人間に、大能力者<sup>レベル4</sup>の自分では太刀打ちできない。

圧倒的な力の差が、明白にされた瞬間だった。

## 5 - 9 圧倒的な力（後書き）

更新遅れて申し訳ありません。

そして、閲覧してくださったみなさん、ありがとうございます。

今回もあまり進展はありませんでした。

このシーンをどうするかで大分迷ってしまっ……。

自分でも納得する出来ではないのですが、どうかお許しを。

今回はとうとう浜面の名シーンです。絶対領域もここに少し絡ませる予定です。

次回もよろしくお願いします!!

5 10 エンカウント（前書き）

「遅くなって本当に申し訳ありませんでした」  
作者 とあるいぬまる

「重ねて申し訳ありませんでした」  
クリアランス  
絶対領域の協力者 花宮 愛花  
はなみや あいか

## 5 10 エンカウト

浜面たちが逃走した直後に絶対領域は壁に空けられた穴から抜けだした。

少し個室サロンで立ち止まってしまったため、浜面たちより遅れ気味になっている。すぐに浜面たちに合流するために、彼が全速力で通路を走り抜けようとしたその時、自分の遙か後方からブーツが床を叩く音が聞こえてきた。一つや二つではない。その音に、絶対領域の体はピタリと止まり、発生源へと振り向いた。

(『スクール』の下部組織の連中か)

今の状況ではそれ以外の可能性が浮かばない。絶対領域は軽く舌打ちする。

浜面たちとは逆の方からの増援。これを無視して浜面たちを追いかけるのは得策とは言い難い。自分や絹旗はともかく、浜面や滝壺は銃弾から身を守る方法を持っていない。合流した後で戦闘を行えば、彼らの負傷というリスクが高くなるだけだ。

こちらのルートの敵を片づけてからの合流以外に、選択の余地はない。

(素粒子工学研究所と、駆動鎧の件で、能力使用モードの方は、残り10分かそれ以下ってとこだな。あまり無駄遣いは出来ねえが……)

緊急時に備えて、常に能力使用モードを最低でも三分はとっておきたい絶対領域としては、下部組織相手に能力は使いたくないというのが本音だ。彼の拳銃の腕から考えれば、工夫次第で時間をかければ訓練されたチームにも勝てる確率は十分にある。自分の保身を

考えればその選択は適しているだろう。

しかし、彼は首筋のチョーカーへと手を伸ばしていく。

「これは無駄遣いじゃねえ」

笑みを浮かべながら呟いた直後、自分の視界に『スクール』の下部組織であろう、武装した男達が視界に入ってきた。ちょうど、通路の角から出てきた形になっていたため、一番前にいた男がほんの僅かな動揺を見せる。

男が冷静を取り戻した時には、すでに男と絶対領域クリアランスの距離はほぼゼロになっていた。

「なっ……」

「失せるよ、クス」

絶対領域クリアランスの細腕が、男の心臓を貫いた。直後、その後ろにいた男達のライフルによる一斉掃射を浴びせられたが、彼にとってそれは脅威になりえるものではない。

「残念だったな。俺の領域じゃあ、銃そいつは役に立たねえよ」

歌うような声で絶対領域クリアランスは告げる。そこから展開されたのは戦闘ではなく、虐殺と呼ぶのが適切なほど、圧倒的なものだった。

\*

「まったく、面倒くせえ」

絶対領域クリアランスはそう吐き捨てながら、指をポキポキと鳴らす。彼は現在、浜面たちの乗ったものとは別のエレベーターの扉の前で立ち尽くしていた。エレベーターは下のフロアにあるらしく、扉はまだ開かない。

彼が目指しているのは、地下の駐車場だ。滝壺や絹旗と一緒に逃げていた浜面仕上という男は、車のキーの開錠スキルにかなりの自信を持っている、逃走には必ず盗難車を使うはずだ。上手くいけばそこで合流ができる。仮に、彼らがすでに逃走を始めていたとしても、安全を確保できた時点で彼らのいる場所まで行くのには自分のバイクを使うのだから、合理性から考えても選択の余地はなかった。思考していると、手前からポンツという歯切れのいい音が響いてきた。それと同時に、目の前の扉が開く。彼は足早に乗り込んで、『B1』と表示されているボタンを叩きつけた。自分以外の乗客などいないため扉はすぐに閉ざされていく。

(ゴキブリどもを潰すのにかかった時間は三分くれえか。だとすると、実質残りは4分間。ハッ、燃える展開にさせてくれるよな)

本来なら、絶対領域クリアランスはここまでやる気はなかった。『アイテム』に属しているのは、守りたい少女の平穩の為に、嫌々というのが本音だ。他の構成員の為に身を削る為ではない。自分ですら、何故ここまでやるうという気になったのか分からなかったが、後悔はない。くだらねえ、と絶対領域クリアランスが呟いたその時、エレベーターが停まった。

上方にあるスクリーンには、『25』とはつきり表示されている。

(……『スクール』か)

今の状況では、それ以外の可能性が見つからない。絶対領域クリアランスは前

方の扉を睨みつけながら、懐から拳銃を取り出した。能力使用モードは流石にこれ以上の消費は避けたい。

視界が扉と共に開いていく。

その直後、絶対領域クリアランスの顔に、怪訝という表情が加わっていった。

その理由は、単純なもの。左右に開かれた扉から、「あら、滝壺理后じゃないのね」という高い少女の声クリアランスが絶対領域の鼓膜を揺さぶったからだ。

絶対領域クリアランスの瞳に映された、十四歳くらいのドレスを着込んだ少女は余裕の笑みを浮かべていた。

絶対領域は、その少女に無言で銃口を向ける。

相手が如何なる者であっても、小柄で華奢な少女であったとしても、彼には容赦するつもりなどない。引き金にかけられた人差し指に、徐々に力が込められていく。

\*

浜面と滝壺は、高速で降下していく鉄の箱の中にいた。

彼のポケットから取り出した開錠用のツールに目を落とし、浜面は思考した。

(……駐車場は地下か。ここら辺のはみんな派手な車だろうけど、迷ってる暇はねえ。エレベーターから一番近い場所にある車を狙って )

浜面の思考はそこで途絶えた。

自分の意思に反して、二五階で止まったことに疑問を感じていると、ドアが左右に開かれていく。

「いたいた」

陽気な少年の声は、浜面に恐怖と絶望を与えた。

## 5 10 エンカウント（後書き）

まずは閲覧していただいた読者の皆さん、ありがとうございます。

遅くなった上に短い内容で本当に申し訳ないです（汗

最近妙に忙しくて……

次回の更新も少し遅れると思います。今月中には定期更新に復帰出来る予定です。

本当に申し訳ありません。

5・11 それぞれの戦いと暗躍(前書き)

「誰だよ」

『アイテム』の構成員 クリアランス 絶対領域

「今言えると思う?」

謎の少女 ????

## 5 - 11 それぞれの戦いと暗躍

クリアランス  
絶対領域は開かれた扉から視界に入る少女を、銃口を向けたまま睨みつける。

見た目は14歳ぐらいの、ホステスのようなドレスを着込んだ少女はおそらく『スクール』の正規構成員。となると、ここで殺すのももつたいない。手足を撃ち抜いて捕縛するのが定石というものだが、相手が『スクール』の正規構成員であるならば話は別だ。凶悪な能力、もしくは能力に頼らずとも戦場で困らないような特技を持っていると仮定して動いた方がいい。そうなると捕縛にかけられるリスクは決して低くはない。もしも相手に命と引き換えに情報提供などという意味がないのであれば、ここで急所を撃ち抜いた方が安全だろう。

彼はあまり期待せずに、口を開く。

「念のため聞くが、俺たちに情報提供する気はねえよな？ 弾がもつたいねえからイエスといってほしいとこだが」

「唐突ね。それだけ余裕がないのはお気の毒に。と言っても私たちのせいなんだろうけど」

「軽口オーケーって言ったか？ 質問に答えろ」

「残念ながら、ノーよ」

そうか、と呟いて絶対領域クリアランスは更に人差し指に力を込める。時間を無駄にした。それだけの話だ。少女の余裕を滲ませた笑みを見て、引き金を引こうとしたその時、

突然、引き金に掛けた人差し指から、力が抜けた。

「拒否してもあなたは引き金を引けない。そうでしょ、『アイテム』の新人さん？」

少女の言葉は疑問形になっているが、その答えはすでに分かっている。暗に言っているのが雰囲気クリアランスに混ざっている。

いつもの絶対領域クリアランスなら、軽く皮肉を交えてとつくに弾丸をぶち込んでいるところだが、生憎、力が入らない。肉体的な意味ではなく、「引き金を引きたくない」と、自分で思ってしまったのだ。その意志は同情からくるものではなく、まるで目の前の少女が自分の大切な人間である為に傷つけたくないという感情からくるものだった。

「て、めえ……、何を？」

一筋の汗が頬を滴り、先ほどまでの余裕が表情から消えている。完全に主導権が少女に渡った瞬間だった。

「悪いけど私も急いでるの。早くリーダーに合流しないとイケないから、手とり足とり説明してる暇はないわ」

「ごめんなさいね、という少女の言葉を絶対領域クリアランスが認識した直後、少女の華奢な体からはとても想像できないほどの、鋭い回し蹴りが彼の鳩尾に叩きこまれた。

いつもの彼であるなら、それぐらいであるならば肉体的にはダメージは大きくとも、気力で立ちあがる事が出来たかもしれない。しかし、理由は分からないが「大切なものに蹴りを受けた」と脳が認識して、彼の気力を削いでいく。視界が揺らいだかと思うと、闇が訪れた。

\*

浜面仕上と滝壺理後の目の前に現れた少年は、『スクール』のリーダーである垣根帝督。学園都市第二位の超能力者だ。対して、浜面と滝壺の能力は無能力者と大能力者。力不足以外の何物でもない。勝利を考えるのは不可能。と、なるとどちらかが囷となるしかない。そして、そういう役は無能力者である自分に回される。何の価値もないから。浜面はつい先ほどまでそう思っていた。しかし、違った。その役は大能力者。である滝壺が選んだのだ。無能力者である浜面を守るために。

それが、浜面仕上という男を変えたきっかけになった。

一度逃げるチャンスを手に入れた浜面は、勝ち目のない戦場へ戻ることを決意した。

その決意は、浜面仕上をヒーローに変えた瞬間でもあった。

\*

どこにでもあるようなただの公園。年齢は低めの子供が集う場所。そこに、不破という少年は存在した。茶色い木製のベンチに腰を下ろし、炭酸飲料で喉を癒すという目的と、もう一つは会話だ。

とは言っても、目の前にその相手がいる訳でもない。

耳に当てられた黒い携帯電話から発せられる『声』が相手だ。

『で、何の用なの？ 今いい汗かいて疲れてたところだから、急いでもらえると助かるんだけど』

面倒くさいという気を全く隠さない高めの声に、不破は肩をすくめた。

別に自分が連絡しなかった訳ではなく、仕事上仕方なく、だ。

「こっちだって連絡したかった訳じゃないんだよ、察しろ。仕事の話だ。お偉いさんがお前の仕事ぶりを確認しろってさ」

『私がしくじるとでも思う？ ……「スクール」にはお世話になったしね』

「だろうな。流石、『スタッフ』唯一の生き残り」

不破は笑いながら言う。明らかに馬鹿にした声で。

その言葉は電話の相手を不機嫌にしたらしく、「チッ」という舌打ちが聞こえた。

『スタッフ』という組織は、簡単に言うと学園都市の暗部の非常時用の補欠のようなものだ。例えば、どこかの暗部組織が壊滅したとする。学園都市のバランスの均衡は一気に崩れることになる訳だ。その為、どこの組織の穴埋めもこなせるように少数で編成された暗部組織を念の為に用意しておく。言うならば保険。それが『スタッフ』だ。

とは言ったものの、ある事情から『スタッフ』の正規構成員は一人だけとなっている。

『もう切るわ』

「ん、御自由に」

『よかったわね、無駄な仕事が増えなくて』

「何？」

『それじゃ』

プツツ、という音と共に、通話が切れた。鋭いな、と不破は苦笑  
いする。

仕事の成功を確かめるだけなら、わざわざ彼が連絡をしなくても  
いい。つまり、彼には別の目的があったわけだ。とは言っても、別  
にそんなに大層なものでもない。もし、電話の相手がしくじったな  
ら、その尻拭いをする人間が必要というだけの話だ。

携帯を懐にしまい、不破は空を見上げた。

「さてと、ヤツらはどうだろうな？」

不破はそう呟いて、缶ジュースで喉を潤した。

\*

「ホント、嫌なヤツ」

どこにでもあるような路上を、少女は歩いていた。  
ピンクの携帯を折りたたみ、高校生ぐらいの少女は盛大なため息  
を漏らす。

幼さの残る顔立ち。肩にかかるぐらいのブラウン・ベージュの髪  
型。白のセーラー服を着込み、その上にクリーム色のカーディガン

を羽織っていた。限りなく普通の格好だが、半端なく短い黒のスカーフが通行人から注目を浴びる。それは彼女も自覚しているが、絶対に見えないよう計算されつくしているものなので、自分からハッピーイベントが展開されることはない。

（『スクール』を管理してたヤツの始末だけが今回の仕事。少し妙ね）

そんな少女もとい、パンチラ絶対防御少女は思考する。

（『ブロック』は鎮圧されたらしいけど、『スクール』の反乱はまだ続いている。なのに、私の仕事がこれだけっていうのは……）

『スクール』には『アイテム』が対抗しているらしいが、彼女には正直『アイテム』が勝てるとは思えなかった。理由は第二位の超能力者<sup>ベル5</sup>。

となると、自分や他の暗部組織も『スクール』鎮圧に加わるだろう。そう思っていた少女としては、違和感を感じずにはいられない。

（今考えても分かるはずないか）

少女は眉間に寄せられたしわを消し、微笑を浮かべた。

（休める時は休むのが当たり前。文句は誰にも言わせない）

少女は思い浮かべる。至福の時を。

5 - 11 それぞれの戦いと暗躍（後書き）

まずは閲覧して下さった皆様、ありがとうございます！

あまり進展なしです。すみません（汗

次話でこの章も中盤終了になる！、はず。

今回はほとんど、新キャラの登場の為だけのものです。

この人物も不破と同じで結構重要になってくる予定です。この章ではそんなに出てきませんが。

次回もお楽しみに

5 - 1 2 協力体制（前書き）

「誰か噂してるのかも」

サイドシリーズ  
第三次製造計画の成功作

プロトワーラスト  
初期番外

「暇なのは分かるけど今は我慢」

クリアランス  
絶対領域の協力者

はなみや  
花宮

あいか  
愛花

## 5 - 1 2 協力体制

「痛ツてえな、クソツ」

降下していくエレベーターの中で、クリアランス絶対領域は顔を歪ませながら  
呟いた。

『スクール』の正規構成員であろう少女に気絶させられた後、彼女は御丁寧にもエレベーターで彼を最上階まで運んでくれたらしい。とどめをさされていない所を見ると、舐められていると受け取るのが妥当だろう。携帯で時間を確認したところ、気絶していた時間はそう長くはない。

クソツ、と吐き捨てた直後、小気味良い電子音が彼の鼓膜を揺さぶった。

(あいつらが今も逃げてられんらしいが)

モニターに視線を向けると、B1とデジタルな表示がされていた。それを確認した彼は、左右に開かれた自動ドアをくぐり、駐輪所へ停めてあるネイキッドバイクへと向かう。

(俺たちを襲撃した理由はおそらく滝壺。殺られちまっても、おかしくはねえ。むしろそっちが自然と考えるべきだ)

眉間にしわを寄せた絶対領域クリアランスはバイクのシートにまたがると、携帯電話を取り出して耳に当てた。焦燥が胸を満たす中、コール音が彼の鼓膜を揺らしていく。

\*

『アイテム』の正規構成員の一人、絹旗最愛きぬはたさいあいは薄汚れ気味の地面に倒れていた。垣根帝督との戦闘でスタミナを根こそぎ奪われた結果だ。

一度気を失い、次に目を覚ました時には浜面の凍りついたような表情と、明らかに普通ではない滝壺が視界に入った。たったそれだけで、彼女は大体の事情を理解した。理解した直後、一瞬の迷いもなく、浜面たちに遠まわしに逃げるよう言った。

(……麦野達の方は大丈夫でしょうか?)

絹旗は同僚の超能力者レベル5二人を思い浮かべる。垣根たちが自分や浜面たちを見逃したことから、おそらく生きてはいるだろう。しかし、自分のように行動不能にされているとしたら、事実上『アイテム』は壊滅状態だ。『アイテム』構成員の彼女としては、あまりいい気分はしない。

心の中で毒づくくと、不意に懐にしまつてある携帯が鳴った。

指一本動かすだけで痛む体に顔を歪ませながら、携帯のディスプレイに目を向け相手を確認すると、何とか通話ボタンを押す。

「……なんですか、絶対領域クリアランス。超手短クリアランスをお願いします」

『今話してるってことは、殺られてはいねえみたいだな』

珍しく多少の気遣いが見られる言葉に少し驚きながらも、絹旗は絶対領域クリアランスの声に聴覚を集中させていく。

『お前と一緒に逃げてた浜面たちの方はどうなった?』

「ここからは超脱しましたよ。ついさっきの話です」

そうか、と絶対領域クリアランスの呟く声が聞こえた。そんな事を聞いてくるという事は、絶対領域クリアランスはまだ動けるだけの力はあるはずだ。最悪の状態は防げたらしい。

とはいえ、これから『スクール』を鎮圧するというのは難しいだろう。『アイテム』の核は自分でも、超能力者レベル5の二人でもない。滝壺だ。

学園都市でも珍しいサーチ系の能力者。今までは彼女のおかげで常に先手を打ててきたのだから。その滝壺が退いた今、『アイテム』には『スクール』の位置すら掴めない。

仮に相手の位置がつかめたとしても、今の『アイテム』には『スクール』を鎮圧できるだけの力もない。

『で、お前は？』

「残念ながら超動ける状態ではありませんね。救急車待ちです」

『そうかよ。そいつはお気の毒に。病院食は上手くねえぞ』

その言葉を聞いて、絹旗は目を見開いた。彼が『アイテム』の構成員になった時から感じていたが、『暗闇の五月計画』で顔を合わせた時はこんな軽口を言うキャラではなかったはずだ。

「冗談とは超似合わないにも程がありますね、絶対領域クリアランス」

『……やべえな、アイツの影響か？』

妙に切迫感のあるその声に、絹旗は口元を緩ませた。

「しかも超笑えないです」

『忘れる。一生で最後の頼みだ』

\*

「……休みって言われたばっかなんだけど？」

先ほ携帯越しに不破と話していた少女は、再び路上で携帯を耳に当てていた。額に青筋が立っているように見えるのは、おそらく気のせいではないだろう。

「冗談やめてよ。私はこれからスイーツ食べ歩きの旅に出るって決めたの。この鋼の決意を揺るがすなんてあり得ない」

『じ、自分にそう言われましても』

電話の向こうの相手は少女の所属していた組織、『スタッフ』の下部組織の人間だ。明らかに困惑している雰囲気か声を通して伝わってくるが、彼女には知ったこっちゃないのである。

『上の人たちの指令ですし……』

「シュークリーム以上の価値があるとは思えないっていうのに……」

少女は額に片手を当てて、嘆息する。暗部の仕事というのは「こ

れからスイータイムなんです」をいい訳に断れる仕事ではない。一応最大限の手は尽くしたが（上層部の人間の着信を確認と同時にブチる）、結局自分が妥協するしかなさそうだ。

「で、仕事って何？」

『そこを何とか……、って聞いてくれるんですか！？』

「あなたのせいじゃないしね。それより内容を」

『え、はい。数分前に『スクール』の手によって『アイテム』が大きな打撃を受けました。『アイテム』だけでは『スクール』の鎮圧は不可能に近い状況です。そこで』

「私がサポートを？」

下部組織の男の声を、少女が引き継ぐ。正直こうなるのではと思っていた。垣根帝督とまともにもやりあえる相手など、学園都市第一位の一方通行アクセラレータぐらいだろう。一方通行アクセラレータでさえも、あくまでまともにもやりあえるだけであって、勝てる相手ではないのかもしれない。

『アイテム』の面々もかなりの力を持っているが、垣根には遠く及ばないだろう。

「了解したわ」

そう言っって少女は一方的に通話を切る。彼女はそのまま空を見上げて、太陽の光で眩しそうに眼を細める。

（私みたいな、しがない大能力者レベル4じゃサポートになるか分からないけど）

少女は憎々し気に前を見つめ、歩きだした。

「ダブルパイシュークリーム……」

その眩きは、誰にも聞かれることもなく、空しく溶けていった。

## 5 - 1 2 協力体制（後書き）

遅くなって本当に申し訳ありません。次回からは通常通りにできそうです。

今回はいわゆる準備期間の話です。

この章もついに終りに近づいてきました。

さりげなく、絶対領域が初期番外から受け始めている影響というのはファミレスの時点で入れてたんですが、今回ではつきりさせてみました。

本遍ではなかなかありませんが、2人とも基本病院にいるため、会話は結構あります。

そして、新キャラの絡みも少々。

次回もお楽しみに

5 - 13 待ち時間（前書き）

「一か月近くも遅延してしまい、申し訳ありませんでした」  
作者 とあるいぬまる

「待たされるのってホントに腹立つわよね」  
『スタッフ』の元構成員 ????

## 5 - 13 待ち時間

絶対領域クリアランスは一度、某ホテルの一室にこもり、電極のバッテリーを充電していた。浜面たちがまだ生きているとはいえ、『アイテム』は壊滅したも同然の状況だ。とは言っても、『アイテム』構成員としてやるべき事をしなければならないという状況は変わらない。

別に積極的に上の役に立ちたいわけではないが、余計な失態で上に目をつけられ、さらに弱みに付け入られるのはあまり面白くないというだけだ。

そのような理由を持つ身としては、すぐに行動を起こしたい訳だが、

(……どう動けばいい?)

問題はそこだった。今までは『アイテム』のリーダーである麦野の指示に従っていただけである為、これからのアクションの起こしようがない。とは言っても、上の情報を待っているだけというものもあまり使いたくはない手だ。情報が送られてくるなどという保証はどこにもないのだから。

絶対領域クリアランスは首元の電極を人差し指で叩きながら、ゆっくりと目を閉じる。

(考える。ヤツの今までの行動から、ヤツが何を求めてやがんのか)

トントンと、電極を叩く人差し指が早くなる。

(クーデターを起こしたからには、学園都市に不満があるからだ。だとすると、狙いは学園都市の壊滅か、もしくは自分に都合のいい

存在にすること。おそらくは後者だろうがな)

一度、冷静に思考を繰り返すことにより、徐々に答えに近づくはずだ。

(学園都市を手中に収めるには、どうするか?)

そこまで思考が至り、微笑を浮かべる。

(簡単だな。統括理事長との『直接交渉権』を手に入れればいい。ハッ、その為の『ピンセット』かよ。だが、それだけで統括理事長の野郎は出し抜けられねえだろ。俺がもし狙うとしたら……)

電極を叩く人差し指の動きが止まり、瞼を薄く開く。

(実際に『直接交渉権』を持つてる野郎、一方通行を殺る。とんでもねえな、オイ)

絶対領域は椅子からゆつくりと立ち上がり一度も振り返ることなく部屋を出た。彼としては珍しい、苦笑を浮かべながら。

垣根帝督が一方通行にただ挑むだけとは思えない。これまでの垣根の行動から見ると、その性格・趣向は大体読めてくる。徹底した陽動、最低限の応戦、危険要素への対応。

つまりは、『保険』を徹底しているのだ。学園都市第二位という他を凌駕する力を持ちながら、自信は持っても驕りはもたない。それが垣根帝督。

(一方通行の弱みぐらい、垣根の野郎は知ってた。野郎が狙うのは打ち止め……。つまり、打ち止めのいるところにはあの野郎が)

思考が核心に迫りそうなその時、不意に絶対領域クリアランスの鼓膜を何かが揺らし、その思考は断たれた。『トントント』という小気味良い音。扉をノックする音だ。

「……つたく」

肩をすくめて溜息を吐きながら、絶対領域クリアランスは拳銃を手にして、音源の方へと静かに向かっていた。

\*

同時刻某ホテルの一室である扉をノックする音が、気持ちよくホテルの廊下に響いていた。

「あれー？ 出てこないな。ここって聞いたんだけど」

ノックの音に混じりながら、少女の高い声が空気を揺らした。幼さの残る顔立ちと、肩にかかるくらいのブラウン・ベージュの髪型。白のセーラー服を着込み、その上にクリーム色のカーディガンを羽織っていた。そして、『校則など知ったことか！』と言わんばかりに主張されたぶつちぎって短い黒のスカート。男性の視線を集めるのには定評？がありそうな風貌だ。

学園都市の暗部組織の一つ、『スタッフ』の正規構成員であった少女、『恒町由里つねまちゆり』は額に手を当て、溜息を吐いた。

その少女は「うーん」と呟くと、自分のいるフロアの廊下を見渡す。見たところ、恒町の他に人はいない。

『ぶちやぶつて中確かめるのはいくら何でもなあ……』と、物騒なことを呟くも、それを実行するのはいささか気が引ける。守ってもらつ系ヒロイン（自称）の身の恒町由里しほまちゆりとしては、そんな自分の品格を落とすような真似をするよりも、スイーツ食べ歩きの旅へと今すぐレッツゴ したいわけなのだが生憎仕事なのでそうもいかない。

この条件からもう、かなり選択肢が狭まっている。

しばらくして、恒町は意を決したかのように大きく息を吸いこむ。

「ちよつと、中にいる人！！ 開けてつて、ホントお願い！！」

大声で叫びながら、扉をノックする音が「トントン」から次第に『ドンドン』に変わっていく。結局自分の品格を落としているのだが、扉をハイパワーで吹き飛ばすよりはマシなはずだと彼女は自分に言い聞かせる。

それでも、扉はまるで開く気配がない。

この時点で、恒町のメンタルは『もう無理、マジ無理！』と言っているのだが、軽いようで根は真面目（自称）の彼女としてはそう簡単に仕事を引き下がれない。

彼女の任務は『アイテム』の今すぐ動ける者と合流、その人物のサポート。

上の人間によると、リーダーの麦野沈利むぎのしずりとフレンダは連絡が取れず、絹旗最愛きぬはたさいあいと滝壺理后たきつぼりこうは戦闘不能。正規構成員で動ける者は、絶対領域リアランスという少年だけだ。

その少年がこのホテルの一室にいるという情報が上から流れてきて、今に至る訳だ。

恒町ががくりと頭を垂らし、羞恥と怒りでメンタルが崩壊を迎えそうなの時だった。

不意に、ガチャリという音が聞こえた。

まさかの展開に、パツと顔を上げ目の前の扉に目を移す。この野郎と言わんばかりにその扉を睨みつけながらも、やっとの進展に恒町は顔を輝かせた。

その数秒後、ギイという何かがきしむような音と共に、扉が僅かに開いた。その瞬間、恒町は口を開きそして、

「……、は？」

茶髪の少年に拳銃を向けられて、固まった。

### 5 - 13 待ち時間（後書き）

まずは閲覧してくださった皆さん。本当にありがとうございます。そして、こんなに長くお待たせしてしまい、申し訳ありませんでした。> m ( ) m <

いわゆるスランプという奴に入ってしまった……。行き詰りに行きづまってしまつて負のスパイラルが色々。

次話の更新予定も今のところ未定です。

今回の話は新キャラ『恒町彩香』の見せ場？回でした。このキャラは自分では超お気に入りキャラでして。

絶対領域とは対極のキャラ設定を基本のコンセプトとして、『人間味、喜怒哀楽がハッキリしている』というキャラに落ち着かせました。

ある方の感想の返信の際にも申したのですが、当初は恒町が主役の作品を作るつもりでもありましたが、色々あつて絶対領域が主体の話に。

元は主人公の恒町にも注目していただけるとありがたいです。

それでは、次回もよろしくお願いします！！

5 - 1 4 情報(前書き)

「あんまり出しゃばんな」

『アイテム』の構成員 クリアランス 絶対領域

「黙ってる」

『フルバード』の構成員 ふわけんが 不破憲我

「そういうことか」

某ホテルの一室に存在するベッドに腰かけながら、絶対領域は怪訝そうに口にしながら、自分と同じくベッドに腰かけた少女、恒町を睨みつける。

彼女はその視線を特に気にすることなく、髪の毛先を指でいじりながら、

「そういうこと。それでああなたのサポートに来たら銃口向けられてビックリして、状況説明するためにベッドに腰かけて今に至るって感じ」

「どう？」と恒町は絶対領域クリアランスに問いかける。

恒町と名乗る少女が言うには、彼女が所属していた『スタッフ』という非公式任務に携わる組織が壊滅状態に陥ったらしく、『スタッフ』で現在動けるのは恒町だけの状況になったらしい。

単独行動を強いられることになった彼女は、一仕事終えた後に、『アイテム』のサポートを即座に命じられた。

話の筋自体は通っているが、信用する根拠はない。とはいえ、彼女がもし自分の敵であるならば、襲撃のチャンスはいくらでもあった。

(……信用、できるのか?)

眉間にしわを寄せながら、絶対領域は恒町の目を見つめる。

その視線からこちらの考えていることを感じたのか、恒町は肩をすくめる。

「まあ信用なんて出来ないでしょうし、すべきでもないよね。こ  
つちの世界でそんな不用心な真似してたら命がいくらあっても足り  
ないでしょうし」

言いながら、恒町は苦笑いを浮かべる。

「それでも、どうする？ 舞い込んできた助けの手を払ってもい  
いけど、こんなチャンス無駄にして、あなたにその後のプランはあ  
るの？」

「……」

ないに決まっている、と絶対領域は額に手を当てた。

垣根の目的に検討をつけはしたが、具体的な対応策はなさそうだ。  
そんな状況で、怪しいからパスなどと言って助けの手を払いのける  
のはどう考えても得策ではない。

しばらく沈黙が続いた後、それを破るように絶対領域はため息を  
ついた。

「一応は信用してやるが、妙なマネしやがったら」

「ぶっ飛ばす？」

恒町が言葉を引き継ぎながら、先ほどの苦笑いとは違った余裕の  
ある笑みを作った。絶対領域（クリアランス）はそれを見て軽く舌  
打ちするが、恒町が気にする様子はなく、笑みを崩すつもりはない  
らしい。

「分かってんならそれでいい。で、恒町、だったか」

「何？」

「お前、偉そうにサポートなんて言ってるからには、それなりの情報ネタぐらいもってきてんだらうな？」

「ああ、そのこと」

当然と言わんばかりに、恒町つねまちは豊かとは言い難い胸を張り、トン、と拳で胸を叩いて言った。

「そりゃあ、ね。『スタッフ』だってそれなりの組織だし、バツクアップは充実してる。それに、今『スタッフ』で動けるのは私だけだから、情報も私に集中するからね。でもそれを言う前に、一つ確認したいことがあるんだけど」

そこで、不意に恒町つねまちは笑みを崩して、絶対領域クリアランスに警戒の眼差しを向け、

「ホテルで男女二人きり。確かにそそられるシチュだけど、ムラツとこられても困るから。」

「……」

「……いや、冗談だって。そんなリアクションされても困るし」

\*

表向きは第十九学区蒸気機関研究所。絶対領域クリアランスの襲撃事件が起きるまでは、ラスカーを主任として多種多様な兵器が開発されていた。その施設に、その少年『不破憲我ふわけんが』は存在していた。

わざとらしくコツコツと足跡を響かせ歩みを進めながら、若干の苛立ちを滲ませて目の前にいる男を睨みつける。

その男は震えながら自分に拳銃を向けているが、無駄な事だと分かっている。

銃弾のような単純な原子の塊では自分の領域を破壊することなど不可能だ。

「と、止まれ！ それ以上進むと撃つぞ！！」

「分かってる」

言いながら、不破はどんどん男との距離を詰めていく。対して、男は迷わず引き金を引いた。

銃声が、空間に響きわたる。

放たれた弾丸は空気を切り裂き、不破の心臓をくりぬく直前で、重力に身を任せて落ちた。

「な……」

予想と反する結果に男は目を見開く。

驚愕と焦燥が頭の中を一瞬で支配し、直後に別の感情が湧き出てきた。今すぐ身を翻し、この少年からとにかく距離をとりたいが、生憎体が震えて思うように動かない。

それをあざ笑うかの如く、不破は止まらず進み続ける。

「余計なおしゃべりは省くでしょう。今のところ、俺にはお前を殺す必要性が見つからねえ。つっても、この後のお前の選択によっては生かす必要もなくなる。むしろ殺さなきゃならなくなっちゃうかもな」

言うが否や、不破は最も男に殺意を伝えやすい形を作る。

懐から取り出された鈍く光る拳銃を突きつけられた男の震えがさらに増すのを見て、不破は微笑を浮かべて言った。

「まずは一つめの質問だ。『綴つづり 慶嘉けいか』という男を知っているな？」

「い、あ、ああ……」

未だに震えの止まないその男は、コクリと頷いた。それを見て、不破の笑みは深くなる。

(……こ、この反応なら、いける?)

男は不破の笑みから一瞬にして、自分に都合のいい筋書きを作り始めた。

目の前の少年が求めているのは情報。

貴重な情報源が自分である今、少なくともすぐに殺されることはないはずだ。

男の筋書きが完成し、内心で笑みを作ったのとほぼ同時。不破が拳銃の引き金に指をかける。

「なッ、ま、待てよ！ 俺を殺したら情報も何も」

「お前は綴つづと共に、『スクール』に手をかしたな？ それくらい分かってる」

「ッ!？」

知っている。目の前の少年はすでにある程度の情報を握っている。ということは、だ。この少年が自分のところに現れたのは情報を取り出すためではない。

「お前はあの襲撃事件を利用して、ラスカーの『H S G A M - 01』出撃コードを奪い、『アイテム』の連中に差し向けた」

「ち、ちが……」

「今さら否定しても意味はない。最初の問いにイエスと答えた時点で、結末は決まったんだよ馬鹿が」



5 15 激突（前書き）

「残念だねえ」

サイドサイズ  
第三次製造計画の個体 プロトワースト  
初期番外

「サイズか？ サイズのこと言つてやがんのか？」

『スタッフ』 正規構成員 『つねまちゆり恒町由里』

5 15 激突

(……やっぱ乳か？ 乳が足りないってかッ！)

恒町は顔を曇らせながら、自分の胸元に目を向ける。

別に本気で誘おうとしたのではなく軽い気持ちで言ってみただけだが、仮にも女性のああいう発言に対しての反応がここまで冷たいものだとは思わなかった。それなりの反応というモノがあるだろう。

何が足りなかったのか？

そう自分自身に問うとほぼ同時に胸という答えに行き着く自分の思考回路。視線を胸に向けるとそこにあるのは残念なサイズ。

自覚は高校生になってから芽生え始めていたが、いざ向き合つとなると結構キツイのだ。

「……まだまだ。牛乳と腕立てのダブルパンチで……」

「ああ？ 何か言ったか？」

「いや、別に何も」

コホンと、と咳払いをして恒町はまた神妙な顔つきに戻る。

「それでさっきの話の続きだけど、情報って言うのは残念ながら垣根のことじゃないからね」

「あ？」

怪訝そうな視線を向ける絶対領域に、恒町は「まあまあ」と片手で制しながら、

「垣根の方は別の部署が何とかしてくれる。私も詳しいことは知らないんだけど、上層部はすでにヤツの行動を掌握してるみたい。推測じゃなくて決定事項として。どんな技術を使ったのかも知らないけどね」

「それでも俺たちは垣根をスルーしろってか」

そういうことかと、絶対領域は鼻で笑う。

垣根帝督かきねていとくに自分たちがこれ以上関与しない。これが意味していること。

つまりは、『スクール』以外にもこの機に乗じた輩がいるという事だ。今の暗部組織の乱れをどこからか察知した外部の諜報員、自分たちと同じ暗部組織か、もしくは組織とも呼べない少数で動く学園都市の闇か。

前者である確率は低い。

となると、必然的に学園都市の暗部に属していたものと敵対する訳だ。たった二人だけで。

「面倒くせえな。目障りな虫けら潰しでもやってるって言うのかよ」

「そ。多分今あなたが考えている事は正解。これから私たちがやることは面倒くさいハ工叩き」

恒町は頷き、嫌悪感を滲ませながら言った。

「『スタッフ』の裏切り者『綴慶嘉』。『スクール』の連中に

手を差し伸べた、性根の腐ったクソ野郎が標的<sup>ターゲット</sup>」

\*

同時刻。

その少年は誰も見向きはしないであろう廃ビルの屋上にいた。身にまとう白のロングコートが風に揺られる。

「あいつから連絡が途絶えて十分ジャストか。もう生きてはいないだろうな」

どこか諦めたような声音で、少年『綴<sup>つづら</sup> 慶嘉<sup>けいか</sup>』は空を見上げる。

綴の言う『あいつ』とは、自分と同じくこの学園都市に反旗を翻すと決意した男の事だ。その男の主な役割は、特殊軍事兵装開発責任者『ラスカー・ハンコック』の私軍とも言える駆動鎧<sup>バウードスライツ</sup>の攻撃コードを奪い、『スクール』に提供することだった。そうする事で『スクール』の垣根帝督がこの街を手中に治めた際に、自分たちもおこぼれを頂けるようにと考えた訳だが。

その協力者からの定期連絡が十分前から途絶えたままなのだ。

もちろん、こちらから呼びかけるような真似はしない。

脱落者を放っておくのはこちらの世界において常識とも言えることだ。

「『スタッフ』の方も殲滅は出来なかった。僕が裏にいることも、恒町からの報告で上層部は握っているんだろう。……ここまですか」

垣根帝督の革命の際に自分に与えられた役目は、『スタッフ』という組織の正規構成員を全員殺害する事だった。

何故その役目を自分が与えられたのか。

それは、自分が元『スタッフ』の正規構成員であったからだ。情報はいつでも入手できる。

『スタッフ』の所有する隠れ家も大体は特定できる。そして何より、まったくまでは言わないが警戒されない。

条件は整っていた。

皆殺しはそう難しい話ではなかった。『恒町由里』つねまちゆりというイレギ

ユラーさえ存在しなければ。

彼女の能力『迎撃空刃』インタースェットに自動演算による反射的な防御機能がついていると知ってさえいければ、二人も逃すという失態は犯していないはずだった。

「僕はもう逃げられない。それくらいは分かっている。だが……」

自分の協力者は殺された。次は自分の番だ。

一応、ラスカーから出撃コードを奪い取った特殊な駆動鎧パワードスーツは手元に置いてあるが時間稼ぎにもならないだろう。

それでも、だ。

彼にも意地というモノがある。

「悪あがきはさせてもらおう。その結果これまでに感じたこともない苦痛が伴う事は百も承知の上でな」

見上げた空から視線を足元に移し、綴は悟ったような乾いた笑みを浮かべた。

\*

10月9日 19:52分

空も深い藍色に染められ始めた頃、二人の少年少女は目の前の廃ビルを見上げた。

こうなる以前はデパートとして扱われていたであろうその廃ビルのシャッターは不自然にも全て閉じられている。

「こんな場所に、その綴って野郎がいやがんのか？」

少年 クリアランス 絶対領域は眉をひそめ、隣の少女 つねまちゆづり 恒町由里に目を向ける。

目の前の廃ビルは明らかに籠城するのに向いていると思えない。自分のように特殊な能力チカラを有していなくとも、力づくで何とか出来そうな場所だ。

いや、そもそも籠城という選択肢を選んだことも不可解だ。そんな事をするぐらいなら、確率は低くとも学園都市外に脱出する事を考えた方が懸命だと思っただが。

クリアランス そんな絶対領域の思考を読み取ったのか、恒町は苦笑いを浮かべる。

「逃げられないって悟ったんじゃないの？ 逃げ際に背中を貫かれるよりも、戦って誇り高い死を選ぶ！ 的な考え」

「本当にそうだとしたら馬鹿確定だな」

「や、私もそう思うけどそれぐらいしか」

その言葉は続かなかった。

ゴドーン！ という轟音とが響き、閉じられていたシャッターの一枚が内側から盛り上がったかと思うと、尋常ではない勢いで吹き

飛ぶ。

粉塵が廃ビルの内から外側の空気に流れ込んできた。

「……そういうことね、納得。こっちは任せたわよ。私は綴を抑えるから」

「ああ。どう見てもコイツは俺向きだ」

二人の視線が向けられた粉塵の立ちこめるそこに、影がうつすらと見える。

明らかに人間のそれではない。

おそらくは、パワードスーツ駆動鎧の系統だろう。

「死なないように、気をつけて」

「誰にモノ言ってるやがる？」

直後、クレアラランス絶対領域は地を蹴った。

## 5 15 激突（後書き）

まずは閲覧してください。たみなさん、ありがとうございます。><）  
—）<

暗部抗争編もおそらくは後2、3話で終わるだろうと思います。

垣根との戦闘も考えてはいたんですが、次章かその次の章でのある事実を示すためには、垣根と一方通行の戦闘のところはなるべくいじらずにという事で落ち着きました。

そして、綴の再登場。

二章で彼の生死をはっきりさせなかったのは、こつやって出そうか出すまいか迷っていたからで（焦

次回からは戦闘回です。

お楽しみに

5 - 16 終わり始まり（前書き）

「僕の扱いはもう少し華があってもよかったんじゃないか？」

『スタッフ』の裏切り者 綴慶嘉つづりけいか

「しょうがないでしょ」

『スタッフ』 正規構成員 恒町由里つねまちゆり

## 5 - 16 終わり始まり

電極に軽く触れて能力の加護を取り戻したその瞬間。  
チカラ

クリアランス 絶対領域は光子反射により一気に加速した。未だ粉塵に包まれるそのシルエットとの距離を一瞬で詰め、同時に右腕を思いきり振りぬいた。

刹那。

拳が完全にシルエットを捕え、光子反射によりそれを吹き飛ばす。ほとんど音もなく飛ばされたソレは、あっというまに向かいの壁面を突き抜ける形で人気のない路上へとその身を送りだされた。

（機体の装甲はセラミック・チタン系の複合装甲か。それさえ分かれば後は組み替えだけだ。次に触ればゲームセットだな）

一瞬の接触で敵の機体構成を完全に把握した絶対領域は、クリアランス 吹き飛ばされた敵を追うべく、もう一度光子反射で風穴のあいた壁面から路地へ出る。

見ると、それは光子反射による衝撃のダメージはほとんど無いに等しいといわんばかりに二本足で立ちあがった。

その結果に、絶対領域は僅かに眉をひそめる。  
クリアランス

念のために追い打ちにやってみたが立ち上がるとは思っていなかった。あれほどの速度で壁面に打ち付けたのだ。装甲は傷つかずとも搭乗者の全身の骨が砕けて即死していてもおかしくないのだが。

しかし、目の前の駆動鎧は何事もないかのように二本の足で立った。  
バードスーツ

それが意味する事。それは、

( …… AI制御の無人駆動鎧<sup>パワードスーツ</sup>。面倒くせえ )

噛みつくように、絶対領域<sup>クリアランス</sup>は駆動鎧<sup>パワードスーツ</sup>を睨みつける。

『 H S M R 01 ホーネットトラプター 』

それがこの駆動鎧<sup>パワードスーツ</sup>の名称だった。

機体の背部、両肩に一つずつ円盤型の『翼』を有している無人型の駆動鎧<sup>パワードスーツ</sup>。人間が搭乗しないため重力を全く考慮しない空中での高速移動を可能にしたラスカー製の機体だ。

しかし、この『 H S M R 01 ホーネットトラプター 』最大の特徴はそんな事ではない。

通電により作動する高分子繊維を用いた人工筋肉のアクチュエータを使用している事により、一つの駆動系で複数種類の動きを可能とし、生物のような迅速で複雑な動きを滑らかに実現しているのだ。つまり、人間のように動く機械である。

<sup>クリアランス</sup>絶対領域の敵意の込められた視線を向けられた直後、ホーネットトラプターは『翼』を輝かせる。

『翼』から生み出された力場により、ホーネットトラプターは一気に高度を上げた。

空中こそ、ホーネットトラプターの領域。あのような路地では自身の真価を発揮できないとAIが判断した結果だった。

「 ……面白えな 」

その飛翔を視界で捉えていた絶対領域<sup>クリアランス</sup>は口角を吊り上げた。

明らかに普通の駆動鎧<sup>パワードスーツ</sup>とは格が違う。暗部の軍事技術を集めた末の兵器<sup>チャ</sup>。

壊<sup>チャ</sup>りがいがある。

「スクラップにしてやるよクソ野郎」

言葉が口からでるとほぼ同時に、クリマランス絶対領域も一瞬で高度を上げた。

ちょうど、ホーネットトラプターと正対するように。

\*

「……随分と喧嘩っ早いよね。分かってた事だけど」

未だに粉塵が空気に漂う空間を見て、恒町は顔を歪める。

あの様子では、案外決着は早いだろう。いかに先ほどの駆動鎧バワードスーツのスペックが高くとも、一超能力者（レベル5）の壁は越えられるはずがない。

あちらの方は心配なさそうだ。

問題はこちらの方。

粉塵が徐々に晴れてきて視界も良好になりつつある空間を改めて見渡すと、予想以上に遮蔽物が多い。書店に並べられるような倒れた本棚、カウンターなど。そして、そのどれもが恒町の腰より若干高いぐらいの高さしかない。つまり、かがまなければ視界は中々に良好な訳だ。

状況を確認して恒町は肩をすくめ、スカートの中に手を伸ばした。太腿に巻きつけられたホルスターから黒光りする拳銃を手にして、

「まさにあなたが好みそうな戦場ってやつじゃない？ じゅうりょうが綴慶嘉！」

自分以外に人影のない空間に高い声が響きわたった。

直後。

まるで恒町の言葉に同意するように、銃声が響いてきた。無論、恒町が引き金を引いたわけではない。

明らかに第三者だ。

どこから放たれたかも分からない弾丸が螺旋状に空気を引き裂き、背後から恒町の心臓を貫く直前。

弾丸は、恒町とは見当違いの方向に偏向された。

「そこッ！」

銃声から大体の発射地点に見当をつけた恒町は、瞬時に振り向き引き金を引いた。すでに安全装置が外されたその拳銃が軽くはね、そのまま空気を引き裂きながら壁面へと突き刺さる。

その結果に恒町は軽く舌打ちしながら、本棚の陰に身を隠した。

どうやら外したようだ。

( やっぱり精神系能力者ってのは厄介ね。 どうでる？ )

思考しながら、恒町は本棚の陰から顔だけを覗かせる。やはり、今自分に敵意むき出しの弾丸をくれた相手であるう人物 綴の姿は見当たらない。

彼の能力は『フェイントセンス意識外向』。精神系能力者の中でもトップクラスのモノだ。

ボクサーなどによくある現象として、試合後にその試合に関する記憶を失くしてしまうという事がある。許容範囲を超える恐怖や痛み体験を肉体が拒否して脳が削除してしまうからだ。

それと同じような現象を引き起こすのが彼の能力で、対象に自分

の姿を、自分の声を、自分の行動を強制的に意識させなくさせる事ができる。

(私の『迎撃空刃』<sup>インターセプト</sup>で見境なしに攻撃してもいいけど……。時間  
の無駄ね。綴のヤツにそんな攻撃が当たるとは思えないし)

どうしようかしら、と恒町が呟いたその時、

「らしくないな恒町由里。<sup>つねまちゆり</sup>本棚の陰で震えて時を過ごす、か。お前の容姿なら絵になるだろうが、僕から見れば哀れなだけだぞ」

「ッ！ 言ってるッ！」

能力をあえて解除した綴の声が鼓膜を揺らし、遮蔽物の陰から出た恒町は音の発信源に銃口を向け引き金を2回引く。

しかし、その弾丸は二発とも再び空を切った。

すでに居場所を変更していた綴も返す刀で銃の引き金を引くが、放たれた弾丸はまたしても不自然に偏向され恒町の皮膚を削ることすら許されない。

彼女の能力は『迎撃空刃』<sup>インターセプト</sup>。大気制御系能力ではトップクラスに位置するモノだ。

気流の強さ・方向、空気圧の調整などを自由自在に行える。

学園都市ではメジャーな能力の一つ『風力使い』<sup>エアロシユーター</sup>や『空力使い』<sup>エアロハンド</sup>と近いモノだが、彼女の場合は並はずれた演算展開のスピード、正確さによりそれらとは全く違った戦闘への応用が可能なのだ。

その一つが自分に害を与えるものへの反射的な自動防御。

例えば、音速に匹敵する銃弾に照準を定め弾丸の側面に気流の推力を生み出し偏向する、など。

つまるところ、2人とも拳銃レベルの脅威では屈する事が出来ない。綴に逃走という選択肢がない今、この戦いは延々と繰り返される。

(このままじゃお互い消耗戦になるだけ。どうすれば )

「この長引くだけの戦闘は退屈か恒町」

思考を遮るように、またしても綴の声だけが空間に姿を現す。

「ええそうね。分かっているなら早めに出て来てくれると助かるんだけど」

「ハハっ。そう焦るな。……とは言え、確かにこのままじゃつまらない。ここで一つ、この戦闘に変化を与えようか。そうだな。お前の痛みに歪められた顔なんていいんじゃないか？」

「何を言って」

その言葉は続かなかった。

直後、恒町の鳩尾が不自然に凹み、肺から空気を奪われる。数瞬後、激痛が彼女を襲った。

\*

先に動いたのは絶対領域クリアランスの方だった。

掌に中間子を集め、束としてそれをホーネットトラプターに向けて撃ちだす。

(さあ、どうでやがる?)

目の前の駆動鎧バウドストツがどういった回避行動に出るのか? それによって今後の組み立て方も変わってくる。最も、この一撃で終わってしまふ可能性も低いとはいえあるのだが。

絶対領域クリアランスの放った閃光がその装甲を貫く直前、ホーネットトラプターは左肩の『翼』だけをより輝かせ、まるでビデオを早送りしたかのように不自然に横にぶれる。

放たれた閃光は、そのまま空気を貫いていった。

返す刀で、ホーネットトラプターは右手に持った銃をこちらに向ける。

その銃は既存のモノに比べると、いささか奇抜さが目立つ銃身だった。普通の狙撃銃程度の大きさの銃口に、レーザーポイントの照準器と何やら白い箱のようなものがゴチャゴチャと取り付けてある。火薬を用いた弾丸を使用するなら、無駄なパーツが多すぎるが、この銃は火薬を使わず電磁力の原理を利用して弾丸を撃ちだすものであり、必要なパーツだった。

銃の側面にはこうある。

『B a i | R a i l l i g u n』

銃口が輝き始め絶対領域クリアランスが身構えた直後、音速の三倍で弾丸が撃ちだされた。

「ッ!?!」

その光景に、絶対領域クリアランスは目を見開いた。

対消滅公式を常に展開させていた為、弾丸が自分を貫くことはなかったが今日の前で起きた現象は普通じゃない。

今のは、

(……第三位の超電磁砲レールガン?)

発射前の通電と電子を運びながら飛んできた銃弾がその推察を確信へと裏付ける。

見開いた眼を細めホーネットトラプターを睨みつけると、左手でレールガンのボルトハンドルを引き弾薬の装填、排出を行っているのが見えた。

どうやらレールガンの複雑な機構の負担を出来るだけ少なくすべく、直動式ボルトアクション方式ストレートブルを装填方式に選んでいらしい。

「ハッ、面白えことばつかしてくれんじゃねえかよ三下がアッ！」

絶対領域クリアランスは口角を吊り上げた。その笑みは歓喜からくるものではない。

学園都市第三位の超能力者レベル5であり、自分の大切な存在の元となったオリジナルの能力者の能力チカラを再現させることに成功した駆動鎧バグドスーツが目の前にいる。

はつきり言って、不愉快だ。

再び、レールガンの銃口がこちらに向けられた。絶対領域クリアランスも同時に掌に中間子の束をいくつか生み出す。

直後、レールガンが火を噴いた。

音速の三倍で撃ちだされた弾丸を消滅という形で防ぎ、返す刀で閃光の雨を浴びせるも、異常な俊敏性でホーネットトラプターはその

全てを回避して見せた。

やはり、中間子による攻撃は回避に徹している。攻撃の直後にも限らず、オーバーなぐらいの回避行動をホーネットトラプターは選んでいる。

それは何故か？

答えは簡単。装甲で受けきれないからだ。もしも、ホーネットトラプターに中間子の束を防ぐ方法があるのならそうするだろう。回避という行為は、次の攻撃を遅らせる行為でもある。

ならば、さほど脅威ではないモノに対しては、ホーネットトラプターのAIはどうでるだろうか？

「コイツはどうだよクソ野郎ッ！」

叫び、絶対領域クリアランスは懐から拳銃を手にして、照準をホーネットトラプターに合わせる。

傍から見れば、何を馬鹿なと笑うところだろう。こんなものでは装甲を貫くことどころか傷一つ付けられることすらできない。

無論、それは絶対領域クリアランスも承知の上だった。

ガン！！ という銃声が連続して鳴り響いた。放たれた弾丸は、そのまま直進してホーネットトラプターの胸部に弾かれる。

直後クリアランスレールガンの弾丸が自分の心臓を貫こうとしたが、気にせず絶対領域はマガジンが空になるまで引き金を引き続けた。そのどれもが装甲に弾かれ情けない音を奏でる。

思っていた通りだ。

ホーネットトラプターのAIの行動パターンは、脅威となるモノは回避。脅威に及ばないモノは装甲で受けてでも攻撃態勢を整える事

を重視としているらしい。

それは十分すぎるほど、勝利の確信を持たせてくれた。

「今のでテメエはスクラップ確定だ。終わらせるぞクソ野郎」

レールガンがこれでもかと言わんばかりに自分を貫こうとしてくるが、それは何の意味もなかった。

すでに全弾を撃ちつくしホルドオープンされた拳銃を光子反射によりホーネットトラプターに向けて射出する。撃ちだされた拳銃はホーネットトラプターの装甲に弾かれ衝撃でバラバラに砕け散ったが、クリアランス絶対領域はそんな事には目を向けえず、懐から長さ約10センチ幅約5センチほどのラグビーボールのような楕円形の黒い塊を取り出す。

世間一般に言う、破砕手榴弾というやつだ。

ホーネットトラプターがレールガンの引き金を引いた直後、クリアラ絶対領域は光子反射により破砕手榴弾をミサイルがごとく射出する。

数瞬後、爆音が空に鳴り響いた。

\*

『H S M R 01 ホーネットトラプター』のAIは現在の状況を把握しきれずにいた。

脅威となる中間子の束による攻撃を中止し、代わりに既存の武器による何の脅威ともならない拳銃と破砕手榴弾による攻撃。センサーの類に不具合を与えるのにも効果的な方法とは言えない。

僅かに熱感知スコープに不具合が生じてしまったが、すぐに修復

できる。

結果、AIは判断する。リスクゼロの攻撃に対する迎撃として、レールガンのチャージを優先させるべきだと。

中間子はセンサーにより、発生した時点で感知できる。後は、破砕手榴弾による熱で誤作動を起こしてしまった熱感知スコープが修復され次第、レールガンの引き金を引くだけ。

徐々に回復してきた熱感知スコープが、正面にいるはずの絶対領域クリアラの熱源を捕らえようとしたその時だった。

三枚の円盤型の『翼』が、真上から全て撃ち抜かれた。

刹那。

浮力を失ったホーネットトラプターは重力に従い落下する。

何故、自分の『翼』が撃ち抜かれたのか？ その答えはAIでもすぐに導き出せた。中間子だ。絶対領域クリアランスが戦闘の際に最も好み、最も驚異的ともいえる能力応用の一つ。

それを感知するセンサーは前方に限定させていた為、真上からの中間子の束には反応できなかった。

ホーネットトラプターの知る由は無かったが、絶対領域クリアランスの目的は破砕手榴弾により熱感知スコープをほんの一瞬だけ使えなくさせる事にあった。爆発に紛れて上空に逃げ、ホーネットトラプターを撃墜させることになった。

もしも、ホーネットトラプターのAIがどんな攻撃に対しても回避クリアラという行動を選択していたら不可能な作戦だった。だから、絶対領域クリアラは確かめたのだ。中間子と拳銃により、AIの演算パターンを。

「ハハアツ！！ 翼がなきゃあ飛べねえなクソ野郎オ！！」

ホーネットトラプターが上空へと熱感知スコープを向けた時、敵対

象である者の発した音声を捉える。

即座に落下しながらもホーネットトラプターはレールガンの銃口を敵対象に向け引き金を引くも、無駄なことだった。

銃弾は敵対象に触れると同時に、はじめから存在しなかったかのように消える。

「分かってねえなクソ野郎！ テメエはもう終わりだったの！！」

その音声をホーネットトラプターが捕らえた直後、敵対象が急接近しレールガンの握られた右肘に触れられる。

それと同時に、その肘が消し飛ばされた。

右腕が宙を舞い、電気信号の送られなくなった右手から力が失われる。

その結果。右手に握られていたレールガンは解放され、敵対象はそれを掴み取った。

「教えてやるよ。銃ってのはこうぶつ放すんだ」

敵対象がレールガンの引き金を引く。放たれた弾丸が、ホーネットトラプターの頭部の中枢部。AIのチップを撃ち抜く。

その瞬間、ホーネットトラプターの全ての機能が停止した。

\*

「が……、あッ！？」

いきなりの衝撃に恒町は痛みに顔を歪ませ思わず地面に片手をつく。地面に手をついていない方の手で口を押さえ、必死でこみあげ

てくるものを我慢した。

（自動防御が働かない……。まさか『意識外向』フェイントセンスを利用した肉弾戦！？）

『意識外向』フェイントセンスという能力はあくまで自分という存在を相手に意識させない事であり、拳銃という存在は相手の意識させなくすることは出来ない。その為、いくら能力を使っても、自分や一方通行、絹旗最愛に銃弾をぶち込むことは不可能だ。はたさいあい

だが、自らの体となると話は別になってくる。どうやって、意識すら出来ないものに対して自動防御の演算式を組めるのだろうか？

（つてことは）

「よけなくていいのか？」

「ッ！」

声が聞こえ、反射的にその場から後方へと飛びのく。四つん這いに近い状態からの無理なバックステップのため、腰や膝にかかる負担は半端ではないが気にしている場合ではない。

飛びのいた直後、何かが空気を切り裂くような音がした。その音に向かつて、何も無い空間に恒町は前蹴りを繰り返す。スカートの下にスパッツ等は無いため、白い布地が露わになるが気にしている場合ではない。

しかし、恒町の繰り返した蹴りは空しく空を切る。

「おっと、危ないな。野蛮な女は嫌われるぞ」

言うが否や、存在を消した綴は恒町の腹部をめぐけて回し蹴りを

繰り出す。

何故、頭部ではなく腹部を狙うのか。漫画や映画ではよく主人公が顔面に拳をめり込ませているが、実際には顔面というのは比較的ダメージを与えにくい。寸分たがわず急所をつけないと気絶などさせることはできないし、頬骨に当たれば自らの拳を傷めかねないのだ。

その点、腹部は内臓という弱点に溢れ、肋骨も弱いところが多く、案外折れやすいものだ。つまり、ダメージを与えやすい。綴の足が恒町の脇腹を完全に捉えた。

「ウアッ!？」

(仕留めたッ!)

その一撃で恒町は完全に崩れ落ち、綴に背を向けてうずくまる。完全にあばらを壊した感覚があった。折れてはいないだろうが、動けはしないだろう。その様子に綴は笑みを浮かべる。

「残念だったな。僕はお前を逃がしたせいで、こんな面倒なことになってしまった」

「……ね」

恒町がなにやらモゾモゾと動きながら何かを呟いたが、綴はそんな事は気にもせず続ける。

「つまり、お前に殺されたも同然なんだよ恒町。だから、僕はお前を殺す。銃じゃ殺せないから大分痛みつけなきゃならないことは悪いと思っよ」

逆恨みと言われればそれまでだが、実際にはそうだから仕方がない。醜い行動だという事も理解はしているが、それでも殺す。

笑みを浮かべながらまずはどこに蹴りを入れてやるうかと思っただまにその瞬間、綴は目を見開かせた。

その眼には、ゆらりと脇腹を押えながら立ちあがる恒町の姿が映っている。内臓にまでダメージが及んでいるのか口元からは一筋の血が垂れ、自分がいる場所とは見当違いの方向を見ていながら、恒町は口を開いた。

「……残念ね」

「ん？ 遺言があるなら早めで頼む」

嘲笑しながら、綴はさらに笑みを深めた。立ちあがった恒町に僅かに驚愕したが、とても十分に動けるようには見えない。次の一撃で完全に沈むはずだ。

「そうね。早めの方がいい。じゃあ言わせてもらおうわ」

「何だ？」

その問いに、恒町は笑みを浮かべながら言った。

「死ぬのはお前だけよ。このクソツたれ」

言うが否や、恒町は腰の後ろに手を回す。次の瞬間には破砕手榴弾をとりだしそのピンを歯を使って抜いていた。綴はそれを見て目を見開く。

綴が自分に接近戦を挑んでいる今、最早避ける術はないはずだ。しかし、それは目の前の少女も同じはず。彼女の防御機能は零距离

での手榴弾に耐えられるほどではない。

「な……、し、正気かお前ッ！ 自分もろとも!？」

「言っただでしょ。死ぬのはお前だけだって」

じゃあね、と恒町は微笑みかけた。直後、風を切るような音が綴の鼓膜を揺らし、目の前にいたはずの恒町が視界から消えた。

「あ、あの野郎オオオオッ!!」

湧き上がる激情に任せて叫んだ瞬間、彼の視界を光が覆った。

\*

「痛ッ！」

爆発が綴を飲み込む音を聞いた恒町は、突入前の路上で膝をついた。

どつやらあばらにひびが入っているらしい。

(にしても、危なかった……。アイツが私の能力を完全に理解して無くて助かったわ)

額から垂れてきた汗をぬぐい、安堵感からため息がこぼれ出た。先ほど綴に使った手段。綴が自分の能力を理解していなかったからこそそのラッキーパンチにすぎなかった。

彼女の能力『チカラ迎撃空刃』は主に気流、空気の制御。

靴底から気流の噴射点を生み出す事で浮力を得ることも可能だ。地面からほんの1センチぐらい浮くことなど造作もない。

そうすることで、地面との接触抵抗は完全に消滅する。後は空気抵抗を無効にする事で、背中に気流の噴射点を作り出せば、高速移動を可能にできる。

「……やっぱりシュークリームの誘惑に負けとけばよかった」

はあと恒町はうなだれる。

しばらくして、協力者である少年が合流すると、2人はその場を後にした。

\*

「垣根帝督の反逆。流石に今回ののはキツかったんじゃないですか？」

窓のないビル内部。アレイスターが浮かぶ水槽に、不破は笑みを浮かべて問いかけた。

『スヘアフロンそうでもないさ。計画に支障がでないと言えば嘘になるが、所詮は第二候補だ』

「……そういうものですか」

期待していた返事ではなかったのか、不破は肩をすくめる。

『そんな事よりも、そろそろ君達のシナリオが始まる。』安全装  
置<sup>イ</sup>』として生き残るのはどちらになるか？ こればかりは私でも  
』

「偽りの言葉はもういいです」

遮るように、不破は口を開き、更に続ける。

「どうせあなたのプランはもう確定している。そんな事が分から  
ないほど俺も間抜けじゃありません」

『……………』

沈黙と、アレイスターの浮かべる笑みが肯定を物語っていた。

## 5 - 16 終わり始まり（後書き）

まずは閲覧してくださったみなさん、ありがとうございます！<br>— ) <

今までで一番長い文章となりましたが、いかがだったでしょうか？  
15巻の内容だけでこれだけ時間をかけてしまい、申し訳なかった  
です。

一応、今回のメインな恒町の能力説明と、主人公たちの戦闘シーン  
でした。

新約で出たファイブオーバーにとつもない衝撃を受け、ホーネツ  
トランプターという駆動鎧が生まれました。

移動砲システムのレールガンとか実際かなり驚異かなあと思った結  
果です。

そして、不破とアレイスターの会話から察した方も多いとは思いま  
すが、次章はとうとう絶対領域 vs 不破の章です。  
不破の能力はかなりのチートになっていると思います。

それでは、次章からもよろしく願いします！！

SS1 (後日談) 同棲生活

10月10日

第七学区のとある病院の一室に、2人の少年少女がいた。

「物件の件なんだが」

少年 絶対領域クリアランスは言いにくそうに口を開いた。

「いい条件の所を見つけた。今日中にこの病院ともおさらばだ」

「やつと？ 結構かかったよねえ」

そう言った少女 初期番外プロトワーストは相変わらずニヤニヤとした笑みを崩さずにさらに続ける。

「どんな感じ？」

「お前の要望通り広めだ。4LDKのマンション」

へえ、と何かを期待するような声を上げる初期番外プロトワーストを見て、絶対領域クリアランスは嘆息する。

彼らが話しているのは、今後の拠点となる場所についての事だ。いつまでもこの病院にいる訳にもいかない。自分も彼女も少しばかり特殊な環境に囲まれている。いつ襲撃を受けても不思議ではない。そんな時、この病院に居ては色々やりづらいのである。

そのような事情で今まで時間のある時に物件探しをしていたのだが、つい最近になって条件のいいモノが見つかったのだ。

「分かったら荷物まとめて来い。とつとと出るぞ」

「あいよ旦那」

妙に嬉しそうに病室から出ていく初期番外プロトワーストを見て、絶対領域クリアランスは怪訝そうに眉根を寄せた。

(？ …… ああ、そうか。アイツはマンション初めてになるって訳だ)

初めての経験というものが、かなり価値のあるものに見えるのだろう。別にプロトワースト変な事でもない。

実際に初期番外プロトワーストが心躍らせる理由とは少々異なるのだが、窓の外を見て微笑を浮かべる少年は気づかない。

SS1 (後日談) 同棲生活 (後書き)

いつもは章の最後にキャラ紹介を入れますが、今回はオマケ程度の短い話を。

同棲生活のスタートです。

それでは、次回もよろしくお願ひします!!

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9492s/>

---

とある科学の絶対領域《クリアランス》

2012年1月2日03時50分発行